俄於二江戶一可レ有二越年一旨曰、稻毛迄御越、十四日に江戶へ御着、昨晚自二江戶一土肥大炊爲レ使參上、何そ直に言上、其故かと云々、又馬場八右衞門尉目安を上る、忠義を言上に依て如レ此共云々、

駿府に右兵衞主常陸主御座間、成瀨隼人を被レ遣被レ留、

板倉內膳京都ゟ父爲二見舞一上之由也、是はばてれん爲レ改被レ遣歟と云々、

十六日、雪、此日より十九日迄甚寒す、

伊勢三川衆於二駿河一越年して、正月四日五日に江戶へ下、板倉內膳罷上時、右之衆今年は罷下事無用之由令二下知一給と云とも、各如何思召けん如レ此、

十八日、主上新內裡へ御徙移、石垣築地無二比類一出來、前代未聞也、去慶長十六辛亥年即位之後、院主上御間以外也、人の無二出入一、御母義院を家康公へ依二讒言一給二院を家康公不レ可レ然樣に曰旨、院被レ及二聞召一、猶以逆鱗也、是は御即位の節、可レ有二御讓一書物已下依レ不二讓給一也、

院御領二千石也、御不自由甚、內裡御領壹萬石也、同腹宮五人御座、一人は近衞大臣養子し給、其外腹々に宮六七人御座、此外姬宮も御座、院は未御年にて四十三、主上は廿一に成せ給ふ、

廿四日、大御所越谷川越爲二鷹野一御出、

廿六日大久保相摸守爲二上洛一、小田原へ江戶より歸、

廿七日、昨今大雨水出る、

廿八日、大御所從二越谷川越一江戶へ御歸、

此年九月十日寒、霜月暖氣、小寒暖氣也、大寒に寒す、

廿九日立春、

同日夜半より卅日雨、此寒中雨雪節々ふる、

當代記卷九

慶長十九甲寅正月朔甲寅日、

於二江戶一兩御所越年、朔日將軍ゟ各遂レ禮如二例年一、なかれ各頂戴之上に、御服一重充周拜領、是近年大御所家康公之時より如レ此、大御所には今は無二此義一、今日大御所ゟ將軍勤行、

二日、在江戶之上方大名小名、將軍ゟ出仕、なかれ御

服如二昨日一、元日に將軍ゟ出仕之衆、二日に大御所へ出仕、二日に將軍へ出仕之衆、三日に大御所へ出仕、

去年之冬より、大御所小馬廻並番衆不レ殘江戶ゟ被二召寄一、入成二不審之思一、

四日入レ夜雨、五日六日海雨降、

五日、大御所將軍へ御成、將軍二男（國丸九歲）能仕給、三番大御所將軍並御臺所見物し給、大名小名座間に被二伺公一けれとも無二見物一、

今日大久保相摸守立二小田原一相上る、是京大坂に伴天連門徒年々に倍增して絆超たり、是を爲二退治一被二差上一、依二事之體一九州長崎まて可二罷下一との御諚也、

六日出家諸宗、大御所へ參上逐二一拜一、則天台有二論儀一、さて淨土宗有二法問一、

七日、大御所下總國とけとうかねへ爲二鷹野一御出、九日將軍へ出家衆出仕、論儀法問如レ右、

十四日、伊勢山田町夜中に火事出來して、八百間燒亡、

十八日、大御所とけより江戶へ御歸、此度鶴多取といへとも、每度鷹鶴にふまる、十三居なから手負、去年九月十七日駿河を立給て、今日まて鶴百廿五（此內白鳥八、）鷹取、村越茂助病死、蕎麥中原迄御所供奉し上けるか、江戶へ御歸之後は頻て、終以如レ此、

大久保相摸守昨日十七日京着、藤堂和泉守屋形に宿す、京大坂之伴天連宗迷惑此事也、伴天連師匠寺有二二箇所一、右之內西京寺は被二燒拂一、四條町中に可レ有レ之寺は、厥二類火一こほちて被二火付一、師匠兩人は無レ構二家財一西國へ退、

廿一日大御所江戶を御立、夜前大久保相摸守兩御所勸當之由被二仰出一、今朝小田原城爲レ可二相請取一、安藤對馬守被レ遣、

廿三日入レ夜大雪、廿四日同雪、此日伊勢國四ヶ市於二海上一、東へ下舟三艘沈、桑名沖にて一艘沈、右之三艘は、四國之住蜂須賀阿波守人數也、

此一兩年中、諸大名江戶屋敷々々之家屋を盡レ美、門は上總主（大御所息）江戶一番也、家は加賀國松平筑前守（將軍一番也、

廿四日、大御所小田原へ着給、

廿五日、將軍小田原へ御出、

廿七日、大御所小田原を出御、三島に着給ふ、此間小

田原城二三之丸被ニ破却一、本丸はかり被レ殘、大御所御通之砌、箱根山路次中五間宛間を置、弓鐵放にて辻堅有て夥體也、昨日より西は三島東は大磯平塚に被レ置人、被レ留ニ行人一、

將軍江戸へ歸城し給ふ、　其後自ニ二月一被レ入ニ番手一、廿九日午剋、日輪五色也、半笠と云物歟、日の兩脇如レ虹、今日二月の節、　及ニ申剋一少雨ふる、驚而休止、今日大御所駿府に御着、

二月小朔甲申日

二日、大久保相摸守罪科已綽定て、今日江州ゟ自ニ京都一下、是は近年拜領の地也、駿府ニ依ニ下知一なり、小田原領五萬石被ニ召上一、抑此人は普代相傳、殊十三の年より家康公ゟ御奉行自愛成し、今年六十三、今かゝる仕合如何と人皆成ニす不審一、舊冬十二月三日、大御所立ニ江戸一給、於ニ路次一馬場毋レ左衞門尉と云不肖者、上ニ目安一事兩度なり、專相摸守匠ニ謀叛之由言上、誠無ニ跡形一虛言成けるを信し給事、偏相摸守盡つれ時節歟、此伊左衞門は甲州のもの、依レ有ニ罪科一、近年被レ預ニ置小田原に一、其中に思怨事有て、如レ此の上ニ目安一歟、于レ時年及ニ八十一、相摸守養女を三ケ年已前、山口但馬守男ゟ嫁、此女は日向守孫女、長門守息女なり、兩御所ゟ

不レ奉レ得ニ內儀一事不届由曰不快、相摸守は先年石川日向守、相摸守男、此儀を被ニ言上一處、尤と令ニ領掌一給上は、重而不レ及レ得ニ御意一事歟之旨內存に而、折々出仕述懷、奉公之樣に相見ゆる、將軍甚無興し給、如レ此の得ニ折節一上ニ目安一と云々、此度相摸守從ニ關東一召連たる侍共暇を出、昨日自ニ京都一東へ下、其體哀也、　右の緣邊の事、古石川日向守被レ得ニ御意一し事は必定なり、然とも其の時迄は、安藝守日向孫不レ違ニ御意一、其後安藝守被ニ勘發一、大垣を退江戶ゟ隱居之間、重而不ニ言上一事不レ謂之由蒙ニ貴命一、

駿河國沼津之城可レ有ニ破却一之旨曰、大久保次右衞門尉男も、去年病死故、遺跡不レ立、

此比、駿府兩替町紹善家火事、頻火及ニ七八間一、五日江戶近習森河內膳、日下部河內守、大窪與一郎被レ付ニ半助一蒙ニ勘氣一、四年已前、大久保加賀守死去之砌、身暇を不レ申小田原ゟ參たりし事、曲事のよし曰如レ此、其後又青山大藏勘發、

十九日辰刻、東美濃岩村城主松平和泉守頓死、

廿日細雨、晚より終夜大雨、

廿一日如ニ昨日一大雨、翌朝大水、諸國同前、右の雨にて大水不レ審、但雪消之時なれは如レ此と云々、

廿二日、米津清右衞門尉生害、去年被ニ流ニ阿波國一、首駿河へ持參、是餘なる御政と云々、被父武功不レ可レ勝計一の士也、

此比尾張國堤專被レ築、美濃國堤三月中旬仰出同被レ築、是は百姓役、

此比、五山之衆依レ召駿府へ被ニ相下一、一寺より兩人宛也、寺々草創之事、幷佛法可レ被ニ相尋一由風聞之間、各氣遣せらる、開山派妙心寺門徒出世之長老近年多レ之、於ニ向後一者駿府ゟ令ニ出仕一、自ニ駿府一五山紫野ゟ被ニ相尋一、扨可レ被レ歷ニ奏聞一と也、此儀付而、彼派出世大方相止分也、

三月大朔癸丑日、　今日より三月節、

大久保相摸守于レ時在ニ江州一、駿府上ニ目安一、日者無ニ疎略一旨言上、南光坊取ニ次之一披露、大御所雖レ見ニ給之一無ニ其驗一、此南光坊は元來關東之人、登ニ叡山一住、今又依ニ貴命一武藏國河越に住持、

八日、鹿美濃國加納之本丸へ來、生捕らへて岐阜稻葉山ゟ遣放しけれは、悅て山へ入、權現堂に禰宜居〆祝しけるとかや、上野國佐野城主　修理大夫古宮田左近子、信濃守弟、城破却、其身令ニ在江戶一、是依レ仰ニ將軍一也、

三日雨、此間節々降、

五日芥河之住狂言小介、於ニ駿府一頓死、是大御所氣相之者也、

七日、伴天連の門派者共、京大坂在レ之分、此間大方ころぶ、相殘七十人餘ころはさる有レ之、奧州外濱ゟ可レ有ニ流罪一相定、今日出京東下、加州居住高山南坊去比より坂本ゟ參居す、是も妻子已下十人計、九州長崎ゟ下、此高山は元來荒木攝津守臣下、荒木謀反之砌、信長ゟ被レ忠節一者也、近頃前田肥前守を賴在ニ加州一、知行二萬石令ニ私領一、是者始より吉利支丹伴天連宗也、

柴山小兵衞爲ニ堺代官一、自ニ去年一江戶朝倉藤十郎被レ遣、堺に有けるか、渡小兵衞東下、

先年於ニ伏見一逢ニ橫死一中坊飛驒守男、奈良爲ニ代官一、是皆人之所存之外也と云々、

十日辰刻より雨、

十二日於ニ駿府淺間一有レ能、今春大夫八郎煩に付能不レ致、孫の七郎幷新五郎大藏大夫能仕、此兩人は八郎子也、　大御所幷若公見物し給ふ、京都之板倉伊賀守召遣忍田金右衞門尉と云者、依レ有ニ其科一被ニ押籠一、從類十人餘絆を打、京より伏見ゟ被レ牽、

十四日申剋夕立、雷數聲、當春之初雷也、則快晴、

十五日堀伊賀守越後國主古左衞門督勘發、則今日宇都宮

わ被レ預、是は古大久保加賀守以二肝煎一古本多豐後守爲レ聟、加賀守と別して入魂不レ斜旨、衆二貴命一如レ此、　今日越後國城普請始、

十九日未刻より雨、　廿日　廿一日　廿二日打續雨、

廿三日快晴風烈して、諸木若枝吹切、

廿六日夜少雨、　廿七日又風烈して、木若枝吹伐、播磨國古三左衛門後室、自二備前國一駿河わ下玉、息男今爲二備前國主一岡山に在城、兄の武藏守播磨國に有、自然之折節備前を可レ被レ奪歟の疑心にて、國替所望の依二訴訟一如レ斯と云々、

廿九日申刻、雨少降、頓而休止、

四月大朔癸未日、立夏　朝日甚緋して無二光陰一、入日も同、今日より五日迄日々如レ斯、　六日朝曇、

八日庚寅　江戸普請被レ遂二根石一、

九日巳刻終より終日終夜大雨、翌辰刻休止、此雨下民悦レ之、

此已前大御所勘氣者、隱二江戸に一居たる衆被二相拂一、此比江戸へ有二勅使一、將軍秀忠公可レ被レ任二右大臣一となり、此勅使は家康公可レ被レ任二太政大臣一旨宣下也、大御所齡遙傾給間、高官無二其詮一、右大臣幷別當職可レ被レ讓二將軍一旨依レ仰如レ此、

十四十五兩日、駿府於二三九一能あり、今春八郎雖二相煩一、日二番つゝ仕、其外少進法印、本願寺衆也、七郎大夫孫仕、　常陸主予時中將も能仕給ふ、當時猿樂役者何も無二學一、鬼能を女能の如く打拍子祝言、　悠見戀慕哀傷愁の打分もなし、今の世には今春八郎大夫に昔殘けるかと云々、

此已前各被レ集、くり石共不レ可レ用、わり石をくり石に可レ仕旨將軍仰也、依レ之自レ他及二迷惑一、

十八日風烈し、　廿日も同、

廿一日駿府於二三九一能あり、　勅使自二江戸一被レ上間被二見物一、今日も風甚烈、

廿三日戌刻より、　廿四日、　廿五日、　廿六日　晝夜大雨、近年無二比類一、廿七日未刻雨止、及レ晚大洪水、下京町末の小家流、攝津國河内幷大坂森口の堤切、彼表頃年無類大水也、

廿九日美濃國摩免戶堤切れたり、然共河下堤とも數ヶ所依レ爲レ切、水則引間、無二指事一、

尾張國しよばたの堤切、田畠損毛不レ可二勝計一、圓常寺渡の下に、笠町と云所に、甚右衛門尉町人姪女蛇に成、しよばたの池へ入たる由、閭巷說也、

此近年、大御所近習之女房衆、於二駿河一金銀被二商買一、此使神子なりけるが、甲斐々々敷才覺して、本利相調獻上する事每度なり、去比池田備後荒木久左衛門子も借二用之一、彼銀を神子令二催促一間、備後用人若衆立銀ある由云含、皮袋を渡、神主度々之事なれは、符を切見るまもなく請取、兩替町に出商人に渡す時是を見に、其內に石を裹たる多之、神子大慈、則皮袋持歸、備後小姓に申けれは、全左樣の事不レ知の由申間、神子と云事に成、其時神子申けるは、汝は余を媒にて備後犯レ妻由申、近比隱謀已露顯、則彼者を被二押籠一、大御所も此事聞給共、如レ斯儀者町奉行彥坂九兵衛可二相計一由曰、此金銀過分に成けれは、備後返辨難レ成、其上失二外聞一間、身上如何可レ有と云々、右借銀千貫目成間、不レ限二備後一歷々衆令二借用一、今速返辨難レ成と云々、

五月小朔癸丑日　今日より五月節、昨日より八專に入、

二日三日雨、

四日醫者盛法印死去、一兩日已前、近衛殿に脉の爲參向、歸宅之上、則病惱して如レ斯、

今日入レ夜雨、　五日、　六日、　打續大雨、亦水出る、從レ是當月中無レ間雨、

五日從二江戸一爲二使者一酒井雅樂助駿府に參上、是は右大臣の悅之禮也、

八日依レ爲二吉日一、今日酒井雅樂助出仕、從二將軍一銀子參百枚、太刀一振進上、酒井雅樂助に刀長光從二大御所一被レ下、

九日東風甚烈、殊大雨、及レ晚雨風頻扇、翌朝迄如レ斯、

十日越中國外山羽柴肥前守死去、近年唐瘡病惱、終以如レ此、

十一日昨今殊大雨、

十二日大洪水、七十一年已來、天文十三甲辰の年より已來の大水と云々、諸國耕作忘レ業、去月廿八日の大水に切たる諸國堤共、打續水出に付て、難レ築故、其儘有レ之上に、此大水に猶以切る、和泉河内攝津國江州濃州尾州六ヶ國取分如二海河一、大坂森口の堤、如レ元は難二成就一云々、

今日甲猶以大雨、

三河國より東洪水にては有共、右の五ヶ國の水ほとはなし、

下野國古河に令二在城一小笠原左衛門佐病死、是は古河井左衛門尉忠次三男也、先年信州松尾小笠原掃部

大夫令二養子一、今年者四十五歲也、
信濃國小室に在城の千石越前守病死、
此廿日比、江戸普請一の丁場各大方出來、二の丁場近日可レ置二根石一之支度也、
大坂之片切市正 此間駿府逗留、今相上、來秋八月二日、東山大佛可レ遂二供養一之旨、大御所有レ命、
廿八日東美濃明知之遠山民部死去、歲八十、
六月大朔壬午日、
三日六月節、今日又大水、先度兩度之水に不レ切ける美濃國會根堤切て、夜半過に大垣へ水入、町中家を出、酒巳下皆水になると云々、
五日午刻より快晴、去四月廿三日より打續每日大雨、前代未聞と云々、
此比伴天連京都に蜂起、寺を立憚無二氣色一行レ之、町町に訴人多有レ之と云とも、餘大勢成敗、◎敷故しらぬ體にて打置、先十人被レ行二籠者一、其妻を取て傾城亭主の又一に被レ預、
黒船至二九州平戸一着、
七日於二駿府三九一能有レ之、九番、今春大夫幷孫之七郎大藏大夫少進被レ行る、、觀世むす子も一番仕、此度は常陸主は能し不レ給、
十一十二兩日、雷數聲夕立、
江戸普請場、紀州主淺野但馬守手前石垣崩、百五十人餘死、
十四十五兩日、南風頻扇、今日土用に入、 十六十七
十八兩三日、大雨同大水、 十九日巳刻より快晴、
廿三廿四日雨、
將軍上位悅として各遂レ禮、
七月小朔壬子日、
三日立秋、 四日夜より九日迄打續雨、
此比駿府にて竹越山城守 右兵衛主一腹兄 屋敷火事、不レ遷二他家一、成瀨隼人 當時出頭人 疗相煩、
十二日蒲生源左衛門尉奥州於二須賀河一死す、近年牢人間、駿河在府、去四月事相濟、會津に下處、路次より腫物相煩如レ斯、是武篇雲有し者也、
十五日同十六兩日、於二江戸城一有レ能、去月中旬從二駿府一今春大夫幷少進法印下着、一日十一番宛也、其內八郎大夫四番宛行レ之、
九州長崎古有馬修理男左衛門佐に、日向國高橋右近領跡被レ下間、佐右衛門佐爲二國替一相移處に、家中者

壹人も不レ隨レ之、伴天連之依レ爲二宗派一也、自二駿河一可レ有二成敗一とて、被レ遣二御使一、山口駿河守、人數等儀、島津陸奥守以二手勢一可二打果一との仰也、
十七日、在大坂織田民部少輔入道古信長舍弟 死去、
嵯峨角藏了以入道保死、此者非二徒者一、方々岩石を切拔、丹波國伊賀國 甲斐國にも川舟を入、兵粮薪已下令二運送一、二兩年已前より、洛中三條二條迄舟輸入、依レ茲京師貴賤賣買得レ便たり、
從二江戸一爲二使者一土井大炊頭來二駿府一、
下野國佐野城主富田修理大夫改易、廿八日 信州松本わ被二預ケ一間、今日彼地わ行、
八月大辛巳朔日
去夏大坂之片桐市正東國わ下し時、於二駿府一家康公曰、東山大佛堂佛鐘被レ遂二行三供養一之由也、市正大坂歸着之上、秀賴公へ右之旨言上、依レ茲八月二日、大佛堂廻を被レ飭、其の結構甚、導師天台三寶院、咒願師妙法院、鐘之銘は東福寺清韓長老被レ書レ之、天台五百人、眞言五百人、合千僧集會也、餅六百石春、諸白柳三千、其外莫レ不レ盡レ美、然處家康公鐘銘寫見給無興上◎シ カ 給上、其外之儀不二庶幾一思給歟、甚腹立給之條、枕供養儀自國に爲二結緣一、爲二見物一貴賤群集者空下國畢、韓長老嶋落せらる、
此比奈良大佛以二衆力一再興仕度旨、或人於二駿府一言上、尤可レ然旨有二貴命一間、則爲二勘進一九州わ下、
六日未刻より大風雨、及二申刻一三河國吉田に有二怪異一、當城主松平主殿助 新地建從會下、近日可レ有二法事一とて、粮其外令二支度一置、彼寺俄右風吹來、寺を一間餘石口を吹退上、道具悉吹散、家內者共、右之粮以下少不レ殘、以レ帶如レ掃吹失、希代不思儀有樣也、扨川端之田町一丁家共、右之如レ寺吹失、其場にて五人死道斯壹人倒死、其所より北東二里相隔牧野と云村、右怪異飛來、家屋十一間、吉田如レ寺吹散、老女壹人空中吹上けるか、頓て落たり、未二死去一云々、其より三里西茜と云村又如レ斯、家も十一間失、家內も右同事也、其山に岩碎けるか、御油赤坂わ其岩落たりと云々、
此日江戸石垣淺野但馬手前崩、人多死、森右近普請ならひたる間人死、
此日風、三河より東駿河國までは指て不レ吹、雨は稠く降、九日伊勢太神、同國野上山わ飛移らせ給とて、或人託して宣、就レ其奇特なる事共多之、廿八日に山

田ゐ可レ有二還宮一、然者雷鳴難風可レ吹との託宣也、依レ之自二村里一躍を構盡レ美、我も〳〵と令二參詣一、夕に參宮の者もあり、貴賤群集すと云々、山田にてもをとる、此躍に付神慮奇特多し、

十月此比まて、晝夜問に、一日も雨莫レ不レ降、

從二大坂一片桐市正駿河ゐ下、先丸子に宿し、伺二貴殿一、其後駿府へ參、是は去比大佛鐘之銘等儀付て、彼是大御所令二腹立一給事、及二迷惑一之由爲二言上一也、

福島掃部左衛門大夫弟也、家中者、去春中於二江戸一上目安、其後又於二蒲原一獻二目安一、彼者を駿府於二城廻一、借自二掃部一搦取、大御所甚腹立、依レ之搦留者を被レ放、さて右の者を搦ける者を、於二駿府一被レ行二籠者一、

此比自二九州一長谷川忠兵衛長崎商物糸巻物以下賣買の代官、駿府ゐ下、此度來朝黒船伴天連遂二侘言一如レ此、以前彼宗派九州に有二居住一様にとの儀にて、舟中のもの曾不二賣買一、か様の事可レ有二言上一儀歟、又は長崎有馬家中者共就二成敗一、爲レ可レ得二貴意一かと云々、カホチヤより爲二音信一虎の子二、駿府ゐ來、籠に入馬に付通二路次一、同いんこの鳥も來、

此間五六日爲二快晴一しか、十八日より又霖雨、

廿五日丑刻地震、

中にも廿七日大雨、廿八日大洪水、去春夏大水より高し、寅刻より北西の大風吹、中にも伊勢國大水也、河邊は家流、人馬以下流死、上方も大水にて、山城國井手の里の家卅餘宇流、大坂森口此度又堤切、飯盛山の麓より近邊如二湖水一、知行十六萬石之通徒成レ海、伏見京橋水越、町中家五尺水有、大坂天滿の橋落、

廿八日、此日伊勢國自二野上山一大神山田ゐ還宮給ふか、去九日如二託宣一雷鳴大風也、奇特と云々、

同廿八日未刻、關東江戸大風、大名小名屋形一宇も不レ全、其内に顛倒之屋形多レ之、民屋以下可レ察レ之、伊達政宗松平筑前守千餘數の家、同門已下倒、況哉其外の家屋不レ可二勝計一、五十年已來之大風と云々、其中に酒井與四郎家門不レ殘倒、駿河遠州參河は風不レ吹、

駿府城女房衆欲レ企二大惡一事、即是を被二糺明一、此女房は去々年原主水を被二追拂一、伴天連之依レ爲二宗派一也、此男密通ける沙汰あり、此儀を思二遁慨一、如レ此之儀を欲レ企歟、原主水武藏國岩付の高力左近所に隱れ居たりける由未二聞給一、左近方ゐ急度以レ使被レ改之時、

各左近身上如何可レ有と云々、右之女房は野尻彦太郎娘也、依レ之兄をも被二押籠一、

愛宕山櫓現堂前の杉倒、同鐵鳥井倒、江州も風強して、大木吹折、根堀に倒るゝもあり、朝妻前原舟付の家共水に浸付て、五丁餘退、山際に居住す、此程町中は成二舟道一、京邊土堤、町人に宛被レ爲レ築、此比從二大坂一大藏卿局駿河江戸ゐ被レ下、

去比大佛鐘銘被レ書し韓長老を、古田織部當時の數奇者令二馳走一由、於二駿府一大御所聞レ之給、甚腹立、韓長老は秀頼公ゐ遂レ禮、被レ在二大坂一云々、

關東中大風大雨、上野國一本木家四十間流、依レ爲二利根河際一、江下へ運送材木檜已下留二彼地一所に、悉流、從二江戸一爲二使者一水野監物、昨日廿七日至二駿府一、廿九日、自二駿府一本多上野助爲二使者一被レ遣二江戸一、當月中、國々怪異多レ之、中にも伊勢國大神宮託して奇特有レ之、

尾州名護屋本丸殿守の北東石垣八十間餘崩、是福島左衛門尉手前也、

九月小朔辛亥日　五日九月節、

二日自二昨日一雨、入二八專一、

三日快晴、今日於二駿府三九一觀世子能仕、五番、

六日雨、駿府殊大雨、及二丑刻一地震、此日本多上野自二江戸一歸二駿府一、

七日快晴、八日入レ夜雨、九日　十日同雨、此八日、本阿彌光悦於二京都一病死す、此間關東より上て、無二幾程一如レ斯、

江戸石垣黒田筑前淺野但馬手前又崩、

九日、里見安房守出仕之處、從二將軍一以レ使曰、安房國可レ致二國替一との儀也、扨安房守一僕にて、大久保千相模守孫、加賀守子也、所に可レ居との命也、任二貴命一居二彼廣間一、安房國へは本多出雲守内藤左馬介、其外奈須衆彼是十頭計被レ遣、安房守家老之者共若及二難澁一、拘レ城は、可二責殺一と也、無二異儀一於レ令二出國一者、日比安房守領分可レ移二鹿島一となり、此安房守は嫁大久保相摸守孫女之處、彼緣座歟云々、是去々年山口但馬守と相摸守事之時、就二緣者一專及二荷擔一儀歟、

十一日、大坂大藏卿局片桐市正、此間駿河在府、大御所より秀頼幷御袋公ゐ有二口事一、彼兩人に仰含、大坂へ今日被二仰遣一、於二駿府下々一者、何角令二取沙汰一云々、市正於二駿府一無二出仕一儀に付、大坂下々騷動と云々、此比駿府町、其邊に綾松を灯城

の方へ行と、人の目に見けるか、無二其行末一、
此比於二江戸一上方諸大名及二五十人一獻二起請文一、是
對二將軍一不レ可レ存二疎略一との儀也、併依二貴命一也、
此比止二箱根路一、足柄筋を可レ被レ通と也、
十三日、丑刻より雨、十四日甲子及二午刻一雨休止、即快
晴、
松平筑前守主北國下二駿府一、古肥前守拜領國々不レ可レ有二
相違一との儀也、自二江戸一爲レ迎二土井大炊頭來、今日
着二駿府一、此筑前は將軍依レ爲レ聟也、江戸へ同道にて
可レ下との儀也、
此比者伊勢太神宮及レ暮は託して曰、むくりと被レ及二
合戰一由にて、神風烈吹、不レ嫌二男女一、大方毎日託あ
り、山田町中火をたて可レ申旨也、半時已後、海上如
レ焔して夥鳴動し、其後海面靜り、還宮と覺れは、如
レ前亦託ありと云々、彼國中今にをとり不レ止、古老の
者かゝる奇特不審成儀、前代未聞と云々、もはや此
比は、京大和近江美濃も躍を致すと云々、奇特不思
議なる事共、幾等も有レ之と云々、
十六日、松平筑前守着二駿府一、
十七日、出仕、進物金三百枚、紅梅上加賀絹弐百疋、白
絹百疋、長光太刀一腰也、三人若君へ銀參百枚宛、
刀脇指相添可レ有二進獻一との儀也、自二大御所一被レ止
レ之、金子拾枚、綿貳百把宛、おあちやおかちお滿
お龜此四人女房衆へ何も同前の遣物也、金五枚綿百
把、お夏と云女へ被レ遣、其外の女房衆へ銀三百枚被
レ遣、
金子參十枚、小袖拾、本多上野介へ、金子拾枚宛、小
袖五つ、安藤帶刀、成瀨隼人、永井右近、松平右
衛門、此四人へ同前遣物也、宗哲桑師後藤庄三郎銀師此兩
人へも、右之家老衆同前の遣物と云々、
筑前守へ自二大御所一長光太刀一腰、刀一腰長光被レ下
云々、
此度於二江戸一被レ致二普請一上方大名衆へ、自二將軍一被
レ下品々の事、一人へ銀五百枚、小袖五十、御馬五
疋也、其次銀子小袖馬、隨二其人々一被レ下レ之云々、
是先度獻二起請文一感應せらるゝ歟、松平武藏守播州の主各
各先立て上、自餘の衆暫在江戸、重而暇給て可レ被レ上
歟、武藏守は何そ蒙レ仰事有レ之かと云々、
十七日入二土用一、十八日夜より、十九日廿日廿一

日打續雨降、廿一日及レ晩雨休止、戌刻より快晴、
去比被二抑籠一し女房衆彦太郎妹、今日被二切棄一、
原主水は手指十を被レ切る、此後又足指十を被レ切、
其後可レ被レ刎レ首と也、
福島左衛門大輔家中之者、自二江戸一尾州へ來て、最前
崩たる石垣令二普請一、
廿五日入レ夜雨、廿六日廿七日朝まて雨、巳刻如
レ雷辰巳方にて鳴、此日曝事如レ夏、可レ爲二大雨一かと
云々、然處戌刻より快晴、廿九日美濃國長屋の社
へ、躍五十七はな一度に來、北方の野に夜に入迄支た
り、同國此日方々躍有レ之、
同廿七日於二大坂一、自二秀頼公一片桐市正可レ有二殺害一
とて被レ召けれとも、號レ煩不參、此密儀を市正へ告知
する族有レ之かと云々、則大野修理織田左門有樂男以下、
以二人數一押寄處、市正も令二覺悟一、其上弟主膳相籠間、
無二左右一難二誅戮一、依レ之自二修理方一取二人質一、市正同
主膳下屋敷へ相退、暫相籠、
廿八日、自二秀頼一以二使者一、駿河へ被レ啓二事由一、
十月小朔庚辰日、七日立冬、今日朔戊刻より雨、至二寅刻一大
雨、雷數聲、片桐市正同主膳此間大坂三の丸居、今日
執二人質一茨木へ退、
二日卯刻下に、雷聊鳴、美濃國加納松平攝津守逝去、
大坂秀頼對二家康公一謀叛之間、被レ貯二兵粮一、自二去八
月一近國遣二金銀一被二相調一、福島左衛門大夫兵粮八萬
石有二大坂一、左衛門大夫所へ于時在二有二借用一度由、以二
飛脚一曰、苑も角も秀頼御意次第之由有二返答一、其外家
康公藏米三萬石、諸國大名米三萬石、幷町方買置米
二萬石、大坂城被二取入一、町人米は代以レ銀速被二相濟一、
去慶長五庚子年、敵方士所々隱居、今被二相招一、數百人
被二扶持一、但無二人質一族は不二抱置一云々、自二大御所一大坂へ被レ遣使者、
大野修理弟也號二大野壹岐守一、
四日、右兵衛督立二駿府一出陣、奥州關東中へ自二江
戸一有二陣觸一、
七日、右兵衛督至二尾州名護屋一付給ふ、
江戸普請上方衆早々罷上候、陣用意仕、一左右次第、
大坂表へ可レ令二參陣一由有二明命一、依レ之相上らるゝ、
吉原富士川舟渡相滯、又路次傳馬乏して、爲レ之迷惑
す、
福島左衛門大夫黑田筑前守加藤左馬助是三人被レ殘二
江戸一、自二駿府一大坂へ被レ遣し使者壹岐守、今日八日

伊勢國泊ニ龜山一、大坂ヘ行、自ニ大御所一使由呼けれとも、近邊ゐも不ニ寄付一間、空歸下由語けると也、

十日比、堺町人屬ニ大坂一、えんせう以ニ千斤一遂レ禮て、秀賴公朱印申請、是を爲ニ聞屆一、自ニ茨木一市正人數少少相遣處、大坂衆是を討捕、堺町人宗くん親子は、家康公得ニ厚恩一間、同令ニ討死一、堺代官柴山五作を町人爲ニ心得一、泉州岸和田ゟ送、

樫原と云者自ニ大坂一令ニ上洛一、人を相抱所に、於ニ淀邊一町人見ニ付之一討殺、小者一人隨レ之、

里見安房守伯父正木大膳在ニ駿府一、自ニ大御所一以レ使曰、安房守幷大膳伯者國ゟ可レ被ニ相上一、於ニ彼國一知行可レ被レ出と也、

十一日庚寅大御所令ニ出馬一給、今日田中城に御着、

今日本多美濃守立ニ桑名一出陣、伊勢衆同前、龜山松平下總守は美濃國加納ゟ被レ參、父美作守有ニ談合一、彼國諸士令ニ同陣一可ニ出張一由、自ニ駿府一夜前飛脚到來間、今日美濃ゟ參出陣也、

十二日、大御所至ニ掛川一着給、此所ゟ大野壹岐守歸來、大坂近所にさへ不ニ寄付一間、不レ能レ演ニ子細一由言上、大御所甚腹立給、

十三日、大御所至ニ中泉一着御、於ニ此所一安藤帶刀同心の者と、大御所被ニ召遣一若輩小性、就ニ陣屋儀一令ニ聞諍一、小性九郎面を二刀腕を一刀手負、帶刀同心者貳人死、

此比信濃國甲斐都留郡衆關東衆、何も江戸ゟ相集、彼近邊令レ居レ陣、奥州衆は未ニ到着一、

十四日、大御所至ニ濱名一着給、

十五日、大御所至ニ吉田一御着、此日伊勢衆至ニ伏見一令ニ着陣一、

十六日、大御所岡崎着給間、右兵衛主名護屋出陣、今夜一宮に被ニ陣取一、此日伊達政宗着江戸、

十七日、大御所至ニ名護屋一着給、右兵衛主赤坂被ニ着陣一、

十八日、雨故、大御所名古屋逗留御、

十九日、大御所至ニ岐阜一着給、右兵衛主昨日雨中柏原迄、今日永原着陣、桑名本多美濃守平方ゟ移、松平下總守淀移、美濃國諸士隨レ之、三河衆鳥羽邊居レ陣、藤堂和泉守赴ニ大和路一、

廿日、大御所柏原着御、

廿一日、大御所永原着給事、今日大坂町外自燒、此日伊達政宗自ニ江戸一出陣、人數一萬餘、

廿二日、大御所前々崎着御、

廿三日、大御所二條御屋敷御着、今朝大坂町外又自燒、自ニ大坂一遣ニ作山伏六十人餘一、二條近邊可レ令ニ放火一有レ企、訴人出て、廿人餘搦捕、

加賀越中能登三ヶ國主松平筑前守將軍聖着陣、下京邊陣取、人數二萬餘、

越前三河守著陣、是も下京邊に被ニ陣取一、人數及ニ一萬ニ云々、

當月廿日より、自ニ大御所一諸勢ゟ被レ出ニ扶持方一、半分は銀、半分は於ニ大和一被レ出ニ八木一、

廿四日、江戸將軍出馬、今日かの河泊給、

廿五日、大地震、午下刻、然共家屋無ニ顚倒一、京都二條御所ゟ五山衆彼是出仕して、被レ居ニ廣間一けるに、天水の桶落たり、其砌右の出家衆、依ニ地震一庭ゟ被レ出ける折境、件桶の水彼人々の首下にかゝりける間、見苦かりける粧也、

國々爲ニ手置一、東海東山兩道所々置ニ一番衆一、人留堅して、無ニ手判一して聊可得返事、

廿五日、今日將軍着ニ小田原一給事、

去比止ニ筥根路一、道筋を可レ被レ付ニ足柄一の由有ニ沙汰一けるか、此間無ニ其沙汰一、

廿六日三島、廿七日清水、廿八日掛川、廿九日吉田御着、路次依ニ急給一、供衆一圓不ニ相續一、況哉武具荷物已下曾て無ニ持參一、政宗長尾景勝將軍先て被ニ相上一、佐竹は自ニ將軍一日跡と云々、

廿八日、大坂自ニ城中一出たる者、二條被ニ召寄一被ニ相尋一、彼者言上、秀賴の御袋着ニ武具一、番所改給、隨レ之女姓三四人着ニ武具一云々、大坂籠城勢三萬餘と云々、但雜兵共に、兵粮薪鹽噌如レ形相貯云々、

十一月大朔己酉日、

二日、將軍至ニ尾州名古屋一御着、昨日岡崎迄自ニ京都一飛脚來、揃ニ人數一急度上洛可レ有レ儀を、路次中急給故、供奉聚不ニ相揃一、輕々敷上給事、不レ可レ然由有レ命ニ大御所一、三日大垣、四日柏原、五日佐和山、六日永原着給、

三日、攝津國河内ゟ被ニ押出一先手衆、先ゟ不レ進、中にも紀州淺野但馬守子今不參、人皆令ニ不審一、大御所內內腹立し給、松平下總守此間平方に令ニ居陣一、自ニ大御所一以レ使曰、先手衆不レ進間、下總守早々平野ゟ可ニ押出一旨也、依レ之今日四日飯盛迄參陣、翌五日至ニ平野一

着陣、平野には敵此間令二居陣一けるか、聞二此旨一今朝大坂に引退、將軍大垣御泊之以後從二江戸一被二召上一銀百四十駄度々に上る、從二大御所一陣中爲二目付一七人の使を被レ遣、謂二山代宮内、瀧川豐前守、城織部、鈴木久右衞門、横田甚右衞門、眞田隱岐守、初鹿野傳右衞門等一也、此内宮内豐前兩人は、大坂奉公之衆也、近年在駿河して、大御所に奉公、爲二普請奉行一、攝津國河内に押出先手衆、彼國中大略以令二放火一、かばい所といへ共、誰か業共なく令二放火一、道明寺被レ出二朱印一間遁二火難一、

六日、將軍永原に暫逗留し給、迹勢を待給、此日大坂衆天王寺を放火、壹塔失火、今日淺野但馬住吉表に參陣、

九日、將軍至二前々崎一着給、翌十日伏見に御着、此比上林德順宇治茶師勘發、

十日、本多佐渡守江戸幷關東城々置目之人數入置、御跡より出陣、今日着二尾州名護屋一、

十二日、右兵衞主立二伏見一出陣、今日着二八幡一給、此日自二伏見一將軍二條に參覲し給、大御所有二對面一、頓而伏見に歸御、

十五日癸亥大御所自二京都一將軍自二伏見一出馬給、

十六日、大御所昨日木津、今日法隆寺着御、

十七日、大御所住吉に御着、將軍は至二平野一御着、

十八日、兩御所天王寺茶磨山に御登、大坂城遠見し給、付城を有二普請一、被レ指二置清兵一止二通路一、將軍は伏見に在城し給、大御所は應御造可レ有レ之旨曰と云々、

大坂城天王寺口の惣構、兩方に堀も、中土手に八寸角の柱を立塀を付、其に四枚かけの板をひしと打付、其内に右の堀丈夫にして又有二土手一、其土手に間一間宛をき櫓ひしと有、是は被レ乘間敷用心と見たり、

奥州衆伏見を立と云共、于レ今當表無二參陣一、路次に居陣、

陣場に近比迄無二賣買物一、兩御所御着之上、商人多入來して、賣買物多レ之、

十九日、あつた村と云所に有二舊付城一、是に大坂人數相籠、淀河尻崎止二舟路一、仰二蜂須賀阿波守一被レ遣二人數一處、あつた村の敵則大坂に引入、

又十日以前に、中島にも如レ斯自二大坂一置二人數一、備前松平左衞門督奉て遣二人數一、敵則大坂城へ引入、其内殿たる雜人少々備前衆の手に討、

十一月上旬より廿二日迄三度に、自二名古屋一大御所銀三千貫目京都へ上る、

廿日入レ夜大雪、但大坂陣中は不レ降、

和泉國自二諸軍一下知亂入して、破二堂社佛閣一薪に取、伐二竹木一、頗及二狼藉一、此爲二警固一被レ遣二西尾豐後守一、此間大坂城中衆と村田權右衞門と云者、得二貴命一出合對面と云々、

此比古田織部當世數寄者之和尚、當二中鐵炮一、但かす手也、

本多美濃守幷伊勢衆、自二平野一住吉令二陣替一、

廿五日自二城中一下臈の者、淺野但馬手に走入、大御所御前に依レ召參上、城中之體を令レ問給、彼者申云、藤堂和泉守淺野但馬已下、各秀頼に致二音信一と云々、僞を申之由曰、額に秀頼と燒驗をして城中に被二追入一、大坂城に向て有二付城一、一天王寺茶磨山、一今宮の下、一其次に壹箇所、一其次えつた島、一でんぼろ、一其次壹箇所、一岡山、一大和路筋に壹箇所、一若江口今福、一守口と天滿の間に三箇所也、

廿六日佐竹陣二取令森口一、自二城中一出レ船打二鐵炮一、今日佐竹衆と相戰、十五六人佐竹手に討捕、佐竹家中隨分者二人、其外百八十人餘討死と云々、

福島を城衆手レ今相抱處、今日備前衆押取、則彼地に居陣、

廿七日えつた村面に廣して長き荻原也、敵舟にて荻の陰に來て打二鐵炮一間、味方に有二手負一、件荻を苅拂可二陣取一由曰、被レ遣二石川主殿大久保相模守二男一、

廿八日大御所えつた村面を可レ有二御覽一とて、鐵炮の者三百挺被レ遣、敵船可レ來方に被レ爲レ打間敵不レ出、然共大御所無二御出一、被レ遣二本多上野等一被レ爲レ見、

又於二千波口一堀尾山城衆押入處、敵緊相防、鑓合者五三疋、山城若狹年十五、神妙に被二下知一、時人譽レ之云々、入レ夜千波幷片平町敵自燒して入二惣構一、高麗橋を可二燒崩一とす、主殿頭人數打二鐵炮一て、不レ燒レ之樣に防之條、不レ得二燒事一、主殿頭支宅尤也と云々、此時主殿頭人數十五六人手負と云々、

島津陸奥守又入薩摩國罷出、近日可レ致二着陣一由、以二飛脚一言上、去八月下旬、秀頼雖二招給一不レ能二領掌一申、從二秀頼一其時被レ遣たりし正宗長銘脇指、奉二返上一と秀頼に披露狀に書たりけるを、此度持て上、可

ン奉二大御所一之由先立て告し、
此比上方大名共家中の者、人質或五人或十人、自二一家中一召寄、被レ置二伏見一紀伊國淺野但馬家中よりは、十三人被レ寄レ召、
從二陣中一被レ遣歟、後此狀大坂町に有レ之、
今度爲二片桐市正使一條數申越候處、一圓同心無レ之、剩抱二諸牢人一籠城之用意其聞候、就レ中先年石田治部少輔勵二逆心一、其注進聞屆、從二關東一不レ移レ時馳上、切勝二於濃州關ヶ原合戰一、頗追二拂北國西國諸軍一、遂二本望一、加之生二捕石田治部安國寺一渡二京都一、家康雪二會稽恥辱一、其刻可レ討二果秀頼一處、太閤報恩、其上以下爲二緣者一故、助命立置候處、還而企二謀叛一候事、蟷螂以レ斧如レ向二龍車一、縱一城張二鐵網一、學二唐咸陽雖レ爲二籠爐馬童一、及二出陣一則時踏落、剩二秀頼首一事不レ可レ回レ踵、右之返書歟、是も同町に有レ之、
芳墨令二披見一候、被二仰越一之題目聞屆候、聊無レ可二承引一、別而父太閤、秀頼及二十五歳一天下可二相渡一旨、日本諸侍數通起請文上候事、不レ可レ有レ紛、然處先年石田治部少輔一身之以二才覺一、雖レ覆二天下一、不レ遇して不レ遂二本望一、其次に窺二國々異見一乍レ去秀頼逆心之樣に唯今承候、何幼少にして別心を知也、併家康表裏之侍、前代未聞に候、いつか太閤忘二厚恩一、秀頼に壹ヶ國も不二宛行一、成レ孤討果との謀不レ及二是非一、秀頼一國一城に成、引二請日本一切腹事、尸上之可レ爲二面目一、若關白天道之叶二正理一、佛神三寶納受在レ之者、將軍父子露命危者歟、尚期二一戰之砌一候、
十二月小朔己卯日、
三日昨今より諸手竹たばを付、惣構堀際、或二町或貳町宇仕寄、敵鐵炮を無二際限一打間、味方竹たばを付衆る、其上手負數多有レ之、
四日大御所將軍、右之仕寄爲二一見一、茶磨山に攀登給、茲に加州の松平筑前守幷越前國主三河守幷非伊掃部大夫(古兵部少二男、別腹)近年在二江戸一、知行一萬石拜領して、近習遂二奉公一、自二去年一伏見在番也、兄の佐和山の右近大夫は、去々年より在江戸、然共外樣一圓鈍なる間被二押籠一、今上野國知行所安中居住、依レ之此度は先佐和山家中者、此掃部大夫有二一所二等一、各の手より竹たば爲二付衆一歟、堀際ゟ遠し、敵構の外ゟ少々出たり、此所の敵は眞田左衛門佐也、(此眞田左衛門佐は、十五年已前庚子年七月、父安房守と伴、大御所會津出張

之時、下野國佐野まで令二出陣一處、石田治部少大谷刑部少輔於二上方一謀反、此眞田は大谷刑少と爲二緣者一之間、自二佐野犬伏一、父と信州眞田ゟ引返令二謀反一、其後天下を大御所平均給之間令二降參一、近年は高野山に居住、是も左衛門佐兄の伊豆守父に引別て、自二佐野犬伏一宇都宮ゟ參、將軍ゟ令二出仕一謂歟、安房守左衛門佐被レ助二身命一たり、安房守は去々年於二高野山一病死、左衛門佐は秀頼より依レ召、去秋參二大坂一、令二籠城一、是を可二追入一とて馳向、櫓の內より以二鐵炮一打レ之、手負死人不レ知レ數、越前衆は本多丹下(古作左衛門于、去々年より大御所伏レ命在二越前一)同伊豆守先登たる間、彼兩人手の者共、或手負或保死、無二正體一次第也、佐和山家中者、過半手負令二打死一、筑前家中の者、尙以如レ此、兩將軍於二茶磨山一見レ之給、逆鱗甚、無二物取一喩、筑前守三川守掃部大輔迷惑相極か、(此丸は惣構え歟二横矢一俄に取出し廻輪也、篠山と云、)明後六日大御所茶磨山付城ゟ移給い、將軍岡山の付城ゟ可二移給一に被レ定、
此中普請ありける付城共、自レ今普請相止、是は於二長引一は、後日に若凶事出來ん歟、急に可レ被二責落一との工夫歟と、閭巷說有レ之と云々、又無事之扱專有レ之、可二成就一否不レ知二人之一、又をらんどより四貫目五貫目の大石火矢被二召寄一、則打レ之者一兩日中可二持來一と云々、
又城幷丸々ゟ落入水を可レ被二關留一と云々、
大坂城中に生鮭多之、寄手の衆忍て秀頼ゟ令二進上一歟と云々、
八日、鐵の楯共、自二先月一於二京都一掠つる、昨日出京、今日至二陣中一、
於二天王寺口一、大和衆石火矢を打けるに、如何したりけん藥に火付、七八十人火に燒る、當座死する者五六疆と云々、
大御所より上方諸大名ゟ銀子百貫目宛被レ下、藤堂佐渡守貳百貫目被レ下、是は去比兵粮壹萬石進上せられし故かと云々、譜代衆へは銀不レ被レ下、上方衆奧州衆迄の儀也、
九日自二先度一藝州備後衆(福島左衛門大夫息)仰付、攝津國鳥飼之邊堤を築、大坂の天滿川水をほし、件堤是日出來、天滿川大方水ほし、然共大和川の水流入間、連に干事なし、水は膝節たけ計也、此次に右の衆に仰付、去夏崩たりし森口の堤をも可レ被レ築と云々、

同九日入レ夜、酉亥寅三ヶ刻、諸手の鐵炮を城ゟ放入、猥波を揚、
十日十一兩夜、如レ右城より揃鐵炮向二陣中一放入、とき の聲を揚、
此比諸手の仕寄に築山拵、大筒を惣構ゟ打入、城中及二迷惑一見たり、
各仕寄惣構の堀ゟ、或二十間或三十間被レ寄、何も竹たはを以の儀也、此時手負死人多之、一手に或三百人、或は五百人也、向には以二土俵一如レ山高く築上ける間、指て鐵炮不レ中、右の土手ゟ往來に、中二鐵炮一事不レ可二勝計一、
此日松平下總守千波の後備寄レ陣、本多美濃守天滿の後備に陣取、榊原遠江守、本多出雲守、同豊後守、何も上方衆の後備に陣取、景勝後備には しぎ野の取出に松平丹波守、二の丸に牧野駿河守陣取、 千波は材木町たる間、于レ今板木多之、以レ是竹たばに用、今日築山城ゟ可レ打二鐵炮一由、下總守に大御所曰、
始より城中ゟ扱之使者有レ之、近比猶以如レ斯、
島津陸奥守催二人數一、國本をは出ると云共、波海順風無レ之間、難レ上之由にて、薩摩國を二日路程出て、居二陣途中一、
島津不二罷上一以前は、長岡越中守田中筑後守加藤肥後守出陣無用の由依二貴命一、此三人衆も于レ今無二參陣一、
天滿口玉作口ゟ沼なりけれ共、簀子を敷板を敷拵了簡、各竹たはを付仕寄仕る、
十二日兩御所方々陣中を巡見し給、節々如レ斯陣場ゟ出給、 入レ夜雨、
十三日日中迄雨、
十四日卯辰刻より又雨、晚より風烈、寒事甚、
藤堂和泉守を敵味方惡レ之歟、色々の惡口を或時呼、或時矢文を射ける、件矢文餘陣ゟ來とも、藤堂陣ゟ送レ之と云々、
藤堂和泉守幷北國衆、自二仕寄一被レ入二金鑿一、
此以前より無事扱有ける、秀賴公より四國の內二ヶ國可レ給、大坂可レ有二退城一との儀也、自二大御所將軍一は安房上總可レ進二兩國一との儀也、關東ゟの下向全不レ可レ有レ之由、秀賴堅依二思給一、今は不二相調一、
大御所被二召遣一ゐちやの局、依レ召陣中山茶慶被レ參、
諸手の築山より敵城の惣構直下打二鐵炮一、依レ之敵手

負少々有レ之と云々、
昨日も夜討入けるか、又十八日夜中、蜂須賀阿波守陣所ゟ自レ城入二夜討一、蜂須賀家中隨分者手負死人多レ之、大方及二百人一歟、然共深く相隱間不二分明一、蜂須賀家老稻田修理親子稠相鬪、于年十五陣中名譽也、其夜討の歸に、高麗橋を敵燒落、是は去比石川主殿相防爲レ燒さりし橋也、此稻田父子に感狀は有けれとも無二褒美一、
同日女性をあちや若狹衆仕寄所ゟ被レ參、自二城中一大藏卿局幷古若狹宰相老女出合、被レ及二對談一專被レ申二無事儀一、
十九日亦兩度、右の女性衆被二出合一、無事相調、從二大御所將軍一以二起請文一不レ可レ有二違變一之旨曰、自二城中一有樂息武藏守大野修理息子信濃守爲二證人一罷出、後藤庄三郎銀師四五年如二近習一也、幷本多上野守より以二兩使一、右の證人請取、則上野陣所令二同道一、
此無事樣子は、惣構幷三の丸可レ有二破却一、秀賴公も母堂も、關東下向之儀無二其沙汰一、領知も此如二以前一、本丸二の丸は如二前々一無二破却沙汰一、
城中にも兵粮は澤山也、其外事之闕物なし、其中に鐵炮無レ乏歟と云々、其故は皆大鐵炮を用けれは、今迄八百石樂を放けると也、三ヶ筒なとは、中々不レ用レ之、十ヶ廿ヶ卅ヶ五十目百目之打二鐵炮一けるによつて也、
此度籠城中、秀賴毎度廻二惣構一、少事をも入レ精者には、其品に依て有二褒美一、人皆莫レ不二美談一、
此度自二城中一兵共呼けるは、六本鑓の衆こわきなと云て惡口しける、是は大工大和、 後藤庄三郎銀師 榮仁京町同茶屋又四郎、 此等皆大御所令二宿直一者共也、
大坂三の丸惣構被二破却一、
廿四日大御所立二茶磨山一上洛し給、 廿五日入洛し給、
淺野但馬暇給て、紀州令二歸陣一、
伊達正宗息、於二伊豫國一二十萬三千石拜領、是は去年富田信濃守被二改易一領知也、
廿八日大御所有二參內一、
慶長二十乙卯年正月朔戊申日、聞は六月也、
立春十日也、 二日將軍之御陣人數不足とて、松平下總守 本多美濃守岡山東ゟ相移、
三日大御所出京、今日前々崎、 四日湊口、 五日龜

山、六日桑名、七日名護屋、九日岡崎、
十日大坂破却普請の體可二言上一とて安藤治右衞門佐
久間河內を自二將軍一大御所へ被レ遣、今日岡崎に着
て、事の由を申、則彼兩使を被レ爲レ上、
十五日未剋より戌の剋まで、桑名町三百間餘火災、本
多美濃守米藏七ヶ所、材木藏壹ヶ所及二類火一、
去比埋たりし大坂千波口舟入潮にて如レ元、
諸軍三人扶持役に土俵一宛、大坂二の丸當二堀向一、諸
人不二審之一、
長谷川左兵衞を堺の被レ補二代官分一、
天滿川先度築留たりし、其儘于レ今あり、依レ之西國舟
無二出入一、以來如レ此ならは、町人商成間敷とて、大坂
町人迷惑此事也、入レ夜雪降、同十六　十七終夜打
續雪ふる、近年の大雪也、近江美濃境なとは、四尺餘
漏、
十六日右兵衞主　常陸主、自二大坂陣中一京都迄歸陣、
十九日將軍自二岡山陣一、至二伏見一令二歸馬一給、松平下
總守本多美作守以下、何も于レ今在陣、
此日大御所從二岡崎一吉良右出御、此中鷹令レ遣給、鶴
鴈數多取、

舊冬より于レ今寒すること、近年無二比類一、

當代記終

駿府記　自慶長十六年辛亥八月朔日到同廿年乙卯十二月廿九日

慶長十六年辛亥

八月

朔日雨降自二京都一飛脚到來、申云、去月廿七日、依レ爲二
吉日一、寅刻三種神器奉レ渡二假殿之內侍所一、同刻主上令
レ移二御座於假殿一、則古御殿壞始、洛中地下人爲二課
役一、板倉伊賀守勝重奉二行之一、禁裡御築地、仰二諸國武
士一令レ築レ之、幷其地形、高六尺、周二町四方、石壁爲二
武士諸大夫一者築レ之、今日大御所出二御于前殿一、諸侍
悉出仕云々、
二日、宰相殿義俊、中將殿賴宣、少將殿鶴千渡二御藤堂和
泉守高虎之亭一、焜飯以後、有二能五番一、水無瀨宰相親留
入道一齋、鈴木久右衞門尉口口等、平生好之故役レ之、
前々雖レ有二此戲一、今日殊有レ興、次有二相撲一、有二筋力一
者以二五番一爲レ勝、次有二風流躍一、和泉守侍兒卅餘人、
裁二錦綉一鏤二金銀一、飾粧而爲レ之、可二奇覩一也、本多上
野介正純、成瀨隼人正正成、永井右近大夫直勝、村越
茂助直吉、松平右衞門佐正久、後藤少三郎光次等侍
レ側見レ之、及二昏黑一令レ歸給、今日之事、於二御前一公達
令レ語給、大御所頗有二御喜悅之氣一云々、
四日、安藤對馬守重政、自二江戶一爲二將軍家御使一參
着、加藤肥後守清正遺跡、其子虎之介可レ賜之否云々、
則無二相違一可レ被レ立二其跡一之旨蒙レ仰、于二江戶一歸赴
云々、
十日、禁中御造營爲二奉行一、板倉內膳正重昌可二上洛一
之由有レ仰、是依レ爲二京都守護板倉伊賀守勝重息男一
也、今日御雜談之次、武藏國由良新太郎口口僕從有、
以二手足一疾跋者、雖二山坂嶮難一、一里二里許、不レ劣二奔
馬一跋行云々、大御所被二催召一、召二彼者一可レ有二御覽一
之由有レ仰、又洛陽有二奇異之事一、一條裏辻有二幸阿彌
陀長安者一、死去以後不レ過二數日一、彼宅中至二日暮一、則
如二山伏貌一者數人出現、而欲レ見レ之忽然消失、每夕如
レ此、長安之弟異レ之、一夜及二深更一、數輩相具潛窺レ之、
山伏貌者不レ知二幾千萬一出來、而充二滿其宅中一、彼弟
有二怖畏之思一走歸、而其翌朝死去、妻子從類不レ堪
レ住二其家一、移二他所一云々、仰曰、想其可レ爲二狐之所爲一
云々、
十二日、金森出雲守正重、初山漆草獻レ之、其葉三七、

而考二見本草綱目圖經一相同云々、

十三日、今朝出二御淺間一、令レ放二鐵炮一給、當二目當二町外一、中二其星一五度、近侍放レ之、同皆不レ中、午刻有レ鳶、留二前殿櫓上一、自令レ放二鐵炮一給、三度共中、而二鳶乃落一、一鳶射二切足一而飛去云々、其遠五十間也云々、

十四日、新造御倉納二御物一云々、

十六日、淺野采女正長則、杉原伯耆守口口、羽柴美作守口口堀從二江戸一參府、淺野彈正忠長政遺領、此三人割二賜之一云々、采女正者二男也、二人者彈正聟也、今日初墳二御書院一、是爲二造替一也、畔柳壽學奉二行之一云々、

廿日、長崎所司長谷川左兵衛藤廣着府、大明南蠻異域之商船八十餘艘來朝、則快爲二商買一之由言上、有二御感一云々、

廿二日、最上出羽守義光獻二初菱喰一、仍被レ進二禁中一云々、

廿三日、至レ夜有馬修理大夫口口出二御前一、卷物二十獻レ之、同息左衛門佐銀子五十枚獻レ之云々、

廿四日、加藤肥後守清正息男虎之介出二御前一、黄金五十枚、銀百枚獻レ之、則中將殿有二饗應之儀一、是近年爲二質子一在二江戸一、今依二肥後守死去一歸國、長岡越中守忠興獻二象牙白絹孔雀豹等一、(通通國道商船故也云々、)

廿五日、高麗人參一襲宛、各醫師拜二領之一、去十三日、會津大地震、蒲生飛驒守秀之城郭石壁以下悉震崩云々、

廿六日、於二營中西丸一被レ綵二神明宮樂一云々、

九月

朔日、在府諸武士悉出仕、金地院崇傳長老出二御前一、被二近召一及二御雜談一云々、

三日、佐久間河內守口口自二尾張國那古屋一參着、獻二御普請之指圖一云々、

五日、國々諸大名奉二重陽之御服一云々、

九日、諸人雖二出仕一、前殿造替故無二出御一云々、

十日、今夜自二子刻一御氣色不レ快、平旦之診脉、宗哲法印逼參故蒙二御氣色一云々、

十一日、江戸御姬君着府、土井大炊助利勝供奉、依二越前少將殿忠直之嫁娶之儀一也、

十四日、日野大納言入道唯心着府之由、後藤少三郎言上、明日爲二姬君御覽一、於二營中三之丸一可レ有二御能一、則御座席之下知福阿彌奉レ之、去歲之秋、琉球王來府之時、其席之體不レ叶二御意一而有二御氣色一、今日初御赦

免、御料理之間營作之功了、今晚有二御料理始一云々、

十五日、有二御能一、中將殿御能二番、宰相殿御小鼓一番令レ勤レ之給、其外下間少進法印、金春大夫二人相具役レ之、狂言鷺二右衛門一、甚六、彌右衛門等勤レ之、姬君被レ見二一萬匹一、被物二領賜二金春大夫一、土井大炊助奉レ之、今朝於二二之丸一御二覽呂宋人一獻二葡萄酒南蠻蠟卷物等一云々、

十六日、吉田神龍院梵舜進二藤氏系圖一卷一云々、

十七日、於二御前一有二大佛殿之談一、虹梁容易難レ動之處、中井大和守正次以二脚代一截、以二轆轤一上レ之云々、秉燭以後、於二本多上野介正純亭一、姬君供奉、土井大炊助、渡邊山城守口口、長谷川筑後守口口、諸侍以下有二招請一及二酒宴一云々、

十八日、姬君令レ赴二越前一給、此二三日宰相殿有二感冒之氣一、醫師皆候二營中一、是以一昨夜宗哲法印被二召出一、蓋服二柴雪一給、御熱氣去云々、

十九日、松平陸奥守政宗獻二大鷹一、淺野紀伊守幸長爲二故彈正遺物一、獻二刀(長光)茶壺(鎮西)南都喜多院明日上洛之由聞一、召之一、賜二被物二領銀二十枚一、建武式目令二道春讀レ之一、議二論其得失一給、山形駿河守家親最上獻二大鷹一云々、

廿日、自二江戸一爲二御使一井上半九郎正就着府、被レ進二生鮭一、則爲二御料理一、來月六日、御鷹野可レ有二出御一之旨、半九郎被レ仰含云々、南蠻世界圖屏風有二御覽一、而及二異域國々之御沙汰一、後藤少三郎、長谷川左兵衛候二御前一云々、

廿二日、水野對馬守口口於二遠江國一求レ隼、雖レ獻レ之不レ叶二御意一、被二返下一、此事鶴君於二御前一被二仰出一、今日紫羅紗(其長十三間)內藤主馬口口自二御庫一取二出之一、是御鷹野可レ裁二御羽織一故也、東海之中有二濃毘須般國一、自レ古未レ通、去年京町人田中勝介、就二後藤少三郎一望二渡海一、今夏歸朝、數色之羅紗幷葡萄酒持來、件紫紗其一也、其海路八九千里云々、施藥院宗伯法印自二京都一下着、則被レ召二御前一、與安法印同有二本草之御雜談一、堀尾帶刀吉晴爲二遺物一、獻二金百枚幷眞壺一、本多上野介正純傳レ之、今日仰二畔柳壽學一、駿河江尻之橋可二改作一之由有二御諚一云々、

廿三日、本多佐渡守正信獻二鮭魚一、來廿七日、藤堂和泉守之亭可レ有二渡御一之由被二仰出一云々、

廿四日、今朝府中近邊、御初鷹野(依爲申日也、)鴨四羽令レ摯

給、則爲二御料理之供一、賜二近習衆一云々、

廿五日、松茸一籠、紅柿二籠、自二京都板倉伊賀守勝重一獻レ之、明後日於二藤堂和泉守亭一可レ有二御能一之由、能組之次第永井右近被二仰付一、依レ之藤堂和泉守唯今候二前殿一之由、後藤少三郎申レ之、則召二御前一能組之儀被二仰出一、被レ下二御料理一、且又生鮭一拜領云々、

廿六日、中將殿伺候之諸侍、可レ賜二所領一之由、日來依レ有二御諚一、安藤帶刀直次、水野對馬守口口、彦坂九兵衛尉光正、以二遠州知行帳一於二御前一有二其配分一、毛利中納言輝元入道宗瑞獻二梨子五籠一、大久保相摸守忠隣獻二生鮭魚幷乾鮭魚一、但馬國代官間宮新左衛門口口獻二朝倉山椒三箱一云々、

廿七日、辰刻渡二御於藤堂和泉守亭一、宰相殿中將殿相隨給云々、御供奉本多上野介、安藤帶刀、成瀨隼人正、村越茂助、永井右近、松平右衛門佐、水野對馬守、西尾丹後守口口、竹腰山城守口口、秋元但馬守泰勝、板倉內膳正、後藤少三郎、長谷川左兵衛、淺井七平口口、大岡兵蔵口口、昵近之御小姓佐久間伊豫守賴勝、日根野左京亮口口、高力河內守口口、北見長五郎口口、野尻萬介口口其外數十輩、御醫師施藥院宗伯法印、與安法印宗哲等、其外御供不レ可二勝計一、埦飯以後有二御能一、一番高砂（金春大夫）二番清經（左京和泉小姓）三番杜若（少進法印）四番采女（金春）五番紅葉狩（少進）六番湯谷（左京）七番昭君（少進）八番谷行（金春）九番吳服（金春）大鼓役（宮增彌二郎、大藏）小鼓役（大藏六藏、幸清五郎、藏世新九郎）杜若之小鼓宰相殿令レ擊給、狂言役（鷺二右衛門、淵右衛門）、今日日野大納言入道唯心知云出二御前一、仰曰、唯今之御能可レ被レ見レ之、次圓光寺長老金地院長老被レ參、召二少進法印及大藏道意一、而有二古來亂舞之御尋一、午時獻レ餅、至レ晚供二御膳一、日野唯心、水無瀨一齋、兩長老爲二御相伴一云々、申刻還御、其節以二佐久間伊豫守賴勝一、今日之能叶二御意一之由、下間少進法印被二仰遣一云々、

廿八日、藤堂和泉守爲二後宴一、今日有二能十一番一、諸士悉群集、青銅二萬匹積二舞臺一、又銀十枚被物一重與二金春大夫一、午時本多上野介、安藤帶刀、成瀨隼人正起レ座而登城、昨晚自二江戶一爲二將軍家御使一參着、同出二御前一、則可レ致二能見物一之由有レ仰、而再到二和泉守亭一、松平右衛門佐、後藤少三郎、長谷川左兵衛候二御前一云々、

廿九日、毛利三次郎（後改二吉向守一）出二御前一、獻二銀百枚一、福原越後守獻二糀十具一、本多上野介傳レ之、三次郎者宗瑞息長

門守弟也、當時長門守在二江戶一、三次郎又赴二江戶一、福原甚介介錯也、龜井武藏守出二御前一、獻二銀百枚鐵炮一挺一、本多上野介成瀨隼人正傳レ之、松平陸奥守政宗獻二鮭魚十箇一云々、

晦日、今朝於二二之丸中將殿御亭一、召二藤堂和泉守一而有二饗應之儀一、則宰相殿渡御云々、

十月

朔日（快晴）如レ例諸士出仕、前殿造替漸出來之故出御、山科少將言緒、舟橋式部少輔秀賢、冷泉侍從爲滿自二京都一着府、則出二御前一、秀賢獻二諸家略系圖屏風一雙一、舟橋式部少輔下間少進法印出二御前一、金春大夫以下召二簀子一、御馬一匹賜二少進法印一、銀三十枚被物一重下二賜金春大夫一、其外六十餘輩、各被物經二頭之一、永井右近奉レ之、少進明日赴二江戶一云々、金春以下又赴二江戶一、今日日野唯心、舟橋式部少、圓光寺、金地院以レ候二御前一、有二京都院內及倭漢古今之御雜談一、藤堂和泉守蒙レ仰而、明日赴二肥後國一、是故肥後守子息幼年爲二異見一云云、遠江國住人市野獻二生姜一、則召二御前一、與二御脫別當諏訪部宗右衛門尉口口一有二牧馬之談一、市野知レ馬者也云々、自二京都一本因坊算砂來、是當時圍碁之名譽也云々、

二日、今晚日野唯心、山科少將、舟橋式部、冷泉侍從、兩長老於二前殿一賜二饗食一、茶後出御、此時山岡修理獻二銀百枚一、山岡新太郎口口獻二羽織二領一、本多上野介、永井右近傳レ之、爲二天台西樂院僧正還物一、二大部六十卷岩本坊獻レ之、因下於二御前一有中天台法門之御雜談上、今日大鷹一聯、後藤長乘拜二領之一云々、

三日、所々御代官、爲二納米之償一、金一萬九千兩松平右衛門佐納二之殿守御庫一、被レ遣二御書於呂宋國王一、腰刀脇刀各一柄爲二信物一、長谷川左兵衛奉レ之云々、

四日御鷹野、彦六、文九郎其外數輩、自二關東一來、當年鷹鴨諸鳥甚多由言上、中井大和守自二京都一來、則召二御前一、此間前殿以下造替次第被二仰出一、仍大和守大佛殿大虹梁容易擧之由申レ之、御氣色快然、今日自二將軍家一被レ進二生鮭魚一、片桐主膳正獻二御服三領幷澁紙二百張一、是如レ例爲二御鷹野料一也云々、生駒讃岐守正俊獻二紫皮百枚一云々、

五日成瀨豐後守口口爲二御使一、自二將軍家一參着云々、

六日、巳刻爲二御放鷹一令レ赴二關東一給、本多上野介、安藤帶刀、成瀨隼人正、村越茂助、松平右衛門佐、後藤少

三郎、其外供奉之輩不レ可二勝計一、今日米五十石被レ遣二日野唯心一、又八十石賜二冰無瀬一齋、山科言緒、舟橋秀賢、冷泉爲満各黄金一枚被物二領宛賜レ之、召二畫工狩野一、大内圖幷日本大社圖新造レ之、前殿可レ書之由被二仰出一、則畫工舟橋式部可二相談一云々、於二駿府八幡邊一御放鷹摯レ雁、則賜二日野唯心一、今晩着二御清水一云々、

七日、甲朝出御、着二御于今泉一、（養德寺と云、）

八日、御二止宿于三島一云々、

九日、小田原城主大久保相摸守忠隣被二召出一、令レ問二息加賀守口口所勞一給、其後當年鴈白鳥等多否有二御尋一、別而多之由言上、本多佐渡守爲二御迎一出向、有二江戸御雜談一、（本多上野介父也、）幕府御後見也云々、

十日、御二着于中原一、安藤對馬守依二幕府之仰一來、御膳以下事相二勤之一、翌日御逗留、今朝大久保加賀守卒去、相摸守嫡男、當時幕府之重臣也云々、

十二日、相摸川邊出御、依二雨降一還御、御逗留云々、

十三日、御止二宿于藤澤一云々、

十四日、御二着于神奈川一、爲二御迎一幕下從二江戸一出御、則有二御對面一、暫御雜談、將軍家還二御于江戸一云々、

十五日、大御所着二御于稻毛一、今日於二途中一白御鷹始

摯二眞名鶴一、御氣色快然云々、

十六日、着二御江戸一、在二江戸一諸大名、爲二御迎一金杉芝品川邊迄出向、不レ知二其數一云々、

十七日、將軍家渡二御于新城一、有二御對面一云々、

十八日、在二江戸一諸大名、大御所爲二御目見一登城、其獻物不レ遑レ記レ之、

十九日、海上白鳥多由、大御所聞二召之一、鐵炮上手數輩被二召供一出御、今日風波惡、御舟搖動、而目當不レ定故還御、今晩土井大炊助從二越前一歸來、則召二御前一、有二越前之御雜談一、

廿日、增上寺國師（觀智）登城、改二御裝束一給、有二御對面一、呑龍丁的廊山等出二御前一、是國師之御弟子、當時淨土之知識也云々、將軍家今朝本多上野介正純、大久保石見守長安、安藤帶刀直次、成瀨隼人正正成、永井右近直勝、松平右衞門佐正久、後藤少三郎光次、長谷川左兵衞藤廣賜二御茶鶴之御料理一云々、

廿一日、江戸近邊御放鷹、鶴鴈等物數令レ摯レ之給、今日於二本城南庭一有二御能十一番一、少進法印、金春大夫、金剛、寶生等爲レ之、則召二近侍一令レ見レ之給、山科、冷泉、舟橋、侍二將軍家之御傍一而見レ之、御能以後、青銅三萬匹積二舞臺之左右一、唐織小袖一重宛、金春金剛寶生各纏二頭之一、其外諸役者被物一重同下賜之一、酒井雅樂助忠世奉レ之、一番賀茂（金春）二番清經（少進）三番松風（金春）四番道成寺（少進）五番自然居士（金春）六番海士（少進）七番鳥頭（金春）八番山姥（少進）九番國栖（金春）十番通小町（金春）十一番弓八幡（大藏大夫、金春二男、狂言鬼、綱右衞門、甚六）等役レ之云々、

廿二日、今日又有二御能一、依二大御所仰一而、幕下御臺所有二御覽一、爲レ質在二江戸一諸國大名母儀息女等登城見レ之、御能五番以後、鵜眼三萬匹下賜之一、唐織小袖二領宛、金春寶生金剛綱二頭之一、幷被物一重宛、諸役者皆頂二戴之一、一番白髮（金春）二番寶盛（同三）三番湯谷（少進）四番舟辨慶（金春）五番柏崎（金春）六番葵上（少進）七番範太鼓寶生八番董永（金春）九番舟橋（少進）十番吳服（金春）于、

廿三日、江戸近遊御放鷹、鶴二鴈十鴨廿令レ摯レ之給云云、

廿四日、渡二御本城一、幕府爲二御迎一及二大門出御一、御若君（竹千代公、）御弟國松（玉）君御座席之緣上二而出向、執二大御所之左右御手一給、然而御臺所有二御對面一、其後供二塊飯一、盡二山海之珍一給、幕下有二御相伴一、本多佐渡守候二御前一、御挨拶申云々、有二天下政務之御雜談一而、大御所還御云々、

廿五日大御所渡二御增上寺一、銀百枚被物十領被レ進二國師一、自レ辰及レ未有二佛法御雜談一、今朝幕下依レ令レ切二鎭西筥之口一給、則於二御數奇屋一召二本多佐渡守、同上野介、大久保石見守、安藤帶刀、成瀨隼人、村越茂助、永井右近、松平右衞門佐、後藤少三郎、長谷川左兵衞一、鶴之御料理賜二御茶一、

廿六日、大御所爲二御放鷹一令レ赴二戸田一給、幕下遣二安藤對馬守一諸事令二沙汰一給云々、

廿七日、將軍家召二金春大夫一下問少進等於二本城一有二御能一、今日關寺小町猩々亂及二祕曲一云々、此關寺小町所レ祕、而數年絕無二致レ之者一、此度依二御所望一少進爲レ之、鼓觀世新九郎大藏助三役レ之云々、

廿九日、令レ赴二川越一給云々、

十一月

朔日、御放鷹、秉燭以後、山門南光坊仙波北院等出二御前一、爲二仙波所化堪忍料一而、寺領可レ有二御寄附一之旨被二仰出一云々、

二日、御鷹野云々、

三日、同、

四日、兄鷹斃二菱喰一、前代未レ聞レ之云々、
五日、至二忍之御鷹場一給、自二將軍家一爲二御使一土井大炊助參上、諸事執行云々、
六日、幕下爲二御鷹野一出二御鴻巣一、是大御所依二御意一也、成瀬隼人正、安藤帶刀、永井右近、松平右衞門佐、後藤少三郎、長谷川左兵衞、自レ忍至二鴻巣一將軍家爲二御目見一也云々、
七日、增上寺國師依二御詫一來二於忍一給、不殘長老呑龍長老相隨而參、於二御前一有二佛法之御雜譚一云々、
八日、大御所御放鷹、鶴鴈物數有レ之云々、駿府出御以來之御鷹之鳥、日々有二御料理一而賜二近侍一、今日秉燭以後、松平陸奥守政宗參候、獻二馬十匹鷹十聯一、自レ是政宗至二江戶一云々、
九日、增上寺國師被レ赴二新田一、是御先祖新田義重賜二官征夷將軍一給、則於二彼地新田一代々之御菩提所可レ有二御建立一、可レ然地形有レ之否可二聞召一故也、土井大炊助、成瀨隼人正被二相添一云々、
十日、御放鷹、自二卯刻一至二申刻一還御云々、
十一日、御放鷹、眞名鶴里鶴共令レ摯レ之給、高麗鷹脇を摯云々、及レ夜南部信濃守利直獻二御茶一、御料理以後、令レ呑二御茶一、則賜二利直一、其後御近侍皆呑レ之云々、
五日、至二忍之御鷹場一給、自二將軍家一爲二御使一土井大炊助參上、諸事執行云々、
六日、幕下爲二御鷹野一出二御鴻巣一、是大御所依二御意一也、成瀨隼人正、安藤帶刀、永井右近、松平右衞門佐、後藤少三郎、長谷川左兵衞、自レ忍至二鴻巣一將軍家爲二御目見一也云々、
七日、增上寺國師依二御詫一來二於忍一給、不殘長老呑龍長老相隨而參、於二御前一有二佛法之御雜譚一云々、
八日、大御所御放鷹、鶴鴈物數有レ之云々、駿府出御以來之御鷹之鳥、日々有二御料理一而賜二近侍一、今日秉燭以後、松平陸奥守政宗參候、獻二馬十匹鷹十聯一、自レ是政宗至二江戶一云々、
九日、增上寺國師被レ赴二新田一、是御先祖新田義重賜二官征夷將軍一給、則於二彼地新田一代々之御菩提所可レ有二御建立一、可レ然地形有レ之否可二聞召一故也、土井大炊助、成瀨隼人正被二相添一云々、
十日、御放鷹、自二卯刻一至二申刻一還御云々、
十一日、御放鷹、眞名鶴里鶴共令レ摯レ之給、高麗鷹脇を摯云々、及レ夜南部信濃守利直獻二御茶一、御料理以後、令レ呑二御茶一、則賜二利直一、其後御近侍皆呑レ之云々、
十二日、御鷹野、今晚自二駿河一飛脚到來、申云、宰相殿(義俊)自二去八日之朝一御不例、至二十日一御疱瘡出云々、依レ之明旦俄可レ有二御歸府一之旨被二仰出一云々、
十三日、今朝自レ忍至二川越一給、將軍家自二鴻巢一令二出向一給、有二御對面一、此時自二將軍家一大御所近侍衆本多上野介、安藤帶刀、永井右近、松平右衞門佐、後藤少三郎、長谷川左兵衞、各黃金御馬御服等賜レ之云々、今夜增上寺國師、及成瀨隼人正、土井大炊助自二新田一歸參、申云、於二彼地一義重義貞之菩提所、昔之舊跡有レ之云々、是以御氣色快然云々、
十四日、御二着于武州府中一、將軍家今日還二御于江戶一云々、
十五日、今日宰相殿御疱瘡容易之由、自二駿府一施藥院宗伯及宗哲法印言上之一、是以有二御喜悅一、而途中緩々可レ有二御鷹野一之由被二仰出一、則令レ赴二稻毛一給云々、
十六日、御放鷹、鶴鴈鴨之類有二物數一、今晚御二着于神奈川一、幕下爲二御暇請一渡二御于此所一、有二御對面一、自二幕府一被レ進二白兒鷹幷鶴一、共以爲二逸物一云々、良久御鷹之御雜談有レ之、則幕府御二止宿於金藏寺一、米澤中納言景勝爲二御目見一參上、綿子五百把蠟燭五百挺馬一匹(精毛獻レ之、今夕宰相殿御疱瘡謂容易之由申來云々、
十七日、終日大風吹、暫二御鷹一事不自由故御逗留、同幕下有二御逗留一、乘燭以後、渡二御于前殿一、有二御雜談一、本多佐渡守候二御前一云々、
十八日、路次御放鷹、着二御藤澤一、幕下還二御於江戶一、及レ夜增上寺弟子玄惠上人出仕、有二佛法御雜談一、則銀百枚賜之、彼堂以下上葺之料也、鎌倉莊嚴院出仕、依二御尋一而鎌倉三代將軍北條九代舊規之事詳言上之、保曆間記所持之由申レ之、自二保元一至二曆應一治亂粗所レ記云云、則其書可レ有二御覽一之旨被レ仰、佐竹少將義宣(右京大夫)至二此所一爲二御目見一、蠟燭千挺獻之云々、
十九日、御鷹野、御二着中原一、今日若鷹始摯二白鳥一、依レ之御氣色快然、及レ夜鎌倉莊嚴院保曆間記持參、於二御前一讀レ之、其外鎌倉中舊跡之事有二御雜談一云々、自二駿河一飛脚參着、宰相殿御疱瘡驗氣之由申レ之云々、
廿日、御鷹野、鶴三鴈三十鴨二十令レ摯レ之給、御二着小田原一、城主相摸守忠隣嫡男加賀守去比卒去、依レ有二其憚一而不レ出二御前一云々、
廿一日、着二御于三島一云々、
廿二日、路次御放鷹、着二御于今泉一(普德寺とも列卒とも云、自二伏見一飛脚到來、申云、去十七日未刻、伏見町中燒亡、家千餘燒失、餘烟之所レ移龜井武藏守口口、古田大膳大夫口口、島津右馬頭口口、稻葉右近大夫口口、田中筑後守忠政、池田備中守口口、石川長門守口口、森右近忠政、毛利伊勢守口口、加藤左衞門佐口口、日根野左京亮口口、堀久太郎口口、筒井紀井守口口、松平大隅守口口、松平土佐守忠義、松平陸奥守政宗、松平伊豫守忠昌、永井右近大夫直勝等宅燒亡云々、凡此日相州小田原在家千餘、豆州下田村、駿府丸子里燒失云々、
廿三日、駿府御歸着、中將殿出二御迎一給、鶴君者宰相殿御疱瘡、且又當時府中小兒無二不レ患之者一、爲レ遁二此時氣一無二御出一、大御所先渡二御于宰相殿之御許一、御疱瘡事之外多出、然漸至二平復一、且被レ令レ悅給云々、
廿四日、日野入道唯心、圓光寺長老出仕、有二御雜談一、則賜レ經、今日土井大炊助自二江戶一爲二御使一參上、是無事御歸府令レ賀レ之給、此間日々自二江戶一以二御使一、

宰相殿御疱瘡令レ問レ之給、大御所御喜悦云々、
廿六日、池田備中守口口獻二銀臺子一飾幷御服十領一、淺野左衞門佐口口出二御前一獻二御服五領一、是淺野紀伊守幸長從弟陪臣也、宰相殿之御疱瘡爲レ奉レ問之參府、宰相殿者紀伊守聟君也、當時所勞故、爲レ使左衞門佐來云々、此間諸國遠近武士、御疱瘡事隨二聞及一而、自二東西南北一馳參云々、
廿七日、宰相殿御疱瘡平復、有二御沐浴之儀一、爲二御祝一則自二御母儀一賜二酒肴一、於二營中一伺候諸侍及二酒宴一、施藥院宗伯法印與安法印、其外此間候二營中一醫師各賜レ銀云々、
廿八日、於二前殿一大明人御覽之、大明商船、雖レ至二何浦一、悉於二長崎一可レ遂二商買一之由申請之、則賜二御印一、長谷川左兵衞奉レ之云々、
廿九日、角倉與一自二京都一來申云、大佛殿漸出來上冤云々、淀鳥羽之船、直至二三條橋下一、是與一父了意決レ河滿レ流爲レ之、禁中御造營之材木運レ之云々、
晦日、松平陸奥守政宗獻二初鰹一、就レ之政宗領所海涯人屋、波濤大漲來悉流失、溺死者五千人、世曰二津波一云々、本多上野介言二上之一、此日政宗爲レ求レ肴遣二侍二人一、則

此者驅二漁人一將レ出二釣舟一、漁人云、今日潮色異常、天氣不快、難レ出レ舟之由申レ之、一人者應二此儀一止レ之、一人者請二主命一不レ行、誣二其君一者也、非レ可レ止、而終漁人六七人强相具之、出二舟數十町一、時海面滔天、大浪如レ山來、失レ肝失レ魂之處、此舟浮二彼波上一不レ沈、而後至二波平處一、此時靜心開眼見レ之、彼漁人所レ住之里邊、山上之松傍也、（是所謂千貫松也、）則繫二舟於彼松一、波濤退去後、舟在二松梢一、其後彼者漁人、相共下レ山至二麓里一、一宇不レ殘流失、而所レ止之一人、所レ殘漁人、無二逃者一沒レ波死、政宗聞二此事一、彼者與二俸祿一、政宗語レ之由、後藤少三郎於二御前一言二上之一、仰曰、彼者依レ重二其主命一而免二災難一、退得レ福者也云々、此日南部津輕海邊人屋溺失、而人馬三千餘死云々、

十二月

朔日、府中近邊御鷹野、田面湛レ水故、有二御氣色一、仰二彦坂九兵衞、畔柳壽學、松下淨慶一、彼田之名主十餘人被レ禁二獄之一、是每年苅田以後、田上之水可二引去一之旨令二相觸一給處、依レ背二御意一及二此儀一云々、
二日、秀賴公以二遊佐新左衞門一、宰相殿御疱瘡平愈祝レ之、相二添直書一給、今日於二前殿一、在府諸侍賜レ饗、於二關東一摯レ之給御鷹之白鳥有二御料理一云々、
四日、府中近邊御鷹野云々、
七日、寺澤志摩守參府、則出二御前一、獻二銀五十枚段子十卷一、同子次郎獻二銀五十枚一、本多伊勢守出二御前一、獻二銀五十枚一、去春父豐後守口口死去以後、其遺跡無二相違一繼レ之、今始出云々、召二安藤對馬守一、明年於二江戶一船入之普請可レ有レ之、中國九國之武士可二相勤一之由被二仰出一云々、
八日、御鷹野云々、
十日、府中近邊御放鷹、今日自二攝州大坂一、織田入道有樂着府云々、
十一日、御鷹野、今晚有馬左衞門佐着府出二御前一、綾子十卷獻レ之云々、
十二日雨降今夜幸若彌次郎大夫被二召出一、有二舞曲一、明日於二田中一可レ有二御放鷹一之由被二仰出一云々、
十三日、田中御鷹野御延引、是天氣不レ晴故也云々、
十四日、今朝有樂於二御數奇屋一賜二御茶一、日野唯心、山名禪高爲二御相伴一云々、檜柴肩衝之御茶入、朱衣肩衝（アケノコロモ）御茶入、（濃茶入）虛堂之御掛物、古銅御花入令レ飭レ之給、大御所花を入給、御茶有樂立レ之、其後於二前殿一有樂獻二黃金三枚御服五領一、自二秀賴公一爲二宰相殿疱瘡御平愈之賀儀一、被レ進二銀三百枚御服十領一、石河伊豆守爲二御使一參云々、
十五日、府中近邊御放鷹、島津龍伯爲二遺物一、長光刀左文字脇指獻レ之、就レ之去歲所二搦來一之琉球王歸レ之、如二前々一琉球之往來可レ爲之由、自二大明國一依レ請レ之、則彼王歸還之旨言上、依レ之琉球人着府、則於二前殿一御二覽之一、藥種及彼邦之異物等獻レ之、今晚富士本門寺校割二箇相承、（日蓮後藤少三郎備二御覽一、其詞云、釋尊五十年、佛法日蓮阿闍梨日與附二屬之一云々、是以按レ之、日蓮爾前之敎、不レ捨事分明也、後來至二末派一暗二本源一、而僅以二四十餘年未顯眞實之一語一、爾前之敎可二弃損一之、是非二祖師之本意一者也、於二御前一有二其沙汰一云々、
十六日、府中近邊御放鷹云々、
十八日、御放鷹云々、
廿日、府中近邊御鷹野如レ例、營中御煤拂云々、
廿一日、爲二御放鷹一令レ赴二田中一給、今晚大久保石見守長安着府、日來越後國仕置、甲斐武藏之御領所廻レ之云々、
廿六日申刻、自二田中一還御、今夜大久保石見守出二御

前、板倉伊賀守、米津田清右衞門口口同出二御前一、前日於二旧中一爲二御目見一、此兩人山城國御檢地相終故參府云々、當時成瀨隼人正常在二駿河一、昵近故、清右衞門在二伏見一而行二其事一云々、

廿七日、石川主殿助敦高爲二越年一參着、出二御前一、美濃尾張三河遠江之諸侍、悉爲二越年一參府、今日對馬國柳川豐前守朝鮮人參芫菁肉從容等之藥種獻レ之云々、

晦日、此兩三日、日本國諸大名、爲二歲暮之慶賀一、金銀御服等獻レ之、不レ遑二枚擧一云々、

慶長十七年壬子

正月

朔日巳刻、出二御前殿一、御髭束白水干御劒高力河內守持レ之 將軍家御名代神尾五兵衞尉守世 越前少將殿忠直御孫子 名代、越後少將殿忠輝公府御第 本多上野介正純披二露之一、今日出仕輩大澤少將口口、松平和泉守口口、同河內守口口、同玄蕃頭口口、同主殿頭口口、水野日向守口口、本多縫殿助康俊、同豐後守口口、戶田土佐守口口、三好因幡守口口、三好丹後守口口、松倉豐後守口口、水野河內守 重弘、有馬左衞門佐口口、桑山左衞門佐口口、堀本 田若狹守口口、池田備後守口口、堀丹後守直奇、溝川豐前守口口、佐久間河內守口口、市橋下總守口口、山代宮內少輔口口、桑山左近口口、岡越前守口口、宮本丹波守口口、能勢伊豫守口口、近藤信濃守口口、德永左馬助口口、山岡主計頭口口、分部左京亮口口、川勝信濃守口口、猪子內匠助口口、別所豐後守各獻二御太刀御馬一、本多上野介、永井右近、西尾丹後守披二露之一、其外無官無位侍出仕之輩不レ可二勝計一云々、

二日、巳刻出御、秀賴公御名代某、金十枚被レ進レ之、今日出仕輩西尾豐後守口口、遠藤但馬守口口、竹中丹後守重、一柳監物口口、九鬼長門守口口、古田大膳大夫口口、稻葉右近大夫口口、谷出羽守口口、平野遠江守口口、長谷川縫殿助口口、日野入道唯心、水無瀨入道一齋、山名禪高、上杉黨、土岐黨、大島黨、高木黨、木曾黨、施藥院 宗伯法印、與安法印宗哲、各御太刀御馬獻レ之云々、

三日、國々諸大名、爲二年頭之賀儀一、金銀御服獻レ之云々、

四日、自二江戶一將軍家爲二御使一土井大炊助參上、又自

分之年始之祝儀申レ之云々、

六日、今日法中幷社司爲二御禮一、仰二遠州可睡軒宗珊一而曹洞宗之法問御二聽聞一之、以二趙州無爲一題、凡爲二法問一者三十餘人、圓光寺長老、金地院長老候二御前一、法問相終、被物銀子賜二宗珊一、又銀子百枚曾我山雲達賜レ之、是曾我山正法寺曹洞宗 修理料也云々、

七日、今日於二三河國吉良一爲二御鷹野一、御道途着二御于田中一云々、

八日、相良御止宿云々、

九日、横須賀着御云々、

十日、着二御中泉一、今晚織田有樂自二江戶一歸來、於二此所一爲二御目見一、則賜二御鷹之鶴一、可レ有二上洛一由被レ仰云々、

十一日、當所依レ爲二御鷹場一御逗留云々、

十二日、着二御濱名一云々、

十三日、着二御吉田一、城主松平玄蕃頭銀百枚賜レ之、

十四日、着二御吉良一、銀百枚城主本多縫殿助康俊賜之、本多美濃守口口、松平下總守淸正、小野日向守口口、菅沼左近口口等至二此所一爲二御目見一、今晚藤堂和泉守來二于此所一、是者去冬爲二肥後國仕置御使一赴二彼國一、則肥州之繪圖作レ之備二御覽一、此趣可レ言二上幕下一之由蒙レ仰、自レ是赴二江戶一云々、

十六日、御放鷹、今日青山岡書助爲二御使一來、是御鷹野爲二御見廻一云々、京極若狹守忠高、同丹後守口口共以二使者一、御服幷嘉肴獻レ之云々、

十七日、御鷹野、今日被レ進二仙洞御鷹之鶴一、傳奏廣橋兼勝、勘修寺光豐、御鷹之鷹各三羽宛被レ遣レ之云々、

十八日、御鷹野、御鷹之鶴令レ贈二秀賴公一給云々、

十九日、御鷹野、今日成瀨隼人正、竹腰山城守口口可レ參之由被レ仰二遣駿府一、是名護屋 御普請 之儀爲レ可レ被二仰付一云々、

廿日、着二御岡崎一、城主本多豐後守口口銀子百枚賜レ之云々、

廿一日、御鷹野、松平攝津守出二御前一云々、

廿二日、御鷹之鶴被レ進二主上一云々、

廿三日、御鷹野、成瀨隼人正、竹腰山城守參候云々、

廿四日、御放鷹、松平筑前守利光獻二御服廿領一、則御鷹之鶴被レ遣レ之云々、

廿五日、御鷹野、羽柴右近忠政獻二設子御袴一云々、

廿六日、大樹寺御參詣、是御祖父御菩提所、銀子五十

枚賜二住持僧一、又參二正應寺一給、是故大納言殿御墳墓所也、銀五十枚賜二院主一云々、

廿七日、着二御名護屋一云々、

廿八日、御屋作、遑以下之事被レ仰二付之一、今日淺野紀伊守以二使者一獻二御服五領一、則大鷹一居幷御鷹鶴賜レ之云々、

廿九日、御二歸着岡崎一云々、

晦日雨降、池田三左衛門輝政御服五領被レ獻レ之、同御鷹之鶴被レ遣レ之、又左衛門督忠継大鷹一聯賜レ之、左衛門督者御孫也、

二月

朔日雨降御逗留云々、

二日雨降御逗留云々、

三日、於二遠江國堺川一有二御鹿狩一、凡列率五六千人、以二弓銃一驅レ之、又唐犬六七十匹縱横追レ之、大御所相二具鐵炮之上手數十輩一令レ撃レ之給、猪二三十獲レ之給、時大雨降來故、令レ止二御狩一給、今晩着二御濱松一云々、

四日、中泉着御、今日成瀬豐後守口口爲二御使一自二江戸一參、幕府以二御内書一安藤帶刀、村越茂助兩人、令レ尋二大御所御機嫌之好悪一給、度々被レ進二御使者一事甚有二御感一、則御鷹之鶴二翼被レ進レ之云々、

五日雨降

六日、御鷹野、及レ晩雨降云々、

七日雨降

八日風大吹、御滯留云々、

九日、着二御懸川一云々、

十日、依二連日雨一、大井河水増、而人馬不レ得レ渡之故、至二金谷一廻二伊呂宇一、求二淺瀬一渡レ之御、其邊村邑水練者千餘人來、爲二河越一供二奉之一御、女中方捧二肩輿一渡レ之云々、田中着御云々、

十一日、府中御歸座、此間於二御鷹野一令レ鞭給鶴七十六、其餘鳧鴨之類不レ知二其數一云々、

十二日、自二江戸幕下一爲二御使一神尾五兵衛尉參着、御鷹野還御被レ賀二仰之一、今日於二前殿一、日野唯心、圓光寺長老、金地院長老賜レ盃、則有二出御一而及二御雜談一、自二女院一以二井家攝津守口口一、薫物被レ贈二進之一云々、

十四日、於二御前一東鑑盛衰記異同令レ考レ之給、少將殿鶴君令レ煩二疱瘡一給、因レ玆醫師候二營中一云々、

十五日、三河國大樹寺鎮譽和尚、當初爲二淨土宗之知識一、其辭世出來、其頌云、大我不生滅、去來豈喪身、遊戲爲レ易、問空却春云々、今日安藤對馬守爲二御使一參着云々、

十六日、成瀬隼人正、竹腰山城守自二名護屋一來、安藤對馬守江戸御普請舟入之畫圖持來之窺二上意一云々、

十七日、自二江戸一爲二御使一水野監物忠元參上、少將殿御疱瘡令レ問レ之給云々、

十八日、板倉伊賀守自二江戸一歸來云々、

廿日、淺間宮之廿日會、宰相殿中將殿有二御出一、於二棧敷一御覽云々、

廿一日、府中近邊御鷹野、乘燭以後、來月御能可レ有二御覽一、則方々諸役者可レ參之旨被二仰出一、此次召二板倉伊賀守永井右近一、觀世大夫可レ有二御赦免一之由被二仰出一、是往年爲二非理之訴一、欲レ殺二無辜人一、故背二御意一、當時隱二居于高野山一云々、

廿二日、召二板倉伊賀守一、自二前代一所二相傳一之寶物、悉被レ返二進于禁中一、院之御代所出來之物、皆仙洞可二令レ移レ之給一由被二仰遣一云々、

廿三日、本多上野介與力岡本大八、與二肥前國有馬修理大夫一交通、或時密謂二修理一云、先年被レ討二捕黒船一爲二褒賞一可レ被レ遣領知一之旨、上野介承二御諚一之由申之、則修理偽領、當時鍋島信濃守領内肥前國某郡三郡可二下賜一之由、僞二書御朱印之案文一遣レ之、修理不レ知、其儘爲レ實而喜レ之、其間金銀錦繻等之賄賂不レ知二其數一、又大八語云、此事自二江戸幕下一可レ有二御下知一、爲二其禮謝一、江戸御家老可レ遣之旨稱レ之、白銀六百枚大八取レ之、以二其銀一爲二商賈一、如レ此及二歳餘一、修理訴レ之、直賜二書於上野介一、上野介不レ得二其意一、呼二大八一詰レ之、大八不レ知之由陳之、此事達二上聞一、因修理召二寄之一及二對決一、修理出二敷通之證文一、是以大八不レ能レ陳レ之則爲二白狀一、今日駿府町奉行彦坂九兵衛尉光正奉二行之一、打二籠禁獄一、如レ此罪人、古今未レ聞之由、諸人申云云、修理因二此若黨一被二誅惑一、自レ是蒙二御氣色一云々、

廿五日、御山鷹野、宰相殿中將殿共爲二御鷹野一有二御出一云々、

廿六日、於二前殿一田中筑後守忠政有二御對面一、銀子百枚、黒羅紗十間獻レ之、今晩召二本多上野介 板倉伊賀守一、來月中旬、幕下有二御招請一、而天下政務之御相談可レ有レ之由被二仰出一、今日生駒讃岐守正俊着府云々、

廿七日、府中近邊御鷹野、松平陸奥守政宗着府云々、

廿八日、呑龍了的傳札自二江戸一來、則常御所召之、御法談移レ刻、其後出二御前殿一、松平陸奥守政宗銀百枚鮭鹽引十箇獻レ之、生駒讃岐守銀百枚御服十領獻レ之、於二御數寄屋一件兩人賜二御茶一、御茶入投頭巾、所レ謂投頭巾、昔年紹鷗珠光始見二此肩衝茶入一時、取二頭巾一持レ之、嘆美之餘不レ覺擲二頭巾一、依レ之有二此號一、朱衣入日野唯心被レ召二相伴一云々、

廿九日、御山鷹野、藤堂和泉守自二江戸一歸參、今日府中諸侍出仕、午刻出御云々、

三月

朔日、算砂(圍碁)宗桂(將棋)自二江戸一歸參、今日府中諸侍出仕、午刻出御云々、

二日、御山鷹野云々、

三日、在府諸武士出仕、於二前殿一算砂宗桂圍二將棊一、宗桂勝云々、

四日、御山鷹野、土井大炊助自二江戸一來府云々、

五日、土井大炊助歸二于江戸一云々、

九日、漸及二短夜一之間、自二今夜一近侍之輩、御夜詰令レ赦給云々、

十日、伊豆山般若院(快運)獻二續日本紀一、合二道春讀一之、

十三日、幕下江戸御首途、着二御藤澤一、今日京極若狹守着府、宿衣物二領被レ獻レ之、若狹守者幕下御聟也、

十四日、幕府着二御小田原一云々、

十五日、幕府着二御三島一、今日以二山門竹林坊一、被レ口二多武峰學頭一也、下間少進法印自二京都一來、依レ可レ有二御能一也云々、

十六日、幕府着二御清水一、各近侍衆爲二御迎一參候云々、今日金春大夫以下諸役者着府云々、

十七日辰刻、幕府入二御駿府西丸一、供奉本多佐渡守、大久保相模守、酒井雅樂助、土井大炊助、青山圖書助、山口但馬守、神尾五兵衛、水野監物、井上半九郎、其餘不レ可二勝計一、午刻幕下渡二御本城一、御劔大久保左京持レ之有二御雜談一還御、宰相殿中將殿各御馬御刀等自二幕下一被レ進レ之、幕下御座間、大御所近習衆又可レ候二御夜詰一之旨被二仰出一云々、

十八日、岡本大八申云、日比有馬修理可レ殺二長谷川左兵衛一之由有二其企一云々、因レ茲自レ獄出二大八一而、於二大久保石見守宅一、與二修理一遂レ決、大八其企之趣一々申レ之、修理閉口而不レ能レ答レ之、是以被レ召二籠修理一畢、大八又入獄云々、彼有馬修理傾知其子左衛門佐賜レ之、急下向而國之仕置以下可二下知一之由被二仰出一云々、

十九日、幕府渡二御本城一、御對面移レ刻而及二御雜談一云々、榮任法師自二京都一來、依レ之於二御前一有二京都御雜譚一云々、

廿日、幕府有二御將棋一、山名禪高彼レ召二御合手一云々、

廿一日、幕下於二加護鼻一、令二竹越山城守放二鐵炮一而御覽、其玉目五十目、二度同坪放之、其道十三町云々、今日幕府近侍之衆大久保右京、同主膳、鳥井讃岐等數十人、爲二大御所御目見一、今日岡本大八自二獄中一出レ之、府內渡レ之、於二阿倍川原一火罪、見人如レ堵、召二板倉伊賀守、南禪記利志旦之法、天下可二停止一之旨被二仰出一、於二京都一彼宗之寺院可二破却一云々、是夷狄之邪法、而亂二佛法之正理一故也、大八修理傾二此宗一故、今及二此儀一云々、長谷川左兵衛賜二御暇一、下二向長崎一云々、

廿二日、幕下召二山名入道禪高一有二御將棋一、有馬修理大夫配二流甲斐國一、大久保石見守奉レ之云々、

廿三日、將軍家於二御前一、本因坊算砂宗桂法師有二將棋一、算砂勝云々、松平攝津守、同下總守、水野日向守、石川主殿助、本多縫殿助等、爲二幕府之御目見一參府云々、

廿四日、中井大和守正次自二京都一參、有二大佛造立之御雜譚一云々、

廿五日、駿府於二三之丸一有二御能一、幕下御覽、第一弓八幡(金春)、第二矢島(中將殿)、第三杜若(金春、御小鍛冶宰相殿)、第四唐船(中將殿)、第五鞍馬天狗(中將殿)、第六松風(少進)、第七鵜飼(金春)、第八安達原(少進)、第九海士(金春)、第十善知鳥(少進)、第十一吳服(金春)、狂言鷺二右衛門、甚六、彌太郎等役レ之云々、

廿六日、大御所於二御數寄屋一幕下御招請、日野唯心若狹守御相伴云々、其後及二午刻一、又幕下渡二御本丸一、其時大御所投頭布楢柴二之肩衝茶入共令レ出レ之給、將軍家叶二御意一、肩衝可レ被レ進之由被レ仰、則投頭巾領レ之御云々、

廿八日、將軍家渡二御藤堂和泉守亭一、宰相殿中將殿相隨給、有二御能一云々、第一竹生島(金春)、第二實盛(少進)、第三湯谷(金春)、第四二人靜(少進)、第五鍾馗(金春)、第六玉鬘(左京、和泉守小第七鵜(少進)、第八百萬(金春)云々、

廿九日、本多美濃守爲二幕下御目見一參府云々、

四月

朔日、在府諸士出仕云々、

二日、加藤肥後守息男忠廣、故肥後守清正遺跡無二相違一賜レ之、爲二御目見一參着、則出二御前一、黄金百枚御服十領給十領獻レ之、今日鍋島信濃守以二使者一黄金五十枚猩々皮卅間獻レ之、同父加賀守黄金十枚獻レ之、是今度信濃守領所有馬修理賜レ之之由風聞之處、依レ爲二大八之虚說一、喜レ之進二使者一云々、乘燭以後、幕府渡二御本丸一、有二御對面一云々、

三日、盜入二南都興福寺寶藏一由申來、則召二板倉伊賀守一可二糺明一之旨被二仰付一云々、

八日、於二三之丸一有二御能一、金春少進等勤レ之、大御所將軍御覽云々、

九日、明日幕下可レ有二遲御一云々、

十日、幕下早旦渡二御本城一、大御所御對面、自レ是直遲御云々、

十四日、今川入道宗閑（俗名氏眞）自二京都一來府、則出二御前一及二御物語一云々、

十五日雨降

十七日雨降

十九日、山門南光坊僧正天海參府、則出二御前一、赴二武州仙波一之由申レ之、依レ之銀參十枚被物等賜レ之、則於二仙波一爲二寺領三百石永代有一御寄附一、此僧正以爲二天台之學匠一、關東天台之所化可レ就之由上意云々、藤堂和泉守依二幕下御諚一赴二江戸一、今日安藤對馬守爲二御使一自二江戸一參着、是今度御座中宰相殿中將殿少將殿御成長有レ御二覽之一而、御喜悦有二御感悦一、又投頭巾御茶入御領納、御喜悦不レ淺之由申上云々、

廿二日、於二三之九一中將殿有二御能之催一、大御所渡御、然所式三番千歲譜、不堪二奉舞一レ之、是以有二御氣色一、而脇能以後還二御本城一、則無二御能一、自レ是諸猿樂蒙二御勘氣一、今晚三河國吉田城主松平玄蕃頭昨日頓死之由申來云々、

廿四日、陰陽頭土御門久脩自二京都一參着云々、

廿五日、兩傅奏廣橋兼勝勸修寺光豐進二使者一申云、前日春日大宮之千木折落、又今度若宮之千木折落、則禁中重御愼之由申レ之云々、御諚曰、是兩宮經二年序一而破壞之故也、自二幕下一可レ被二修造一之旨被二仰出一云々、

廿六日、相國寺艮西堂、春秋左氏傳三十卷、齊民要術十卷獻レ之、道春傳レ之云々、

廿八日、出二御前殿一、丹羽勘解由出二御前一云々、

五月

朔日、在府諸侍出仕、午刻出二御前殿一云々、

二日、安居中於二駿府一、摠持院伊豆山般若院快運聚二僧徒一爲二眞言論議一、料米百石賜レ之、今日爲二御聽聞一渡御、論議題、以下凡聖六天有二差別一否上云々、

三日出二御前殿一、般若院竹林坊賢盛等、昨日眞言論議有二御雜譚一、加藤左衛門尉自二伯耆國一參、銀三十枚白絹三十匹獻レ之、松前伊豆守獻二膃肭臍二箱一云々、

四日、爲二御使一自二江戸一神尾五兵衛參、則爲二端午之賀儀一、御帷子五領被レ進レ之、今日國々諸大名獻二五日之御服一云々、

五日、在府諸武士出仕、巳刻出御、日野唯心、水無瀨一齋、土御門久脩出仕、飛鳥井中納言雅庸、冷泉三位爲滿、舟橋式部少輔秀賢昨日着府、出二御前一有二御雜談一、本願寺門主大僧正始出仕、袷衣五領銀子五十枚獻レ之、立二御座一令レ送レ之給云々、

七日、依二幕府仰一、於二甲斐國郡內一有馬修理大夫自害之由、本多上野介言上之、是欲レ殺二長谷川左兵衛一罪也云々、

八日、日野唯心、水無瀨一齋、飛鳥井雅庸、冷泉三位爲滿、土御門左馬助久脩、舟橋式部少輔秀賢出仕、各賜二鶴之羹一、有二倭漢儒釋之御雜談一、羽柴肥前守以二使者一獻二銀子千枚（彼領內土產銀也、）染絹百匹白絹百匹白布百匹一、又宰相殿中將殿共金熨斗付之刀十腰宛同獻レ之、堀尾山城守忠晴（帶刀吉晴息、）參府、銀子三百枚單物五領帷子五領蚊帳一張（黄生絹）獻レ之、同家子數十人爲二御目見一、村上周防守參府、銀百枚蠟百貫目（十箱に入）獻レ之云々、

十三日、高野山寶性院寶龜院無量壽院等出二御前一、及二佛法御雜談一、明日於二營中一、眞言論議可レ有二御聽聞一之旨被二仰出一云々、

十四日、有二眞言論議一、以二八識發心一爲レ題、寶性院爲二判者一、寶龜院无量壽院般若院智積院等僧卅餘人爲二論議一、爲二御施物一銀百枚賜二寶性院一、今日文殊院權僧都勢與爲二遣物一、朱徵宗皇帝應畫二軸一、遊行上人像自畫自贊獻レ之云々、

十五日、板倉伊賀守、米津田清右衛門賜二御暇一上洛云云、蒲生飛驒守秀之日來病惱之由被レ聞二召之一、則以二牧野清兵衛一差下於會津一、令レ問レ之給、御藥等被レ遣レ之、（大御所御聖也、）

十七日、召二寶性院一令レ得レ傳二受眞言秘密一御云々、

十九日、蒲生飛驒守終死去之由申來、令二驚歎一給云云、

廿一日、圓光寺閑室長老頃日罹レ病、今日遷化、令レ哀二惜之一給云々、

廿二日、越後少將殿江戸御亭燒失云々、

廿三日、寶性院賜二御暇一、歸二山于高野一云々、

六月

朔日、日野唯心、水無瀨一齋、冷泉三位、土御門左馬權助、舟橋式部少輔出仕、在府諸武士伺候、午刻出二御南殿一、御座上壇宰相殿中將殿少將殿同相隨給、日野、水無瀨、飛鳥井、冷泉、土御門、舟橋等共座疊上依二上意一山名禪高召二疊上一、其餘皆候二御緣一、御前之御膳方二日野、飛鳥井方一冷泉、土御門、舟橋、水無瀨、山名足卽其後珍菓嘉肴庁如レ山積レ之、所レ候之輩頂戴之、今日若原右京池田三左衞門郷政家子出二御前一、下二賜御馬一、又御藥等被レ遣二三左衞門一云々、

二日、江戸新開地有二御町割一、依二上意一京都及堺津商人下二賜屋敷一、後藤少三郎奉レ之云々、

六日、後藤少三郎始獻二甜瓜一籠一云々、

十日、醫師驢庵法印(瑞溪)爲二江戸之御番一來、今日出二御前一、則赴二江戸一云々、

十一日、青山岡書助爲二御使一參二江戸一、御普請之體、自二幕下一爲下窺二御意一給上也云々、

十四日、加藤肥後守自二江戸一歸來、出二御前一、御刀國次御脇指國光賜レ之、則歸國云々、板倉伊賀守以二飛脚一申云、仙洞御不例、友竹法印上二御藥一、少驗云々、

十六日、嘉定如レ例、日野唯心、水無瀨一齋、飛鳥井中納言、冷泉三位、土御門左馬權助、舟橋式部少輔出仕、在府諸武士伺候、午刻出二御南殿一、御座上壇宰相殿中將殿少將殿同相隨給、日野、水無瀨、飛鳥井、冷泉、土御門、舟橋等共座疊上依二上意一山名禪高召二疊上一、其餘皆候二御緣一、御前之御膳方二日野、飛鳥井方一冷泉、土御門、舟橋、水無瀨、山名足卽其後珍菓嘉肴庁如レ山積レ之、所レ候之輩頂戴之、今日若原右京池田三左衞門郷政家子出二御前一、下二賜御馬一、又御藥等被レ遣二三左衞門一云々、

十七日、冷泉、舟橋賜二御暇一、銀二十枚綿子百把帷子五領宛被レ遣レ之、是依二院御惱一所二上洛一也、下間少進法印賜二御暇一、綿二百把拜二領之一、萬病圓烏犀圓等之御藥、被レ遣二本願寺門跡一也云々、

十八日、飛鳥井、土御門賜二御暇一、銀二十枚綿子百把帷子二領宛賜レ之、板倉伊賀守以二脚力一申云、院御惱逐日危急、而醫師難レ獻二御藥一之由申レ之云々、

十九日、寺澤志摩守廣高自二江戸一歸來出二御前一、獻二段子五段一、五島淡路守同出二御前一、獻二黃段二卷一云云、

廿日、美作侍從忠政森右近也着府、獻二銀三百枚帷子十領單物十領一、九鬼長門守息男二人相具之御目見、赴二江戸一之由言上、嫡子獻二御太刀御馬單物五領一、二男獻二御太刀御馬一、今日金地院歸府、出二御前一及二御雜談一、令レ問二院御不例之事一云々、

廿二日、板倉伊賀守以二飛札一、院之御不例御驗氣之由申レ之云々、

廿四日、於二淺間之蓮池坊有二眞言論議一、此比蓮花紅白交レ色、且爲二御聽聞一、且爲二御納涼一渡御、兼依二上意一、以二密敎所レ立勝二顯敎一爲レ題、般若院快運、判者報土寺長老、金地院和尙、高野山寶龜院等候二御前一云々、

廿五日、松平攝津守獻二美濃瓜一籠一云々、

廿六日、藤堂和泉守自二江戸一歸府出二御前一、盛方院法印江戸御番相勤着府、出二御前一、獻二帷子二領單物一、賜二御暇一、則上洛、成瀨隼人正獻二堺瓜二籠一、赤井豐後守自二京都一歸府、院御所御不例平驗之由言上、廣橋勸修寺寄二贈狀於本多上野介一云々、此豐後守先日爲レ令レ問二院之御惱一所レ被レ遣也云々、

廿八日、生駒讃岐守自二江戸一歸來出二御前一、賜二御暇一歸國云々、

廿九日、永井信濃守尙政自二江戸一爲二御使一參、是土用酷暑、御氣色安泰否令レ問レ之給云々、

七月

朔日、如レ例在府諸武士出仕、午刻出二御南殿一、花山院大納言下着、則今日御對面云々、

四日、曝二御文庫之書籍一、今日島津陸奥守家久陪臣伊勢兵部少輔貞昌爲二使者一參府、緋段子二十端伽羅三斤沈香一箱獻レ之、自分卷物五卷獻レ之云々、

七日、水野監物自二江戸一爲二御使一參着、爲二七夕之賀儀一、被レ進二御帷子五領及御袷衣御單物等一、就レ之被レ得二上意一云々、江戸御番衆中柴山權左右衞門、去月廿五日其小姓依レ有レ科而殺レ之、然處彼小姓之傍輩在レ側、拔レ刀又指二殺權左衞門一、逐電、幕府聞二召之一、方々令二追懸一給、終廣二彼者一來、彼者語云、日來相約云、縱雖レ爲二主人一、理不盡之儀有レ之者、可レ報二其讎一之由、連署結二徒黨一故如レ此云々、因レ茲拷問被レ尋、其黨類一一白二狀之一、其族世所謂歌舞妓者也、切下髮髮一、染二狂紋一、所レ帶大刀長柄、其刃刻銘皆其容貌不二尋常一、件輩聞二彼白狀一、雖二逃散一搜二尋之一、已七十餘人被二搦捕一、其外逐去者五六十人、如レ此者一兩輩者、面々家內有レ之、然穗坂長四郎若年數十人拘レ之、是以被レ離二其所領一、

而其番頭令レ預二置其身一給云々、仰曰、惡黨被二召禁一事、政道之肝心也、則於二駿府一如レ此類有レ之否、可レ有二御糺明一者也云々、爲二秀賴公御使一佐々孫平參府、爲二屋節之賀儀一黃金十枚被レ進レ之、又自分獻二單物雜子等一云々、

九日、南都喜多院賜二御暇一歸京、銀子五十枚袷衣單物等被レ進二遣之一、令レ尋二十重禁戒二百五十戒次第一給云々、

十三日、彦坂九兵衛申云、一昨夜飯田傳吉（芸阿弥）與二朝比奈甚太郎（共中將殿御小姓）松野勘介一於二町中一及二喧嘩一、甚太郎勘介等對二傳吉一吐二惡口一、剩拔レ刀懸向、其時傳吉不レ能二堪忍一散々切合、於二其場一勘介同郎從殺レ之、甚太郎二三箇所被レ疵倒臥、傳吉自レ是逐電、聞二召之一、飯田顯手柄之由有二御感一、而被レ召二返之一、甚太郎惡口之罪不レ輕、則可二殺害一之由被二仰出一云々、

十四日、及レ晚御霍亂氣、宗哲法印獻二御藥一云々、

十八日、閑室長老爲二遣物一、黃昏鈔（廿一卷）獻レ之、幸若大夫賜二御暇一歸二越前一、銀三十枚下賜之一、今日日野唯心、山名禪高、藤堂和泉守賜二御茶一、近習衆拜二領之一云々、

廿三日、安藤對馬守此間爲二勘定糺明一在府、就二今日鼻下腫物一、外科伯安見レ之云々、

廿四日、御藥製始也、烏犀圓萬病圓雲母膏等劑也、宗哲法印奉レ之云々、

廿五日、出二御南殿一、藤堂和泉守、山名禪高、日野唯心、金地院伺候、高野多聞院長深出仕、依レ之有二眞言法門之御雜談一、今日大明商船及呂宋歸朝商船共廿六艘着二長崎一、白糸二十萬斤餘載來由、長谷川左兵衛狀到來、後藤少三郎於二御前一申レ之云々、

廿六日、召二三島代官一被レ仰曰、先年桑板自二八丈島一來、今在否、代官申云、六枚有レ之、厚四五寸云々、十餘年以前之事、無二御失念一之由各慥申云々、歲藏忍代官口口八九郎大河內孫十郎來府之由、松平右衛門申レ之、依レ之召レ之、令レ問二當年關東田畠之事一給云々、

廿七日、忍代官衆上二御年貢米金子數千兩一、松平右衛門奉レ之云々、

廿八日、出二御前殿一、日野唯心、花山院口口口父子、山名禪高、傳長老、其外諸士出仕、高野多聞院出二御前一、依レ之有二眞言之法談一云々、今日藤堂和泉守能興行、小姓左京爲レ之、故切々有二此事一云々、

廿九日、自二昨夜一大風雨、壞二倒屋壁一云々、

晦日、連雨不レ霽、還遷商客船頭獻二段子緋羅鮫皮等一、因令レ問二諸國變災之物語一給云々、因果居士自二京都一來、今日御二覽居士一曰、猶活哉、即令レ問レ年給、答申云八十八、昨今雨入二殿主窓戶一、漏滴如レ雨、即大工源右衛門仰曰、此中非二大和守不入念一故也、名護屋殿主不レ可レ如レ此造一、如レ此則可レ爲二曲事一云々、大和守當時上京、源右衛門大和守代棟梁也、廊山上人自二江戶一來、召而有二淨土之御雜談一、大久保石見守自二一昨夕一中風口喎、可レ下二賜烏犀圓一歟之由、宗哲法印申レ之云云、

八月

朔日、出二御前殿一、在府諸士其外僧徒等出仕、阿部川洪水、堤將レ切、昨夕安西衆諸人以二新材木土俵一防レ之、可レ有二普請一之由彦坂九兵衛申レ之、今日於二御前一有二將棋一、築任齋學元豐宗佐爲二合手一、御二覽之一給、常平生有レ之云々、

二日、有二御勘定之糺明一被二改正一、子年以來十餘年之間、今日大方可レ相二濟之一有二仰出一云々、

三日、金地院長老、廊山上人、多聞院出仕、仍令二多聞院長深一令レ讀二眞言要文一給、今日賜二科註法花於廊山一云々、

四日、呂宋船頭類子（ルイス）御目見、獻二段子及蜜二壺一、今日長崎飛脚到來申云、去月廿三日、黑舟着津、白糸十四萬斤、其外段子等多來云々、後藤少三郎於二御前一申レ之、今日伊豆山般若院自二豆州一來參云々、

八日、南都一乘院有二御對面一、爲二春日社造替一下向云云、是當時陽明（近衛殿也）之御舍兄也云々、

十日、高野無量壽院御目見、南都不動院御目見、先レ是東大寺內法輪院與二惣寺內一有二論訴一、今日金地院言上之處、惣寺內可レ爲二理運一之由被二仰出一云々、

十二日、阿蘭陀舟來二于平戶一云々、

十四日、朝召二一乘院一賜二御茶一、日野入道、金地院、藤堂和泉守爲二相伴一、折節古田織部正重然下着、仍今朝立二御茶一、織部者當時數奇之宗匠也、幕下甚崇敬之一給、諸侍志二茶湯一輩、朝于レ晚有二茶湯一云々、

十五日、諸人出仕如レ例、片桐市正且元出二御前一、獻二銀三十枚羽織一領烏子紙六束一、古田織部正獻二紫皮二十枚一、大明人一官進二上御藥種等一、又大明人祖官出二御前一、仍召二兩人一、及二唐土御雜談一、甲斐國松木紹哲與二畔柳壽學一園基御覽、令二助語一給云々、

十六日、仰二本多上野介一赴二一乘院宿所一、申下春日社頭造替料八木二萬石可二寄進一之旨上云々、井上半九郎爲二御使一自二江戸一來府云々、

十八日、京都角倉與一獻二紅糸緋紗綾沈香藥種縮砂斑猫葛上亭長等一、後藤少三郎申レ之、此與市者遣二商船於安南國一、每年往來云々、今日諸寺事、傳長老板倉伊賀守兩人可レ聞之由有二御諚一、片桐市正古田織部正皆赴二江戸一、因被レ下二御藥一云々、

十九日、出二御前殿一、奈良不動院出仕、有二御法談一、次令レ尋二維摩經之事一給、又三論宗要文寫二一紙一、於二御前一讀進之一、日野入道、金地院、因果居士等伺候云々、御雜談之中、昔年御幼少之時、有二又右衛門某と云者一、錢五百貫奉レ賣二御所一之時、自二九歳一至二十八九歳一、御二座駿河國一之由令レ談給、諸人伺候皆聞レ之云々、

廿日、自二江戸一幕下被レ進二初鷹一、自二相馬一來云々、本多上野介言上之一、今日就二寒食一麵修製、不レ入二御意一、與安法印改爲レ之、生姜汁多而麵不レ堅、仍有二御氣色一云々、

廿一日、今昔日野唯心、山名禪高、藤堂和泉守、三好因幡守、同丹後守、本田若狹守、池田備後守等賜二御料理一御茶一云々、

廿三日、出二御前殿一、日野唯心、山名禪高、藤堂和泉守、金地院、玄陽坊出仕、松浦肥前守隆信出二御前一、獻二段子五卷一云々、

十二月九月、十月、十一月缺

十五日、天陰欲レ雨申刻還御、此間關東御放鷹也、諸大名御目見、爲二越年一赴二江戸一云々、

十七日、京極丹後守口口獻二銀百枚御服十領一、松平武藏守玄隆獻二銀百枚御服十領一、黒田筑前守長政獻二銀二百枚御服十領一、其子息萬德丸獻二綿二百把銀三千兩一、有馬玄蕃頭豐氏獻二銀五十枚御服二領一、稻葉彦六口口獻二御服二領銀五十枚一、山崎左馬允獻二御服二領銀五十枚一、古田大膳大夫口口同獻二御服銀子一云々、

十八日、諸大名賜二御茶一、日野唯心、山名禪高同席、各退出以後、黒田筑前守父子出二御前一、又獻二銀五口枚一、於二御廣間一賜二酒盃一、萬德丸爲二右衛門佐一、即御刀長光御脇指政光本多上野介傳レ之云々、

廿日、細川內記忠利御目見、獻二綿二百把一、木下右衛門大夫口口同出二御目見一、

廿六日、藤堂和泉守出二御前一、島津陸奥守獻二燒酎琉球酒二壺一、砂糖五桶一、今夕石川主殿頭出二御前一云々、

廿七日、自二大坂一秀頼公被レ進二玄鶴一、是應所レ孕也、自二三河一爲二越年一來松平和泉守、松平主殿頭、水野日向守、本多豐後守、本多縫殿助、菅沼左近、丹羽勘介等也云々、

慶長十八年癸丑

正月大 庚申朔日、陰、及黄昏小雨、幕府御名代酒井左衛門尉忠世(大澤少將披露之)、左衛門尉自分御禮御太刀持參云々、越前少將殿忠直(大澤少將披露之)云々、松平和泉守口口、松平河內守口口、松平玄蕃頭口口、松平主殿頭口口、水野日向守口口、本多縫殿助康俊、本多豐後守口口、戸田土佐守口口、三好因幡守口口、戸川肥後守口口、三好丹後守口口、松倉豐後守口口、水野河內守重弘、桑山左衛門佐口口、本田若狹守口口、池田備後守口口、堀丹後守直奇、瀧川豐前守口口、佐久間河內守口口、市橋下總守口口、山代宮內少輔口口、桑山左近口口、岡越前守口口、宮木丹波守口口、能勢伊豫守口口、近藤信濃守口口、德永左馬助口口、山岡主計頭口口、分部左京亮口口、朽木兵部少輔口口、川勝信濃守口口、猪子內匠助口口、別所豐後守口口、布衣平侍衆云々、

二日陰、秀頼公御名代遠水甲斐守守久(次イ)(大澤少將披露之)、日野大納言入道唯心、水無瀨宰相入道一齋獻二御太刀一、山名入道禪高、畠山左近、土岐市正口口、土岐左馬助口口、上杉黨、木曾黨、西尾豐後守口口、遠藤但馬守口口、竹中丹後守重門、古田大膳大夫口口、稻葉右近大夫口口、谷出羽守口口、平野遠江守口口、長谷川縫殿助口口、片桐市正且元、同主膳正獻二御太刀一、醫者衆法印法眼御太刀持參、羽柴(宗)對馬守口口名代柳川豐前守口口、御退出之時、京堺大坂奈良伏見町人等御禮云々、入レ夜有二御諮詢一、宰相殿、中將殿、少將殿、日野唯心、山名禪高、永井右近、本多上野介伺候、御諮五番、觀世大夫、梅若大夫其外御服二領宛拜領云々、

三日快晴於二御座處一三獻之御祝、宰相殿、中將殿、少將殿御裝束、國持衆名代獻二御太刀御馬一、羽柴肥前守利家、米澤中納言景勝(于時中納言)、毛利輝元入道宗瑞(前中納言)、松平三左衛門尉輝政、島津陸奥守家久、松平陸奥守政宗、佐竹右京大夫義宣、松平下野守忠鄉、京極若狹守忠高、同丹後守口口、南部信濃守利直、最上出羽守義光、羽

柴(森)右近忠政、松平長門守秀就、細川内記忠利、松平武蔵守玄隆、淺野紀伊守幸長、蜂須賀阿波守至隆、羽柴左衛門大夫正則、黒田筑前守長政、堀尾山城守忠晴、松平土佐守忠茂、(◎義カ)田中筑後守忠政、鍋島信濃守勝茂、加藤左馬助嘉明、生駒讃岐守正俊云々、

四日、駿府町人等御禮云々、

五日、巳刻御山鷹野、未刻還御云々、

六日雨降、與之於二御書院一、金地院崇傳和尚御目見、增上寺觀音國師使僧廊山上人、其外天台眞言淨土法華御禮、伊勢內宮外宮之社人等御禮、諸社人等御禮、遠州可睡宗珊法門有レ之、本來面目之話、法門畢而、爲二御布施一青銅百貫被レ遣レ之云々、

廿九日、自二播磨一使者到來、去廿四日巳刻、松平三左衛門輝政俄大中風指出無言之由、本多上野介言上、大御所御鷹、而黒川八左衛門と申大番衆被二仰付一、中風之御藥烏犀圓被レ遣、同臨二昏黒一使者到來、去廿五日申刻輝政死去云々、是依レ爲二御狂一甚御愁歎云々、

二月

五日、自二幕下一爲二御使一土井大炊助參上、是輝政死去、有二被レ仰儀一密々言上、播磨國御仕置等之事之由云々、

十八日、天台座主正學院僧正、樂樹院、五智院、禪行坊、禪定院、多武峰竹林坊、武州川越仙波南光坊僧正、仙波中院、淺草安養院、觀音院、江戸神田立法寺、上野千妙寺僧正、其外卅人、事利堅横之論議一一相入之手立、何れも面々胸中盡すと云々、

廿日、黒田筑前守子息右衛門佐、於二江戸一自二幕下一御名字被レ下、右衛門佐爲二御禮一、銀子三百枚、同父筑前守獻二銀百枚一、賜二御盃一、其上御太刀守家御馬(鹿毛)賜レ之、則御暇出歸國、今日淺間之神事延引、昨日洪水、建穗寺往還不通故也、建穗寺僧淺間祭之役勤レ之故也云々、

廿一日、今日淺間神事執行云々、

廿三日、自二叡山一天台宗五六輩依二參府一、今日三首病人論議在レ之、一字不說之論議、論議終而賜レ饗云々、

廿八日、叡山正學院僧正、千波南光坊僧正、上野國くろねの千妙寺僧正賜レ饗、三人僧正(三方脢)御施物銀十枚被物二領宛、中老僧衆銀五枚被物二領賜レ之、若輩僧青銅三百匹、被物一宛賜レ之云々、

三月

三日、節供之爲二御禮一、諸大名出仕、於二南殿一御目見云々、

四日、天台論議、講師樂樹院、五智院、覺林坊召二三人一、四十人爲二合手一問答、ほうしんを飜て成佛歟、即身成佛之論議、論議終而賜レ饗云々、

五日、於二三之丸一御能、中將殿御能五番、(田村、安宅、鵜、三輪、鞍馬天狗、)少將殿(忠輝)御年十一御能二番、(江口、柏崎、)宰相殿御小鼓一番、江口被レ遊云々、其餘猿樂勤レ之、大御所幷御母堂方御見物、日野唯心、山名禪高、藤堂和泉守、天台僧衆見物云々、

十一日、於二三之丸一御能、觀世、金春、大藏大夫、梅若大夫、藤堂和泉守小姓喜之助、池田備後守、鈴木久右衛門、水無瀨一齋勤レ之、一番右近、二番清經、三番松風、四番葵上、五番天鼓、六番海士、七番隅田川、八番通小町、九番弓八幡、天台眞言僧見物、今日爲二御使一自二江戸一安藤對馬守參府云々、

十五日、爲二播州御仕置一安藤對馬守、村越茂助被レ遣レ之云々、

廿九日、於二三之丸一御能、中將殿二番、少進法印二番、金春大夫四番、觀世大夫一番、今日佐竹右京大夫爲二御目見一參府、又古田織部正參府、自二去秋一在二江戸一、今日參府爲二御目見一云々、

晦日、佐竹右京大夫今日御禮、獻二銀百枚御服十領一云々、

四月

三日、越後少將殿(忠輝)參府云々、

四日、越後少將殿御禮、被レ獻二銀百枚御服十領一云々、

五日、於二三之丸一御能九番云々、

六日、同亭御能云々、

八日、於二殿中一新儀之論議有レ之、大佛智積院、關東明星院導師、此外所化四十餘輩、題地水火風空之五體離れて成佛歟否歟云々、

九日、奥州政宗參府、越後少將殿舅也云々、

十日、政宗御禮、銀百枚御服十領云々、

十二日、於二御數奇屋一政宗賜二御茶一、唯心禪高兩人爲二相伴一云々、

十三日、加賀國主松平筑前守利光(幕下爲二御聟一)使者奥村備後守參府、爲二御息女誕生祝儀一、銀百枚御服十領被レ獻レ之云々、

十八日、三之丸御能九番、中將殿、少進法印、其外役者勤レ之云々、

十九日、依二陸奥守御服一歸國云々、

廿日、眞言新儀論議、題自力他力、智積院、和州長谷玄翁、關東明星院云々、

廿五日、大久保石見守長安死去云々、

廿六日、諸司代伊賀守參、則於二御前一京都之儀申上、又爲二御使一自二江戶一土井大炊助參府、是越前國爲二御仕置一也云々、

廿七日、村越茂助、安藤對馬守、自二播磨一歸府、則輝政仕置等之儀言上、中村主殿助、若原右京仕置惡之由、仰曰、右京可レ被レ行レ罪、主殿助病死云々、

廿九日、照高院御門跡道晬御下向云々、

五月

朔日、醍醐三寶院御門跡御下着云々、

二日、南門跡御登城、於二南殿一御對面、今日米津田清右衞門尉口口下代依二不行儀一、阿波國流罪云々、

三日、西園寺右大將實益息三位中將公益下着云々、

四日、諸公家出仕、於二南殿一御對面云々、

五日、諸公家諸大名御禮、今日照高院、三寶院、本山、當山兩山臥出入有レ之付、於二御前一裁許、武藏不動院可レ有二御追放一之由被二仰出一云々、

六日、幸若八郎九郎大夫召二御前一、舞曲有レ之、又大久保石見守跡之勘定、下代共被二召出一御改之處、過分私曲有レ之由、殊外御腹立、彌諸國石見守賊寶可二改出一之由可レ觸之由被レ仰云々、

十九日、今日越前國主家老本多伊豆守富正國中仕置被二仰付一、御朱印頂戴歸國云々、是者去年越前少將殿家中就二鬪諍一、伊豆守相手今村掃部助、清水丹後守舊冬御改易、今度中川出雲守口口、廣澤兵庫助、林伊賀守遠流、竹島周防守去年訴來時分、訴人依二斬罪一、自二少將殿一被二召禁一、則乘二籠輿一參府、對決落居、周防被二召置一處、仲禁獄恥思歟、及二黃昏一自殺云々、大久保石見守下代共、悉諸大名被二召預一云々、

廿日、松平筑前守利光御禮、獻二銀子五百枚綿五百把紅絹百匹杤葉色絹百匹一、陪臣横山山城守口口、奥村河內守口口、同攝津守自分御禮、獻二進物一御目見云々、

廿二日、筑前守依二御暇一江戶下向云々、

廿七日、播州輝政御後室御娘子也、依レ召今日御下着云々、

六月

四日、吉田神龍院梵舜神道可レ在二御傳授一旨被二仰出一、明後六日卯刻被レ定云々、

五日、從二長崎長谷川左兵衞一、遣遲舟二艘、エゲレ舟一艘、其外漳州舟六艘着岸之由申レ之云々、

六日、神龍院吉田出仕、出二御南殿一、臨二其期一神道傳授秘密之事、輒不レ可レ聞之由被二仰出一、神龍院金地院佛法有二御雜談一云々、

七日、本多上野介爲二御使一赴二江戶一、何之爲二御使一事、他人不レ知レ之、密々被二仰遣一云々、

九日、三井寺僧衆八人下着、則今日於二南殿一御目見、金地院申次、明後十一日、論議可二令レ聞給一之旨被レ仰、題者色身戒體一一、

十三日、從二江戶一上野介歸府、密々言上云々、

十六日、傳奏衆上洛、今日嘉定如レ例、播磨國主輝政一男武藏守玄隆賜二播磨國一、二男左衞門督御孫于也、賜二備前國一、同播磨國之內三郡賜レ添レ之云々、

諸公家法度

一公家衆家々之學問、晝夜無二油斷一樣可レ被二仰付一事、

一不レ寄二老若一、背二行儀法度一輩者、可レ處二流罪一、但依二罪輕重一可レ定二年序一事、

一晝夜之御番、老若共無二懈怠一相勤、其外正二威儀一相調、伺候之時刻、如二式目一參勤仕樣に可レ被二仰付一事、

一夜晝共に、無二指用一所に、町小路徘徊堅停止之事、

一公宴之外、私にて不似合勝負、幷於二不行儀之者一、以下拘置二者一、流罪同二先條一事、

右條々相定所也、五攝家幷傳奏其屆有レ之時、從二武家一可レ行二沙汰一者也、

慶長十八年六月十六日　御判

板倉伊賀守殿へ

勅許紫衣之法度

大德寺、妙心寺、知恩寺、知恩院、淨華院、粟生光明寺、金戒光明寺、

右住持職之事不二罷成一、勅許以前可レ被二告知一、撰二其器量一可二相計一、以二其上一入院之事可レ有二沙汰一者也

云々、

十八日、照高院上洛、北野松梅院幷宮仕座論、松梅院可レ有二下知一旨被二仰出一、宮仕能閑改易云々、仰曰、竹內曼殊院御門跡、北野寺務萬事可レ爲二仕置一之旨被二仰出一云々、

廿日、板倉伊賀守上洛云々、

廿一日、天台論議云々、

廿二日、播州御後室歸國云々、於二京都一座頭檢校誰々

六七輩、可レ在二不座一之旨被二仰付一、於二憁檢校一是者大久保石見依レ致二出入一也、其内高山誕一檢校、近年名譽平家琵琶上手也、

廿四日、美作國主森右近忠政依レ召今日參府云々、

廿六日、森右近被レ召二出御前一御直談、其上青木紀伊守肩衝茶入拜領、是松平左衛門督忠繼舅也、忠繼若輩故、可レ有二異見一之由被レ仰歸國云々、從二長崎一飛脚到來、唐船數艘來之由、後藤少三郎申レ之、又從二邏羅國一木屋彌三右衛門歸朝之由、龍下御目見、彼國之事令レ問給、僧數多有レ之由、着二黄法衣一云々、

廿八日、論議云々、

七月

三日、今日内裡御柱立云々、

六日、南光坊僧正從二叡山一下着、高野寶性院下着云云、

七日、於二淺間一御能七番、梅若大夫勤レ之、大御所御見物、及宰相殿中將殿少將殿、黄昏還御云々、

八日、御能七番、藤堂和泉守小姓左京之助、池田備後守、鈴木久右衛門、水無瀨一齋役レ之云々、

九日、大久保石見守息藤十郎口口、同弟外記口口、同弟櫃之佐口口、同弟雲十郎口口、同弟内膳口口、其外越後播磨居住之息男、以上七人切腹可二申付一之旨、件預り人之許被二仰遣一云々、

十七日、論議云々、

廿三日、論議云々、

廿五日、從二江戸一爲二伏見御城番替一、松平安房守口口、非伊掃部助直孝、渡邊大隅守口口、一色宮内少輔口口參府云々、

廿六日、伏見御番替、昨日參府之輩、御目見上洛云々、

八月

朔日、諸士出仕、則於二南殿一御對面云々、

二日、從二長崎一花火上手唐人參府云々、

三日、花火唐人、今日御覽、則六日之夜、花火可レ有二御覽一之由被二仰出一、イゲレス今日候二殿中一、獻二猩々皮十間、脅一挺、象眼入鐵炮二挺、長さ一間程之鰹鰹六里見一之云々、

五日、土井大炊助爲二御使節一從二江戸一參府云々、

六日、摠檢校以下六十餘人參府、是者大久保石見守所出入之儀御立腹、爲二御侘言一參府、臨二昏黑一花火唐人、於二二之丸一立花火御覽、宰相殿中將殿少將殿御見

物云々、

八日、今日土井大炊助于二江戸一歸參云々、

九日、來月十七日、爲二御放鷹一令レ赴二關東一可レ給之由被二仰出一云々、

十日、廓山參府、則出二御前一、增上寺國師可レ有二參府一由言上、佛法有二御雜談一云々、

十一日、南光坊僧正爲二御暇一登城之處、則論議御所望、御藥等被レ遣レ之云々、

十三日、增上寺國師參府云々、

十五日、巳刻增上寺觀智國師駿府報土寺被レ居、大御所于二此寺一渡御、御供本多上野介、安藤帶刀、成瀨隼人、村越茂助、松平右衛門佐、其外百餘輩、暫法問御聽聞、題一念彌陀佛即滅無量罪、午刻還御、從レ夫南光坊宅渡御、暫佛法御雜談、及二昏黑一還御云々、

十七日、國師源營登城、法問有レ之云々、

十八日、同於二殿中一國師法問云々、

廿一日、江戸吉祥寺出二御前一、野狐話法問、今日松平武藏守玄隆同左衛門督忠朝父輝政逝去、爲二繼目一參着云云、

廿二日、件兩人御對面、銀三百枚御太刀守家武藏守獻レ之、銀二百枚御太刀長光左衛門督獻レ之、于二江戸一可二罷通一之旨御諚云々、

廿七日、卯刻大風雨、近邊士民家屋破壞、及二申刻一止云々、

廿八日、佐和山井伊兵部少輔爲二御目見一下着云々、

廿九日、淺野紀伊守幸長廿四日未刻煩再發、存命不定之由註進云々、

九月

朔日、淺野紀伊守幸長、廿五日辰刻死去之由言上云云、

二日、增上寺源營國師登城、佛法御密譚、不レ叶二御内存一云々、天台四門之處毀レ之給、不レ叶二御意一、天台宗御崇敬云々、

三日、片桐市正着府、出二御前一、爲二御加增一知行一萬石、自二秀賴公一雖レ被レ下、關東御前憚不レ領レ之、則今日拜領云々、

七日、從二江戸一神尾五兵衛、爲二重陽御使一參府云々、

九日、神尾五兵衛出二御前一、御服五領進上、關東鳥多來賓之由申上云々、

十六日、於二御前一、以二松平右衛門後藤少三郎一、檢校之

儀御侘言申上、御赦免、近習御小姓河内梅千世俄旨、
檢校被二仰付一云々、
十七日、巳刻爲二御鷹野一駿府御動座、清水渡御云々、
十八日、善德寺着御云々、
十九日雨降御滯留、菱喰御鐵炮二羽令レ連給云々、
廿日、三島御着、大久保相摸守爲二御迎一參上、於二浮島原遊一、伊豆銀山之者目安指上、大久保石見守惡名申上、石見守存生之內不二申上一、唯今申上事、太不レ叶二御意一云々、
廿一日、小田原着御、本多佐渡守加藤助右衞門口口、自二幕下一依レ仰、爲二御迎一參、御機嫌甚快然云々、
廿二日、中原御着云々、
廿三日、御逗留云々、
廿四日、御逗留云々、
廿五日、藤澤御着云々、
廿六日、神奈川着御、幕下爲二御迎一御動座、則於二御旅館一御對面移レ刻、幕下于二江戶一還御云々、
廿七日、未刻、于二江戶新城一着御、諸大名御目見云々、
廿八日、幕府于二新城一出御、御對面、

十月

朔日、諸大名御禮、增正寺國師出仕云々、
二日、卯刻爲西御放鷹、鶴一雁四鴨九令レ摯給、又菱喰三鐵炮令レ討給、申刻還御云々、
三日、南光坊僧正於二新城一論議、題現世安穩、後世善所、兩御所御聽聞、其外諸大名聽聞、淨土宗廓山江戶誓願寺聽衆云々、
四日、南殿出御、近習伺候、幕下渡御、御閑談之後還御、本多佐渡守同上野介召二御前一、御閑談移レ刻云々、
六日、南部信濃守從二奧州一參着、則出二御前一、獻二砂金千兩一云々、
七日、關東所化付二淨土宗一召二御前一、恐懼無懼之輩之往生令レ問給云々、
八日、於二新城一吉祥寺口口法問、泉龍法問、本來面目、頗措不レ成盡不レ就、讃口不レ及休二生受一、本來面目無レ所レ藏、世界壞時渠不レ朽、今日富田信濃守口口坂崎出羽守口口訴申故、兩御所出二御南殿一、直裁許令レ聽給、富田非之由被二仰出一云々、及二昏黑一淺野紀伊守遣物玉堂肩衝茶入、吉光脇指、キネノオレ、古銅花入進上、本多佐渡守披二露之一云々、
九日、於二新城一南光坊僧正論議、其外十三人、兩御所

御聽聞、持戒、毀戒、威儀、具足、正見、邪見、利根、鈍根、等雨、法雨、煩惱、不斷成佛、五逆罪滅歟、精義南光坊僧正、講師那須法輪寺云々、
十日、辰刻本城御成之儀、自二去夜一依二御咳病一延引云々、
十三日、鵜殿兵庫助口口、寄藤半右衞門口口、川毛備後守口口、中村伊豆守家屋破却、兵庫被レ召二預土井大炊助一、備後內藤若狹守云々、
十七日、御咳病依二復本一、明日于二幕下一御本城可レ有二渡御一之由被二仰出一云々、
十八日、辰刻渡二御御本城一、供奉本多上野介、成瀨隼人正、安藤帶刀、永井右近、松平右衞門佐、後藤少三郎、醫師衆、其外近習百餘輩、申刻、淺野但馬守召二本城一、則被レ召二御前一、紀伊守遺跡紀伊國拜領、依レ無二實子一舍弟爲レ子云々、
十九日、卯刻本多上野介、成瀨隼人正、安藤帶刀、永井右近、松平右衞門佐、與安法印、後藤少三郎、道春等、幕府於二本城一御料理、巳刻、幕府新城渡御、南光坊論議御聽聞、題、以二我功德力、如來加持力、法界力、三具足一爲二即身成佛一、今日入レ夜、石川玄蕃頭日來不儀依二露顯一、知行沒收、大久保石見守緣座云々、
廿日、卯刻爲二御鷹野一、鶴一雁五鴨令レ摯給云々、
廿一日、御鷹野、鶴一雁五鴨令レ摯給云々、
廿三日、川越渡御云々、
廿四日、富田信濃守口口知行被二沒收一、其身奧州岩城鳥井左京亮口口被二召預一、立花左近口口高橋者、富田依レ爲二一味一也云々、
廿五日、石川肥後守、同弟半三郎、兄玄蕃儀に付被二沒收一、又佐々孫介、同內記所領被二召放一、依二富田事一也云々、
廿六日、藤堂和泉守依レ召參上、於二川越御旅館一密々御閑談、富田知行十萬石御改易云々、
廿七日、松平右衞門被二仰付一、於二岩付一白鳥三十三取レ之云々、
廿九日、巳刻、於二仙波一南光坊論議、大御所御參詣、題妙覺位有入重玄門之儀乎、

謁中　講師　月山寺
聽衆　南光坊　西運寺
日圓坊　法輪寺

論議申刻終、川越御旅館還御云々、
晦日、忍渡御云々、
霜月
二日、卯刻幕下爲二御鷹野一、渡二御鴻巣一云々、
四日、御鷹野、今日酉刻、於二忍御殿一、新儀論議、題五字
能造論議、精義弘善院、講師長久寺、息諦院、玉藏院、
無量寺、長存坊、吉祥院、明星院、觀音寺、鏡識坊云々、
九日、佐野修理大夫御目見、是者富田信濃守弟、雖
レ蒙二御氣色一、無レ誤旨達二上聞一如レ此云々、
十日、御鷹野云々、
十一日、御鷹野云々、
十二日、御鷹野云々、
十三日、御鷹野云々、
十四日、御鷹野、來十七日可レ有レ渡二御岩付一之由被二
仰出一云々、
十五日、大御所御寸白氣故、御鷹野止云々、
十六日、依二御違例一、明日出御、十九日迄遲引之由被二
仰出一云々、
十七日、御不例依二御復本一御鷹野云々、
十八日、御鷹野、於二路次一百姓等上二目安一、于レ時代官
深津八九郎、與二百姓一於二御前一遂二對決一、直令レ聞レ訴
給、頗代官私曲、則代官被二召上一、高木九助口口小栗庄
右衛門口口遠藤豊九郎口口天野彦右衛門被二仰付一
云々、
十九日、卯刻岩付御動座、路次中御鷹野、申刻渡二御岩
付一、城主高力左近爲二御迎一參向云々、
廿日、岩付出御、未刻、渡二御越谷一、本多上野介知行自二
小山一參向、將軍家從二鴻巣一于二江戸一還御云々、
廿一日、御鷹野、鶴三雁十六令レ摯給云々、
廿三日、幕下爲二御使一神尾五兵衛參、則出二御前一云
云、
廿四日、近邊百姓、於二御鷹場一、代官捧二目安一、還御之
後、及二乘燭一、代官與二百姓一被二召決一處、百姓無レ謂事、
仍致二言上一、則棟梁六人被二召搦一云々、
廿五日、鶴五雁鴨數多令レ摯給云々、
廿六日、明日葛西可レ有二渡御一之由被二仰出一、越谷御鷹
野中、鶴十九令レ摯給、御氣色甚快然云々、
廿七日、卯刻越谷出御、令レ赴二葛西一給、鶴六令レ摯給、
申刻渡二御葛西一云々、
廿八日、鶴五令レ摯給、明日于二江戸一可レ有二還御一之旨

被二仰出一云々、
廿九日、卯刻葛西出御、路次鶴六、雁數多令レ摯給、未
刻江戸于二新城一還御云々、
十二月
朔日、南殿出御、將軍家御對面、諸大名御禮、不レ可二勝
計一、午刻、南光坊仙波中院於二御前一佛法御雜談移レ刻、
御氣色快然、則僧正於二仙波近所一寺領五百石被レ爲二
寄附一、仙波中院黄金十枚被レ遣レ之、兩僧退出以後、增
上寺國師出仕、是亦佛法之御雜談、明後三日、江戸可
レ有二御動座一之由被二仰出一云々、
二日、巳刻、幕下渡二御新城一、御對面、御密談移レ刻、未
刻、幕府還二御本城一、大御所供奉之輩、爲二御暇一本城出
仕、黄金呉服等拜領云々、
三日、未明幕下爲二御暇乞一渡二御新城一、辰刻、大御所御
動座、着二御稻毛一、鶴二雁數多令レ摯給云々、
五日、自二御鷹野一還御、則曉可レ有レ渡二御中原一之由御
詫、入レ夜本多佐渡守御暇被レ下于二江戸一、歸一居萬
病圓二百粒八味圓百粒拜領、來春諸大名御普請可二相
觸一之由被レ仰處、飛驒國主金森出雲守正重、當春尾州
那護屋臨時之御普請致之條、可レ被レ除之旨被二仰出一
云々、
六日、着二御中原一、從二京都板倉伊賀守一飛脚到來、堺政
所細井喜三郎頓死之由言上云々、
七日、從二幕下一爲二御使一板倉周防守重宗于二中原一
參着、御肴物被レ進レ之云々、
十三日、俄自二中原一江戸可レ有二還御一之由御詫、辰刻
御動座、申刻稻毛渡御、是者未無二御摯飼一、若鷹數多在
レ之故、來正月、上總國土氣東金可レ有二御鷹野一之由、
幕下爲二御迎一、夜半渡二御小杉一、則御對面、幕府于二江
戸一還御云々、
十四日、午刻大御所江戸新城令二入御一、幕下又同新城
渡御、御對面云々、
十五日、到二乘燭一、諸大名御目見云々、
十九日、伴天連門徒爲レ可レ有二御追拂一、大久保相摸守
于二京都一可レ被レ遣之旨被二仰出一云々、
廿二日、京都板倉伊賀守飛脚到來、其狀云、去十九日
卯刻、禁裡御移徙、內侍所已下無事、如二先規一渡御之
由申來云々、
廿五日、爲二御鷹野一渡二御越谷一云々、
廿六日、相摸守爲二用意一、歸二于小田原一云々、

廿八日、依レ爲二節分一、從二越谷一于二江戶一還御、幕下新城渡御、

廿九日、爲二歲暮一、織田有樂御禮、銀五十枚小袖五領、羽柴越中守忠興御禮、銀三百枚小袖十領、鍋島信濃守銀三百枚小袖十領、松平土佐守銀二百枚小袖十領、堀尾山城守銀百枚小袖五領、松平攝津守、同下總守、石川主殿助、本多美濃守、松平和泉守、本多豐後守、松平主殿助、其外諸大名不レ可二勝計一、各獻二進物一云々、晦日、諸大名歲末御禮、幕府御禮云々、

慶長十九年甲寅

正月大

朔日甲寅、天晴、風靜、巳刻爲二御禮一、將軍家渡二御于新城一、於二南殿一御對面、御太刀守家御馬代銀百枚、御奏者大澤少將披二露之一、奧之於二御座敷一御上段一御祝、御酌松平右衞門佐正久、御加水野金十郎口口、御陪膳金森左兵衞口口、北見長五郎口口、內藤掃部助口口、其以後諸士御禮云々、

五日、渡二御本丸一、御祝儀終而南殿出御、御能三番、高砂、百萬、善界共、幕府御二男國君八歲、令レ勤レ之給、幕府御臺所大御所御女中衆籠中見物、御女中見物、諸士無二出仕一云々、

六日、巳刻、增上寺觀智國師御禮、法問僧衆弘經寺、新知恩寺、勝願寺、了的、其外天台衆、眞言衆諸宗御禮、入レ夜天台南光坊論議、常陸笠間郡月山寺依レ爲二學匠一、寺領三百石御寄附云々、

七日、爲二御鷹野一渡二御葛西一、入レ夜自二幕下一御使者成瀨豐後守被レ進二御肴一云々、

八日、千葉渡御云々、

九日、東金渡御、於二路次一鶴四令レ摯給、此所形地甚叶二御意一、爲二幕下御使節一水野監物參着、御使者切々被レ進之儀、御機嫌快然云々、

十日、鶴五雁十八鶴七令レ摯給云々、

十一日、鶴六雁十六令レ摯給、近遊猪多有レ之由、可レ狩之由被二仰出一、明後日于二江戶一還御可レ被レ成之旨被二仰出一、

十二日、鶴三令レ摯給、近遊猪多有レ之由、可レ狩之由被二仰出一、明後日于二江戶一還御可レ被レ成之旨被二仰出一、

十三日、土井大炊助、永井右近、松平右衞門佐、其外近衆百餘騎、爲二鹿狩一、吉田佐倉遊參向、則鹿二猪四獲レ之云々、

十四日、雨降無二御動座一、今日於二江戶一村越茂介直吉煩而死去云々、

十五日、御鷹野、本多出雲守忠將、御鷹場近所知行所參着、每日御肴等獻レ之、御氣色快然云々、

十六日、卯刻、東金御動座、申刻、千葉着御、村越茂助死去之事言上、御哀憐云々、

十七日、千葉御動座、路次御鷹野、未刻、葛西着御云云、

十八日、申刻江戶新城還御、將軍家爲二御迎一令レ出給、及二黃昏一、藤堂和泉守出仕、大御所召レ之、藤堂和泉守有二御密談一云々、

十九日、召二本多佐渡守一仰曰、今度大久保相摸守與二山口但馬守一結二婚姻一、不レ得二上意一、依レ之相摸守子右京主膳御追放、安藤對馬守被レ遣二於小田原一、城廓請取、相摸守從者可二追放一之由被二仰出一云々、

廿日、及レ晚有二天台論議一、精義南光坊、講師法輪寺、其後大應二聯羽柴越中守忠興、同一聯賜二鍋島信濃守一云々、

廿一日、巳刻江戶御動座、申刻、御二止宿神奈河一云々、

廿二日、藤澤着御、終夜雨降云々、

廿三日、巳刻屆レ晴、出二御藤澤一、申刻、着二御中原御旅館一云々、

廿四日、中原出御、路次御鷹野、鶴一雁數多令レ摯給云云、未刻、小田原着御、今晚佐渡守、上野介、帶刀、大炊助、對馬守連判狀、遣二大久保相摸守一云々、

廿五日、未刻將軍家着二御小田原一、乘燭之後有二御對面一、御閑談移レ刻、佐渡守、藤堂和泉守在二御前一、餘人不レ近レ之、將軍家還二御二之丸一、大御所仰曰、明朝自二早天一此城破却可レ有レ之云々、仍江戶駿府諸卒崩二石垣一壞二大門一、依二此騷動一、自二江戶駿河一、馳二參小田原一輩不レ可二勝計一、今日最上駿河守飛脚自二江戶一參着、申云、去十八日、最上出羽守義光卒去之由、佐渡守言上、依レ之子息駿河守家親急下國、仕置等可二申付一之旨被二仰出一云々、

廿六日、松平筑前守利光使札到來、高山右近口口南之坊也、內藤飛驒守口口依レ爲二伴天連宗旨一、捕レ之遣二于京都板倉伊賀守一、其外宗旨替者不レ替者、記錄而獻レ之、本多佐渡守、同上野介言上、仰曰、日本國中伴天連宗旨不レ替者、急可レ流二遣津輕一云々、兩人奉レ之、卽回二飛狀一云々、

廿七日、御二着三島一、保田甚兵衞口口烏彌左衞門口口、

昨夜より來二于此地一、留二往來之者一、今日路次箱根山爲二御用心一也、成瀨豐後守爲二幕府御使一參向、被レ進二御肴一云々、

廿八日、渡二御善德寺一云々、

廿九日、駿府御着、則川江橋迄、宰相殿中將殿少將殿爲二御迎一令レ出給、則供二奉于御城一令レ入給云々、

晦日、從二幕下一爲二御使一土井大炊助參着、則本多上野介同道、召二御前一、從二將軍家一仰之趣密々言上、移レ刻退出、砂糖二十斤拜領、折節自二長谷川左兵衛一所レ獻也云々、

二月

朔日、大御所出二御南殿一、諸士出仕、又召二土井大炊助一、右之御返事御直書、又御密談、歸二參于江戶一、其以後被二仰出一旨者、今度大久保相摸守相親之輩在レ之由、幕下御腹立之旨、近習之輩被二仰聞一云々、

二日、淺野但馬守參着、舊冬紀伊守路◎跡歟目被二仰付一、紀伊國拜領御禮參着之由、本多上野介言上、明日御目見可レ仕之旨被二仰出一、當國沼津城可レ令二破却一之旨、上野介帶刀正被二仰付一、大久保相摸守伯父大久保治右衛門口口依レ爲二居城一也云々、

三日、淺野但馬守御禮、銀三百枚御服二十領獻レ之、則今日于二江戶一可二參覲一之旨被二仰出一云々、

八日、寺澤志摩守御禮云々、

九日、今日眞言論議、題意密本尊向二行者本尊一、一一不レ向二行者一、講師大樂院、多聞院、庵室院ナヒ、遍照光院云々、

十日、今日御山鷹野、宰相殿中將殿少將殿令二供奉一、御列率爾數百人、申刻還御云々、

十二日、羽柴右近忠政、蜂須賀阿波守至隆、有馬玄蕃頭豐氏參府云々、

十四日、南殿出御、森右近羽柴獻二銀二百枚御服十領一、蜂須賀阿波守獻二銀百枚御服十領一、有馬玄蕃頭獻二銀五十枚御服五領一云々、

十五日、眞言論議、題三密双修口、講師多聞院、大樂院、庵室、遍照光院、自二今晚一近習之輩御夜詰御免云々、

十六日、羽柴丹後守口口京極參府云々、

十七日、羽柴丹後守口口御禮云々、

十八日、眞言論議、題奉菩提正覺、東方大圓鏡智藥師如來、南方平等性智觀音、西方妙察智阿彌陀、北方成所作智釋迦、中央法界體性智大日如來、是た五智の如來と云、四方に各四菩薩有、四々十六にして、北方第十六番な

拳菩薩と云、此菩薩北方にして、大日の叶に叶歟不レ叶歟と云問答也、講師大樂院、高室院、多聞院、庵室、遍照光院云々、

十九日、佐竹右京大夫獻二南鐐銀二百貫目砂金千兩一、是從二領內銀山一出云々、

廿日、今日淺間神事、土井大炊助爲二御使一參着、午刻洞家宗法問、題靈雲見二桃花一悟道、靈雲初禪師參二溈山一、見二桃花一悟道頌云、三十年來尋二劍客一、幾回葉落又抽レ枝、自レ從一見二桃花一後、直至二如今一更不レ疑、莊明四頌云、二月桃花處々新、靈雲一見更無レ親、相逢恁レ道體官去、林下何曾見二一人一、法問衆遠州全長寺宗珊、瑞光寺、得願寺、廣德院、安養寺、大林寺、天林寺、秀陽、泉良、宗惠、宗珊かはりに云、烟煙と咲ふた桃花の色は、萬歲の色を含む、林下一人もみゑねは、天下安全の吉事、

廿一日、土井大炊助召二御前一、本多上野介申次、御閑談移レ刻、他人不レ知レ之、眞言論議、題住無爲戒三摩耶戒とは同歟別歟、口に眞言を唱へ、手に印を結ふか如きは、三摩耶戒也、心法に約するは無爲戒也、僧衆同前云々、

廿二日、土井大炊助召二御前一、御直に御密談、歸二赴于江戶一云々、

廿四日、高野寶性院、寶龜院、無量壽院、明王院、遍明院、正智院、其外十餘輩參府、則金地院右之衆參府之段言上處、明日可レ有二出仕一之旨被レ仰云々、

廿五日、生駒讃岐守正俊參府、則今日出仕、獻二銀百枚御服十領一、眞言論議、題發心即到、講師無量壽院云々、

廿六日、題大悲代受レ苦、講師正智院云々、

三月

朔日、自二幕府一爲二御使一水野監物參上、上巳之御祝儀也云々、

五日、奈良一乘院御門跡、北院、其外法相之學匠數輩、依レ召參府、爲レ可レ被レ聞二論議一也云々、

六日、南禪寺五山天龍寺慈濟院彭長老、相國寺慈照院保長老、鹿園院啅長老、建仁寺常光院紹益、兩足院口口東福寺不二菴、龍眼庵口口、南昌院◎以下七字空白依レ召參着、於二御前一即席文章可二令レ書給一之旨所レ被レ仰也、今日傅奏廣橋大納言兼勝、同辨兼賢、三條大納言實條、藪宰相口口、高倉少將口口參府云々、

七日、五山衆下向之旨達二上聞一處、明後九日出仕可レ有レ之旨被二仰出一、然者文章を書可二持參一之旨被二仰出一、題爲レ政以レ德、譬如二北辰居一其所一而衆星共レ之と云題也云々、

八日、廣橋兼勝、三條實條、廣橋辨兼賢、藪宰相口口、高倉少將等御對面、今日黑田筑前守參着、松平武藏守參着云々、

九日、黑田筑前守獻二銀二百枚御服十領一、松平武藏守

同前、則賜二御暇一、于二江戸一下向、午刻、五山衆捧二文章一、御目見之處、即席題寶樹多二華菓一衆生所二遊樂一頌を作る云々、

十日、雨降今日淺間御能延引云々、

十二日、天晴今日於二淺間一御能九番、卯刻渡御、宰相殿中將殿少將殿御供、近習數百輩供奉、一乘院、北院、天台南光坊、月山寺、藥樹院、眞言衆寶龜院、大樂院、明王院、其外五山衆見物、御能組、弓八幡、通盛、湯谷、殺生石、杜若、海士、項羽、自然居士、吳服、金春七郎、同新五郎、大藏大夫勤レ之云々、

十四日、今日法相宗論議、題八識之上立二九識一乎否、難云、楞伽住の心は、八識の上に九識を立つ、答云、法相宗の所レ立は、八識の內に有爲無爲をも眞如をも攝す、別に九識を不レ可レ立、

證義　一乘院
講師　喜多院菊亭殿享
同　東北院豐橋筑
問者　明王院
同　无量壽院
講師　如意輪寺
問者　多聞院
聽衆　西南院
北面　聽衆兩傳奏、其外公家衆、南光坊、月山寺、藥樹院、其外淨土宗、五山衆云々、

十七日、法相論議、題大小戒二同異一云々、

一乘院　阿彌陀院
講師　妙喜院
東北院　華藏院
擔枠院　明王院

廿一日、細川內記御禮、銀子御服等獻レ之云々、

廿三日、法相論議、題法華譬喩品、三車四車、問、羊車、鹿車、牛車是を三車と云、此三車は、火宅門內にあれは、門外に別に大白牛車あるへしと、無二亦無三なれは、四車あるへし、答、宅內牛車、即大白牛車にして、別に不レ可レ有、唯此一事實、餘は即非レ眞、又實道二人、形色懸隔とあれは、三車の證文也、

證義　喜多院
講師　東傳院　明王院
問者　妙喜院
華藏院

廿五日、論議終而、於二御數奇屋一、一乘院、喜多院、東北院、阿彌陀院院賜二御茶一、御茶入大海云々、

廿六日、管絃數寄相口口、琴樂人三人、但候二簀子一、笙篳篥笛樂之名、一番千秋樂、二番青海波、三番陵王、常之於二御書院一有レ之、於二奥之間一御女中方會津御後室御息女令レ聞レ之給云々、

廿七日、冷泉中納言爲滿參府、古今傳授爲レ可レ被レ得也云々、

廿八日、於二駿府一熊野森火起請取、是者兄を殺す由論有レ之、彦坂九兵衛奉行云々、

廿九日、從二江戸一幕下爲二御使一土井大炊助參府、今日田中筑後守參府、是者江戸依二御普請一也云々、

晦日、筑後守御禮、獻二銀二百枚一獻黑羅紗一、十間、本多上野介披二露之一、備前松平左衛門督郎從荒尾但馬守、福原清左衛門、石原市右衛門御禮、獻二御服二領宛一、土井大炊助有二御密談一云々、

四月

朔日、諸士如レ例出仕、幸若有二舞曲一云々、

二日、夕日如レ火赤、今日件火起請取者手裏改レ之、奉行見レ之、被レ究二實否一云々、

三日、昨日夕陽、今朝日色如レ銅赤、見者慄レ之、今日木下右衛門大夫御禮、銀二十枚御服獻レ之云々、

四日、明星院眞言有二論議一、加藤肥後守忠廣御禮、獻二銀二百枚御服十領御袷衣廿領一、同郎從五人御目見、今日間宮新左衛門、田邊十郎左衛門從二佐渡一參府、銀千貫目餘持參云々、

五日、群書治要、貞觀政要、續日本紀、延喜式、自二御前一出二五山衆一可レ令レ披下公家武家可レ爲二法度一之所上之旨被二仰出一、金地院崇傳道春承レ之、淨土宗西福寺長老獻二撰釋集二卷一、則於二御前一令レ讀給、總持院法華經廿八品歌廿八首獻レ之、於二御前一冷泉金地院令レ讀レ之、今日自二駿府前濱一、似レ龜魚網に引揚、漁人持來、廿餘人荷レ之、背黑如二龜甲一、頭如二犬顏一、尾三股に出、有二大鰭一、腹色斑、諸人見レ之云々、肥前大村丹後守口口銀二十枚段子五卷云々、

六日、午刻霰降如二冬天一、今日越前少將殿忠直御禮、銀二百枚綿三百把被レ獻レ之、同家老本多伊豆守、同丹下被レ召、忠直若輩之內、兩人可レ致二後見一之由被二仰出一云々、

八日、越前少將殿御目見、今日令レ赴二江戸一云々、從二

京山科安祥寺ニ飛脚到來、去三日、高野山前檢校寶性院死去云々、後住可レ爲ニ大樂院ニ之由有ニ御氣色ニ云云、

九日、智積院出仕、當時眞言新儀能化也、同覺譽坊、長存坊、圓福寺出ニ御前ニ、明後日可レ有ニ論議ニ之旨被ニ仰出ニ云々、

十日、安養寺存康洞家法問、題洞山無ニ寒暑ニ云々、

十一日、新儀法問、知積院、明星院、建穗寺學頭、近江摠持寺、菖蒲吉祥院、上野鏡譽坊、結城之長存坊、下總圓福寺、題無爲戒、講師圓福寺云々、

十三日、眞言新儀論議、精義知積院、人數同前、題發心即到、今日群書治要、續日本紀、延喜式等之披書上ニ于御前ニ、金地院道春於ニ御前ニ讀ニ進之ニ、未刻生鰹二箇彦坂九兵衛獻レ之、柳津浦當年始而釣レ之云々、賀茂社人如ニ例年ニ葵幷卷數獻レ之云々、

十四日、於ニ三之丸ニ御能九番、五山長老衆、冷泉黃門見物、御能組、白樂天、金春春榮、中將殿、少將殿、御年十、井筒、少進、小鼓、宰相殿、鞍馬天狗、中將殿、通小町、同盧刈、金春七郎、柏崎、金春葵上、少進養老、梅若大夫云々、

十五日、於ニ三之丸ニ御能九番、一番竹生島、金春七郎ニ、賴政、少進三ニ千手、金春四ニ谷行、金春芭蕉、少進花月、金春七郎、安濟、少進善知鳥、金春老松金春七郎云々、

十六日、新儀論議、知積院、題業識能所、講師鏡譽坊云云、

十八日、傳奏衆自ニ江戶ニ歸府、法相論議、題八識之內四分、見分、相分、自證分、一乘院、講師北院、東北院、阿彌陀院、摠持院、妙喜院等、今日就ニ大乘院ニ受戒、東大寺興福寺有ニ戒和尙公事ニ百五六十年、東大寺退轉之間、興福寺戒和尙可レ勤之由被レ仰云々、一乘院賜ニ御暇銀百枚綿百把ニ、喜多院賜ニ銀五十枚綿百把ニ云々、

十九日、御違例、今日板倉伊賀守飛脚到來、申云、去十六日卯刻、大佛鐘鑄成就云々、今日高野衆從ニ江戶ニ歸府、即座論議被ニ仰付ニ云々、

廿日、眞言論議、題西方非ニ西方ニ、自身即西方、明王院、大樂院、无量壽院、如意輪寺、遍明院、正智院、金剛三昧院、多聞院、西南院、庵室、北室院、次ニ新儀論議、同高野衆聽聞、題法身說法、知積院、明星院、摠持寺、建穗寺學頭、菖蒲吉祥院、鏡譽坊、長存坊、講師圓福寺、論議過而以後、高野衆召ニ御前近ニ、寶性院相ニ續大樂院ニ可レ然之由被ニ仰出ニ、大樂院申云、先師存寄所有レ之

之旨辭退申、雖レ然彌神妙被ニ思召ニ之間、强而被ニ仰付ニ云々、

勅使廣橋大納言兼勝、三條大納言實條、其外鼓宰相口口、日野辨口口、廣橋辨兼賢、高倉口口參向、今日登城、今度勅使下向意趣者、女御幕府御息女可レ有ニ御入內ニ之由、又大御所太政大臣歟、准三后從一位御任官之由言上、大御所重仰曰、公家中之法式爲ニ礼定ニ、諸公家之記錄皆書寫可レ有レ之旨被レ仰、三代實錄西三條折持之由言上、今日道三玄朔出ニ御前ニ、江戶御番替云々、自ニ京都ニ飛脚到來、申云、大佛殿鐘唐金一萬七千貫目餘、鞴數百卅二丁、樋四筋、鑄師棟梁山城國釜之座彌右衛門、同助左衛門、又脇棟梁十一人、諸國鑄師都合三千百餘人云々、鐘の口九尺一寸五分、高さ一丈八寸、厚さ九寸云々、

廿一日、今日於ニ三之丸ニ御能、高砂金春經政七郎、三輪中將殿、鵜中將殿、野々宮少進皇帝中將殿、御裳洗金春勅使公家衆見物也、

廿二日、羽柴越中守忠興在ニ江戶之處、依ニ所勞ニ御暇被レ下、御目見、進物袷衣十領段子廿卷、今日池田備後守捧ニ目安ニ、直訴申云、神子と號して女盜人有レ之、諸方女中を迷し、金銀を取放、神子拷問之處、池田備後妻所に有レ之由依ニ白狀ニ、請取不レ申由言上云々、證跡依レ有レ之、備後守蒙ニ御氣色ニ云々、

廿三日、新儀論議、題心法色形、講師長存、知積院、此外諸化衆御暇被レ下、江戶幕下參云々、幕下爲ニ御目見ニ五山衆御暇被レ下云々、論議以後、三好因幡守、三好丹後守、本田若狹守、能勢伊勢守、保田甚兵衛、奧田三郎右衛門召ニ御前ニ、今度池田備後守儀被ニ仰出ニ云云、

廿七日、從ニ江戶ニ爲ニ御使ニ安藤對馬守參府云々、

廿八日、今日安藤對馬守出ニ御前ニ、江戶幕下御任官之儀令レ伺給、勅定之旨不レ及ニ違背ニ之由被レ仰、又本草綱目令レ遣レ之給、于ニ江戶ニ無レ之故也云々、

五月

朔日、今日御拍子有ニ五番ニ、老松觀世、當麻金春、松風觀世、錦木金春、江口觀世、云々、

二日、論議、題西方非ニ西方ニ云々、

三日、片桐市正御禮云々、

四日、論議、中院、成菩提院、法輪寺、題離散開悟、月山寺、講師春日岡云々、

五日、御能依レ雨延引、自二幕下一爲二御使一酒井雅樂頭忠世參府、右大臣從一位拜賀之御禮也、依二日次惡一、八日出仕可レ有レ之旨被二仰出一云々、

六日、論議、題自證法授他否、講師月山寺、中院、眞光寺、成菩提寺、春日岡、法輪寺云々、

八日、酒井雅樂頭忠世出二御前一、從二幕下一被レ進二銀三千枚御太刀（光長）御馬一（黒毛、雖レ然銀三百枚被二召置一云々、奥之常之御座於二御上段一御禮、本多上野介幷阿茶御局披二露之一、雅樂頭爲二自分一爲二御禮一、獻二蠟燭五百挺御太刀御馬一、御暇被レ下、御腰刀（光長）拜領、今日歸二于江戸一、爲二加藤肥後守（下）名代一加藤右馬允御禮、是者會津蒲生飛驒守秀之息女、（御孫女、）幕下爲二御養娘一、令レ嫁二肥後守一給二祝儀一也、獻二緋縅子廿黒縅子廿御服十領銀二百枚一、右馬允自分進物、御服五領銀三十枚獻レ之、片桐市正御目見、移レ刻有二御雜談一、干飯二箱、一倉炭三箱獻レ之云々、

十日、今日板倉周防守自二京都一參、出二御前一、移レ刻御密談云々、

自二十一日一至二十四日一迄霖雨云々、

十五日、天台論議、題夢有二實因實果一否、講師眞光寺、精義中院、月山寺、成菩薩院、春日岡、法輪寺、法泉寺（三非寺の）云々、

十六日、自二江戸五山衆一文頌到來、文題、君子德風也、小人德草也、草加レ風必偃、頌題、是法住法位世間相常住、（法華方便品、）於二御前一金地院道春讀進、令二褒美一給云々、

十九日、加藤式部少輔口口御禮、左馬助子息住國伊與、三ヶ年腫物煩遲參、獻二銀百枚綿二百把袷衣十領一、本多上野介披二露之一、父左馬助在江戸、京都從二伊賀守一飛脚到來、五畿內大雨洪水、賀茂川堤切流二町屋一云々、瀨田橋板傾落云々、右之旨板倉內膳言上、則可二修補一之旨被二仰付一云々、加賀肥前守利家（◎長カ）（于レ時中納言、年五十）逝去之由今日申來云々、

廿日、片桐市正出二御前一、御暇被レ下、秀頼公巢鷹被レ遣レ之、市正巢鷹御馬拜領、今日申刻、叡山正覺院僧正、南光坊權僧正、五智院、泉福寺、惠光坊、西樂院、佛眼院、竹林坊、惠心院、行光坊、日增院、叡光院、東光坊、學林坊參府云々、

廿一日、叡山僧衆御目見、暫有二佛法御雜談一、僧徒退出以後、於二奥之間一血脈御相傳、從二南光坊僧正天海一令レ受レ之給、今日池田備後守知行可レ被二召放一之旨被二仰出一、今日池田越前守口口御禮（光政男、播州姫路代官、）云々、

廿二日、天台衆各參上、出二御南殿一、南光坊僧正被レ申云、此比比叡山八王子三宮有二珍事一、其故者、學林坊奴二郎天狗飄レ之、不レ知二行方一、處、十日計過、彼二郎歸云、我頃日當山二郎坊爲二使者一、愛宕太郎坊、鞍馬大僧正（セン）、遂山豐前坊、大山伯耆坊、上野妙義法印、何も叡山へ可レ被レ參由有レ觸、則各大天狗登山之由就レ申レ之而、人皆爲二不思議思一、彼三宮參詣見レ之處、晴天俄曇、風雨烈、甚大霰降、其後彼二郎、三宮社段棟に飛揚り、如レ倒落而於二軒端一起舉、つまだてゝ立り、其外之者大勢、於二社上一色々爲二不思議一、扇をつかい歌舞體、諸人見レ之、又三宮扉尋常二三十人持程なるを、一町程宛ひらめかし投レ之、雖レ然此扉少も不レ損、又自二虛空一大礫數多打レ之、如レ郊積上云々、

廿三日、戸田采女正口口御禮、獻二銀五十枚御袷衣御帷子十領一、是者近江膳所城主息男也云々、

廿四日、南光坊僧正出仕、御雜談次而被レ申云、上野國日光山麓日比銅出レ山、頃日銀出之由、留守僧申越之由、併佛法御擧用故如レ此歟云々、指而無二御擧用一云云、

廿六日、五山衆從二江戸一歸府云々、

廿七日、五山衆出二御前一云々、

廿八日、天台論議、題暗證禪師、誦文禪師、以二數化一可二成佛一歟否、叡山僧關東僧廿四五人云々、

廿九日、五山衆銀御服被レ下、里見安房守口口御禮、銀百枚御單物御帷子獻レ之、

六月

朔日、辰半時出御、諸士出仕、各於二御前一富士氷被レ下、幸若大夫舞曲（高館伊吹落、）今日南都東大寺、清涼院、同花嚴宗御禮、清涼院當時俱舍讀也（號卿君）云々、

二日、松平和泉守子息御禮、和泉守依二死去一、繼目御禮也、獻二銀五十枚御帷子等一、今日卷本之續日本紀不足之所十卷、此中仰二五山衆一令二書續一給、捧二御前一、今日竹林坊、鶏足院、日增院、觀音院、即座問答被二仰付一、題五逆罪人不レ可二成佛一、答、法花の上にては善惡不二一邪正一如故、提婆も如來預范苅ほとに可二成佛一云々、竹林坊講師、問答御入興云々、

三日、華嚴宗論議、題十方國土一佛歟亦多佛歟、講師清涼院（卿君）大喜院、惣持院（帥君）无量壽院、專實坊、治部卿云々、今晚妙法院、梶井宮、青蓮院着府云々、

四日、爲二幕府御使一自二江戸一成瀬豐後守着府、諸大名石垣築レ之、過半成就之由言上、併雨故少遲引云々、

自二四月廿三日一至二今日一霖雨、是者四月二三四五六日、朝夕日其色如レ朱、諸國所々洪水、堤崩損橋田畠流、百姓迷惑云々、成瀬豐後守被二仰付一、をもりなしの斗鷄于二江戸一幕府被レ進云々、

五日、幸若大夫舞曲築島云々、

六日、妙法院宮雌子單物十領被レ進、出二御前殿一御對面、於二御前一有二論議一、三門跡幷五山衆、論議聽聞云々、論議題、君臣相同一生歟及二他生一歟、

院
坊
寺
坊
院
寺

心
林
智
林
光
光

趣
竹
林
坊
法
泉
坊
五
學

觀音院より春日岡迄
惠光坊講師

南光坊僧正
春日岡
中ゟ月秀日東觀
山日增光音

院
寺
國
院
坊
院

七日、御能、三門跡同天台宗、其外僧衆見物、御能組、

室君八郎實盛少進夕貌（觀世三十郎、左近子、初勤レ之、紅葉狩（今春七郎、

八日、五山衆上洛、愛宕威德院御目見云々、

九日、天台論議、先日撰被レ殘衆也、題、抑止門攝取門之心にて、五逆之惡人可二成佛一歟否、西樂院、行光坊、延命院、鷄足院、東光坊、學林坊、法泉院、宗光寺、泉福寺、禪行坊、嚴光院、相住坊也、學林坊雖レ爲二人數一、法泉院問答相手に、重而被二仰付一也云々、御能役者六十餘蜜、御服御雌子被レ下、金春同孫子七郎唐織御服拜領、

十日、華嚴宗論議、題三界唯一心、心外無二別法一、心佛及衆生、是三無差別にして、不レ可レ有二不同一、人數先三日に同、講師帥君云々、播磨良照院殿歸國（輝政卿後室、云々、

十一日、幸若大夫舞曲、伏見常盤云々、

十二日、庭田宰相口口從二江戸一歸府、下間少進法印赴二江戸一、頃日在府御能、今日金子十枚綿百把賜レ之云々、

十三日、天台論議、題、感得衣裏寶珠限二法華一乎、爾前餘經にも有レ之否、僧衆六日に同、鷄足院、法泉院被二召加一、講師惠心院、論議以後、因業念佛、果業念佛、竹林坊、五智院兩僧令二問答一、西福寺被レ召二御前一、此事被二仰出一云々、

十六日、御嘉定如レ例、巳刻、南殿出御、宰相殿中將殿（御祓之時、三人之公達御少年故、令二出御座一給事御無用之由云々、少將殿御例座、令配膳西尾丹後守、次日野大納言入道三方、傅長老（足附、冷泉中納言同上、水無瀨宰相入道同上、大澤少將同上、御緣山名禪高片木、佐々木中務少輔同上、畠山長門守同上、土岐左馬助同上、同市正同上、其外三好因幡守、三好丹後守、猪子內匠助、本田若狹守、德永左馬助、戸川肥後守、市橋下總守、堀丹後守直奇、其外諸士不レ可二勝計一、午刻、常御放之間、天台論議、題、因業念佛、果業念佛、今日者無二講師一、兩人宛問答、人數九日に同、精義惠心院被二仰付一云々、

十七日、天台論議、題、宅內にして乘二大白牛車一歟、宅外にして乘歟、人數、精義正覺院僧正、南光坊僧正、講師月山寺、惠心院、眞光院、春日岡、竹林坊、法泉院、今日知積院、幷鏡識坊、長存坊、圓福寺、從二江戸一參上、出二御前一、頃日在二江戸一、於二幕下御前一論議三度有レ之由云々、冷泉中納言弄花持參捧二御前一、是者頃日自二御前一可二校合一之由被レ仰本也、

十八日、松浦肥前守隆信出二御前一、頃江戸勤二御普請一、西國平戸吉利支丹可レ改之旨被二仰出一云々、

十九日、島津右馬助御禮、獻二伽羅卷物御太刀御馬一云々、

廿日、眞言新儀論議、題、隨二劣根氣佛の方便に一、惡を願ふ者には惡をつゝしと敎示する歟否、講師長存坊、精義知積院、建穩寺學頭、遲臺寺、圓福寺、今日南都華嚴宗可レ赴二江戸一由被二仰出一云々、

廿二日、天台論議、題、元本之無明をは、等覺にて斷する歟、妙覺にて斷する歟、精義正覺院、講師春日岡、南光坊僧正依二所勞一無二出仕一、今日片桐主膳正、大野修理大夫出二御前一、則赴二江戸一云々、

廿四日、眞言新儀論議、題、生死無明無始有終歟、有始有終歟、講師鏡識坊、精義知積院、人數同前、從二越後少將殿一爲二使者一吉田某參府、出二御前一、越後城之普請之樣子言上、今日自二江戸一爲二御使一青山善四郎重政參着、獻二御內書一、則召二御前一、御普請石垣等事令レ問給云々、

廿五日、天台論議、題、極善極惡、善人極樂に生る事早き歟、惡人地獄に墮る事早き歟、人數十六日同、無二講師一、兩人宛問答、精義惠心院云々、

廿六日、眞言新儀論議、題、於二現世一成佛歟、前世善根

宿善にて成佛歟、人數廿四日同、講師圓福寺、精義知積院云々、

廿八日、天台論議、題、人天果報娛樂、無漏乎有漏乎、講師覺林坊、精義兩僧正、人數如レ例、春日岡依二所勞一無二出仕一云々、

廿九日、眞言新儀論議、題、三密雙修、人數先日同、講師忠音、今日自二京都一伊賀守註進申云、今月廿三日、禁裡御能、然所狼藉者乍レ立見物、警固之者制レ之、御門外追出す、件者羽織之下に潛に刀を拔脇に隱し、又御門に入而、件之警固人を即座に截殺、則右之狼藉者、警固之族即座に切殺す、御庭流血故、晴天俄曇而雷雨夥云々、右之狼藉者憲法と云劒術者、京之町人也云々、

七月

朔日、新儀論議、題、即事而眞、人數先日同、講師空純、今日飛鳥井雅庸御禮云々、

三日天台論議、題、世間相常住本門に限る歟、跡門にわたる歟、講師竹林坊、精義正覺院、兩光坊、兩精義惠心院、宗光寺、月山寺、行光坊、法輪寺、日增院、五智院、惠光坊、東光坊、法泉院、今日妙法院御暇被レ下上洛、大佛供養八月三日之由、大佛開眼供養、仁和寺御門跡可レ爲二導師一之旨勅定之由金地院申上云々、

四日、新儀論議、人數同前、講師賴圓、新儀僧衆賜二御暇一上洛、知積院銀三十枚御帷子、長存銀十枚、鏡識銀十枚御服御帷子等賜レ之、其外四人同レ之賜二御暇一云々、

七日、今日如レ例御祝、自二江戶一幕下爲二御使一水野監物參着、御帷子五領被レ進レ之、江戶御普請以下御尋、從二大坂一山口左馬允、秀賴公御使參府、今日爲二御祝儀一也、黃金十枚被レ進レ之、左馬允自分之進物、紫皮十枚御太刀御馬獻レ之云々、

八日、栂尾地藏院慶善院御禮、南光坊僧正披二露之一、今日南光坊言上曰、今度大佛供養、仁和寺御門跡開眼供養導師云々、然者天台門跡と座論可レ有二穿鑿一歟、秀吉公之時者、德善院其始、眞言僧木食上人眞言故、眞言座着レ左、到二今度一者、供養導師爲二妙法院一、然上者開眼導師勿論と存處、御室御門跡御出座之儀、不慮之至被レ申、仰曰、近代例不レ可レ用、聖武賴朝之時代儀式可レ被二相尋一、開眼供養堂供養、兩日歟一日歟、於二一日一又朝歟晚歟、天台眞言同時出仕歟、片桐市正可二尋遣一之山傳長老奉レ之云々、

九日、飛鳥井中納言家之系圖、歌道宗匠日記備二御覽一云々、

十日、冷泉中納言從二江戶一歸府、出二御前一、定家卿歌書被レ爲レ見、歌道御雜談、今日幸若有二舞曲一、靜、則御暇被レ下、銀三十枚御服等拜領之云々、

十一日、天台論議、題、塔中三身、難云、寶塔之中釋迦多寶有二二佛一、分身諸佛在二地下一、（寶塔品之答云、寶塔とは五大也、三身は法身報身應身也、釋迦多寶法報にして、色心不二之處を表す、應身從本垂迹とて、天上の月池水に影を寫すか如し、然則三身共に塔中に座すと云へし、

惠心院	淨土宗
眞光寺	同日
竹林坊	律
日增院	五智院
東光坊	醫林坊
法泉院	月山寺

十三日、土井大炊助爲二御使一從二江戶一參着、昨日三好丹後守依二癰病一死去、正覺院上洛、右大炊助參着者、加賀肥前守利家◎長隱居領として、拾六萬石能登國有レ之、於二筑前守一可レ被レ下歟否云々、肥前守陪臣前野對馬守、水原左衞門尉、奥村攝津守、本多安房守政重、是三人及レ晚被レ召二出御前一、仰曰、筑前守利光北方三萬石可レ遣之由被二仰出一、幕下御息女也、未筑前守若輩、各後見可レ有レ之由被二仰出一、賴被レ思召一之旨依二御意一、三人之輩流二感涙一退出、各獻二加賀絹五十匹宛一、又肥前守爲二遺物一不動正宗脇指備前三郎刀獻レ之、本多上野介披二露之一云々、

十四日、山門爲二代僧一五智院赴二江戶一、一切經仙波被レ遣、右一切經毛利中納言入道幻庵宗瑞獻レ之、今日定家自筆伊勢物語從二幕下一被レ進、土井大炊助持參、彼本奥書等、道春於二御前一讀レ之、右本者、後土御門院御物、能登畠山入道拜領、其後轉傳、三好修理大夫長慶所二持之一、三好沒落以後泉州堺に有レ之、細川幽齋玄旨求レ之、其後尾州下野守殿忠吉從二幽齋一所望、下野殿御死去後、被レ進二幕下一、申刻、城內竹腰山城守宅燒失云々、

十五日、公家衆諸士出仕、彼定家自筆本伊勢物語、日野唯心飛鳥井冷泉令レ見給、大炊助被レ下二御暇一赴二江戶一云々、

十六日、天台論議、題、目蓮救レ母事、目蓮も地獄に入

て救歟、乍レ在二娑婆一救レ之歟、右之題、難は此界に在て可レ救と、答は自身共に餓鬼道に入可レ救、精義南光坊僧正、人數月山寺、眞光院、春日岡、竹林坊、法輪寺、日增院、東光坊、觀音院、講師三井寺住法泉院也、今日冷泉爲滿定家筆卅六人歌撰一冊持參備二御覽一、定家自筆歌書、冷泉家重寶雖レ多レ之、殊勝筆跡云々、一人之歌十首宛有レ之、其內定家朋レ之給歟、十首之內二首宛、切二薄紙一以二付紙一押レ之云々、歌書でつてうとち、以二唐紙打交糸一閉レ之云々、本者四半本也云々、

十七日、午刻俄風雨、及レ夜大風、今日仙石兵部少輔御禮、是者父越前守死去繼目也、獻二銀百枚絹五十匹御帷子御單物十領一、於二奥之御座間一御禮、越前守爲二遺物一金百枚脇指長光拜茶壺獻レ之、上野介披二露之一云々、權太小三郎依二死去一、自二江戸一沒收家財目錄到來、金千貳百五十兩餘來云、々廿分一之未濟也、

十八日、今日從二京都一板倉伊賀守片桐市正言上申云、大佛供養、來月三日早天、仁和寺御門跡開眼供養、事訖退出、以後日中供養可レ有レ之、座配天台可レ爲二左座一由云々、其外應司殿下着座、公家衆於レ堂着座、童子執綱執蓋、又三門跡之外、天台宗引頭竹內曼殊院御門跡、眞言引頭隨心院と云々、此外摠様之布施目錄到來、傳長老披露、此次而東鑑大佛供養之賴朝之例令レ讀給、冷泉爲滿爲家御自筆假名遣左枚右枚書樣書物、於二御前一持參備二御覽一云々、多武峰崩而、大織冠社摽破却、神像無レ恙、取出移二他所一云々、傳長老、竹林坊言上云々、

十九日、島津陸奥守使者到來、染絹百匹琉球酒二壺獻レ之、同維新入道使者到來、「緋段子廿卷香一箱獻レ之、相國寺長西堂與西堂寺領三百石賜レ之、是者豐光寺大光明寺領也、右兩人兌長堂子也、彦坂九兵衛言上曰、福島掃部助從者參申云、掃部家人有レ咎走逃、依レ有レ之當地搦取云々、町奉行無斷卒爾搦捕、依レ然止レ之相尋處、先年目安を以訴申者也、仰曰、右從者雖レ上二目安一、被レ對二左衛門大夫一御用捨之處、如レ此仕合奈何、仍而右之討手五人搦二捕之一、掃部蒙二御氣色一云々」、

廿日、飛鳥井中納言新歌撰寫獻レ之、明日源氏物語講釋可レ有二御聽一之旨云々、谷出羽守御目見、于二江戸一相詰、御暇被レ下、本多上野介披露之云々、

廿一日、源氏物語講釋、飛鳥井讀レ之、於二御數寄屋次之間一讀レ之、近衆四五輩、傳長老、板倉內膳兩人召レ之、仰曰、大佛鐘銘關東不吉之語、上棟之日非二吉日一、御腹立云々、

廿二日、華嚴宗論議、題、佛出世本懷、難云、法華云、唯以二一大事因緣一故出二現於世一とあり、其上華嚴にては、二乘はさとらす、又三法輪とは、根本法輪、枝末法輪、攝末歸本法輪也、根本は華嚴法華同一醍醐といへとも、法華本懷も遂に根本の華敎に歸入す、法門甚深なる故、二乘は不レ悟、又三法輪の時も、根本は華嚴也、阿含方等般若なとは枝末也、枝末を收めて一圓乘に歸入するは法花也、然共其歸入する本は華嚴にあれは、出世の本懷も華嚴にあるへし、講師淸凉院、惣持院、大喜院帥君云々、

廿三日、成瀨藤藏同半左衛門出二御前一、是者父隼人依二癰病煩一、自二江戸一參着云々、

廿四日、成瀨豐後守爲二御使一自二江戸一參着云々、

廿五日、成瀨豐後守出二御前一云々、

廿六日、天台血脈相承、自二南光坊一御傳授、今日捧二片桐市正一通之狀一、幷板倉伊賀守書狀到來、大佛供養來月三日、開眼十八日可レ爲二供養一雖レ被レ仰、十八日豐國臨時祭有レ之間、三日早天開眼、其後堂供養可レ被レ行歟之由秀賴被レ仰云々、仰曰、今度大佛供養之儀、棟札と云ひ鐘の銘と云ひ、奈何之由御氣色不快、往昔賴朝時代も、開眼と堂供養之事等隔二十ヶ年一、考二先例一、諸事無二後難一樣にと被二仰遣一、本多上野介傳長老奉レ之、

廿七日、今日南光坊天台法問之儀、於二御數寄屋一令レ受二御傳授一、成瀨豐後守于二江戸一歸、自二大御所一晋書、玉海、朱子大全、朱子語類、大學衍義補、二程全書、文章辨體、文章正宗、李白詩集、東萊南軒集、其外以上卅部被レ遣、江戸御文庫無レ之書籍也、道春奉レ之、今日佐野修理大夫知行改易之由被二仰出一云々、舍兄富田信勘氣一也云々、

廿八日、小笠原左衛門佐息年九御目見、獻二御帷子十領銀百枚一獻レ之、今日自二菊亭殿一於二板倉伊賀守一遣狀到來、是者律令金澤文庫本、往昔自二關白秀次一被レ遣二於菊亭殿一、今又被レ進二于駿河一云々、

廿九日、日野唯心被レ獻二侍中群要抄十卷一、金澤文庫本、先年關白秀次令レ取レ之、與二日野殿一本也云々、

八月

朔日、如レ例出二御前殿一、諸士出仕、大御所御長袴、南光坊、傳長老、東大寺衆、日野唯心、飛鳥井雅庸、冷泉爲滿、唐橋已下出仕、及二御雜談一云々、

三日、大佛殿之鐘銘到來、中井大和守捧レ之、件之銘東福寺韓長老(清韓)書レ之、國家安康之語御不快、其外文章所々御不快之儀、一通令レ寫、于二江戶一被レ遣、道春奉レ之云々、

三日、奥之御座間前泉水被二仰付一、築レ島堀レ池放レ魚、諏訪部摠右衛門奉レ之云々、

四日、大佛殿棟札寫到來、中井大和守捧レ之、照高院道勝法親王令レ書レ之給、不レ叶二御意一御不快、仰曰、鐘銘奈良大佛鐘銘可レ准之旨被レ仰處相違、又秀賴於レ爲二出京一者、供奉雖可レ被レ任二諸大夫一云々、任二官諸大夫一而、秀賴出京止之由、頗御不審之由被レ仰云々、

五日、今日大佛鐘銘棟札、片桐市正捧レ之、於二御前一金地院讀レ之、中井大和守差二上書付一、無二相違一、件鐘銘善惡之處、五山衆可レ致二評判一之旨、則善惡嘗記可レ捧之旨被二仰出一、爲二御使一板倉內膳正可レ赴二京都一之旨被二仰出一、其銘曰、

欽惟豐國神君、昔年掌二普天之下一、億兆之上、外施二仁政一、內歸二佛乘一、是故天正十六戊子夏之孟、相攸於平安城東一、創二建大梵刹一、安二立盧舍那大像一矣、蓋夫慕二瀾聖武帝南京之大像一、昭二顏賴朝公東大之再建一者也、雖レ然慶長七年臘月初四、不レ圖罹二罇攸之變一、已爲二鳥有一矣、凡戴髮含齒之類、無レ不二歎惜一焉、粵前征夷大將軍從一位右僕射源朝臣家康公、謂二正二位右丞相豐臣朝臣秀賴公一曰、舍那梵刹者豐國之創建也、不幸而有レ變、不レ能レ無二遺憾一焉、右丞相何不レ繼二先志一乎、右丞相曰、盛哉此言、憑レ茲丕二發弘願一、輒命二片桐東市正豐臣且元一、再建二舍那寶殿一、始二于慶長己酉一、至成于慶長癸亞一矣、速擧二其功一者、以二大樹之鈞命無レ鹽、右丞相志願不レ淺也、童子聚沙之戲、猶功用不レ可レ測、矧又過二長者布金之制一乎、其佛身也、萬德圓滿之受用身、華嚴宮上之敎主也、臺上盧舍那、葉上大釋迦、葉中小釋迦、一華百億國、一國一釋迦、三重相關、互爲二主伴一、音聲無邊、色像無邊之相好、不レ移二寸步一、可レ立而見二矣、寔變二忍界一成二報土一者乎、其寶殿也、公輸削レ墨、郢工運レ斤、嵯峨棟宇、高秀二青雲之上一、璀璨玉礎、深徹二黃泉之底一、千楹萬柱、峥二嶸其內一、大梁小椽、絡二繹其上一、繡桷棍耀、雕栱玲瓏、堵墀疊レ石、鈴鐸鳴レ風、壁門前聳、玉廊四回、訝二都史夜摩忽現二下界一、惟二逃島瀛洲已在二人間一、八天神所二瞻禮一、寔天下之壯觀也、緬懷菴役那爛陀大刹、甲二于西域一、嘉州阿逸多大像、冠二于東

震一、亦風猶在レ下矣、加レ旃欲下鑄二梵鐘一、以備中晨昏上、金銀銅鐵、鉛錫白鑞、積如二丘山一、火官冶工、差レ肩而雲集、蠻奮時奮、鎔範已設、萬鈞洪鐘、一時新成矣、周禮所謂于鼓鉦舞、甬衡旋篆、無二一不レ備焉、昔在佛世梵王下、鎔二鑄祇桓金鐘一、拘二留孫造石鐘一、諸佛出興、亦不二多讓一矣、夫鐘者禪誦之起止、齋粥之早晚、送迎緩急之節、必鳴レ之以警レ衆焉、顯密法器之制、莫レ先二於鐘一、故建レ寺安レ衆、必先置レ之、摧折魍魎、屈二伏魔外一、三寶爲レ之證明、諸天爲レ之擁護、廣資吒王、劍輪頓空、南唐李主、累械忽脫、雲門七條、德山下堂、其妙用不レ可二勝計一焉、蒲牢一聲、上徹二天宮一、下震二地府一、雷鼓霆擊、普及二微塵刹土一、使二人天幽明異レ類、耳根清淨、以證レ入二圓通三昧一、其施不二亦博一乎、金索簨簴、以掛二着寶樓一、祝曰、仰冀天子萬歲、台齡千秋、

銘曰、

洛陽東麓、舍那道場、鎣レ空瓊殿、橫レ虹畫梁、參差萬瓦、崔嵬長廊、玲瓏八面、焜燿十方、境象二兜夜一、刹甲二支桑一、新鐘高掛、爾音干鎧、響應二遠近一、律中二宮商一、十八聲緩、百八聲忙、夜禪晝誦、夕燈晨香、上界聞レ竺、遠寺知レ湘、東迎二素月一、西送二斜陽一、玉筒堀レ地、豐山降レ霜、告二怪於漢一、救二苦於唐一、靈異惟夥、功用無量、所二庶幾一者、國家安康、四海施化、萬歲傳芳、君臣豐樂、子孫殷昌、佛門柱礎、法社金湯、英檀之德、山高水長、

時慶長十九甲寅歲孟夏十六日

大擅那　正二位右大臣豐臣朝臣　秀賴公

奉行　片桐東市正豐臣且元

冶工京三條釜座名護屋越前少掾藤原三昌

前住東福後住南禪文英叟清韓謹書

六日、大藏一覽傳長老獻レ之、仰曰、此書重寶也、百部歟二百部可二開板一、幸銅字廿萬字有レ之由被二仰出一云々、

七日、山崎宗鑑自筆廿一代集、日野唯心飛鳥井冷泉令レ見給云々、

八日、板倉內膳正、今日上京、鐘之銘棟札之時、座配之儀被二仰遣一云々、今日南都東大寺上生院出二御前一、奈良大佛のみくし傾く由、直レ之度旨、眞柱を取替、諸國勸進、銅を以鑄懸可レ直之由言上之處、御諾、依レ之中井大和守被二仰付一、賴朝造二重源一給自筆之文書二通、

東大寺緣起、彼僧持下御覽、洞下僧松薫御目見、是者泉龍之與奪を以、大中寺可レ住之旨云々、今日小笠原兵部大輔父子御禮云々、

九日、天台論議、題、法華入實者、阿含之但空歟、方等之彈呵による歟、精義南光坊、月山寺、眞光寺、法輪寺、日增院、寶泉院也、今日尊應榮雅兩人與奪之定家古今集、道遙院稱名院筆三代集、冷泉幷公家衆令レ見給、冷泉申云、古今集頗不審云々、

十日、公家衆金地院令レ見二弘法心經、道風佐理行成之手蹟、尊圓一卷、道遙院、稱名院筆伊勢物語二部、同源氏物語系圖、二卷幷定家筆新勅撰等二給、諸人驚レ目云云、今日被レ仰二清涼院、花嚴會上葉上葉中三佛之說奈何一、答云、三佛出世、相互爲二主伴一、仰曰、於二外典一者、君臣位をかゆる儀歟、道春伺候、是者大佛鐘銘有二此事一云々、

十一日、南光坊僧正天台佛法與儀被二申上一、今晚畔柳叢學獻二大魚一、長四尺餘、貌似レ鯛云々、

十二日、山名禪高元豐於二御前一、兩吟連歌被二仰付一、面八句、即座發句、いらさらん空にてみはや秋の月と云能阿古句令レ出給、御入興云々、

十三日、南蠻人黑船船頭御目見、白糸卷物獻レ之云々、

十五日、天台論議、題、法花圓頓戒者、退失歟、不退失歟、心大乘戒一得、永不失とて不可失となり、然共其保つ人に依て退失する事も有へし、

月山寺	藥樹院
眞光寺	寂光院
法輪寺	東光坊
日增院	善行坊
法泉院	觀音院

及二乘燭一、於二常御座間一御拍子、小督、三井寺、老松、姨捨、觀世大夫勤レ之云々、

十七日、奈良與福寺南大門法隆寺、御持堂、聖靈院、法華堂等棟札寫二四通一、中井大和守捧レ之、仍而令二御覽一給所、各大工棟梁姓名載レ之、然今度大佛棟札、大工名無レ之儀御腹立之內也、

十八日、天台論議、題、咸佛得脫者、依二自力一歟、依二他力一歟、人數、講師明靜坊、東光坊、法泉院、善行坊、寂光院、摠持院、觀音院、精義眞光寺也、今日板倉內膳正自レ京歸參、五山碩學長老七人、彼鐘銘趣批判捧レ之、則文箱開レ之令レ見給、南光坊傳長老道春出二御前一、如二上意一

右之七人之衆之淸韓文章之難書二戒之一、今日片桐市正到二九子之寺一參着之由云々、韓長老蒙二御氣色一云々、

十九日、律令到來、是者金澤文庫本關白秀次執レ之、今出川殿被レ遣レ之、今日被レ進レ之、令廿籍、內十一籍不足、律は二卷在レ之云々、片桐市正于二駿府一可レ參之旨被レ仰、今日參上、自二京都一來五山衆批判之書七通書二寫之一、于二江戶將軍家一被レ遣レ之、道春奉レ之云々、御大母十三回忌、銀百枚于二江戶增上寺一被レ遣レ之云々、

廿日、高野寶性院出二御前一、獻二一束一卷一、大樂院當時以二御諚一寶性院後住御禮着府、同釋迦文院俊長坊出二御前一、寶性院遺物、自二前代一所持之法華經一部獻レ之、南都東大寺大佛修補勸進帳、淸涼院書レ之、傳長老披二露之一、今日傳長老上野介被レ仰曰、今度鐘銘棟札、最前被レ仰與相違奈何、其上諸牢人餘多被二抱置一、御不審之由被二仰渡一云々、

廿一日、天臺論議、二題、法華涅槃二經勝劣、講師藥樹院、月山寺、眞光院、法輪寺、日增院、東光坊、法泉院等也、飛鳥井雅庸被レ遣二御暇一、可レ赴二江戶一云々、

廿二日、飛鳥井雅庸源氏三箇大事、令レ受二御相傳一給云々、

廿三日、眞言論議、題、地大能生、須聽抄之論題也云云、問、諸法能生之儀、五大之中、可レ謂レ限二地大一哉、答、可レ通二五大一也、講師寶性院、大樂院也、如意輪寺、釋迦文院、俊長坊、深由坊、冕證院、宿賢坊云々、

廿四日、自二長崎一長谷川忠兵衛、茶屋又四郎淸次來、南蠻唐人商船來朝之由云々、吉利支丹追放之儀被レ成二御尋一云々、

廿五日、村上周防守、溝口伯耆守御目見、有二蠟燭等獻レ之、木下宮內少輔子熊始而御目見云々、

廿六日、於二御廣間一御能、觀世左近大夫子、吳服、經政、佛原、大佛供養、猩々、觀世大夫八木百俵鳥目三千匹被レ下レ之云々、

廿七日、天台論議、題、法華、彌陀、觀經彌陀と同體歟別體歟、精義南光坊、講師月山寺、藥樹院、眞光寺、法輪寺、日增院、東光坊、法泉院等也、飛鳥井雅庸被レ遣二御暇一、可レ赴二江戶一云々、

廿八日、水野監物爲二御使一、自二江戶一參出二御前一、本多上野介同參、是者大坂之儀就二御立腹一、來密々言上云云、

廿九日、今晚大藏卿局從二大坂一參府云々、

卅日、今朝俄本多上野介爲二御使一赴二江戸一、今日寶龜院依レ召登城、寶性院什物、惠泉印信大師自筆大日經七卷之內三卷不足、願行之鈔、其外黑箱過去帳、其外紛失、定而寶龜院可レ存之由被レ仰、不レ屆二於前住一開藏之儀、後住爲二落度一之由被レ仰云々、

九月

朔日、如レ例公家諸士出仕、今日阿蘭陀人御目見、獻二白糸二九、龍腦二斤、丁子二嚢、大木綿段子等一、獻レ之、やようす出二御前一、虎子二匹引レ之來、江戸幕府若公達可二進上一之由申上、從二江戸一飛脚到來、去廿八日、大風、士民家屋悉破却之由、城中無レ恙、塔山門其外無レ所レ不二吹損一、古今無レ之大風之由云々、

三日、於二三之丸一御能五番、老松、江口、大會、小鹽、西王母、觀世子三十郎勤レ之、金春左吉、太鼓名譽、鷲二右衛門、狂言名譽、但鷲者自二住昔一寶生座、右兩人從二今日一觀世座可二龍成一之旨被二仰出一云々、

四日、地誦役者不レ殘、八木二十石宛、當座之爲二賜物一被レ下、永井右近奉レ之、今日天台論談、題、提婆權者歟實者歟、精義南光坊、譯師法輪寺、月山寺、眞光寺、日增院、東光坊、法泉院、觀音院云々、月山寺、眞光寺、法輪寺三人、賜二御暇一關東下向、自レ京飛脚到來、去月廿八日、大雨洪水、山城河內近江方々堤崩、百姓流家溺死多云々、或說、今年二合歲故云々、

六日、眞言論議、題、他作自受、他人のなす善根を自身に受る歟否乎、講師寶性院、如意輪寺、釋迦文院、俊長坊、覺證院、覺俊坊云々、

七日、本多上野介自二江戸一歸參、今日以二金地院上野介一爲二御使一、片桐市正被レ仰曰、市正知行與る事、大御所被レ仰二於秀賴一被二宛行一、弟主膳同前、是併大御所依二御恩一也、疎略於レ存者、可レ爲二不義一、其上秀賴對二御父子一、調伏之儀風說、將軍家御心底奈何、又大藏卿局此旨被二仰遣一、市正歸二于大坂一云々、今日舟橋秀賢依二死去一、繼目爲二御禮一舟橋大炊助清原參着、秀賢子息、爲二遺物一三代實錄五十卷獻レ之、內十卷不足云々、

八日、南光坊、傳長老、寶性院、飛鳥井、冷泉、重陽御服各二領宛賜レ之、

九日、巳刻常之御書院渡御、如レ例公家出仕、自二幕府一爲二御禮一神尾五兵衛參府、重陽御服五領被レ進レ之、於二御前一公家衆賜二酒盃一、今日仰曰、清和天皇貞觀之時、僧正僧都位階被レ定、然處近代龜山院之時、僧正

準二參議一、近代之例不レ可レ用云々、今日高野寶性院紛失什物、急度寶龜院可レ出之由被二仰出一、上野介奉レ之、上野國榛名山法度御朱印、于二南光坊一遣レ之云々、

十日、雨降華嚴宗論議、題因明聲論論勝論之問答、講師清涼院、妙喜院、大喜院帥君云々、

十一日、從二朝鮮國一肉蓯蓉一重牛黃獻レ之云々、

十二日、今朝片桐市正上洛、今度無二御目見一、大藏卿も于二大坂一歸る、

十三日、飛鳥井中納言御暇被レ下、銀三十枚綿二百把賜レ之、今日寶性院紛失什物、大樂院文殊院歸二高野一可レ改由被二仰出一云々、又奈良大佛修造、上性院、清涼院兩人、諸國勸進不足之處、可レ被二仰付一之由被二仰出一、今日原主水自二關東一搦來、則兩手指を截、額に火印をあて、彼者舉用する者於レ有レ之者、可レ爲二曲事一之由、被レ添二制札一被二相放一、彦坂九兵衛奉レ之、是者吉利支丹也、數年隱居、唯今尋捕來、今日寶性院上洛、山科安祥寺被二仰付一云々、

十四日、土井大炊助爲二御使一自二江戸一參着、上野介則言上、密々大炊助言上云々、

十五日、於二御數奇屋一南光坊密々佛法御雜談、今日如レ例諸侍出仕、今日幸若小八郎從二江戸一參府、於二御前一舞曲、烏帽子折云々、

十六日、今朝早天松平筑前守利光着府、午刻御禮、黃金三百枚、紅染絹二百匹、白絹百匹、則出二御前一、御太刀守家御脇指長光拜領、本多上野介傳レ之、筑前守陪臣奧村河內守、同攝津守御目見、獻二御服一、及レ晚縫目御朱印被レ遣レ之、其詞曰、

加賀能登越中三ヶ國之事、一圓被二仰付一訖者、守二此旨一可レ抽二忠勤一者也、仍如レ件、

慶長拾九年九月十六日　御直判

松平筑前守殿

右之御使本多上野介土井大炊助奉レ之、則明朝早々可レ赴二江戸一旨被二仰出一云々、大炊助赴二于江戸一云々、

十八日、自二江戸一松平武藏守着府、出二御前一、御暇出歸國、是者御普請依二原明一也、今日遠州可睡宗珊出二御前一、曹洞宗佛法御雜談、其後幸若舞曲、信田云々、

十九日、原主水御改易之內、岡越前守所に寄宿、依レ之介レ問給所、越前守知行所有之處、子息平內依二朋友一拘二置之由一、平內御改易、越前守御赦免、駿府槇谷耕雲寺、件主水隱居間、此僧曲事被二仰付一云々、今日板倉

內膳於三三州ふかうづに一千五百石御加增拜領云々、
廿日、上總國東金西福寺日善上人御目見、日蓮宗也、
蒔田權佐獻二御菓子一云々、幸若小八郎舞曲、文覺從二江
戶一伊丹喜之助康勝鎭目市左衞門參府、是者當時御代
官所爲二御勘定一也、今度里見安房守爲二國替一被レ遣二
伯耆一、安房城本多出雲守內藤左馬助爲請取一被レ遣（里見安房守大久保相摸守是也）云々、
廿一日、今日御癈故無二出御一云々、
廿二日、知恩院今度八宮御入室、御門跡號と御沙汰有
云々、
廿三日、大御所出御、上山檢校平家かたる、鰹問答云
云、
廿五日、今日大坂片桐市正飛脚參着、其狀云、去十八
日自二駿河一大坂上着、御意之旨申上、末々將軍家不和
奈何、然間秀賴在江戶歟、御母儀在江戶歟、不レ然者大
坂城被レ退、御國替可レ然之旨申、依レ之秀賴幷御母儀
不快、市正可レ被レ殺之內存依レ有二告知者一、止二出仕一引
籠有レ之由、上野介達二上聞一之處、彌御腹立云々、
廿八日、南殿出御、御癈御平愈云々、
廿九日、吉利支丹淸安と云者籠舍之內、籠に在レ之罪

十月

朔日、京都自二伊賀守一飛脚到來、其狀云、去廿五日、
於二大坂一大野修理、靑木民部少、石河伊豆、薄田隼人
正、渡邊右衞門佐、木村長門守、織田左門、其外十餘
輩、秀賴依レ仰、片桐市正爲レ殺、市正知レ之、用二意于私
宅一引籠有レ之由、本多上野介、板倉內膳正言上、依レ之
御腹立甚、于二大坂一御出馬之由、近江伊勢美濃尾張三
河遠江被二仰觸一、又于二江戶幕下一被二仰遣一、又伊賀守飛
脚到來、書狀に云、市正于二駿府一下向せは、秀賴をも
城を出給樣にして、織田常眞を大坂城に入、大將とし
て可二籠城一之旨、織田左門其外談合之由云々、
三日、氷降、大さ如レ棗云々、
四日、宰相殿到二那古屋一御進發、成瀨隼人正、竹腰山

城守、其外尾張衆以下數百人（尾州名古屋者、宰相殿義俊御領分也）云々、
五日、京都伊賀守飛脚到來、大坂之體彌構二城廓一、諸牢
人拘置、籠城支度之由註進云々、
六日、京都伊賀守飛脚到來、從二織田有樂一伊賀守方へ
一通之書狀遣レ之、其狀云、今度大坂雜說之儀、市正駿
河之御使惡敷仕由、秀賴公御折檻に付而、市正同弟主
膳攝津棘木市正（立除、依レ之大坂以外騷動、我等全對二
兩御所一野心之儀不レ存由、此旨宜可レ申云々、又今日
從二江戶一御普請隙明、細川內記忠利參府、以二上野介一
言上、申云、今度之大坂騷動之儀、於二箱根邊一始而承
レ之、國本父越中守忠興在レ之間、某兩御所之中、於二何
方一可レ奉レ供、大坂先手可レ被二仰付一由申上處、仰曰、尤神
妙之由蒙二御感一、又赴二江戶一、中川內膳正自二江戶一御普
請隙明參府、出二御前一、早々赴二豐後一催二人數一、從レ是註
進可二相待一之由被二仰出一云々、從二美濃加納一今日飛
脚到來、申云、松平攝津守、從二去朔日一俄腹痛、翌日二
日午刻死去之由、此旨上野介言上、仰曰、加納人數、舍
弟伊勢龜山城主松平下總守淸正召連、大坂可二參向一
之由被二仰出一、父美作守定而可レ爲二愁歎一、加納城能可二
相守一由被二仰出一云々、

七日、京極丹後守、同若狹守忠高、森右近忠政、田中筑
後守忠政、江戶御普請隙明、被レ下二御暇一參府、各御目
見、仰曰、急歸國催二人數一、可レ相二待御左右一旨被二仰
出一、今日片桐市正同主膳使者小島勝兵衞、梅津忠介
來、從二大坂一棘木迄立退由、以二本多上野介一言上、兩
使被二召出一、御服御羽織拜領、又被レ遣二御書一、其趣云、
今度俟人族種々依レ致二申事一、棘木迄立退之由、被レ思二
召神妙一、猶本多上野介可レ申候也云々、於二主膳一同前
被レ遣二御書一、兩御書共に御直判、松平紀伊守、三宅宗
右衞門、駿府御留守御番依レ可レ被二仰付一、於二三州一被
レ遣レ召、伊豆所港、西國方之早船有レ之、急相改取檜可
レ申之旨、於二彥坂九兵衞一被二仰付一、沼津御番長野九左
衞門□□□□囚獄□□川井作兵衞可二申付一之旨、九
兵衞奉レ之、去廿八日、石河伊豆守妻子引連、大坂城中
立退、市正依レ爲二緣座一赴二大野一云々、自二大坂一市正
知行所改易、大野修理布施屋飛驒守下知云々、
八日未明、藤堂和泉守爲二先陣一大和邊迄相詰、則攻口
天王寺表、紀伊美濃尾張伊勢遠州三州御人數一手に
可レ向之由被二仰付一、今日自二幕下一爲二御使一土井大炊
助參府、今度依二大坂之儀一、大御所被レ出二御馬一之由

被二仰付一、於二幕下一、大御所關東江戶御仕置被二仰付一可レ被レ下之旨再三言上之處、仰曰、先御上洛、大坂之躰被二御覽一、爲レ指儀於レ無レ之者、御仕置等被二仰付一可レ有二還御一、若又於二大坂一堅籠城者、被レ仰二幕下一、大坂城可レ被二攻落一、大御所又以二拾萬人數一、奥州以下御仕置可レ被二仰付一旨、大炊助被二仰含一、又幕下人數引率給、可レ有二御上雒之由被二仰含一、江戶御留守御含弟越後少將殿忠輝、蒲生下野守忠鄉、奥平大膳亮、最上駿河守家親、同仰姪鳥井左京亮、酒井河内守、大御所御姪同備後守忠利、内藤若狹守以下、御留守居被二相定一尤之由、大炊助蒙レ仰、急歸二江戶一、今日竹中伊豆守 御普請隙明、自二江戶一參府、御目見、仰曰、汝福島左衛門大夫正則爲二知音一之間、爲二御使一可レ被二指下一、其趣者、今度秀賴被レ挿二野心之巧一、且秀賴非レ所レ行乎、織田有樂、大野修理、木村長門、渡邊權兵衛、其外爲二若輩一、秀賴進二惡逆之儀歟、正則太閤以レ好、秀賴不レ疎也、雖レ然今度秀賴別心之儀如何被レ存、對二我父子一、逆心雖二有レ之間敷一、下々作二狐疑之間、手前人數於二國本一差下、息男備後守差添、大坂表攻口被二加勢一、正則者在江戶可レ然之由被レ仰二遣于江戶一云々、

九日、最上駿河守駿河參着、則今日御目見、父出羽守義光、去五月十八日死去、繼目御禮、銀五百枚、綿五百把、蠟燭千挺、御馬蘆毛、御太刀正恒獻レ之、出羽守遺物、黄金百枚、脇指來國俊獻レ之、本多上野介披二露之一、仰曰、大坂御出馬、將軍家江戶可レ爲二御留守一之由被二仰渡一赴二江戶一云々、

十日、淺野但馬守、鍋島信濃守、松平土佐守、蜂須賀阿波守、小出大和守、稻葉彦六、遠藤但馬守、毛利伊勢守從二江戶一御普請隙明參府、御目見、仰曰、大坂御出馬、明十一日、何も國本馳參用意仕、御一左右可二相待一之旨被二仰出一、急能登云々、

十一日、辰刻中將殿賴宣御出馬、安藤帶刀、水野對馬守、其外數百騎、巳刻大御所御動座、路次中依二御放鷹一、諸軍勢從二午刻一發足、本多上野介正純下知云々、或說、大御所御人數四百七十騎云々、到二申刻一田中着御、板倉伊賀守飛脚到來、大坂躰彌籠城支度、其意趣者、金銀多取出、大坂近邊八木買込、武具以下城中入置、搪構壁を付、番匠數百人櫓井籠之支度之由、又天龍川舟橋出來、御通り以前諸人往來可レ禁哉否之由、彦坂九兵衛言上、仰曰、舟橋諸人往還爲レ令二自由一也、何可レ禁レ之哉、併大勢

一度於レ渡者、早可レ破レ之、一騎討可レ通旨云々、

十二日、申刻遠州懸河着御、及二黄昏一大野壹岐守、井片桐市正使者、自二攝州棘木一參着、則被二召出一、壹岐守大坂之躰御尋之處、言上申云、今度之企、織田有樂、同息左門、木村長門、渡邊内藏助、惣兄修理を始、近士俄企之旨申上、兄大坂、罷有處、早速罷歸、神妙之由被レ仰、又自二京都一伊賀守飛脚到來、去六日七日、京都諸牢人之内長曾我部宮内少輔、後藤又兵衛、仙石豐前守、明石掃部助、松浦彌左衛門、其外名も不レ知牢人千餘人、金銀を出し籠城抱置、奈良表打出、大和打破、從レ夫宇治眞木島指出放火、攝州嶽木押寄、市正兄弟可二打果一之由風聞之通申上、依レ之路次御急云々、

十三日、未刻中泉着御、路次御放鷹、從二幕下一板倉周防守重宗參上、路次中御氣嫌爲レ可二令レ問給一被二付置一云々、福島左衛門大夫正則使者從二江戶一參着、并竹中伊豆守書狀一通、言上申云、今度大坂之儀に付、御諚之趣謹而承、秀賴并老母野心之儀、存外之至、且者秀賴近習若輩故歟、正則認二書狀一、秀賴同老母以二兩使一申達、其狀本多上野介内見之處、今度大佛出入之儀に付、對二兩御所一如レ此之企、天魔之所行歟、早速被レ改二其心一、母儀爲二御侘言一、江戶駿府於二在國一者、秀賴御長久可レ爲二御運一、於二正則一者于二江戶一妻子以下指置、其上一圓兩御所無二二之忠節之條、於不レ被レ改二野心一者、始二正則一天下諸軍勢于二大坂一馳向、攻落之儀必定也、右之旨被レ加二思慮一、長久與二自滅一何歟可レ被二思召一哉云々、

十三日、中泉着御、路次御放鷹、◎以上重出鶴三雁五令レ擊給、則鶴之御料理、近習輩賜レ之、又自二長崎一飛脚到來參着、長谷川左兵衛申云、其趣者、去月廿四日、伴天連徒黨百餘輩、并大檀那高山右近、内藤飛驒守、其外長崎中伴天連乘船、于二天川一遣之由申上、仰曰、御快氣之由可二申遣一云々、及二昏黑一黒田藏人安藤帶刀所從、路次行合、刀鞘とがめして及二口論喧嘩一、藏人五箇所被レ疵、雖レ然藏人若黨帶刀所從者截殺、一人蒙レ疵云々、

十四日、卯刻中泉出御、路次御放鷹、天龍川二瀨舟橋、大石十右衛門、豐島作右衛門奉二行之一、午刻、濱松着御、京都板倉伊賀守飛脚到來、其狀云、大坂之躰相替儀雖レ無レ之、諸牢人彌多被二抱置一由、別紙註文捧レ之、異田源三郎、是者先年關か原御陣之時、爲二御敵一蒙二御勘氣一、數年于二高野山一引籠、秀賴爲二當座音物一、黄金

貳百枚銀卅貫目遣レ之、于二大坂一籠城、若原右京播磨牢人召連籠城、淺井周防守、是者御母儀緣者、其外根來三百騎籠城、何も依二金銀多遣一、諸牢人馳參事不レ知二其數一之旨言上、今日從二幕下一爲二御使一松平助十郎參、路次中御機嫌令レ問給云々、加藤肥後守從二江戸一御普請隙明被レ下二御暇一、於二濱松御旅館一御目見、早々國本馳參、人數を催國を堅固に守り、可レ相二待一左右一之旨、今日御應之雁二、賜二肥後守一、松平右衞門佐正久奉レ之、脇坂淡路守安元自二江戸一參着、早速于二伊豫國一罷下、催二人數一大坂表罷出、藤堂和泉守組に罷成可レ攻之由被二仰出一、伯耆國代官伊丹山田出二御前一、伯州亖年物成銀百五十貫目持參云々、召二上野介一仰曰、本多美濃守を始伊勢人數、淀鳥羽可レ出之旨被レ仰、越前少將殿忠直手勢一萬五千、早々淀橋本近邊可レ被レ爲二出陣一之旨被二仰出一云々、

十五日、吉田着御、板倉伊賀守飛脚到來、其狀之趣、去十二日、從二大坂一堺之津可レ破由申に付、町人以下不レ及二異儀一、秀頼依レ致二歸伏一、鐵炮玉藥武具、大坂城中自レ堺取運、堺政所芝山小兵衞依レ爲二無勢一、不レ及二了簡一堺立退、岸和田引除云々、又堺町人柏尾宗具、去九日堺を出、今十五日到二吉田一下着、則召二御前一、宗具申云、大坂城中彌籠城之體、然上者堺可レ致二放火一之由風聞、依レ之妻子在鄉隱置、御旗本馳參由言上、仰曰、奇特志之旨蒙二御感一、是者圍非上手、折節伺候之者也云々、

十六日、岡崎着御、板倉伊賀守飛脚到來、去十三日、於レ堺自二大坂一人數三百騎程出し、片桐市正人數二百餘、堺町加勢之所、多羅尾半左衞門牧治右衞門討死、今井宗薰同宗呑討死之由云々、從レ夫市正人數尼ヶ崎退所、大坂勢追懸、路次七八騎討捕、依レ之彌路次令レ急給、自二大坂一出勢大將棋島玄蕃頭等也、今日福島左衞門大夫獻二一通書狀一、正則在二江戸一、妻子江戸城中籠置云々、宰相殿義俊昨日尾州發足、到二一宮一令レ着給由云々、自二江戸一爲二御使一成瀨豐後守參着、奥州政宗、長尾景勝、佐竹義宣以下于二江戸一參、早速江戸御出馬有度由被二仰上一、仰曰、於二其儀一者、其方次第御出馬可レ有レ之由被二仰遣一云々、

十七日、未刻那古屋御着、古田織部重然、醫師駈庵、爲二御迎一參向、追手門外御目見、及レ夜鶴御料理、近習輩賜レ之云々、

十八日、從二昨晚一依二雨降一御逗留、從二京都一伊賀守飛脚到來、彌籠城用意、今井宗薰父子最前討死之由雖レ申、城中召捕參、自二加賀一筑前守飛脚到來、去十四日、國本發足、近日京着、然者陣所何方可二罷有一哉、仰曰、淀鳥羽近邊迄出張可レ有レ之旨被二仰出一云々、越前少將殿忠直、飛脚到來、江州坂本迄、十六日參着、陣所何方可レ然歟之由申來、仰曰、西岡東寺九條山崎邊可二相詰一由被二仰出一云々、

十九日、午刻到二美濃岐阜一着御、德永左馬助飛脚到來、從二秀頼公一於二左馬助一披露狀、其趣曰、今度市正對二秀頼一條々不届仕合在レ之に付、市正折檻之處、大御所以外及二御腹立一、近日御出馬在レ之由、誠以不レ及二了簡一儀に候、且者對二兩御所一、於二秀頼一毛頭野心不レ存由、此旨宜レ被二申上一者也、

十月九日　　秀頼黒印

德永左馬助殿

右之趣、本多上野介於二御前一申上處、仰曰、秀頼若輩故、彌織田有樂大野修理種々廻レ謀由被二仰出一、秀頼僞二意趣一、去三月、從二大野修理所一加賀肥前守方へ遣二一通狀一、其趣者、秀頼萬才覺、彌逐レ日爲二增進一、漸時分此時に候間、早有二上洛一、秀頼可レ有二御指南一、兵粮已下大坂有レ之分、福島左衞門大夫手前三萬石、秀頼藏納七萬石、其外商買兵粮數多在レ之、御一人之仰承レ之由、書狀肥前守利家◎（長カ）死去已後、子息筑前守以二本多上野介一指上に付、大坂別心之所必定、何有レ疑哉云云、島津陸奥守、毛利宗瑞入道、鍋島加賀守、黒田筑前守、福島備後守、松平武藏守、同左衞門督、同宮内少輔、淺野但馬守、蜂須賀阿波守、加藤左馬助、森美作守、田中筑後守、生駒讃岐守、其外中國西國催人數萬人數、大坂表可二押寄一之旨、以二本多上野介一被レ仰云云、

廿日、柏原御旅館着御、京都伊賀守飛脚到來、申云、從二大坂一そ〳〵たくを以金銀を取、二條御近邊在家放火可レ致旨、徒黨訴人在レ之に付、數人搦捕之由言上、右之内大坂町人金子五百枚捕、乞食之體、大御所御上雜路次ねらい可レ申旨、捕レ之云々、御氣色快然云々、

廿一日、江州佐和山着御云々、

廿二日、江州永原着御、京都伊賀守飛脚到來、先勢諸軍從二京着之日一、御扶持方兵粮相渡之由、今日堺從二南北町中一言上、去十三日、政所引退、亂妨狼藉之御制札

致二頂戴一度由望申故、後藤少三郎言上、依レ之御制札被レ遣レ之、竹中伊豆守召二御前一、汝安藝備後馳參、福島備後守諸人數召連、大坂表可レ參之旨被二仰付一、備後國鍛冶數多在レ之間、鐵楯可レ拵之旨被二仰出一云々、又前庭半入二大坂一居住、今日永原來着、則召二御前一、大坂樣體軍陣之體、萬事此儀指出給、依レ之諸卒失レ色云々、

廿三日卯刻、永原出御、自二矢橋一召二早船一、（艘四十艇立、）膳所戸田左門於二船中一獻二御膳一、午刻、二條亭着御、則片桐市正子息出雲守出二御前一、此比大坂城中勘二別心一者等之儀申上云々、福島左衞門大夫使者從二大坂一歸參、對二正則一無二返報一云々、藤堂和泉守片桐市正召二御前一、大坂堀淺深之儀、其外諸方攻口之樣子、以二繪圖一申上云々、自二幕下一爲二御使一青山善四郎參着、御京着令レ問給、幕下御出馬、猶可二令レ急給一之由被二仰遣一云云、

廿四日、爲二勅使一兩傳奏廣橋兼勝、三條實條御對面、其外先手諸大名爲二御目見一參上、水野監物爲二御使一自二幕下一參着、將軍家御出馬、早速被レ成度之由被二仰上一、仰曰、政宗景勝義宣何も奥州勢爲二先手一、急上洛可レ然之由被二仰遣一云々、

廿五日、未刻大地震、今日藤堂和泉守片桐市正召二御前一、大坂城中取卷人數先手被二仰付一云々、

廿六日、織田常眞御對面、是先年關ヶ原合戰以來御牢人、今度秀頼密談之處、達而御異見、則於二大御所一御内通有レ之、則御知行可レ被レ遣旨被二仰出一、今日諸大名御目見、於二御内々一後藤少三郎申云、松平武藏守、淺野但馬守、鍋島信濃守、當年江戸從二御普請一、直に御陣場參向故、不自由之段申上處、銀子恩借仕度由、依レ之銀二百貫目宛、從レ夫小身各諸大名借二賜之一、今日京極采女正即召二御前一、獻二奈良柿千一云々、

廿七日、一乘院喜多院出二御前一、寶性院片桐主膳正御目見、石河伊豆守、松平武藏守出二御前一、奥之間被レ召、大坂尼崎繪圖軍陣之樣子令レ仰給、今晚自二關東一飛脚到來、將軍家今月廿三日江戸御出馬、廿四日藤澤着御云々、數萬軍勢行程急に難レ押、今少緩々可レ押旨被二仰遣一、今日五山衆五十人、南禪寺於二金地院一諸家記錄一本三部宛令レ寫給、一部禁中、一部江戸、一部駿河可二令レ置給一由、傳長老道春奉レ之、堺南北獻二銀二百枚一、成瀨隼人披二露之一云々、

廿八日、醍醐三寶院、奈良大乘院、本願寺門跡、妙心寺

鐵山長老、大德寺松岳長老御目見云々、

廿九日、今日表無二出御一、於二奥之間一御咄、江戸從二將軍家一爲二御使一永井信濃守參着、廿七日、幕下三島着御之由言上、池田備後守去夏蒙二御勘氣一、今度御陣幕參、御先手埋草にも可二能成一之由、板倉伊賀守言上之處、御氣色能、有馬玄蕃頭豊氏先手可レ參之由被二仰出一云々、

十一月

朔日、八條宮智仁親王、二條殿昭實、九條殿忠榮、妙法院宮、梶井宮、勘修寺宮、隨心院御對面、日蓮衆廿一ヶ寺上人各御目見、松平左衞門督、有馬玄蕃頭爲二御目見一參向、自二上下京中一獻二銀千兩一云々、島津陸奥守使者來申云、去比從二大坂一、長崎往來商人高屋七郎兵衞、以二秀頼公黒印并長銘正宗脇指一令二持參一、今度就二一儀一、陸奥守可レ頼之由申來、陸奥守返答云、於二薩摩一關か原以來流牢之處、大御所以二御恩一、本領安堵、然者大坂同心之儀不レ成由、七郎兵衞依二商人一不レ殺レ之、彼脇指返レ之旨言上、彼曾者使者持參、本多上野介披二露之一云々、

二日、從二幕下一爲二御使一内藤右衞門佐、自二三州吉田一參着、出二御前一、幕府路次中御急、自二駿州清水一懸河、

從二懸河一吉田迄着御之旨言上之處、大軍數里行程不レ可レ然由甚御腹立、不レ可レ然旨被二仰遣一云々、

三日、片桐市正從二御先手一參、諸軍大坂取卷之旨言上、仰曰、無二御下知一以前、手出し仕間敷旨被二仰含一、及二昏黒一御使番島彌左衞門本多藤四郎、天王寺口先手物見被レ遣處、則歸參言上之趣、道明寺近所小山邊藤堂和泉守、從レ其次第陣之躰申上、仰曰、未程遠、今少可二押寄一之旨云々、松平下總守、石川主殿助、古田大膳大夫、德永左馬助等人數、平野鄕迄可二相詰一之由被二仰出一云々、戌刻、松平陸奥守政宗從二途中一爲二使節一、山岡志摩守于三島一參上、出二御前一申云、從二大坂一右筆和久半左衞門爲レ使、政宗憑思由秀頼狀黒印持參、政宗返答云、兩御所御恩、何奉レ忘乎、於二秀頼一同心不二思寄一之旨、依レ然半左衞門搦捕、以二本多佐渡守正信一於二森下一言上、仰曰、尤神妙之旨太御感云々、

四日、今日南殿出御、近衞殿、御方御所、一條殿、御方御所御對面、并諸公家百徐輩御禮、御奏者大澤少將金地院、又昵近公家衆少々出仕可レ有レ之旨、御内々可レ得二御意一處、數輩出仕不レ叶二御意一、召二本多上野介板倉伊賀守一御立腹云々、及二黄昏一大坂邊繪圖、片桐市

正獻ニ御前一、上野介伊賀守帶刀隼人召ニ御前一、件繪圖令レ見給、御大工中井大和守正次被ニ仰付一、大坂近邊繪圖令レ捧給、去廿八日、自ニ大坂城中一遁出者口上、具にニ御前一後藤少三郎言上云々、

五日、御使番横田甚右衞門、佐久間河內守、初鹿傳右衞門自ニ御先手一參申云、御先手住吉表出張、又片桐市正召ニ御前一、暫大坂攻手立被ニ仰付一、本多上野介被レ遣云々、市正所從日比半右衞門御服二領拜領、御先手藤堂和泉守軍勢、濫妨狼藉放火之由被ニ聞召一、御腹立、堅可ニ停止一之旨被ニ仰遣一、本多美濃守平方邊陣取、濫妨狼藉堅禁制被ニ聞召一、甚御感云々、

六日、中井大和守出ニ御前一申云、三井寺本覺坊訴申儀、照高院御門跡道勝、幷三井寺僧七人、關東調伏之法を立、自ニ大坂一祈念之由依ニ申上一、御氣色不快、被レ仰ニ板倉伊賀守一、七人之僧召出、可レ遂ニ穿鑿一旨被ニ仰出一云々、加藤式部少輔御目見、毛利宗瑞使者宍戶備前守御目見、本多上野介披ニ露之一、未刻、松平下總守飛脚參申云、昨日從ニ大坂一薄田隼人爲ニ大將一平野鄕打出放火、又于ニ大坂一引退由、下總守追懸所、早速引取可ニ召出一之旨被レ仰云々、

九日、南光坊、傳長老召ニ奥御座間一御雜談、今度諸家記錄就ニ御寫一、日本後紀、弘仁貞觀格式、類聚國史、類聚三代格等、仙洞有レ之乎否、以ニ南光坊一被ニ仰遣一、記錄書立、則傳長老道春奉レ之、南光坊院參被レ奏處、御所持本可レ有ニ御書寫一旨云々、今日道春申云、扶桑略記見レ之、將門純友謀反之次第具在レ之由云々、攝津國達磨寺御制札被レ下、本多上野介奉レ之、

十日、將軍家從ニ永原一到ニ伏見一着御、於ニ膳所一城主戶田左門獻ニ御膳一、公家衆僧衆諸士大津追別迄爲ニ御迎一參、宰相殿中將殿追分迄爲ニ御迎一令レ出給、御對面、今日從ニ仙洞一類聚三代格六卷、自ニ聖武一後一條院迄年代略、十九卷類聚國史、二卷古語拾遺、名法要集、神皇系圖、南光坊爲ニ院使一持參、及レ夜道春於ニ御前一讀レ之云々、

十一日午刻、將軍家從ニ伏見一渡ニ御二條御城一、於ニ奥御座間一御對面、今度大坂御進發之儀、將軍家御上着令レ待給之儀、忝旨被ニ仰上一、本多上野介、成瀨隼人、安藤帶刀、板倉伊賀守、酒井雅樂助、土井大炊助、安藤對馬守召ニ御前一被レ仰曰、明後十三日可レ有ニ御進發一旨云云、未刻、將軍家於ニ伏見一還御、今日松平主殿助、伊奈筑後守兩人、神崎表鳥養遊向、堤崩し、河水可レ落由被ニ仰付一、申刻、陸奥守政宗御目見、此度將軍家供奉先陣也、今日泉州堺今井宗薰同子宗呑出ニ御前一、依ニ大坂城遁出一也云々、

十二日、尾張宰相殿義後、二條御進發、木津川邊御止宿、長尾景勝佐竹義宣御目見、將軍家御先手也、及ニ黃昏一南光坊傳長老出仕、明十三日辛酉南行惡日之由、依レ之十五日迄御出馬御延引云々、

十三日、土井大炊助自ニ將軍家一爲ニ御使一自ニ伏見一參、出ニ御前一、暫御密談云々、申刻、出ニ御南殿一、細川玄蕃頭、新庄越前守父子、土方掃部助、其外諸侍御目見、今日橫田甚右衞門、山代宮內少輔、爲ニ先手物見一先日被レ遣所、今宵歸參、出ニ御前一申云、先手諸勢天王寺打過、大坂城十四五町近邊迄推寄可レ然云々、仰曰、將軍家御下知以前、堅手出不レ可レ有レ之旨被ニ仰付一云々、

十四日、今日從ニ江戶一本多佐渡守上着、出ニ御前一、鶴御料理賜レ之、今朝從ニ永原一到ニ伏見一、從レ夫於ニ二條御亭一參上之由申上云々、又申云、關東奥州勢後陣、江戶品河可レ有レ之旨申上云々、

十五日卯刻、大御所二條城御動座、未刻、木津着御、雖レ然依レ狹ニ御旅館一、俄奈良渡御、奈良奉行中坊左近獻ニ御膳一、一乘院、大乘院、喜多院、春日禰宜、爲ニ御迎一出ニ

途中、今日將軍家伏見御出馬、平方御止宿云々、
十六日、朝之間雨降、午時屬レ晴、法隆寺阿彌陀院御止宿、幕下爲二御使一、從二平方一永井信濃守尙政參着、幕下今卯刻平方御進發、河內岡山可レ有二御宿陣一之由言上云々、
十七日、大御所于二攝州住吉一御宿陣、從二今日一供奉輩着二甲冑一、則於二住吉一藤堂和泉守、淺野但馬守、蜂須賀阿波守、松平筑前守、越前少將毀損、生駒讃岐守、一柳監物父子、松平下總守、本多美濃守父子、古田大膳、本多左京、桑山伊賀守、脇坂淡路守、松平宮內少輔、其外諸大名諸士不レ可二勝計一、御目見參上、藤堂和泉守、松平筑前守召二御前一、大坂表繪圖令レ見給、攻口次第被二仰付一、將軍家平野御宿陣、及二昏黑一土井大炊助爲二御使一參上、仰曰、明日早天、先陣之體可レ有二御覽一、幕府天王寺茶臼山邊可下令二出仕一給上之旨被二仰含一、大炊助歸參云々、
十八日、卯刻大御所于二茶臼山一出御、幕下自二平野一早天同所出御、大御所令レ待給、則藤堂和泉守本多佐渡守召二御前一、城攻之次第御評判云々、其外付城可レ有、處々方々を堀、土手可レ築由被二仰付一、茶臼山大坂從二

搦構一、廿七八町有レ之由、大御所住吉、將軍家平野還御、藤堂和泉守爲二才覺一、爲二御用心一鐵炮卅挺茶臼山立並置云々、
十九日、巳刻幕下於二大御所御陣所住吉一渡御、御對面、大坂繪圖、本多佐渡守、同上野介、藤堂和泉守、安藤帶刀、成瀨隼人召二御前一、御評諚移レ刻、兎角於二淀川鳥養邊一、攝津地切落、其上堰二留之一可レ然之由被二仰付一、其上天滿口千波口天王寺口、自二四方一一度に可レ攻由評定相究、土俵萱芦可レ取由被二仰付一、土俵廿萬、二ヶ國早速可レ出之旨被レ宛、幕府御相伴大御所被レ召二上御膳一、仙波口新城邊穢多ヶ島、大坂自二城中一大野主馬薄田隼人指出小屋掛、大舟廿餘艘にて有レ之處、淺野但馬守、松平宮內少輔、蜂須賀阿波守被二仰付一、三人右之敵追拂、彼島付城拵、松平陸奧守政宗使山岡志摩守出二御前一、木津今宮迄可レ橋二陣所一由被二仰出一云々、
廿一日、自二幕下一爲二御使一土井大炊助安藤對馬守參上、出二御前一、大坂表近邊、付城可レ致由被二仰渡一云々、
廿二日、今夜大坂自二城中一臨江苦介所、於二松平武藏守一遣二兩通書狀一、其趣云、諸大名大坂內通在レ之、松平武藏守大坂歸伏於レ可レ有レ之者、秀頼可レ爲二滿足一、依二

御報一、拙者其表可二罷出一之旨云々、然所仲使者兩人搦捕、右之書狀相添、往吉御旅館差二上之一、本多上野介披二露之一、仰曰、右使者致二亂明一、諸大名之內、於二誰々一自二大坂城中一遣レ狀哉、可二相改一之由被二仰出一云々、
廿三日、淡路國松平宮內少輔忠長陣所、自二城中一大野修理遣二一通之狀一、狀之趣、日本諸大名對二秀頼公一內內有レ志、早被レ存二其旨一、被レ通レ志者、可レ爲二芳恩一之旨云々、淡路國百姓等一揆可レ隨二大坂一之旨、宮內家老所、自二城中一遣レ狀、是も使者六人搦捕、住吉御旅館註進、松平陸奧守、羽柴丹後守、同若狹守、松平土佐守、堀尾山城守、松平宮內少輔、蜂須賀阿波守、藤堂和泉守出二御前一、然所政宗暫抑二留御前一、仙波御雜談、日野唯心傳長老候二御前一云々、
廿六日、今日於二玉造口一、佐竹右京大夫義宣陣場致二普請一處、人數多自二城中一打出、互及二合戰一處、義宣郎從澁江內膳六七百騎引率合戰、敵敗軍、敵之首十四五討捕、義宣從者廿四五騎被レ討、義宣勢歸二陣所一、又致二普請一處、暫有而、未刻又自二城中一木村長門守後藤又兵衛大將、三千餘騎打出、又澁江內膳合戰討死、其外廿四騎討死故、義宣軍勢敗北之處、大將義宣長太刀取、自身眞先に進、依レ之敵敗北、其時長尾景勝橫合加勢、杉原常陸介打て出、依レ之城中兵穴澤を始、究竟之將兵十五六騎討死云々、
廿七日、青屋口佐竹義宣陣所、爲二物見一島田治兵衛、自二幕下一口口某口口口口被レ遣レ之、古田織部助重然私爲二見廻一同道、義宣出合、四人堤邊徘徊之處、鐵炮織部左目上に中る、御手故織部不レ煩、無二痛氣色一云々、
廿八日、今日本多上野介、安藤帶刀、成瀨隼人、しんけいより中島爲二通路一道を造る云々、
廿九日、勅使廣橋兼勝、三條實條御對面、日野唯心、飛鳥井雅庸、傳長老同伺候、松平美作守忠宗（政宗子息、）爲二御目見一參向、本多上野介奉レ之、福島備後守御目見、同家老小關隼人御目見、竹中伊豆守爲二後見一參着、自二秀頼一於二備後守一數通之狀備二御覽一、本多上野介披二露之一、島津使者伊住院半右衛門御目見、山口駿河守御目見、蜂須賀阿波守、松平宮內少註進申云、今朝野田福島捕レ之云々、戶川肥後守、花房一黨註進同前、九鬼長門守、向將監忠勝船大將衆註進、今朝番舟數艘取、其外小舟不レ知レ數、敵皆捨レ舟於二天滿一逃入、淺野但馬守馬口勞淵可二陣取一由被二仰付一、則爲二御使一成瀨隼人

正參向、又召二安藤帶刀一、野田福島軍法之次第可二申付一之由被二仰付一、帶刀及レ夜歸參、申云、野田福島馬口勞淵之躰、諸先手皆鐵炮者を以押寄之由言上、帶刀申云、今日石川主殿助進鐵炮せりあひ之處、九鬼長門守横に福島に入、番舟を捕云々、又蜂須賀阿波守、松平宮內少輔侍高名之者、其姓名書二記之一備二御覽一、各黄金御服拜二領之一、阿波守所從者高名森甚太夫、同藤兵衛合レ鑓、廣瀨加左衛門、森長左衛門取レ首云々、松平宮內少輔所從士高名一紙、其姓名書註備二御前一、各黄金御服賜レ之云々、

晦日、自二昨夜一到二今朝一、大坂近邊燒亡、鐵炮之音頻也、物見遣し給、敵放火、仙波町天滿町燒立、先手諸勢不レ恐レ火、天滿仙波に入、城中兵旗鐵炮を捨、城中逃入云々、今日本多上野介、成瀨隼人、安藤帶刀、永井右近爲二物見一、件處に遣令レ見給、申刻歸參云々、

十二月

朔日、自二平野一本多佐渡守、土井大炊助來出二御前一、暫御密談、今日仙石兵部少輔御目見、廓山上人從二奈良一來出二御前一、暫淨土宗有二御雜談一、日野唯心、金地院伺候、松平武藏守、同左衛門督、森右近、有馬玄蕃頭申云、今日諸勢入二天滿一云々、物見服部權太、島彌左衛門馳來申云、右之衆今日入二天滿一云々、今日生虜一人申云、年十四五奴男也、後藤又兵衛脇に鐵炮中る、痛手、城中諸人力落云々、又申云、青屋口戰に、大野修理乘レ馬而雖二出向一、佐竹長尾大軍依二競來一而、大野修理城中引退、今朝大坂燒亡二時計、大野修理宅自火云々、今夕仰曰、來四日、於二茶磨山一可レ有二御陣取一、於二仙波一町屋破壞速レ之、御陣屋可レ造由被二仰付一、中井大和守奉レ之、鍋島信濃守獻二生虜一人一、令レ問二城中事一給處、不二分明一、仍剋刻可二追放一由被二仰出一、仙波口橋、自二城中燒絕、高麗橋相殘、敵此橋爲レ燒處、石川主殿助進而、於二此所一鐵炮せりあい甚急也、此由達二上聞一、佐久間河內守、山代宮內少輔被レ遣被レ止レ之、雖レ然合戰不レ停、永井右近申云、主殿助小勢也、加勢可レ被レ遣歟之由、仰曰、若輩者慥進而出二此橋一、敵徒於レ橋雖二燒絕一、有二何事一哉、敵可二出難一歟、甚不レ可レ然由、加々爪甚十郎忠澄爲二軍使一馳參、無二御下知一、摠責之外小せりあい、堅停止之旨被二仰出一云々、

二日、大御所渡二御茶磨山一、明後四日可レ有二御動座一由云々、則從二此處一唯一騎令レ赴二城邊一、敵之躰令二御覽一給、將軍家被二聞召一、自二平野一同令二出合一給、本多佐渡守、同上野介、成瀨隼人、安藤帶刀同爲二御供一、自餘不レ參、申刻還御、南部信濃守利直御目見、先日於二伏見一雖レ致二御目見一、人數自二國本一未レ到云々、淺野采女正長則御目見、又有馬左衛門佐御目見、是者今度高橋沒領六萬石、於二日向國一被二仰付一、本多上野介披二露之一、長谷川左兵衛宜樣申上云々、本多美濃守出二御前一、於二灯下一仰曰、誰歟、近習衆答申云、平八也、美濃守直奏申云、私陣場不二相定一、可二仰付一乎否、仰曰、自二此方一可レ待二御觸一、諸軍各赴二先手一、然美濃守、松平下總守清正陣場不レ定、依二上野介一雖レ問レ之、其場不レ定云々、今日遣二松平右衛門正久一、城周廻令レ見給、及レ夜歸參申云、仙波天滿備前島曝布今市青屋口玉造口板並等之諸口之躰申上通叶二御意一云々、

三日、成瀨隼人、安藤帶刀赴二天王寺邊一、見二宰相殿中將殿陣場一、明日吉日也、將軍家從二平野一到二岡山一、依レ有二御動座一、宰相殿中將殿同赴二天王寺邊一、可レ然由被二仰出一、今夕本多上野介、後藤少三郎、於二御前一文箱一通狀讀レ之、和睦之儀に付、織田有樂返報也、有樂使村田吉藏、大野修理使米村權右衛門兩使參、則於二上野介少三郎一返報達レ之云々、上野介爲二物見一大坂城邊見廻る、松平左衛門督、森右近、改二天滿一入二于仙波一云々、左衛門督申云、大軍故、陣場配分、一萬石面三間之由也、細川內記忠利御目見、上野介奏者、金地院後見、小出大和守吉英、同信濃守吉親御氣色不快之處、御斷申上歟、依レ之又曝布鄉堤築事被二仰付一、則御目見、堤普請早出來、致二苦勞一之由被レ仰云々、堤普請者、京都往來得二自由一之故也、土井大炊助爲二御使一、自二幕下一參向、中井大和守出二御前一申云、茶臼山御陣屋、明日可レ普云々、仰曰、然時六日可レ有二渡御一云々、今日先手軍勢押寄、自二城際一十町或五六町云々、後藤少三郎申云、今度平野御殿阿部備中守正次致二普請一處、小壺一箇堀二出之一、壺中黄金三十兩、金具九塊、南鐐百兩有レ之、伊丹喜之助康勝持來云々、件金五六十年以前埋レ之歟之由云々、則賜二備中守一云々、

四日、將軍家從二平野一渡二御岡山一、宰相殿中將殿天王寺邊有二御陣取一、成瀨半左衛門尉子息人、爲二宰相殿御供一、此間久雖レ爲二將軍家御昵近一、於二住吉一被レ屬二宰相殿一、今朝越前少將殿郎從本多伊豆守富正、同次郎大夫、以二鐵炮一敵とせりあふ處、越前少將殿軍勢登二捕城一、已欲

ゝ破時、敵大勢突出、依ゝ之寄手討死者百餘輩、軍監馳來、此由申上、則遣二安藤帶刀一給、急可二引取一旨御下知云々、井伊掃部助直孝軍勢登ゝ壁進、敵大勢突二退之一、寄手數百騎云々、未剋渡二御茶臼山一、本多上野介前駈、爲二普請御覽一也、召二本多伊豆守、同次郎大夫一、令ゝ問二昨日合戰之事一給、兩人申云、若輩早雄者所ゝ爲、併兩人過也云々、併兩人罷出引取由申上、仰曰、兩人越度之由、御氣色少不快云々、又先手爲二御覽一、從二茶臼山一藤堂和泉守陣所見廻給、自二城中一鐵炮如ゝ雨、雖ゝ然數度城邊令二見廻一給、及ゝ晚還二御住吉一、奥北山熊野山夫等、爲ゝ可ゝ抑二留年貢一、少々發二一揆一、致二山籠一之由立二御耳一、依ゝ之仰二其邊代官一、可ゝ取二人質一旨被二仰出一、大坂籠城之者妻子在二奈良一者、可ゝ搦二取之一旨被二仰出一、中坊左近小堀遠江守正一奉ゝ之、今夜金地院廓山上人出二御前一、摠攻日取書金地院讀ゝ之、又廓山上人明日可ゝ歸二奈良一之旨言上、此僧雖二淨土宗一、蒙ゝ仰從二去冬一於二奈良一、粗習二唯識論一云々、

五日、池田 松平 宮内少輔、蜂須賀阿波守出二御前一、仰曰、土手を築、竹手束を拵、無二手負一樣相構而可ゝ致二仕寄一由被二仰含一云々、九鬼長門守出二御前一、仰曰、於二海上一敵舟を數艘改出事、此度之手柄神妙所二思召一也、又城通出者可ゝ有ゝ之乎否條、以二兵船一不ゝ限二夜中一可二伺見一云々、酒井左衛門尉家次、松平甲斐守、仙石兵部少輔等出二御前一、六條中納言有廣、冷泉中納言爲滿、山科宰相言緒自ゝ京參着、今日御目見、金地院披二露之一云々、召二高野山文殊院應昌一仰曰、奈良内山山伏先達、吉野大峯五鬼之中一菩鬼名助、籠二大坂城一、依ゝ之其徒黨熊野惡民等、於二北山一蜂起之由有二其聞一、遣二代官一伐ゝ之、然山伏之峯入無二其理一、斷絶歟、先達等存二此旨一、行向可二申觸一由被二仰出一、政宗使者山岡志摩守來申云、御鐵炮預り申度由言上、即召二使者一、弓火矢二挺大筒（卅挺、五日、五十目、）借二賜之一、松平右衛門火矢二筋持來、出二御前一申云、是大柿衆所ゝ造也、飛過二四町一云々、御手取ゝ之令ゝ放給、横田甚右衛門、間宮權左衛門爲二物見一赴二仙波天滿一、歸申云、御詮趣、進先手鐵炮者、雖二一人一可二甚惜一事也、能々土手堤等置ゝ前而責寄、無二手負一支度肝要之旨申渡所、忝御詮之由、諸人悦勇云云、奈良函人岩井與左衛門捧二御甲冑一、仰二稻富宮内一、試以二小筒三文目五分玉一令ゝ討給處、玉不ゝ融云々、今夕政宗出二御前一、仰曰、陣場善處而可ゝ爲二滿足一云々、

政宗言上申云、木津可ゝ攻旨被二仰付一處、仙波破時、政宗一騎見廻試、急遣二鐵炮者四五百人一、到二壘下仙波堀角一、而伊駒讃岐守陣取之左也、今夕仰曰、摠攻之爲二用意一梯數多被二仰付一、以ゝ之可ゝ登二進壁石垣一之旨被ゝ仰、政宗尤御詮之由申上、良暫有二御雜談一退出、其後奈良酒一樽蜜柑二籠可ゝ賜ゝ之、是者今度從二堺津一、大坂城中被二生捕一、又遁出今井宗薰、右之二種調進、于二政宗陣所一持參、而依二御意一持參之由可ゝ申旨被二仰付一、宗薰政宗年來懇切之者也、今夜石河備前入道宗林御目見、獻二御羽織一、宗林者關ヶ原御陣以後、爲二牢人一徘二徊京都一處、今度不ゝ籠二大坂一處、於二御前一被二仰出一故、其段申上云々、自二岡山一將軍家爲二御使一、土井大炊助參上、申云、從二城中一御和睦之儀申上之由聞召、尤大御所御下知之外雖二有ゝ之間敷一、漸日本諸軍勢于二此所一馳參、然所是程之城廓、何不二攻落一乎、和平後難如何、近々定二日限一、令二攻入一可ゝ給之由言上、仰曰、尤大樹御憤雖ゝ有二其理一、見二小敵一不ゝ可ゝ侮云々、其上不ゝ戰勝謂二良將一事有、隨二御下知一可ゝ給之旨再三被二仰含一、大炊助于二岡山一歸參、右之仰之通申上、暮下仰曰、大御所文武之道、天下無雙雖ゝ爲二大將一、此度之儀、何忽緒給事奇怪之由、御氣色不快、于ゝ時本多佐渡守御前に候曰、御憤雖ゝ爲二御尤一、先大御所御下知令ゝ隨給可ゝ然由遂而申上云々、

六日辰剋、渡二御茶臼山一、供奉不ゝ着二戎衣一、將軍家從二岡山一入御、有二御對談一、藤堂和泉守、本多佐渡守候二御前一、今晚土井大炊自二岡山一爲二御使一參、暫有二御密談一、成瀬隼人、安藤帶刀、同弟對馬守、今日爲二物見一見ゝ城廻體、歸申上云々、對馬守則歸二岡山一云々、今午剋、甲山之邊路次傍、一二間四方草深處、蛙幾千萬不ゝ知ゝ數、喰合戰事一時計、諸人見ゝ之、寒天之時分殊奇怪也云々、

七日、及二黄昏一、本多出雲守仕寄之次第被二仰付一處、出雲守申云、我陣所天滿表、其川深數尋、摠責之刻、我陣場容易難ゝ寄由言上、御氣色不ゝ快、寺澤志摩守御目見、石火矢近日可二參屆一之由申上、秋田藤太郎御目見、南光坊樂樹院出二御前一、暫有二御雜談一、昨日蛙合戰、南蛙北蛙鬪、北蛙多死傷云々、大坂方、自二其所一負蛙方北方也、依ゝ之前表之旨、諸人勇之由申上云々、

八日、松平武藏守、同左衛門督、脇坂淡路守出二御前一、本多佐渡守、土井大炊助、藤堂和泉守出二御前一、暫有二

御雜談、佐久間久右衛門、同源六御目見、五山僧衆御目見、金地院奉レ之、淺野但馬守、松平土佐守、同弟吉介出二御前一、本多上野介申云、昨日淺野但馬守陣所、從二城中一射二矢文一、備二御覽一、其趣云、雖レ爲二少身一、綾依二緣座一、無二是非一、今度籠城、種々御和睦御異見雖レ申、諸牢人不レ致二同心一、依二此御報一、城中可二罷出一云云、淺野采女正御目見、堺商人幷長崎地下者捧二進物一、長谷川左兵衛奉レ之、南部信濃守出二御前一、南都喜多院出二御前一、菊亭少將御目見、獻二御羽織一、今日自二城中一織田有樂、大野修理返狀、本多上野介、後藤少三郎密密披二露之一、織田有樂使者村田吉藏、大野修理使者米村權右衛門來、今度諸牢人可二寬宥一、又秀賴御國替之儀、何國可レ有二御望一云々、雖レ然開城可レ有二奈何一哉云々、

九日、藤堂和泉守伺二候御前一、總攻御評定云々、山代宮內少輔、瀧川豐前守參申云、今日長柄堤築立、河水悉流入二尼崎一、而天滿川甚淺、近日可二乾拔一之由申レ之、青木民部少書狀來、上野介拔二露之一、永井右近、青木二郎右衛門同出二御前一、仰曰、自二今夜一每夜寄手二三度宛、可レ揚二鬨聲一、爲レ令二敵不一レ能レ寐也、今日從二仙洞一被レ進二蒸物一包一、南光坊僧正持參云々、召二越前少將殿家老山本內藏助一、着レ鎧出二御前一、攻口之陣場被二仰付一、今夕諸方揚二鬨聲一、鐵炮連放一時餘、恰如二疾雷一云々、つるべはなし打樣惡由甚多、不レ可レ然旨被レ仰云々、

十日、京町人獻二釘千斤一、傳長老出二御前一、談二日取書物一、午刻、將軍家入御、藤堂和泉守、本多佐渡守伺候、宰相殿中將殿同參給、種々有二御相談一、今日毛利宗瑞御目見、子息長門守秀就御懇切忝旨、以二上野介一申上云々、吉川福原同出二御前一、伊奈筑後守、北見五郎左衛門來申云、堰河堤出來、今夜仰曰、城中諸方持口姓名、矢文に書可レ射レ之、其趣者、今迄雖二如レ此爲一レ敵、致二降參一者悉可二赦免一云々、

十一日、藤堂和泉守出二御前一、有二御密談一、伊豆山箱根山三島明神社僧神主等獻二卷數一、北野松梅院幷昌琢（連歌師）御目見、本願寺使者下間少進法印獻二小屏風一雙一、政宗出二御前一、上野介奉レ之、召二問宮新左衛門一、島田清左衛門直時、日向半兵衛一、銀山銀堀を以、櫓崩旨被レ仰、藤堂和泉守、井伊掃部助、松平筑前守陣場可二堀入一所有レ之云々、則數百人を以堀レ之、黑田筑前守獻二釘三千斤一、淺野但馬守使者來申云、今日仕寄附、急可レ埋レ堀否云々、姑可二相待一之由被レ仰、上野介奉レ之云々、

十二日、大御所自二天滿一到二備前島一、爲二御覽一出御、鐵炮如レ雨、雖レ然綾々令レ見給、未刻還御、今日未刻、自二城中一有樂修理普狀、於二御前一後藤少三郎密々披二露之一云々、

十三日、大風雨、頃日久不レ雨、天氣晴如レ春、土井大炊助從二岡山一參申云、今日依二雨降一、御機嫌令レ問給、摠攻之時、梯に熊手を付、石壁に投掛支度、中井大和守蒙レ仰奉レ之、今日大名一人、梯五十本宛可二配渡一旨、上野介奉レ之、今夜淺野但馬守、松平土佐守、仙波堀川、目くら舟を以、舟橋可レ渡旨被二仰出一云々、

十四日、大風雨、到二未刻一雨止、風及レ晚甚烈、自二岡山一幕下爲二御使一板倉周防守來申云、今日風雨御機嫌奈何、爲二御見廻一也、今日御阿茶局自レ京于二天王寺茶臼山一參着、藤堂和泉守於二御前一暫有二御雜談一、今夜南部信乃守出二御前一、獻二薰陸一、是南部知行栗木林在レ之云々、安藤帶刀與安法印披二露之一、是者今日薰陸出二何地一否依二御尋一、日本所レ謂薰陸與二琥珀一同、而唐薰陸乃乳香也、本草綱目有レ之云々、依レ之南部領內有レ之旨申上進二上之一云々、

十五日、風未レ止、宰相殿中將殿參二向御前一給、召二後藤少三郎一、和睦之事令レ問給、少三郎申云、彼使申樣、城中悉受二秀賴御母儀命一、今又依レ爲二女儀一、萬事不急成故、返事延引之由申レ之云々、又御母儀爲レ質、江戶御越之事、又諸牢人可二扶持一知行可レ有二加增一歟之由申來旨、上野介少三郎言上、仰曰、諸牢人有二何志一可レ與二知行一哉云々、依レ然此返事延引歟、寄手士卒爲レ令レ勞乎、且又延二時日一、城中彌重構二壁堀一而爲二要害一歟、來年乙卯、爲二秀賴吉年一之由、以二卜筮者所一レ云、如レ斯回レ策歟之由人疑レ之云々、今夕安藤對馬守自二岡山一參上云々、

十六日、擇二鐵炮鍛錬者數十人一、赴二藤堂和泉守越前少將殿（忠直）等之攻口一、以二小筒大筒一、試矢挾間櫓等可レ打之旨、松平右衛門佐正久被二仰付一、牧野清兵衛稻富宮內以下同赴云々、巳刻、將軍家自二岡山一渡御、宰相殿中將殿同參給、本多佐渡守、同上野介、藤堂和泉守伺候、御阿茶局出二御前一、兩御所暫有二御密談一、松平丹波守、同周防守、加藤式部少輔御目見、南光坊僧正、金地院出二御前一、八條宮智仁親王、伏見宮邦清親王、二條殿

昭實使者到來、各被レ獻二毛氈酒菓等一、金地院奉レ之、西尾丹後守披二露之一、仁和寺宮、妙法院宮、梶井宮、青蓮院宮使者到來、各被レ進二酒菓餅一、南都清涼院御目見、京都高臺寺御目見、獻二蜜柑一、今夕今井宗薫持來石火矢玉重さ五六百目、是從二城中一政宗陣場打レ之云々、令レ見レ之給、先日伊丹喜之助自二岡山一持來大玉、是者自二城中一片桐市正陣所打二出之一云々、玉重さ六百五十目、但鐵也、安藤帶刀申云、井伊掃部助咳病、賜二藥對金飯子一、與安法印傳レ之云々、

十七日、蜂須賀阿波守使者參申云、今晚敵大將鳴彈右衞門出二本町橋一、阿波守陣所爲二夜討一處、出合拒レ之、中村右近討死、其外卅餘輩被レ疵、稻田修理、岩田七左衞門到レ橋令レ鑓、修理子九郎兵衞（年十四）與組討二捕首一、又鵜飼七郎左衞門、四宮與兵衞、横井十郎兵衞三人、敵六騎討捕由言上、依レ之被レ遣二板倉內膳正一令レ問給、午刻阿波守出二御前一、仰曰、夜討不慮之處、手柄之由云々、稻田修理握二敵鑓一故、手裡被レ疵、雖レ然御目見預二御感一、阿波守御感狀被レ下、其趣曰、今度穢多城馬口勞淵被二攻捕一、剩於二仙波表一敵出二夜討一處、令レ鑓捕レ首、被レ疵之條、一入祝着所二思召一也云々、御右筆建部傳內也、稻田修理父子御感狀被レ下、本多上野介奉レ之、稻田父子御腰刀、其外高名輩各賜二御服黃金一、馬口勞淵手に合張森甚太夫、同藤兵衞、廣瀨加左衞門、森長左衞門、以上十人、黃金御服拜領、藤堂和泉守出二御前一申云、及二合戰一時、陣屋可レ置二留守居一、後陣被二濫妨狼藉一之由及二雜談一處、和泉守後陣尾張衆故、成瀨隼人申云、先陣入城時、後陣到二堀際一立レ旗、不レ見二左右一、不レ致二狼藉一云々、越前少將殿御目見、本多上野介土井大炊助奉レ之、仰曰、殊外成人、將軍家御重寶之由被レ仰云々、政宗出二御前一、陣場仕寄之指圖被レ備二御覽一、暫有二御雜譚一、片桐市正咳病、今日與安法印可レ到二彼所一之由被二仰付一云々、爲二勅使一廣橋兼勝、三條實條被二參向一、是者寒天之時分、于二諸軍一被二仰付一、大御所先可レ有二上洛一歟、且若和睦之儀可レ被レ仰歟、御內證勅定云々、日野唯心、傳長老申二上之一、大御所仰曰、諸軍爲レ可二申付一致二在陣一也、和睦之儀不レ可レ然、若不レ調則令レ輕二天子命一、甚以不可也、御勅答、加藤肥後守獻二八代蜜柑五箱一、關東筑波山知足院御目見、今日將軍家以二水野監物稻富宮內一、自二佐竹陣場高處一、石火矢數張令レ打給云々、淺野但馬守攻口仙波堀川爲二堀埋一、敵放二石火矢一、其玉重さ五六斤云々、取二寄御前一令レ見給、件玉土俵に中而不レ洞、蓋木鐵炮歟之由被レ仰、當時木鐵炮多造、城中有レ之由也云々、

十八日、榊原遠江守出二御前一、京極若狹守母儀常光院殿、自二城中一令レ出若狹守陣場一給、御阿茶局本多上野介赴二其所一、申刻兩人歸參、（常光院殿、秀忠御母儀御妹也、）今夕水野監物自二岡山一爲二御使一參、被レ進二開口魚一、自二大御所一被レ遣レ鶴云々、安藤對馬守申云、河堤築料云々、致二辛勞一之旨被二仰出一云々、

十九日、藤堂和泉守出二御前一、仙石兵部少輔御目見、織田有樂大野修理兩使來申云、唯今常光院殿若狹守陣場令レ出給由申レ之、此旨本多上野介、後藤少三郎依二申上一、阿茶御局上野介於二于彼陣屋一、常光院殿對面、于二城中一歸給、松平甲斐守御目見、松平筑前守、越前少將殿、加藤式部少輔、福島備後守、松平河內守御目見、南光坊僧正出二御前一、中將殿御老母之父正木觀齋落馬爲レ煩之由被二聞召一、摩沙間御藥被レ遣、與安法印奉レ之、黑田松平右衞門佐忠之出二御前一、病氣未二本復一、雖レ爲二縱病死一、御陣可二罷立一由、强而依レ申、早速參着之由、長谷川左兵衞申レ之、郎從井上周防守、小川內藏允出二御前一、右衞門佐鹽硝五千斤獻レ之云々、

廿日、今晚自二城中一人質捕レ之可レ參之旨、後藤少三郎蒙レ仰參向、本多上野介家老寺田將監差添、有樂修理兩息捕來、修理子幼稚童出レ之、少三郎忿而、嫡子可レ出之旨申レ之、移レ刻而修理嫡男大野信濃守（年十七）有樂息武藏守（年十九）出レ之、右之段々少三郎言上、不レ捕二幼稚童一事甚御感云々、

廿三日、傳長老、日野唯心出二御前一、仰曰、今度諸記錄書寫、然則自二公家一、古今禮義式法之相違可レ被レ申旨、先日相觸處、無二其註進一之由被レ仰云々、

廿四日、今晚茶磨山小姓衆小屋五六間燒失、松平右衞門、板倉內膳、加々爪甚十郎等、堅二守御門一不レ能二出入一、今朝將軍家渡御、暫有二御相談一、還御以後、本多佐渡守、土井大炊助猶在二御前一、有樂修理出二御前一、獻二御服三領宛一、津田武藏守獻二御服二領一、大野信濃守獻二御服二領一、同時京極若狹守出二御前一、有樂着二十德一入二于囲內一、修理着二羽織袴一在レ外、本多佐渡守、藤堂和泉守候二御前一、御挨拶云々、仰曰、有樂先出、城中堀橋壞平之儀、普請早々可レ致之由被レ仰、修理稽首而退出、已刻、諸大名御目見、松平筑前守、福島備後守、淺野但馬

守、鍋島信濃守、細川內記、寺澤志摩守、松平武藏守、同左衞門督、松平宮內少輔、森右近、有馬玄蕃頭、稻葉彥六、京極丹後守、松平土佐守、堀尾山城守、加藤式部少輔、南部信濃守、毛利長門守、同甲斐守秀元、同陪臣吉川、福原越後、又越前少將殿、同御舍弟伊豫守忠昌、松平安房守、榊原遠江守、本多出雲守忠將、本多美濃守、松平下總守清正、本多豐後守、松平主殿助、水野日向守、又南光坊僧正、金地院崇傳出二御前一御雜譚、以二南光坊僧正一、御鷹匠小栗忠藏侘言御赦免、年來蒙二御氣色一、長谷川左兵衞藤廣、堺政所可レ仕由、今朝自二岡山一被レ召被二仰付一由、本多上野介披露之一、大御所以二御內證一將軍家被二仰遣一由也、土井大炊助出二御前一、江州佐和山井伊掃部助直孝、自二幕下一拜領之由言上云云、

廿五日辰刻、大御所御歸陣、茶臼山出御、申刻入二御二條城一、板倉伊賀守奉レ迎レ之、大坂城破平之間、將軍家宰相殿中將殿御在陣、本多上野介、成瀨隼人、安藤帶刀同留二茶臼山一、今日有樂、大野修理、七組頭參二岡山一、將軍家御目見云々、

廿六日、金地院出二御前一、今度被二仰付一記錄之內、舊事紀、古事記、續日本紀、文德實錄、三代實錄、江次第、明月記、續文粹、菅家文集、西宮記、釋日本紀、內裡式、山槐記、類聚三代格等獻レ之、道春同伺候、今夕片桐市正出二御前一、板倉伊賀守伺候、暫御雜談、廓山上人出二御前一、暫有二佛法御雜談一云々、

廿七日、金地院、黑谷清林出二御前一、今夕自二將軍家一土井大炊助、自二岡山一參二二條城一出二御前一、摠堀檜壞平之由言上、諸大名依二今度在陣苦勞一、公役普請三箇年御赦免之由被二仰出一、本多次郎大夫獻二生鰐一、有二御料理一、召二板倉伊賀守一仰曰、明日巳刻參內之由被二仰出一、禁裡御進物銀子百枚綿三百把、仙洞銀五十枚綿百把、於二長橋局一、對二諸公家一有レ被レ仰事、禁中禮法儀式等、申刻還御、今夕板倉伊賀守言上、爲二院使一阿野大炊寮顯被レ參、今度天下靜謐珍重、今日參內御喜悅云々、又菊亭右府御對面有レ之度之所、不二行歩一背二本意一云云、又申云、來春改元可レ有レ之沙汰云々、仰曰、可レ被レ用二古之善世年號一歟云々、仰曰、伏見殿薰物千年菊、其薰香其方組、受二相傳一給度由、伊賀守奏レ之、片桐市正出二御前一、將軍家於二岡山一御越年、然者可二罷下一之由、以二板倉伊賀守一申レ之、長谷川左兵衞自レ堺調十枚

獻レ之云々、

廿九日、僧長老南光坊僧正出二御前一、信乘院御目見、知恩院之八宮、大覺寺御門跡、一乘院、廣橋大納言、三條大納言御對面、捧二目錄七箇條一、正月節會事、白馬節會事、踏歌事、官位之事、准后親王位階事以下云々、仰曰、是無二其古今異同之分一、考二律令格式一、自二駿府一可レ被二仰越一之由被二仰出一、今夕御祝儀如レ例、伊丹喜之助自二岡山一來、兵粮扶持之儀被二仰付一、富田信濃守沒領伊豫國內拾萬石、伊達兵五郎秀宗拜領政宗嫡男云々、

慶長廿年乙卯

正月

戊申伊藤丹後守長次、丹波守自分御禮、其外出家衆御禮、金地院披二露之一云々、

三日、午刻二條御所出御、申刻到二膳所一着御、城主戶田左門善盡美盡云々、

四日、辰刻被レ召二御座船一、近習小姓衆五六輩、其外松平右衞門、與安法印、後藤少三郎伺候、自二矢橋一御揚り、申刻到二水口一着御、御代官長野內藏允善盡美盡云云、

五日、卯刻水口出御、到二申刻一、勢州龜山着御、城主松平下總守未大坂御城割無二歸參一、臣下共御馳走云々、

六日、辰刻龜山出御、到二申刻一、桑名着御、路次坂之下山茂る內、鐵炮衆二百人令レ入給、日向半兵衞、島田清左衞門直時下知云々、城主本多美濃守大坂城割未二歸參一、臣下御馳走云々、

七日、卯刻自二桑名一被レ召二御船一、令レ着二那謎屋一給、從レ其御乘馬、路次御放鷹、到二申刻一、入二御于那謎屋一給、宰相殿未大坂御滯留、藤田民部少輔、原右衞門御馳走云々、

八日、那古屋御逗留、自二卯刻一御放鷹、到二申刻一還御、鶴三雁鴨物數令レ擊レ之給、將軍家大坂表城割御普請、以二諸人數一雖レ埋レ之、二之丸堀濶四十間、或五十間六十間、何も石垣水底三間四間、淺所二間就レ有レ之、早速難レ遂二普請一由被二仰上一云々、

九日辰刻、那謎屋出御、路次御放鷹、鶴三雁鴨物數有レ之、申刻岡崎着御、城主本多豐後守大坂城割未二歸參一、臣下御馳走云々、今夜節分御祝儀如レ例云々、

十日、岡崎御逗留、鶴四雁鴨物數有レ之、自二幕下一爲二

御使ニ永井信濃守參、召ニ御前ニ、城割之體令レ問給、先日之飛脚同前申上、併十六七日時分、大形可レ有ニ出來ニ之旨申上云々、

十一日、御逗留、御秘藏御鷹爲レ雁損す云々、

十二日、同御逗留、自ニ幕下ニ爲ニ御使ニ佐久間河内守、安藤治右衞門參、召ニ御前ニ、城割之體令レ問給、二之丸堀存外深く廣し、土手雖ニ引落ニ、土三ヶ一も不レ足、二之丸千貫櫓を始め、有樂家屋、其外西之丸井修理家、何も引崩し、右之堀埋、其上地形高所引崩し埋レ之由言上、仰曰、安藤治右衞門、去時分於ニ玉造口ニ志賀野ニ、佐竹與レ敵合戰之時分、其場有合由聞召、其場樣體具可ニ申上ニ由被ニ仰出ニ、安藤治右衞門謹而申云、佐竹景勝陣場へ、自ニ幕下ニ爲ニ御使ニ屋代越中守、伊東右馬允、某參處、佐竹陣所へ、自ニ城中ニ鐵炮者百餘輩出、佐竹手打懸所、佐竹普請者共五六十輩、雖レ戰敗軍之處、佐竹自身塵を取、澁江內膳眞先に進む、追返し、佐竹手へ首十四五打捕、又某も眞先に進み、柵迄敵を追付、柵を隔鑓を合、暫突合暫せりあい居申內に、屋代越中守子息わきより廻り、彼者を討取、其儘諸人數城中引退由言上、又景勝手より最前橫矢鐵炮百挺計にて、杉原常陸介大將にて懸るに付而、且は厭ニ橫矢ニ引退歟之由申上、佐竹自身働神妙、又景勝郎從杉原常陸介、屋代越中守子、其子働神妙之由蒙レ仰則退出云々、

十三日、同御逗留、鶴二令レ摯給、鶴取之御鷹、爲レ鶴損云々、依レ之御機嫌不快、又御秘藏鶴摯ニ御鷹一そるゝに依て、彌御機嫌不快、今日最上駿河守爲ニ使者一坂上紀伊守參、獻ニ白鳥ニ黑御馬一匹幷最上濱夢一桶、此酒名物也、坂上紀伊守自分御禮獻ニ子籠雌一ト足、則紀伊守召ニ御前一仰曰、駿河守心底依ニ律儀一、御心易江戶御留守被ニ仰付一由被ニ仰含一云々、

十四日、同御逗留、鶴雁物數令レ摯給云々、

十五日同、

十八日、自ニ大坂岡山一爲ニ御使一青山善四郎重政參着、大坂城割御普請大形出來、去十六日、宰相殿中將殿京都御上洛、將軍家十九日到ニ伏見一可レ有ニ御歸陣一由言上云々、大坂城二之丸迄悉壞平、本城計相殘云々、

十九日、今日吉良着御、路次御放鷹、鶴雁物數令レ摯給云々、

廿日、御放鷹云々、

廿一日、同御鷹野、從ニ伏見一飛脚參着、申云、去十九日申刻、將軍家自ニ大坂一于ニ伏見御城一渡御由云々、未ニ城割成就一依レ之諸大名諸人數被ニ殘置一、本多上野介、安藤對馬守爲ニ御目付一被ニ殘置一由云々、

廿二日、同御放鷹、從ニ幕下一爲ニ御使一成瀨豐後守參云云、

廿三日、從ニ秀賴一爲ニ御使一吉田玄蕃允參、御小夜着物三、內染物潛二、緋（橋子、緋段子）、御蒲團三、緋（橋子、緋段子）、同蒔繪御枕、同紅梅御枕懸、右之分桐長持二ニ入被レ進レ之、大野修理大夫自分進物、獻ニ羽二重十匹一、吉田玄蕃允自分進物、鷹大緒十筋獻レ之、則召ニ玄蕃允一、御鷹鶴於ニ秀賴一被レ進云云、

廿四日、大風、依レ之御放鷹無ニ出御一、安藤帶刀從ニ大坂一參、則大坂城割之儀令レ問給、其外御鷹野御雜談云云、

廿五日、御放鷹、鶴雁物數令レ摯給云々、

廿六日、風吹、依レ之御放鷹無ニ出御一、京都板倉伊賀守飛脚到來、申云、去廿四日未刻、從ニ伏見一到ニ二條城一、將軍家入御云々、同日御參內之由云々、

廿七日、未刻吉田着御、路次御放鷹、鶴四雁鴨物數令レ摯給云々、

廿八日、吉田御逗留、御放鷹、鶴五其外物數令レ摯給云云、

廿九日、濱松着御、路次御放鷹、物數令レ摯給云々、

晦日未刻、中泉着御、京都從ニ幕下一爲ニ御使一內藤右衞門參着、則召ニ御前一、右衞門佐申云、幕下仰曰、去廿八日、京都二條御所御動座、御ニ止宿膳所一云々、其外日本諸大名、去廿四日廿五日、大坂城割普請出來故、則國々歸陣之由申上、然者未ニ城中悉破却一、御對面可レ有レ之間、爲レ其綏々與路次御放鷹之由被ニ仰遣一、京都板倉伊賀守飛脚到來、申云、自ニ去廿二三日比一、播磨輝政御後室御疱瘡云々、

二月

朔日、同中泉御逗留、本多上野介從ニ大坂一參、是者大坂城割被ニ殘置一所致ニ出來一、三之丸二之丸堀門櫓等迄悉崩埋云々、何も本城櫻門降を、上下往還に仕由申上、其後召ニ奧御座之間一御密談云々、

三日、同御逗留云々、

四日、中將殿於ニ駿河一、將軍家爲ニ御馳走一早速令レ下給、則於ニ尾州那護屋一、御舍兄宰相殿幕下御馳走、能々被レ聞、於ニ駿府一可レ有ニ御請待一之旨被レ仰云々、

五日、今日從二幕府一爲二御使一井上主計助正就參上、將軍家昨四日于二岡崎一着御、明後七日、到二中泉一御對面可レ被レ成之旨被二仰上一、本多上野介披二露之一、仰曰、然者御旅館以下用意被二仰付一、御座敷以下可二新改一之由被二仰付一云々、

六日、幕府遠州濱松着御云々、

七日辰刻、將軍家渡二御中泉一、先獻二御膳一、暫有而於二奥之間一御對面、本多佐渡守、同上野介依レ召參候云々、御密談移レ刻、暫有而土井大炊助召二御前一御密談、將軍家御退出、於二南殿一供奉近侍衆御目見、何も一人宛也、被レ懸二御詞一、供奉衆酒井雅樂助、土井大炊助、本多佐渡守、同三彌、安藤對馬守、水野監物、井上主計助、神尾刑部少、小山長門守、青山伯耆守忠勝、其外七十餘輩、花美粧云々、今度於二京都一、右之內十五六輩任二諸大夫一、殘所自二其前一任レ之、午刻、幕府中泉令二退出一給、申刻懸河着御云々、

八日、京都自二板倉伊賀守一飛脚到來、去四日曉寅刻、良照院殿（播磨國揖西郡龍野城主、御後室者御姬子也、）御死去云々、

九日、中泉御逗留云々、

十日、相良着御、始而依レ爲二御鷹場一御殿新造云々、

十一日、依レ雨御逗留云々、

十二日、田中着御、彦坂九兵衛光正依レ爲二御代官一獻二御膳一云々、

十三日、御逗留云々、

十四日、午刻駿府着御云々、

十五日、雪降云々、

十六日、自二今夜一近習御夜詰御免云々、

十八日、輝政御後室良照院殿御弔、秋元但馬守泰勝於二播州一被レ遣云々、

廿日、長谷川左兵衛藤廣、茶屋四郎次郎清次出二御前一云々、

廿五日、越後少將殿駿府御着云々、

廿六日、從二大坂一織田有樂使者村田吉藏參着、其狀云、某今度不慮籠城、其砌城中可二罷出一覺悟處、早速御和睦、然者此度大坂罷出、京堺引籠罷有度由、以二本多上野介一被レ申、仰曰、尤於二何方一志次第可レ有二御沙汰一之旨被二仰出一、併將軍家令レ問給可レ然之由云々、今日越後少將殿御目見、江戶御留守之衆也云々、

廿七日、今日最上駿河守家親從二江戶一爲二御目見一參、江戶御留守衆也、

廿八日、從二備前一飛脚到來、去廿二日曉、松平左衛門督依二疱瘡一死去之由、本多上野介言上、令レ歎給、甚御愁傷、則舍兄武藏守幷於二勇森右近忠政許一、森左兵衛爲二御使一被レ遣、仕置等可二申付一旨被二仰遣一、今日最上駿河守御目見、獻二蠟燭一、同家老坂上紀伊守出二御前一云々、

廿九日、村上周防守、溝口伯耆守御目見云々、

三月

朔日、大御所南殿出御、日野唯心其外諸士出仕云々、

二日、將軍家爲二御使一土井大炊助參着、於二御前一御密談云々、

三日、大御所南殿出御、日野唯心其外諸士出仕、御禮如レ例云々、

十三日、秀賴爲二御使一常光院殿、二位局、大藏卿、正永尼、幷青木民部少輔一之參府云々、

十四日、阿茶御局、本多上野介、爲二御使一被レ遣二於常光院殿一、明日出仕可レ有レ之旨被二仰出一云々、

十五日、大御所南殿出御、從二秀賴一爲二御使一青木民部少輔出二御前一、被レ進二金襴十卷一、幷秀賴捧二御書一、自分爲二御禮一、御鷹のうちつき詩給十枚獻レ之、令レ入二御內內一給、秀賴御母儀之御妹常光院殿、二位局（渡邊筑後守母、）大藏卿（大野修理母、）正永尼（渡邊內藏助）御目見、秀賴御母儀御使也云云、

十六日、從二京都一板倉內膳歸府、京都大坂次第於二御前一申上云々、

十七日、松平陸奥守從二京都一着府、則今日御目見、獻二御太刀御馬一、召二御前一賜二御盃一、去年陣以後、京都滯留云々、

十八日、自二幕下一爲二御使一土井大炊助參府、御密談云云、下野國宇都宮城主奥平美作守、去十二日曉死去之由、飛脚到來、（御聟也云々、）

十九日、金地院、道春下府、於二京都一五山衆被二仰付一背籍、自レ跡下着之由申レ之、南殿出御、御雜談移レ刻云云、

廿日、蜂須賀蓬庵御目見、蓬庵者阿波守父也、申刻より雨降、入レ夜大風、翌日巳刻止云々、

廿一日、今日大藏一覽板行之儀被二仰出一、道春奉レ之云云、

廿二日、石火矢加藤之波那、於二水車邊一令レ鑄レ之給云云、

廿四日、從二大坂一大野修理郎從米村權右衞門來云々、
廿五日、從二今日一府中伊勢躍と號し、諸人在々所々致二風流一、是從二勢州一躍出、奥州迄踊レ之云々、
廿六日、成瀬隼人正仰二名護屋一、是者宰相殿依二御祝言一也、淺野紀伊守幸長娘子也、紀伊守自二存生時一被二仰出一云々、
廿九日、從二幕下一爲二御使一井上主計助着府、御密談云云、

四月

二日、從二大坂一下向之女中衆赴二那護屋一、片桐市正御目見、大坂引除故、于二駿府一引越云々、
三日、明日那護屋迄可レ令レ赴給一之由被二仰出一云々、是者於二那護屋一宰相殿依二御祝言一云々、御内心大坂諸牢人無二追放一、結句端々、剩有二武勇譽一者被二抱置一故、從二名護屋一御上洛云々、
四日、午刻名護屋出御、申刻田中着御云々、
五日雨降從二大坂一大野修理以二使者一申云、大坂御國替之儀、達而御侘言可レ申旨、秀頼幷御母儀被レ仰之通、以二常光院殿一被レ仰、仰曰、於二其儀一者無二是非一仕合云々、伏見町奉行長田喜兵衞捧二一通書狀一、永井右近、後藤少三郎於二御前一披二露之一、大坂以外騷故、京伏見迄騷動云々、
六日、陰、辰刻晴、中泉着御、從二幕下一爲二御使一板倉周防守參、但路次中御機嫌令レ伺給故被二付置一云々、先伊勢美濃尾張三河等人數、伏見鳥羽可二進發一之由、本多上野介奉レ仰云々、
七日、濱松渡御云々、
八日、吉田渡御云々、
九日、岡崎渡御云々、
十日、名護屋渡御、常光院殿、二位局、大藏卿、正永尼、青木民部少御目見、仰曰、大坂之體、未諸牢人被二抱置一、秀頼幷御母儀憤、于レ今有レ之由謳歌之由、被レ仰二於常光院殿一云々、則常光院殿、二位局御請申、于二大坂一歸參云々、大藏卿、正永尼、青木民部少、於二京都一可レ相二待御上洛一旨被二仰出一、板倉伊賀守奉レ之、御内證後藤少三郎奉レ之、傳二于伊賀守一云々、
十二日、京都板倉伊賀守飛脚到來、申云、去九日之夜、從二本城一大野修理大夫歸二于宿所一處、不レ知二何者一、從レ跡以二脇指一左の脇より肩さきへ突拔云々、突捨一町程欠落之處、修理郎等共追懸切留、修理大夫弟主馬從者之由謳歌云々、依レ之城中諸牢人互疑騷動云々、戌刻宰相殿御内室從二熱田一御輿入、供奉輿五十挺、騎馬女中四十三人、長持三百棹、善盡美盡、宰相殿從二御内室一被レ進二銀子二百枚御服十領一、同宰相殿御母儀御服十領銀子百枚被レ進云々、
十三日、今日從二大坂一織田有樂、同息武藏守被レ參、則出二御前一、大坂之體、諸牢人三つに分る、七組之頭大野修理大夫、後藤又兵衞一組、木村長門守、渡邊内藏助、眞田左衞佐、明石掃部助一組、大野主馬、長曾我部宮内少輔、毛利豐前守、仙石豐前守一組之由被レ申云々、明晝桑名可二令レ赴給一之由被二仰出一云々、
十四日、卯刻雨降、今日出御御延引、今日宰相殿三日之御祝、大御所本丸渡御云々、
十五日、巳刻那護屋出御、佐屋御乘船、申刻桑名着御、入レ夜本多出雲守忠將出二御前一、將軍家御上洛之爲二御先手一上洛也云々、
十六日、勢州龜山着御、從二京都一伊賀守飛脚到來、申云、大坂之體、去十二日配二金銀一、諸牢人武具道具用意、俄騷動之由申來、今日宰相殿那護屋御進發、令レ着二桑名一給云々、
十七日、水口渡御、從二路次一雨降、從二幕下一爲二御使一成瀬豐後守參、申云、去十日江戸出御、去十四日駿州清水御止宿、廿三四日之内御京着云々、其以前御合戰令レ待給、將軍家御先手被二仰付一可レ被レ下之旨言上、安藤帶刀、成瀬隼人飛脚到來、申云、今日江州永原御止宿、宰相殿土山御止宿之由云々、越前少將殿江州坂本陣取之由註進、則明日西岡向明神邊可レ被二陣取一之由被二仰遣一云々、
十八日、卯刻小雨降、水口御動座、從二矢橋一到二大津一御乘船、膳所城主戸田左門於二御船一獻二御膳一、午刻從二御船一令レ揚給、御乘輿御入洛、供奉不レ可二勝計一、公家衆京中町人等、山科邊爲二御迎一罷出、未刻渡二御二條城一、宰相殿中將殿御入洛云々、
十九日、大野壹岐守召二御前一、汝兄修理大夫不慮手負、爲二見廻一可レ參、痛手薄手、又誰所レ爲乎可レ致二言上一、於二知現一者、可レ爲二罪科一之由被二仰出一、于二大坂一赴云々、
廿日、松平陸奥守政宗、黒田筑前守長政、加藤左馬嘉

明上洛云々、
廿一日、將軍家渡二御伏見城一云々、
廿二日、將軍家從二伏見一爲二御對面一渡二御二條城一、御密談移レ刻、本多佐渡守、土井大炊助、本多上野介候二御前一、幕府申刻還二御伏見城一云々、
廿四日、常光院殿、二位局、大御所爲二御使一又赴二大坂一、三箇條御書付被レ遣、又大野修理母大藏卿、渡邊內藏助母正永尼、于二大坂一可レ歸旨被二仰出一、則今朝歸二于大坂一云々、
廿五日、諸軍勢從二關東一上洛、自二幕下一爲二御使一土井大炊助、安藤對馬守參二候二條城一、則出二御前一、御密談移レ刻、明日幕府可レ有レ渡二御二條城一旨被二仰渡一、兩使于二伏見一歸參云々、
廿六日、巳刻自二伏見一將軍家渡二御二條城一、有二御對面一、明後廿八日、兩御所可レ有二御出馬一旨被二仰出一云云、
廿七日、雨降 本多上野介爲二御使一赴二伏見一、明日御出馬先御延引旨被二仰遣一云々、
廿八日、自二大和國一飛脚到來、自二大坂一諸牢人一萬餘騎引率、出二郡山龍田法隆寺近邊一、今夜子刻放火之由申來、法隆寺堂塔以下無レ恙云々、郡山地頭筒井主殿頭雖二防戰一、敵依二多勢一不レ叶敗北、因レ茲彌先手可二相詰一旨被二御觸一云々、
廿九日、幕下從二伏見一渡二御二條城一、御密談移レ刻、來三日、幕下御進發之旨被二仰出一、自二堺津一飛脚到來、申云、昨日申刻、從二大坂一大野主馬眞木島玄蕃爲二大將一催二人數一、堺住吉其外大港近邊放火、但住吉社頭無レ恙云々、今日淺野但馬守飛脚到來、申云、於二信達一大野修理家老北村善太夫大野彌五左衛門、其外卅餘輩生虜有レ之由言上、御機嫌甚快然云々、
晦日、淺野但馬守使者參着、言上申云、昨日廿九日巳刻、大野主馬、同道犬、郡主馬、眞木島玄蕃、塙彈右衛門爲二大將一、三千餘騎、但馬守在陣信達郷（シダチ）抑寄、從二卯刻一午刻迄挑戰、大坂勢敗北、但馬守郎從上田主水入道宗古、龜田大隅守、田子助左衛門、但馬守家老淺野左衛門佐乘レ勝而追懸、塙彈右衛門、芦田作內、米田監物、横井治右衛門、山內權三郎等始而、以上物頭十二騎、雜兵數人討捕、上田宗古龜田大隅殊更手柄高名云云、塙彈右衛門 宗古討取 所謂大坂合戰、可レ謂二一番鑓一云々、但馬守働無二比類一之由御感狀被レ下、件兩使黃金拜領、松平右衛門、秋元但馬守、後藤少三郎奉レ之云々、

五月

朔日、諸大名御目見、來三日、大坂御出馬之由被二仰出一云々、
二日、淺野但馬守使者到來、去廿九日合戰繪圖同記錄、幷大野彌五右衛門首獻レ之云々、
三日、雨降 今日御出馬、明後五日迄御延引云々、
四日、雨降 明日天氣於レ晴者御出馬云々、
五日、天晴 巳刻大御所二條御所御動座、供奉士不レ可レ勝計、申刻星田渡御、羽柴越中守忠與星田御陣處參着、早速參向神妙之由被レ仰、申刻、將軍家從二須奈星田一渡御、御對面、御陣之次第暫御評定、本多佐渡守、藤堂和泉守、土井大炊助、安藤對馬守候二御傍一云々、
六日、大御所星田御逗留旨被レ仰所、自二幕下一安藤對馬守爲二御使一參申云、大坂表人數、道明寺矢尾近邊迄徘徊之由、從二先手一申來、言上之處、幸之處へ打出之間、其人數不二引取一樣致二驕引一、能時分追討可レ仕之旨、先手衆藤堂和泉守、井伊掃部助被二仰遣一、幕下御人數平岡迄可レ被レ押旨、大御所俄御出馬、於二須奈近所一早打參申云、大坂表人數、先手つかへ申故、暫扣二御與一御逗留之處、甲州住人河野庄左衛門息男權右衛門日比雖二御勘氣一、今度先手井伊掃部手に屬、一番首討捕、則御前持參、申云、大坂表自二井伊掃部手一使者參申云、今朝巳刻、道明寺邊木村長門守、同主計、山口左馬允、後藤又兵衛此勢一萬餘騎打出、井伊掃部助暫合戰之所、木村主計引退に付、長門守左馬允を始、究竟將兵三百五十餘、掃部手討捕、殘勢玉造口迄引退、又井伊掃部手、後藤又兵衛家人二人、長門守從者一人生捕、後陣大將榊原遠江守手、首數百卅餘討取、神保長三郎も手に合ひ首を捕、後藤又兵衛於二道明寺邊一政宗手へ討取、則大御所平岡御在陣、幕下御同所御在陣云々、
七日、寅刻將軍家大坂表御進發、大御所卯刻御動座、平野天神森、茶臼山邊巳刻合戰始る、大坂勢敗北、大坂勢眞田左衛門佐、明石掃部助、長曾我部宮內少輔、仙石豐前守、大野主馬、同道犬、眞木島玄蕃、又七組之頭堀田圖書之口、眞野藏人宗口、伊藤丹後守長次、中島式部少正口、野々村伊豫守吉安、青木民部少輔一之、速水甲斐守守久等、數萬人數入亂、敵悉敗北、幕下於二御先一本多出雲守忠將、小笠原兵部少輔、同信濃守、安藤彥

四郎、松平助十郎、古田左近(織部)子、野一色頼母、神保長三郎、奥田三郎右衛門等討死、未刻迄挑戰處、關東勢少敗北之處、幕府自令レ執レ塵介レ進給、御圍人取留之、雖レ然拂二左右一勇給、依レ之諸軍勇進、又越前少將殿手より、大野修理宅放火、就二其火移一二之丸一、本丸不レ殘燒亡、都合敵二萬餘被二討捕一、未刻大御所茶臼山、幕下御同所渡御、幕下仰曰、諸軍潔仕之由被二仰上一、大御所仰曰、幕下無二比類一御手柄之由甚御感悦、御感涙令レ流給、自レ夫幕下岡山還御、同申刻、從二城中一大野修理郎從米村權右衛門爲レ使參二于茶臼山一、以二本多上野介、後藤少三郎一訴申云、諸牢人不レ殘討死、今日姫君城中令レ出給、於二岡山一御座、秀頼幷御母儀、其外女中數輩、大野修理母子、速水甲斐守、其外山里帶くるわ二間五間之庫に取籠り給由、秀頼幷御母儀命於二御助一者、修理を始各切腹可レ仕由、則上野介披露之處、可レ有二御赦免一、幕下可レ令レ問レ之旨雖レ被レ仰、及二黄昏一右之使者、被レ召二預于後藤少三郎一云々、

八日、辰刻片桐市正使者言上申云、秀頼幷御母儀、大野修理、速水甲斐守を始、其外究竟士、二之丸帶車輪に引籠る由云々、幕府爲二御使一安藤對馬守參上申云、秀頼幷御母儀其外、帶くるわに籠處、則切腹申付之由被二仰上一、午刻召二井伊掃部助直孝一、秀頼母子其外帶くるわに籠處之族、可レ有二切腹一之由被レ仰云々、

自害之衆(此自害之衆、秀頼公同時同所於二帶車輪一自害也、餘不レ註レ之、)從一位右大臣秀頼公、年廿三、御母儀(號淀殿)、大野修理大夫、同信濃守、速水甲斐守守之、◎久(缺)同息でき、年十三、津川左近、(武衛孫子、年廿六、)竹田榮翁、堀年廿五、)高橋十三郎、年十三、高橋半三郎、年十三、埴原八藏、埴原三十郎、寺尾少右衛門、小室茂兵衛、土肥庄五郎、(小姓衆原甚五郎、)加藤彌平太、森島長意、(松井藤介兄、)片岡十右衛門、(片岡長雲子、)以上廿人、女中衆、わごの御方、(伊勢國司親雄、)大藏卿、(大野修理母、相庭局、右京大夫、(秀頼御乳母、)宮内卿、(木村長門守母、秀頼御乳母、)お玉、(湯川孫左衛門姉、)二位局、(渡邊筑後守母、一人呼出助命給、)以上六人、新庫衆、毛利豎前守、同勘解由、(豎前弟、)氏家内膳入道道喜、中方將監、(淺井周防子、)同半兵衛、眞田大助、(年十三、左衛門子、)以上六人、男女一所自害卅二人、

又於二戰場一首實檢、眞田左衛門佐首、御宿監物首、大野道犬首、從二越前少將殿一持來云々、申刻大御所茶臼山出御、京都御歸陣、戌刻二條御所着御云々、

九日、幕下岡山御歸陣、令レ赴二伏見一給、大坂金銀爲レ可レ改、安藤對馬守、青山伯耆守、阿部備中守被二殘

置二云々、

十日、大雨降、淺野但馬守、蜂須賀阿波守、生駒讃岐守、松平宮内少輔京都參着、則被レ爲レ召二出御前一、但馬守今度信達邊働無二比類一由被レ仰、但馬守家人上田主水入道宗古、龜田大隅守、田子助左衛門等召二御前一、今度但馬守手柄無雙之由、且汝等捨二身命一勵二武威一、神妙之由蒙二御感仰一退出云々、

十一日、長曾我部宮内少輔於二八幡邊一、蜂須賀蓬庵從者生虜之、二條御所西御門前長曾我部縛搦晒レ之、諸人見レ之如レ堵云々、午刻、將軍家自二伏見一渡二御二條御所一、御密談移レ刻、申刻還二御伏見一云々、

十二日、今度大坂落人國々逃散之間、可レ進二速搦一由、諸代官守護人地頭被二仰遣一、今日秀頼御息女七歳、從二京極若狹守一尋出捕レ之註進、秀頼男子在之由内々依二聞召一、急可二尋出一之由所々被レ觸云々、

十三日、雨降中川内膳正、寺澤志摩守參着、則出二御前一、今度不レ逢二御合戰一事、依二遠國一無念之由言上云々、

十四日、自二方々一落人首六百餘持來、今日大坂町奉行水原石見守二條御所近邊忍居之由、依レ有二訴人一、則藤堂和泉守被レ遣二討手一所、石見守致二覺悟一相戰、寄手三人切臥戰死、則石見守頸西御門前晒レ之云々、

十五日、今日長曾我部宮内少輔從二一條一渡二大路一、於二六條河原一梟首、於二三條河原一晒レ之、大坂伴黨七十二人、粟田口并東寺邊梟首云々、

十九日、將軍家從二伏見一渡二御二條御所一、大御所近日可レ有レ還二御駿府一旨、將軍家被レ仰曰、八月迄有二御滯留一、萬事御仕置等御談話被レ成度旨、强而被二仰上一、依レ之大御所八月迄可レ有二御在京一之趣被レ仰云々、

廿日、大野道犬於二大佛邊一生二虜之一、眞田左衛門佐妻、紀州いとの郡忍居、淺野但馬守捕レ之差上、黄金五十七枚自二秀頼一賜二眞田一、來國俊脇指所持、則御前差二上之一、則賜二但馬守一云々、

廿一日、秀頼御息八歳伏見農人橘之邊令二忍居一給處、則搜出虜レ之來、容貌美麗云々、

廿三日、從二伏見一將軍家二條御所着御、御密談移レ刻、午刻、幕下還御、未刻、秀頼御息八歳於二六條河原一被レ殺給、乳母男田中六左衛門同時誅レ之、乳母被二赦命一云々、

廿四日、後藤少三郎召二御前一、大坂沒收金銀改可レ申之旨被二仰出一、則于二大坂一參云々、

廿七日、榊原遠江守、御陣以後麁物相煩死去云々、
廿八日、井伊掃部助、藤堂和泉守、幕府召二御前一、金銀之千枚吹、分銅二宛拜領、其上可レ被レ下二御知行一由、御直談被二仰出一、是者今度大坂表六日七日合戰依二勳功一也、今日片桐市正且元病死、年六十自二駿府一申來云云、
廿九日、田中筑後守從二國本一參、依レ爲二遠國一遲引云云、

六月

二日、大坂沒收金貳萬八千六十枚、銀貳萬四千枚京着、則安藤對馬守、後藤少三郎改爲レ持上洛、則出二御前一申上云々、
四日、幕府御咳病、諸醫伺二候于伏見一云々、
五日、島津陸奥守家久御禮、獻二銀五百枚綾子五十卷一云々、
七日、祇園神事、今日從二幕下一爲二御使一土井大炊助于二條御所一參、幕下御咳病御復本之由云々、
八日、最上駿河守家親飛脚到來、去朔日午刻、江戶大地震、家破地割云々、今日松平下總守召二御前一、於二大坂一知行拾萬石被二宛行一云々、（踏頷五萬石、下、云々加增五萬石、云々）
十一日、午刻吉田織部正重然（當時茶湯數奇棟梁也、）同息山城守、於二伏見一切腹被二仰付一、檢使鳥井土佐守、內藤右衞門佐、是者今度大坂內通有レ之由云々、
十四日、吉田織部家財被二沒收一云々、增上寺國師上洛、淺野但馬守上洛、紀州一揆棟梁生二虜之一來云々、
十五日、巳刻大御所御參內、御輿供奉衆卅餘輩、令レ奉二銀百枚綿二百把一給、女院綿百把銀五十枚、女御同上、長橋局銀二十枚綿卅把、午刻御院參、銀五十枚綿百把被レ進云々、
十六日、嘉定、諸大名參候云々、
十七日、天台論議云々、
廿日、幕下二條御所渡御、暫御密譚、其後吉田織部所持せいたか肩衝茶入、於二幕下一被レ進云々、
廿七日、大野道犬被レ遣二堺津一、長谷川左兵衞奉行、今度堺津燒亡事、道犬依二所爲一、於レ堺可レ令レ誅旨被二仰付一云々、
廿八日、幕府二條御所渡御、松平宮內少輔召二御前一、備前國賜之、舍兄左衞門督遺跡故也云々、
廿九日、秀賴所持之骨喰刀吉光一尺九寸五分、本阿彌又三郎尋出獻二御前一處、則被レ下二於本阿彌一、然所本阿彌將軍家差上る、則黃金十枚賜レ之云々、
晦日、大御所出二御前殿一、金地院、南光坊僧正、智積院、勸學院以下伺候、今日道春新板大藏一覽十部、自二駿府一爲二持來一、御覽之處文字鮮明、諸人稱二美之一、是今度於二駿府一、以二銅字數十萬一、板行百廿五部所レ被二仰付一也、仰曰、每二一部一押二朱印一可レ寄二進諸寺一云々、南光坊僧正被レ申云、天台宗外不レ可レ著二紫衣一、其上不レ任二僧正一、多聞院自二末座一進出申云、於二御前一如レ此聊爾不レ可レ被二申上一、弘法既着二紫衣一、又高野東寺醍醐之中、任二僧正一族古今聯綿有レ之云々、僧正無レ答云々、

閏六月

二日、松平武藏守、松平宮內少輔出二御前一、本多上野介承レ之、是依二將軍家仰一、宮內少輔舍兄左衞門督遺跡拜二領備前國一、爲二御禮一出仕云々、
三日、松平阿波守淡路國拜領、小豆島（セウヅシマ）者、長崎與二堺津一、海路舟之往來得二便所一也、長谷川左兵衞可レ致二代官一由被二仰出一、土井大炊、伊丹喜之助自二伏見一來、漳州舟寄二來紀伊國浦一、淺野但馬守遣レ人見レ之處、載二來沙糖一、可レ被レ下二檢使一歟之由、以二後藤少三郎一言上之處、恣可レ致二商賈一之由被二仰出一云々、酉刻飛驒國主金森出雲守正重死去云々、
四日、大御所出二御前殿一、蜂須賀阿波守出二御前一、仰曰、去年以來、不レ惜二身命一、抽二無貳之忠節一條、尤神妙也云々、言上云、爲二將軍家仰一、淡路國加增拜領、厚恩餘レ身由云々、本多上野介奉レ之、淡路者松平宮內少輔雖レ令二知行一、今度備前國被二改補一之故如レ此云々、宮內少輔者阿波守聟也、羽柴越中守忠興（長岡也）出二御前一、則被レ下二御暇一歸國云々、
五日、酷暑故無二出御一云々、
六日、將軍家從二伏見一渡二御二條御所一、則於二奧之御座間一有二御閑談一、本多佐渡守、同上野介伺候、今日於二前殿一眞言論議有レ之、題者十惡起不起、身三口四意三、同時起耶、各別耶、寶性院、无量壽院、遍明院、正智院、金剛三昧院、如意輪寺、庵室、北室院也、講師者多聞院、兩御所同有二出御一、令レ聞レ之給云々、尾張宰相殿、遠江中將殿、越前少將殿、松平陸奧守、松平筑前守、京極若狹守、藤堂和泉守、本多佐渡守以下伺候、其外日野入道等諸公家成二座列一云々、今日（南禪寺）金地院末寺河內國矢尾眞觀寺領千石被レ下由、將軍家被二仰出一、未刻將軍家伏見還御云々、

七日、今度大坂表合戰之時、崩逃之族餘多有レ之之由、內々達二上聞一之間、可レ有二穿鑿一之由度々有二御諚一云云、

八日、廓山上人出二御前一、淨土宗法度可二成被一下由、依レ仰件條子持參云々、大藏一覽一部拜二領之一、先日松蕫出二御前一、于レ時大中寺曇洞宗法度御朱印被二出下一、今日於二伏見一將軍家召二飛鳥井父子一、令レ御二覽蹴鞠一云云、

九日、大御所出二御前殿一、織田有樂出仕、大坂城中兵火之後、茶入肩衝等多紛失、仍令レ問二其貌一給云々、金地院持二本朝文粹兩部一備二御前一、件本者從二甲州身延山久遠寺一到來、仍先日仰二五山僧一、令二書寫一給所也、第一之卷不足之所、道春於レ京探二出之一備二御覽一、仍急可二寫補一由被二仰出一、一卷出來奇特之由、道春蒙二御感一云々、松浦肥前守獻二高麗鵙一、非鶯、信州松本山初出二銀及鉛一之由註進、則言上之處、其守護人可レ令レ掘由被二仰出一、松平右衞門佐、伊丹喜之助奉レ之云々、

十日、本多美濃守、同子息平八、同弟甲斐守出二御前一、今度大坂合戰之時、美濃守舍弟出雲守忠將討死、出雲守本領上總國小多喜城六萬石、甲斐守拜領、則出雲守女子可レ嫁二甲斐守一由依レ有二御內證之仰一、將軍家先日被二仰付一故、今日爲二御禮一出仕云々、本多上野介披二露之一云々、越後少將殿、幷伊豫守殿越前少將殿御舍弟御目見、松浦肥前守爲二父法印遺物一、獻二刀一腰銀二百枚一、本多上野介披二露之一、尾張宰相殿從二昨夕一少令レ煩二暑氣一給、成瀨隼人正、與安法印言上之處、六和湯可レ宜之由依レ仰調進之一、則令レ得二驗氣一給、片桐主膳正獻二伽羅一折一、島津陸奧守獻二鐵炮藥袋幷件火繩十筋一、件火繩者薩摩國所產唐竹所レ綱也云々、

十一日、昨日於二伏見一青山石見守切腹被二仰付一、青山伯耆守爲二檢使一云々、石見守密與二大坂一內通之由、其子訴申故也、

十二日、濠口外記父子御改易、南部十左衞門于二大坂城一籠、於二京都宿所一肝煎罪科也云々、

十四日、大御所出御、頃着二黑絹一給、是者雖レ不レ着二袴表着一、令レ對二面諸人一給也、今度山科侍從申二上之一云云、今日賜二淨土法度御朱印廓山上人一云々、

十五日、大御所南殿出御、諸侍各出仕、公家衆如レ例出仕、越後少將殿出二御前一給、南光坊、傳長老、其外天台眞言之僧衆伺候、今日南都法隆寺阿彌陀院爲二遣物一、

唯識論幷諸疏等一箱、中井大和守以二金地院一備二御前一、先度多聞院死去之時申云、此書者先師與福寺多聞院所二相傳一也、織田常眞御禮、遠江中將殿於二伏見一令レ赴給、暮下御對面、未刻令二二條歸一給、尾張宰相殿御二煩暑氣一之後、股少腫故、于二伏見一不レ給レ赴云々、安藤對馬守爲二御使一從二伏見一參候云々、

十六日、將軍家自二伏見一渡二御二條御所一、於二奧御座間一有二御閑談一、本多佐渡守伺候、未刻還御云々、越後少將殿、越前少將殿、松平和泉守等出仕、其外御譜代衆各如レ例出仕、今度大坂城兵火故、銘物之刀脇指悉燒、其後尋二出之一、今日召二鍛冶一下坂、再燒レ之試令二燒淬一給、

十七日、於二前殿一有二淨土法問一、即座被二仰付一、題者難易二道云々、增上寺國師、呑龍、了的、廓山、長流、理益以下十二人云々、一乘院、青蓮院、大乘院、其外公家衆參上云々、松平陸奧守、藤堂和泉守出仕、松平右衞門佐忠之、松平武藏守御目見、冷泉中納言獻二大比叡歌合一冊一、今日被レ議二彼合戰之時崩逃族一、而一人宛於二御前一召出、其時在二何處一否令二尋問一給、各申開族有レ之、或又所二申上一不分明族又在レ之、永井信濃守伺政

爲二御使一自二伏見一參上、被レ進二大鰹一箇一、仍調二御膳一云々、來月改元、可レ定二十三日一由、被レ仰二渡兩傳奏一云々、

十八日、井伊掃部助出二御前一、本多上野介言上申云、掃部助者以二將軍家御諚一、一昨日被レ任二侍從一、仍爲二御禮一參上云々、仍下坂所レ練再燒刀賜二掃部助一云々、於二大坂一軍功被群之故、於二佐和山近邊一、長濱領五萬石御加增、又金銀分銅拜領、今又官位昇進云々、出二御前殿一、諸士各御目見、金地院、南光坊僧正、竹林坊等參上、仍有二佛法御雜談一、

十九日、天台論議、內々可レ有レ之處、今日僧徒歸山之由、南光坊僧正言上、仍延引、松平隱岐守、松平陸奧守、藤堂和泉守出仕、越前少將殿、松平筑前守同被レ任二宰相一、依二今度軍功一也、右之內藤堂和泉守者叙二四品一云々、

廿日、本多上野介申云、蜂須賀蓬菴御目見、獻二刀脇指一、松平右衞門佐正久傳之、則出二御前一、蓬菴早々上洛、大儀之由被レ仰、蓬菴申云、阿波守頻以二使者一急令二上洛一、御禮可レ被レ申由頻雖レ申、風波高故、渡海少延引、又申云、淡路者有二由緒一爲レ國之處、阿波守拜

領、厚恩餘レ身、不レ知レ所レ謝云々、仰曰、今度粉骨不レ惜二身命一、抽二無双之忠一、其上爲二嫡孫聟一條、與二公達一同事思召云々、蓬萊承二此仰一、良久押二感涙一退出云々、

越前宰相殿御禮、宰相補任之御禮也、陪臣本多次郎大夫任二諸大夫一飛驒守一、松平陸奥守、松平筑前守、藤堂和泉守御禮、皆官位昇進之御禮言上云々、

廿一日、將軍家御參內、辰刻渡御、施藥宗伯法印獻二御膳一、宰相殿、中將殿同入御、黃金十枚帷子十領賜二藥院一、將軍家御裝束御與、巳刻參內、銀千枚被レ獻レ之、御供奉尾張宰相殿、遠江中將殿、越前宰相殿、大崎宰相政宗、井伊侍從、藤堂和泉守、吉良侍從義弼、御劒役酒井左衞門尉家次、酒井雅樂頭忠世、土井大炊助利勝、安藤對馬守重政、本多出羽守、同大隅守、青山伯耆守忠勝、內藤若狹守、水野監物忠元、井上主計助正就、酒井下總守、烏井讃岐守、神尾刑部少輔守世、青山大藏少輔幸成、松平下總守清正、本多美濃守、戶田左門、午下刻院參、銀三百枚綿五百把被レ進、銀百枚綿三百把被レ進二女院一、女御進物同上、御參內以前、廣橋大納言、三條大納言參上、阿野大納言實顯爲二院使一參上云々、飛烏井、冷泉、六條、烏丸中納言、廣橋辨、山科、難波、烏丸辨以下各參上、而則爲二御供一、晚近公家衆と號す未刻還御、從二藥院一內々可レ有レ渡二御二條一歟之由、併直于二伏見一還御云々、

廿二日、兩傳奏于二二條御所一參上、被二謝申一云、昨日將軍家御參內之事、其外公家衆多伺候、本朝文粹一部、以二兩傳奏一被レ進二內裏一、島津兵庫頭使者參上、獻二段子十卷一、陸奥守在京故、兵庫頭上洛之事、預二御免一條、忝由言上、則陸奥守御目見、片桐出雲守御禮、銀三百枚獻レ之、爲二東市正遺物一、獻二刀脇指羽茶壺一、本多上野介被二露之一云々、

廿三日、眞言論議、題十惡同時斷歟、漸々斷歟、講師遍明院也、寶性院、无量壽院、如意輪寺、性智院、金剛三昧院、多聞院、庵室、北室院、釋迦門院、今日政宗持二參定家自筆古今集一、被レ備二御覽一、召二冷泉中納言一爲滿一令レ見給、政宗以二日野唯心一言上云、於二御意入一者進上申度由、再往被レ申之、雖レ然陸奥守可レ爲二翫弄之慰一之由被レ仰、令レ返レ之給云々、今日織田刑部大輔捧二訴狀一、是者先度就二父上野介遺跡之儀一、刑部舍兄民部少輔依二訟申一、爲二其返答一及二此事一、分部左京亮、長野內藏允申之云々、仰云、父已有二遺言一之上者、民部申處不レ謂由云々、

廿四日、將軍家召二金地院一、武家之御法度條々可レ被二仰出一之御內證被二仰談一云々、

廿五日、天台論議、題、戒定惠三學備而卽身成佛歟、戒法はかりにて成佛歟、講師實報坊、精義惠心院、今日東寺寶護院持參、果實無盡藏、口大師筆蹟、同歷二御覽一、金地院奏レ之、天台法門傳授、南光坊僧正被二申上一云々、今日大和宇多郡福島掃部城可二破却一由被二仰出一、小堀遠江守正一、中坊左近奉レ之云々、

廿六日、眞言論議、題、肉身を指て卽身成佛歟、肉身不捨成佛歟、講師高室院、今日淺野但馬守御目見、狐川殿御禮紙、太刀折大御所立レ座、囲をゑりて送給、此狐川殿關東將軍基氏之後裔云々、今日仙石豐前守息(十一歲)自二伯州一拽出、今日被レ渡二大路一、即於二六條河原一梟首、同乳母男同時被レ刎レ首

廿七日、將軍家渡二御二條御所一、伶人奏樂五番、振桴三節萬歲樂、延喜樂、陵王、納蘇利、太平樂、狛桙、散手、古德樂、抜頭、還城樂、退出長慶子、公家衆悉出仕、尾張宰相、遠江中將殿、越前宰相殿、加賀宰相、大崎宰相、越後少將殿、島津陸奥守、毛利長門守、同甲斐守、田中筑後守、森右近、京極丹後守、同若狹守、松平武藏守、松平土佐守、淺野但馬守、藤堂和泉守、生駒讃岐守、鍋島信濃守、加藤式部少輔、稻葉彦六、有馬玄蕃頭已下各出仕云々、

廿八日、增上寺國師出仕、明日關東依レ可レ有二下向一、御暇乞云々、了的、廓山言上云、彦坂小刑部蒙二御勘氣一、唯今可レ有二御赦免一歟之由御侘言申上、無二御許容一云々、

廿九日、本多上野介、成瀨隼人、安藤帶刀於二御前一、織田民部同刑部訴訟之事被二申上一、民部僻事之由被二仰出一、知行御收公、黑舟着岸之由、自二長崎一註進、後藤少三郎言二上之一、今晚古田織部從者宗喜生捕二車上一、渡二大道一、其後亦籠舍、是者今度大御所於二御出馬一、其夜島津從者大坂一味、爲二一揆一之由僞而、京中可二放火一企有レ之所、去四月廿八日、御出馬延引、五月五日爲二定日一、其間件宗喜企露顯、板倉伊賀生虜、數度及二拷問一云々、

七月

朔日、將軍家渡二御二條御所一、諸公家諸大名諸士各出仕、御能、高砂(觀世)矢島金春松風少進(鵜)(觀世)百萬金春自然居士少進祝言金春(孫)今日比丘貞、狂言久兵衞致二立舞一處、

御氣色惡、御能九番可レ有レ之之處、七番御覽入御、未刻將軍家還二御伏見一云々、

二日、傳長老法度之草案捧二御前一、則于二伏見一參、將軍可二言上一之旨被二仰出一、南光坊僧正出仕、天台之法問得二相傳一給、仰曰、昨日御能矢島、平家は海、源氏は陸と云て、平家者上面をさし、源氏は幕をさす、亡ふ平家を御前をさす事曲事也と、金春有二御氣色一、又太鼓のしらへを床木の上にてしめならす條曲事也、此等之者共、御前の作法不レ知由被二仰出一、亂舞役者迷惑す、今日遠州可睡宗珊御目見云々、

三日、土井大炊助從二伏見一參上、昨日御法度之條子共申上云々、眞言論議當座に被二仰付一、題清淨行者不入涅槃、破戒比丘不墮地獄、寶性院、无量壽院、遍明院、多聞院、寶性院、爲二講師一云々、

四日、天台論議、題三葉示同、講師月山寺、正覺院僧正、南光坊、陽成院、越前僧也惠心院、竹林房、法輪寺、惠光坊等、水野監物從二將軍家一爲二御使一參上、被レ進レ鰭、今日召二梅若大夫一、能裝束一緡被レ下云々、

五日、大御所南殿出御、源氏物語抄、公家衆被レ成二配分一、假名を可レ付由被レ仰、日野、三條、飛鳥井、冷泉父子、烏丸也、幸若彌次郎、同八郎九郎、同小八郎舞曲被二仰付一、烏帽子折彌次郎和田宴八郎九郎俊寬小八郎土井大炊助從二伏見一參上云々、

六日、眞言新儀論議、今日松平下總守大坂殿守東北之櫓之跡令レ堀處、黃金四十三枚、同竹流し金數十、幷金盆、金爐、金箸、金壺之諸器、自二灰燼之中一求出、松平右衞門佐、後藤少三郎奉レ之、備二御前一、蓋右金器者、秀賴御母儀玩弄之物也、仰曰、持二參伏見一可レ有レ之云云、則賜二下總守一云々、

七日、出二御前殿一、南光坊僧正、日野唯心出仕、今日於二伏見一有二御能一、吳服、眞盛、湯谷、鍾馗、錦木、海士、黑塚、通小町、祝言、諸大名伺候、御能之半賜レ褒、今日御能以前、早朝武家御法度十三箇條被二仰出一、諸大名傳長老讀進云々、

武家諸法度

一文武弓馬之道、專可二相嗜一事、

左文右武、古之法也、不レ可レ不二兼備一矣、弓馬是武家之要樞也、號レ兵爲二凶器一、不レ得レ已而用レ之、治不レ忘レ亂、何不レ勵二修鍊一乎、

一可レ制二群飮佚遊一事、

令條所レ載嚴制殊重、耽二好色一、業二博奕一、是亡國之基也、

一背二法度一輩、不レ可レ隱二置於國々一事、

法是禮節之本也、以レ法破レ理、以レ理不レ破レ法、背レ法之類、其科不レ輕矣、

一國々大名小名幷諸給人、各相二抱士卒一、有レ爲二反逆殺害人一者、速可二追出一事、

夫挾二野心一之者、爲レ復二國家一之利器、絕二人民一之鋒劒、豈足二允容一乎、

一自今以後、國人之外不レ可レ交二置他國者一事、

凡因レ國其風是異、或以二自國之密事一告二他國一、或以二他國之密事一告二自國一、佞媚之崩也、

一諸國居城雖レ爲二修補一、必可二言上一、況新儀之構營、堅令二停止一事、

城過二百雉一、國之害也、峻壘浚隍大亂本也、

一於二隣國一企二新儀一、結二徒黨一者在レ之者、早可レ致二言上一事、

人皆有レ黨、亦少二達者一、是以或不レ順二君父一、作違二于隣里一、不レ守二制禁一、何企二新儀一乎、

一私不レ可二結婚一事

夫婚合者、陰陽和同之道也、不レ可二容易一、易曰、匪レ寇婚媾、志將レ通、寇則失レ時、桃夭曰、男女以レ正、婚姻以レ時、國无二餘民一也、以レ緣成レ黨、是姦謀之本也、

一諸大名參勤作法之事、

續日本紀制曰、不レ預二公事一、悉不レ得レ集二己族一、京裡二十騎以上、不レ得二集行一云々、然則不レ可レ引二率多勢一、百萬石以下二十萬石以上、不レ可レ過二廿騎一、十萬石以下可レ爲二其相應一、蓋公役之時者、可レ隨二其分限一矣、

一衣裝之品、不レ可二混雜一事、

君臣上下、可レ爲二各別一、白綾、白小袖、紫袷、紫裡、練無紋小袖、無二御免一衆、猥不レ可レ有二着用一、近代郎從諸卒、綾羅錦繡等之飾服、甚非二古法一、

一雜人悉不レ可レ乘レ輿事、

古來依二其人一、無二御免一乘家有レ之、御免以後乘家在レ之、然近來及二家郎諸卒一乘レ輿、誠濫吹之至也、於二向後一、昵近之衆、幷醫陰兩道、或六十已上之人、或病者等、御免以後可レ乘、家郎從卒悉令レ乘者、其主人可レ爲二越度一也、但公家門跡、幷諸出世之衆者非二制限一、

一諸國諸侍、可ㇾ被ㇾ用ニ謙約一事、
富者彌誇貧者恥ㇾ不ㇾ及、俗之凋弊、無ㇾ甚ニ於此一、所ㇾ令ニ嚴制一也、
一國主可ㇾ撰ニ政務之器用一事、
凡治ㇾ國道、在ㇾ得ㇾ人、明察ニ功過一、賞罰必當、國有ニ善人一、則其國彌殷、國無ニ善人一、其國必亡、是先哲之明誡也、
右可ㇾ相ニ守此旨一者也、

八日、於ニ伏見一又御能、越前永平寺長老御目見、永平寺者曹洞宗本寺、
九日、出ニ御于前殿一、南光坊僧正、傳長老◎脱字カ而仰曰、豐國社可ニ致捨一事雖ニ本意一、子細有間、可ㇾ遷ニ置大佛廻廊之裏一、太閤可ㇾ爲ニ大佛鎮主一云々、兩僧最可ㇾ然之由言上、仍召ニ板倉伊賀守勝重一、爲ニ妙法院門跡大佛住持一、知行千石御加增云々、照高院被ㇾ調ニ伏御父子一之間、有ニ思召一其子細一、雖ㇾ然先任而可ㇾ遷ニ于聖護院一云云、今日冷泉爲滿參上、仍令ㇾ問ニ源氏物語奥入之事一給所、定家自筆奥入所ニ持之一、而揚名介之處、註釋之上、却而銷ㇾ之云々、
十日、土井大炊助從ニ伏見一參、召ニ御前一仰曰、今月廿七日可ㇾ有ニ御下向一、將軍者自ニ其以前一歟、或以後歟、可ㇾ爲ニ御隨意一云々、召ニ傳長老多聞院一仰曰、高野山有ニ惡僧一而、隱ニ置寶性院什物一由風聞之間、急可ㇾ致ニ穿鑿一云々、又召ニ板倉伊賀守一仰曰、禁中之事、關白者有ニ關白之役一、辨者有ニ辨之役一、右以ニ其役々一可ㇾ奏、强不ㇾ可ㇾ限ニ兩傳奏一云々、
十一日、將軍家渡ニ御二條一、於ニ奥御座間一有ニ御對面一、本多佐渡守、同上野介伺候、今月十九日、將軍家關東御下向可ㇾ有ㇾ之由被ニ仰定一、午刻還ニ御伏見一云々、
十二日、大御所出ニ御前殿一、能登國總持寺曹洞兩本寺也御目見云々、
十三日、越前永平寺、能登總持寺、曹洞宗法度御印被ㇾ下度之由申上云々、蜂須賀蓬菴御暇被ㇾ下、井伊掃部助直孝御暇被ㇾ下、今夜有ニ改元一、號ニ元和一、上卿近衛殿云々、德大寺、西園寺、六條有廣、廣橋、日野、同宰相、烏丸光廣、飛鳥井云々、
十四日、昨日今日於ニ伏見一、從ニ幕下一諸大名御暇被ㇾ下云々、
十五日、出ニ御于前殿一、京極丹後守、同若狹守忠高、鍋島信濃守勝茂、島津陸奥守家久、其外諸士御暇被ㇾ下云々、
十六日、松平右衛門佐忠之於ニ奥御座間一御暇被ㇾ下云云、
十七日、將軍家渡ニ御二條御所一、垸飯以後、大御所出ニ御前殿一、有ニ御對面一、於ニ泉水御座敷一、召ニ兩傳奏一被ニ仰出一曰、公家法度之儀、則二條殿菊亭、於ニ御前一令ㇾ聞ニ右法度一給、有ニ十七箇條一、廣橋兼勝讀ニ進之一、傳長老、二條實條、其外諸公家伺候、二條殿昭實、菊亭晴季、被ニ仰出一之法度最神妙、無ニ殘所一之由被ニ申感一云々、八條宮智仁親王御禮、進物太刀御馬、伏見殿邦清親王御禮、進物小高檀紙十束、九條殿忠榮御禮、進物帷子太刀御馬云々、已刻御能、式三番、竹生島金春賴政少進佛原觀世谷行金春芭蕉少進裘上金春祝言、八條殿、伏見殿、二條殿、九條殿、一條殿、應司殿、近衛殿、菊亭等、七五三之饗應、其外織田常眞、日野唯心、兩傳奏、花山院以下諸公家數十人、各賜ㇾ饗、將軍家供ニ奉諸侍一、皆賜ㇾ饗、申下刻將軍家于ニ伏見一還御云々、
十八日、加藤肥後守忠廣御禮、獻ニ銀三百枚幷帷子一、松平武藏守、松平土佐守、堀尾山城守、加藤式部少輔、其外諸大名多被ㇾ下ニ御暇一、此度田中筑後守、稻葉修理兩人御暇不ㇾ被ㇾ下、諸人成ニ不審之思一云々、其外之大名者越前宰相殿、加賀宰相御暇出之時、從ニ將軍家一黃金二百枚宛被ㇾ遣ㇾ之、島津家久、松平武藏守共銀千枚宛賜ㇾ之、自餘各拜ニ領金銀一云々、
十九日卯刻、將軍家關東御下向、今晚江州長原御止宿云々、仰曰、智積院遷ニ于照高院寺屋敷一、妙法院可ㇾ被ㇾ護ニ大佛一云々、仍寺領三百石有ニ御加增一云々、中院中納言通勝御禮、傳長老、日野唯心、冷泉中納言爲滿取成被ㇾ申云々、
廿日、中院令ㇾ讀ニ源氏物語初音卷一云々、
廿一日、御能、賀茂、忠則、井筒、大江山、栢崎、大佛供養、藤戶、國栖、祝言云々、今日秀吉公北大政所爲ニ見物一登城、其外公家衆上﨟女房多見物云々、
廿二日、御能、嵐山、兼平、源氏供養、大會、邯鄲、春近、善知鳥、融、祝言云々、鳥目二萬匹積ニ舞臺一、唐織袷衣帷子、觀世金春拜ニ領之一、其外猿樂七十餘人、各有ニ纏頭一、本多縫殿助康俊出ニ舞臺一與ㇾ之云々、
廿三日、越前宰相殿御目見、井伊侍從掃部助從ニ佐和山一來出ニ御前一、織田常眞拜ニ領知行五萬石一、大和國宇多郡福島掃部助跡三萬石、又於ニ關東一二萬石、合五萬

石云々、今日有二天台論議一、題人天小善、精義南光坊僧正、講師惠心院、其外雜者藥樹院、眞光寺、喜見坊、月山寺、竹林坊、法輪寺、日增院、惠光坊、法泉院云々、

廿四日、寶龜院御目見、是者今度就二寶性院遺跡一、雖レ蒙二御勘氣一、依レ有二申理一、被レ赦歸山、則寶性院彌致二入魂一、可レ勵二佛法一之旨被二仰付一、五山碩學科各致二拜領一、保長老、藤長老以下御目見、今度五山大德、妙心、永平、摠持、眞言故義新儀、淨土宗等、皆御法度被二仰出一、傳長老奉レ之、

廿五日、伊藤修理御目見、則御暇被レ下云々、

廿六日、眞言論議、題西方非西方、寶龜院、講師寶性院、無量壽院、遍明院、正智院、多聞院、庵室云々、今日仰二三條鑄物師一、令レ鑄二鐘數十一給、可レ被レ成レ寄二進諸寺一云々、越前宰相殿御暇被レ下、加藤肥後守忠廣同御暇被レ下云々、

廿七日、御姬君關東御下向、內々雖二相定一、依二雨降一御延引云々、

廿八日、出二御前殿一、公家衆諸士各出仕、松平隱岐守、田中筑後守忠政御目見云々、

廿九日、於二御數奇屋一、令二中院讀一源氏物語帚木卷一給、金地院、冷泉伺候云々、今日岡越前守於二妙顯寺一切腹、同息平內梟首、明石掃部依レ爲二緣座一也、

晦日、巳刻姬君關東御下向、阿茶御局、其外女中數百人御供、警固安藤對馬守、今日氏江家內膳息男三人、於二妙顯寺一切腹、是者父內膳入道大坂籠城故也云々、

八月

朔日、出二御南殿一、御禮二條殿、近衛殿、八條殿、伏見殿、應司殿、一條殿、九條殿、其後諸門跡衆妙法院、梶井宮、竹內曼殊院、一乘院、三寶院、靑蓮院、大乘院、隨心院云々、其後諸公家衆各御禮、其後信乘院門跡御禮、其後黑舟南蠻人御目見云々、

二日、於二御數奇屋一、中院源氏帚木之卷令レ讀給、其後紫野大德寺長老天叔、松岳、玉室召二三人一、一人宛佛法之事令レ聞給、南光坊僧正、金地院御次之間伺候云々、

三日、明日四日、關東可レ有二御下向一由被二仰出一云々、

四日、午刻大御所京都出御、申刻膳所渡御云々、

五日、（朝之間小雨降）巳刻從二矢橋一御乘船、水口御止宿、今曉仰曰、今度越後少將殿上洛之刻、於二森山草津邊一、江戶御家人長坂某伊丹某不レ慮行合所、理不レ盡截二殺之一由、始而立二御耳一、奇怪之由御氣色不レ快、仍召二本多上野介一、

其子細令レ問給處、右之風說雖レ有レ之、委不レ存之由言上、又近江代官長野內藏允、小野宗左衛門、觀音寺を召、其許爲二近邊一之間、定可レ存之由被二仰出一所に、申云、上總殿御出不レ存、長坂某伊丹某參會之所、前駈之者共、少將殿御前乘打仕條、狼藉號二曲事一截二殺之一云々、

六日、依レ雨御逗留云々、

八日、同依レ雨御逗留云々、

九日、雨屬レ晴、卯刻水口出御、勢州龜山渡御云々、

十日、未明龜山出御、今畓水谷九左衛門於二四日市一獻二御膳一、從レ夫御乘船、申刻渡二御名護屋一、宰相殿爲二御迎一令レ出給云々、

十一日、名護屋御逗留、於二美濃國一知行三萬石、宰相殿爲二御加增一被レ遣云々、

十二日、雨降、同御逗留云々、

十三日、屬レ晴、巳刻名護屋御動座、岡崎着御云々、

十四日、參州吉田渡御、明日遠州中泉可レ有二着御一之由被二仰出一云々、

十五日、中泉渡御云々、

十六日、御滯留云々、

十七日、依レ雨御逗留云々、

十八日、同雨降云々、

十九日、御逗留云々、

廿日、駿河渡御云々、

廿一日、駿州田中着御云々、

廿二日、御逗留云々、

廿三日、午刻駿府着御云々、

廿四日、於二大坂表一敗軍之輩、自レ他見聞入札可レ仕、但意趣遺恨最負偏頗無レ之書付可二差上一旨、誓紙可レ仕由被二仰出一、仍松平右衛門佐正久、板倉內膳正重昌、秋元但馬守泰勝奉レ行之云々、

廿五日、右被二仰付一入札御一覽、又如レ元令レ封給云云、

九月

七日、九鬼長門守黃金卅枚獻レ之、是者大坂牢人喜多十左衛門雜物云々、

八日、從二幕下一爲二御使一水野監物參府、召二御前一、今度大坂表諸軍御穿鑿令レ問給所、近日急度入札被二仰付一、御穿鑿御尤之由被レ仰、自二幕下一右之段被レ仰御答云云、

九日、尾張宰相殿白鳥被レ進、是者自以二鐵炮一令レ放給云々、今日如レ例諸士各出仕、南殿出御、仍件白鳥御料理可レ被レ下由、日野入道唯心、大澤少將、畠山長門守、土岐左馬助、同市正、三好因幡守、猪子內匠頭、本田若狹守、堀丹後守直奇、市橋下總守賜レ饗、志賀御茶壺口令レ切給賜二御茶一、今朝從二將軍家一重陽御服被レ進、水野監物爲二御使一云々、

十日、小雨降、佐竹右京大夫義宣大鷹二聯獻レ之、松平陸奥守政宗大鷹一聯獻レ之、最上駿河守家親大鷹二聯獻レ之、本多上野介、安藤帶刀披二露之一云々、松平忠左衛門出二御前一、是者先日爲二御使一赴二越後一、今度越後少將殿、將軍家御家人二人理不盡成敗之處、何猥之儀有レ之哉、向後御中違之由被二仰遣一處、以外仰天雖レ有レ之、御陳法無二御承引一、結句御立腹、尙自二將軍家一可レ被レ仰旨被レ仰云々、

十一日、松薫宗觀出二御前一、則松薫大藏一覽一部拜領、道春奉レ之云々、

十二日、曹洞宗有二法問一、題本來面目、宗關松薫、

十四日、從二早天一山鷹出御云々、

十五日、諸士如レ例出仕、雖レ然無二出御一、羽柴越中守忠興御服廿獻レ之、本多上野介披二露之一云々、今日鴻巢不殘上人來府、出二御前一、則大藏一覽一部拜二領之一云々、今日從二幕下一爲二御使一神尾刑部少輔參府、是者近日御放鷹、關東御下向之旨、御喜悅之御使云々、

十八日、早天御放鷹出御、雁四令レ摯給、巳刻還御云々、今日從二幕下一蛤二籠被レ進レ之云々、

十九日、頃日令レ摯給鶴御料理、日野唯心其外安西衆賜レ饗云々、

廿一日、自二早天一御放鷹、鶴一雁四鴨六、其外鴛鴦令レ摯給云々、

廿二日、從二名護屋一成瀨隼人正、志水甲斐守來、出二御前一云々、

廿三日、南光坊僧正着府、出二御前一、數刻佛法御雜談在レ之、及レ晚金森長門守重賴、父出雲守正重爲二禮日御禮一御目見、出雲守遺物國次刀正宗脇指羽茶壺獻レ之、長門守獻二銀子二百枚一、弟兩人銀子十枚宛獻レ之云々、

廿四日、從二江戶一飛脚到來、申云、去廿一日豊、毛利長門守秀就從レ宅火事出來、松平陸奥守政宗、鍋島信濃守勝茂、島津陸奥守家久等宅燒失云々、

廿五日、南光坊僧正出仕、於二前殿一御雜談、織田常眞御對面、進繻紗十卷被レ進レ之、井伊掃部助直孝獻二御服十領銀子二百枚一云々、

廿六日、從二將軍家一爲二御使一土井大炊助參府、出二御前一、御密談移レ刻云々、

廿七日、金地院崇傳長老從二京南禪寺一參府、出二御前一、河內矢尾之事令レ問給、眞觀寺依二住寺職一也云々、

廿八日、明廿九日、關東爲二御放鷹一、彌可レ有二御動座一旨被二仰出一云々、

廿九日、午刻駿府城出御、御供奉本多上野介、松平右衛門、秋元但馬、板倉內膳、其外供奉百餘輩、申刻清水着御云々、

十月

朔日、未刻善德寺渡御、路次御放鷹云々、

二日、善德寺御逗留云々、

三日、三島渡御云々、

四日、小田原渡御、安藤對馬守、近藤石見守箱根迄爲二御迎一參向云々、

五日、中原渡御云々、

六日、中原御逗留云々、

七日、同御逗留云々、

八日、藤澤着御云々、

九日、神奈河着御、幕下從二江戶一爲二御迎一神奈河着御、則御對面、大樹江戶還御云々、

十日、大御所江戶新城着御、諸大名爲二御迎一路次迄參向云々、

十一日、將軍家新城渡御御對面、御閑話移レ刻云々、

十五日、大御所本丸渡御云々、

廿日、大御所明廿一日、爲二御放鷹一戶田可レ有二出御一之旨被二仰出一云々、

廿一日、卯刻江戶出御、午刻戶田御旅館渡御云々、

廿五日、卯刻戶田出御、未刻川越着御云々、

晦日、卯刻川越出御、未刻忍渡御云々、

霜月

二日、將軍家爲二御放鷹一鴻巢着御云々、

九日、大御所忍出御、岩付渡御云々、幕下從二鴻巢一江戶還御云々、

十日、大御所越谷渡御、御鷹場水滯り、御放鷹不レ成、因レ玆代官蒙二御勘氣一云々、

十五日、大御所越谷出御、葛西渡御云々、

十六日、大御所下總國千葉着御、將軍家舟橋渡御、土井大炊助所領下總佐倉御鹿狩可レ有レ之之旨也云々、
十七日、大御所東金着御、將軍家佐倉渡御云々、
廿三日、將軍家江戸還御云々、
廿五日、大御所東金出御、未刻舟橋着御、丑刻舟橋町中不レ殘燒亡、但御旅館無レ恙云々、
廿六日、大御所葛西着御云々、
廿七日、大御所江戸還御、秉燭之比、本多佐渡守從二去秋一病痾復本、始而出二御前一、御諚曰、久々病痾、大形本復、御喜悦被二思召一之旨云々、
廿八日、來月四日、江戸御動座、可レ令レ赴二駿府一給上之由被二仰出一云々、
廿九日、三島近邊、御隱居所可レ被二見立一之旨被二仰出一云々、

極月

三日、明四日江戸出御可レ被レ成之旨被二仰出一、大樹新城渡御、御閑談移レ刻、本多佐渡守候レ側云々、
四日、辰刻大守所江戸御動座、午刻稻毛着御云々、
五日、稻毛御逗留云々、
六日、稻毛出御、從二辰刻一甚雪降、御供之匹夫、於二路次一五六疋凍死、未刻中原着御云々、
七日、中原御放鷹云々、
八日、中原御逗留云々、
九日、同御逗留云々、御小人頭稻垣權右衛門誅戮、是者御鷹に行當り、御鷹損ずるに依て也、
十二日、終日雪降、御逗留云々、
十三日、中原出御、小田原着御云々、
十四日、三島着御、近所明十五日爲二吉日一、御隱居所可レ被二見定一之旨被二仰出一云々、
十五日、辰刻三島出御、近所泉頭(イヅーカシラ)爲二勝地一之間、御隱居可レ被レ成之旨被二仰出一、來春御隱居云々、未刻善德寺着御云々、
十六日、善德寺出御、申刻駿府還御、中將殿爲二御迎一清水迄御出向、則御供云々、
十九日、節分、將軍家爲二御使一土井大炊助參府、則出二御前一、泉頭御隱居珍重思召之旨、自二將軍家一御內書被レ進、泉頭御音請、從二將軍家一可レ被二仰付一旨大炊助言上云々、
廿日、立春、泉頭御音請、以二日用一可レ被二仰付一之旨被二仰出一云々、

廿五日、將軍家歲末爲二御祝儀一、神尾刑部少輔守世參府、出二御前一云々、
廿九日、明春元旦之御禮、諸士烏帽子裝束不レ着者、不レ可レ有二出仕一之旨被二仰出一云々、
右慶長十六年辛亥自二八月朔日一、同廿年乙卯到二十二月廿九日一、五箇年日記也、

駿府記終

有斐錄序

予自レ幼喜覽二古記一、身賤不レ能レ窺二國家之典一、而野史私乘稗官小說、下及二委巷之語一、頗嘗涉獵、又過二故老一、討二問諸方俗事一、時得二異聞一、以レ是折二衷今古一、粗論二大略一、蓋道學之行二於世一、慶長以降、始爲レ可レ觀、王室之盛、置レ寮具レ官、禮樂文物之懿、固非二後世所一レ望、然其所二以爲一レ學者、不レ過二辭藝之末一而已、至二處心立身之本一、則學歸二浮屠之敎一、降及二鎌倉一、如二泰時時賴一雖レ有二救時之才一、而孔孟之道、貌乎無レ聞、元弘朝、玄惠始講二朱註一、斯學之兆、才著二乎此一、下一髮之細、不レ能レ騰二千鈞之重一、禪門之熾、介胄之士、盡論二其中一、亂臣賊子、交二跡當世一、而生民塗炭、會天啓二明良之會一、撥レ亂反レ正、時則有二藤惺窩氏者一、始唱二吾道一、自レ此已後、名儒輩出、不二特家人士庶一、閨閣語孟、而不レ有二公侯之貴一、師二友布衣一、聖賢之道、以修二其身一、推二諸家國一、施二之政事一者、是前世所レ未レ有也、而故備前國主芳烈源公最其尤也、公承二藉祖考之勢一、坐鎭二大邦一、富貴孰讓焉、而折レ節力レ學、洞二究心性之微一、眞證實跡、自レ家

及レ國、允齊允治、貽二厥孫謀一、于レ今爲レ烈、故天下有志之士、莫レ不下歆レ誦二盛德一、希ら聞二偉蹟一焉、國人三村氏、瞻二奉所業一、渥二濡遺澤一、恭惟闕二揚鴻美一、示二之後人一、無レ忘二報胃之恩一、輒筆レ所レ得三于國中古錄一爲二一編一、叙事朴直、用意深遠、自謂非二敢補一史闕文一也、問二序于予一、予異邦外臣、晩生寡識、豈敢贅二加一言一、顧三村氏至交也、而竊仰二止芳烈公之風一者、亦有レ年矣、況去歲嘗一遊二備府一、於二所レ謂敦土山閑谷等地一周覽、咨嗟低回久レ之、今閱二此書一、慨然興レ懷、豈但涉二洪澳一而思二衛武一、賦二淇水一而頌二魯僖一也已耶、故不二敢辭一、謹叙二其始一云、寛延己巳夏四月、河口子深敬識、

有斐錄を拜覽して　　子深下同

あきらけき君か御影をとゝめおく
　ふみこそ世々の鏡なるへし

閑谷の學校を思ひ出して

民草のなひきし露のゆかりとて
　こゝろなき身も袖そぬれにき

有斐錄元

一芳烈公の御祖父池田三左衛門尉輝政卿は、永祿七年、尾州清洲の御城に御誕生被レ遊、天正八年、御歳十六にして御初陣の時、比類なき御働有て、夫より段々御軍功を以て、終に播備淡の主と仰かれ、大凡百萬石と申に成らせ給ふ、其時卿御意被レ遊るゝは、御自身之御誉は、三萬石の御格に被レ成、御奥の女中も三十人に不レ可レ過よし仰出さると也、御前様は中川瀬兵衛殿清秀公の御女也、大義院様と申、御廟に、御被といふ物は、袷にて表唐織にして、色紅枝菊龜甲桐繪、裏は練色紅也、然るに左右共御袖幅は竪に接縫有て、色も取合悪し、是を傳聞に、御有合の物にと仰付らるゝとなり、御被とは、御掻卷ともいふ、御大名御姉人、臺中の對客の時分御用ひ被レ遊候ものゝよし、中川様被レ進候而、今御剛に御歳に是にて當時御質素なる事思ひ知るへし、唯武備有レ之御人數にのみ御心を用ひ給ひ、世に名ある浪士をは高知にて被二召出一、御忠節を被レ勵、或時厠に被レ爲レ入、けしからぬ御聲聞へける故、御側の人々驚き走て奉レ伺二御機嫌一は、卿御笑被レ遊候而、我常に軍旅の事のみ工夫を凝す、今も圖にやりたると思ふとある

に付我ならす斯々そ有つらめ、あやしむことなかれ、沙汰なし〳〵と御意被レ遊と老人の語り傳ふるあり、されは右のことく晝夜御功實御辛苦の餘慶、大國之主とならせたまひ、御子孫御繁榮なる事、其下たるもの迄も忘るましき事ともなり、

一先考武藏守利隆公之御時より、松平と被レ稱へきの命あり、先祖榊原式部大輔康政公の御女、實は大須賀康高の御女なり、大樹秀忠公の御猶子に被レ成候而、利隆公へ御婚禮有レ之、福照院樣といふ、慶長十四己酉歳四月四日、備前岡山御城にて、芳烈公御誕生被レ遊、此時尊君より上使として牧野豐前守殿岡山に來り、御祝儀として青江の御刀、信國之御脇指を公御拜領、同十六年、公御歳三◎（脱カ）にて東都へ御下向、法式の御獻上物にて、尊君へ御目見被レ遊、依レ之來國俊の御脇指を賜はる、已來の事實、公御記錄幷御墓表に詳なれは、爰に略せり、

一公の東照宮に御目見ありしは、五ツの御歳なり、其時御脇指を御拜領、御膝もと近くをはします、東照宮公の髮髮をかきなてゝ、三左衛門か孫なり、早く人になり給へと仰有、公御拜領の御脇指をするりと拔て御覽有り、東照宮これはあふなき事にとて、御手つから柄を持給ひ、鞘に納められけり、公の退出給ひし後、眼光のすさまじき、只人ならすと東照宮上意ありけり、

一公未幼かりし頃、夜毎に寢に入らせ給ひても、睡らせ給ふ事もなく、曉に成つてわつかに枕をさせ給ふ、近侍の人々あやしみ、いかなる事にや〝又わつらはせ給ふ事もや候と尋しに、しか〳〵答へさせ給はさりしに、或夜より特に能寢させ給ひしを、又々其故をとひまいらせけれは、我父祖の蔭により、かく大國を賜る事分に越たりと思へり、然れは此國民をいかゝして治め養ふへきと、さま〳〵に心をつくして思慮せしによりて、久敗寢られさりき、思ひよりたる事の有そとよ、昨日論語を讀せて聞しに、予君子の儒となりて、國産を教へやすんすへきといふ事をしりぬ、是に決斷せし上は、別の思慮もなく、よく寢られぬと仰ありけり、（御歳十四の御時の事といふ、說には學文思召付の最初なり、）

一十四五はかりの御◎（脱カ）時にや、板倉伊賀守勝重に、國民を治め申さん事如何心得候へきと問せ給ひしに、勝重京都の商賈の輩を◎（カ）の訴を判斷の上に年月を經て、國政を行ふ道はわきまへしらすといはれしに、公

重て、京都所司代の譽世に高くおはす、必國の事は先有へしと語らせ給へは、勝重、さらは可レ申候、方なる箱に味噌を入て、丸きしやくしにてとるへき様に、はからひ給はん事然るへからんと答へ申されけれは、公や〳〵久しく思惟の後、心得難く候、隅の行届きかたきを如何し候へきと仰有けれは、勝重、其事に候、我は東照宮に仕へ奉り、あまた智謀勇才ありと人に稱らるゝ諸將をも見申候へとも、公の如く年若くおはして、心を國事に盡させ給ふ人は、今日始てしりて驚候餘りに、かくは申候ぬ、公の明敏、國中を角々迄野をもりたるやうにと思召ならん、大國は左はならぬ物と承傳へて、唯今のことくに申つれは、果して御不審の候ひき、國事は寛ならされは人心を得かたき事にて候とて、勝重落涙せられけり、

芳烈祠堂記に見へたり

一常に御母公様へつかへさせ給ひて、御孝養の數々しるすにいとまあらす、御平生御側に御座なさるゝ時、御心を慰させ給ひ、御當座のおとけなと仰られ、御近習の女中までも笑ひにたへす、誠に嬰兒の母に戯れ遊ふかことく、扨又福照院樣勝れて禮義正敷御座被レ成候、或時歌舞妓を御覽有ての給ふ、是婦人の見るものにあらす、客の馳走にも無用の事也と御意有て、其後無レ據御擬應の事あれは、輕き人形つかひを御召被レ成といふ、

芳烈祠堂記に見へたり

一福照院樣御好にて、松を御植させ被レ遊候時、植やう御氣に入不レ申、度々植させ候得共不レ宜候得者、公自鍬を執て御植被レ遊候事、

同書

一挾箱持の奴のまね、まのあたり御覽被レ遊度仰られけれは、公早速笥にてまねを遊され、御目に掛らる、其時政言君も被レ遊二御座一、御感心御落涙にて、御覽も不レ被レ遊候、政言君へも其まね御所望被レ遊候得共、御笑被レ成候而不レ被レ遊候へは、公怒らせ給ひて、御前を退出ての給ひけるは、國を領する身に親の奉養事かくへきや、唯か樣の事にて、其欵を受へき事成に、其心付なきは不孝也と仰ける、寛文十二年冬、於二江戸一御煩、終に御逝去被レ遊、公御病中御側を離れ給す、萬事御心被レ用候御事、御逝去に至り、御愁傷筆に伸かたし、數日水齋御口に不レ入、御尊骸備前へ御歸、公御道中等人數少にて御供被レ遊、和々谷二の御山に御合葬、禮節甚備れり、

一江州小川の邑中江與右衛門、藤樹先生と號す、王氏

の學にして、道德甚尊し、公御尊敬被レ遊、常に御文書を以て御議論有、江戸御往來には、大津の邊へ出て見へ給ひ、或は御旅館へ御招有て、御裝應御閑話等有、先生沒後、神主を西之丸に設給ふ、賢を尊ひ士をしたしみ給ふ事是のみならす、先生の長子大右衛門備前へ御招き、御客並の御會釋にて甚重し、敏達才藝有しに、廿二歳にして病死せり、仲子彌三郎祿四百石、綱政公之御時、病の故を以て致仕して、江西に歸る、先生高弟中川權左衛門、（權大夫小祖、熊澤次郎八、前に家譜行狀有、泉八右衛門、熊澤の弟也、加世八兵衛等、甚御信用遊はさる、其外軍功の武藝能有者をは召出さる、草加五郎右衛門、若松市郎兵衛、今跡絕、齋藤加左衛門、今加左門といふ、此三人は、大坂七本鎗の功を以て、祿を千石充賜て被二召出一、草加若松兩人の屋敷は、二日市町、今豐番所也、の公御應野なとにて御下りの節は、本古戰咄を聞んとて御入有し由、

一若松市郎兵衛、草加五郎右衛門は、大坂にて木村長門守重成に屬し、鳴野の軍に戰功ありしかは、采祿を賜り召出されぬ、其前齋藤加左衛門も、木村に屬して戰功有しかは召出されしか、三人武功を論して、先登の先後を爭ひ訴に及ひしかは、御前に召て判斷せらる、齋藤か先驅分明也しといへ共、木村か證書候とて出けるに、木村は實は其時證書を與へさるにより、齋藤が訴論然るへからさるに決せしに、齋藤其朝大に酒を呑て無禮放言多かりし中に、御前を退出て、大音をあけて、目くら成殿に仕へて訴に負ぬる由を申ける、面り聞召、齋藤は無禮、讒告せすは虛妄の論長すへしとて、池田口口に預らる、采邑を除かれぬ、されと剛の者なれは、用に在し立へき者なりとて、甲冑と鎗をは口れて、其惣聲には少の怒にもおはしまさりけるとかや、

一公の御代、被二召出一人々多き中に、吉井藤內後一閑と小藤內といふ、今井武藝を能ぜり、鐵炮櫻井孫三郎今跡絕、兩人は、島原亂に功有を以て被二召出一、岡田甚五兵衛今跡今西和左門今跡森脇三右衛門跡絕、此三人皆武藝を以て被二召出一、森脇か子右門作射を能し、强弓先(マヽ)寸三分を射れり、鐵炮は荻野六兵衛跡絕、鄕司七左衛門今七左衛門といふ、遠射を能す、碇田彥八郎今立入郎、弓は常地權之丞跡絕、中村多兵衛、今傳十郎、鎗は佐分利猪之介、今跡□坂口市兵衛、後に勘左衛門と云、于猪左衛門時に退去、家絕、此市兵衛、加藤出羽守月窓翁之兒小姓にて、幼年より鎗御名人の御手筋を學て、勝り御もらひ有て被二召出一、劒術は戶田權左衛門今跡絕、馬は市森彥三郎今彥十郎、谷口勘兵衛今跡□寒川源太左衛門今跡久之丞、軍者

上泉治部左衛門（今跡治部左衛門）、山田道悅（今跡大之進）、富田甚之丞、儒者にも小原善助（大文軒といふ、今彌左衛門）、市浦清七（今清七郎）、窪田道和等なり、

一元日之 御規式、忠孝 御掛物 御拜有レ之事、今以有レ之、御讀初自筆之孝經、御書初は、天下泰平儒道興行之八字を被レ遊候事、

一常に小倉織の袴を召させ給ひ、ぬかせ給ふ時も、たたむ事なく、柱の竹釘にこよりを引張りたるに、侍臣に命して掛させ給ふ、紫の被の數年に成けるを、山川重郎左衛門替んと申せしに、予吝にあらす、猶かへす共有なんと仰て、又年を經て垢けれは、山川重て何共申さてかへたり、衣服差物大かた此類也、江戸にて御挾箱に金の蝶の御紋付たりしを持せ給ひしに、挾箱は我着替を入るゝ器也、誰人に持せて行列の先に有へくもなしとてやめ給ひ、又長刀も無益の物也、婦人の持すへき兵器也とてやめ給ひし、

一お六樣初ての御難とて、上巳に御館へ御入被レ遊、女中共蜆の御吸物にても可二指上一と伺候得者、夫には及はぬ事也との給ひ、只有合の御菓子御取入候、御祝ひ被レ遊、御滿悅不レ斜、御土産には紙ひいな金子被レ進、此時の御事、御年寄役の女中共、御姬樣と申せは、夫は公卿已上の詞也、我等こときの子、しかいふ事なかれと御制しあり、

一御側之者へ、汝らを見るに、衣服に定紋を不レ付しては不レ叶やうに覺るとみへたり、紋は何にても濟たる事そ、又或は掛物のたくひ、家の者の書たるにあらされは用ゐす、是皆心得違也、能分限を知れと御意被レ遊、

一或時御咄之序に、近頃は餘り大なる過ちも無かと思ふとの給へは、泉氏聞て、恐なからそれはいやにて御座候と被二申上一けれは、公御顏色少し變しさせ給ひて、奥へ入らせ給ふに依て、泉氏退出恐入、翌日出仕をひかへて在宿なれは、御尋有、早速登城あれは、召して御咄あり、御容貌常に變らせ給はす、御機嫌勇々敷、泉氏も前日の事聊心頭になしと見へて、敬謹恭しく、其後再ひ其事の給はす、泉氏も不二申上一、識者是を聞て、誠に君臣合體といふ是なり、此位は道に通したる人ならては知かたき所也といへり、

一二日市町麥藏の川手の門は高櫓也、公折々御出、此櫓に御座有て、御船手へ被レ命て、艘の折くらへ、船頭

の働を御覽ある所なり、江戸御上下度々 御船被レ爲レ召候事、

一御船にて播州兵庫の海上にて、難風に御逢被レ成危く、御供の上下覺悟を極たり、岸藤左衛門 船奉行たり、辛勞いふ計なし、血眼に成て下知すれは、藤左衛門を召して御意に、死生有レ命、乘船する上は、如何樣なる難風にて、及二破船一共不レ及レ力、心を平にして下知すへしと仰有、藤左衛門難レ有の餘り落涙に及ひ、忽ち力を得、夢の覺たること〳〵成しと、後に藤左衛門物語也、其時公には泰然として御機嫌御平生也、やゝ有て漸御船兵庫の湊へ着て、誠に虎口の難を免れさせ給ふ、

此時兵庫網や新九郎といふ者、明松を夥敷濱手へ出す、依レ之水主共力を得たり、御着船直に新九郎所に御止宿、夫より今に御本陣に成、

一或時江戸御下向の折から、播州明石の濱島に御憩を居へられ、海上を御遊覽ありて、御喜樂の御樣子成しかは、山内權左衛門御前へ出、此間は御機嫌何とやらん御平生ならす奉レ存候處、今日は風景御慰に相成候と奉二恐悅一候段申上候、公、されは每も國を立て此邊に至る迄は心不レ勇、いかんとなれば、思ふに我一人に付て大勢の者共遠境跋涉は、嘸親子兄弟妻妾等に、暫の別を惜むへし、又小身者共、何靡不安堵成事も有へし、彼是不便成事とおもへは、何となく心いさます、去なから此邊へ來れは、自然と又氣を轉すると御咄あり、御供の人々皆感涙を催し、義心憤發して、御供仕けると也、

一御道中にて、御兒小姓の內に、乘掛に絹の紫蒲團を敷たる者有、御覽有て、何者やらん美々敷乘掛ありと御咄有けれは、皆々恐入、早々右之蒲團やめけり、

一信濃守樣御同道にて、江戸御下向の時、信州樣ひろうと御傘袋を御持せられしを御覽付られ、大國を領する人の傘にや、他所の者にて有へし、我等か行列に混雜不レ致樣にと、山內權左衛門へ御意有れは、甚御迷惑被レ成、其夜泥障を切、縫合て改め替らる、

一白須賀驛の邊にて、一人の乞兒の其身痩にて、老たる叔母を養ふて孝なり、公被二聞召一御感淺からす、鳥目壹貫文被レ遣、其後御通行の節は、國御尋有て、鳥目を被レ下、常に人の善を賞せる事かくのごとし、

一御道中或驛にて、馬子大勢集り、騷敷體也、公御側

の者を召て、何事を見て參れと御意にて、御供の內何某見に參り、馬子大勢集り、手廻にして居たり、此由を急き申上る、公、惡き奴原かな、一人も不レ殘切捨候へと御意被レ成、御供の者共何茂飛掛りけるに、恐れて馬子は皆々逃失けり、直に何某を召て、少も心に掛る事なかれ、何程の卑賤の者也とも、是程大勢して手込せは、是非に不レ及事也、其方はおくれたるにあらすと御意有、平生御家人は御手足と思召、他へ出て變あらは、身に替てもおくれは取らせ間敷と仰付けり」、

一青地善左衞門は御納戶役を勤む、江戶御參勤の節、於二京都一珍敷筆の物、一條家より御拜領にて、是を善左衞門に仰て、御先へ江戶へ持參候而、表具をいたし、御待請に御床に掛置候樣にと有けれは、夜を日に繼て、三日計御先へ着候而、表具出來、御待請の筈に合けれは、甚御機嫌にて、山內權左衞門へも御見せに成、善左衞門へ骨折候故と御稱美有けれは、權左衞門能程に御取合申上、扨乍レ序申上候、善左衞門義久々御奉公して、加樣之序を以て御加增被レ遣可レ然と申上候趣、甚御機嫌損し、其方共身に代り、諸士の賞罰も取行ふ身分にて候、然るに唯今の通之儀を申は難二心得一候、惣體加增新知等は戰場にて一命をかけての働の上にて遣候ものに候、然るを平日の勤功、此度之骨折位の事を以て加增遣候はゝ、右戰場の功のことは、何を賞美加增に遣し可レ申哉、然は其方なと以の外心得違と被二思召一候、善左衞門か此度の褒美は、申付かた有レ之候、只今是へ呼候へと仰らる、權左衞門則善左衞門を召れ罷出候へは、此度の褒美幷兼々奉公精出候趣につき、加增遣候樣にと、只今權左衞門申聞候故、加樣々々に叱り候、其方如きの勤功にて、加增はとられぬものと心得可レ申候、此度の骨折に是を遣候とて、御紋附御羽織を御手つから被レ遣候、

一山內權左衞門年來に成て、此度著御道中御駕籠にて御供仕度由被二相願一、日置若狹何心なく請込候而被レ伺候處、何の御答へも無二御座一、御發駕次第近寄候故、權左衞門よりも度々催促候故、御發駕四五日手前に、又候伺候へは、御意に、權左衞門は年寄候而者、虎口場へも駕籠にて出る了簡に候哉、年來に而道中供難レ致は斷可レ申候、駕籠は成間敷と仰にて、若狹も氣之毒なから其由申傳、漸旅駕籠にて、忍ひ〳〵に乘來候樣にと有し事、

一御道中某所にて、先年大猷院樣御上洛の時の事語り出させ給ひ、此事誰や覺たると仰有時、扈從したる人なし、石川淸介能覺て可レ有と申、さらはとて淸介を召す、淸介少しも存候はすと申す、側の人あやしみて如何にと問へは、淸介公の聞召所にて、我年久しく勤仕する事怠らす、然るをしらせ給はさるは殿の不明也、今往事を語り出さは、殿の不明を擧るに似たり、己か暗主に仕ふるは恥るにたらす、殿の不明の恥をかくせる故に語らすといひしを聞召て、江戶へ着せ給ひ、淸介を召出して、祿百五拾斛あたへられたり、

一何れの御時にや、江戶の朝廷にて、諸大名御祝を遁られ候事ありし時、公夏目長左衞門か箕方か原にて討死せすは、かゝる國家の太平は有ましと仰有けるを、朝廷執政の大官達も、智者の一言、德川家に仕ふる士の節義を憤發せりといひ傳へ給ひけるとそ、

一於二江戶一御旗本何某御相伴にて、御膳被二召上一候節、御汁に菜の虫御椀中に有、蓋を取て御覽付られ、品◎早々蓋を被レ遊、御旗本へ被レ仰候者、今朝之汁は不レ被レ給、二の汁にて御支度有候樣にと御意あり、御膳後役人を被レ爲レ召、右の虫を御見せに成、無念成事と思召候、然なから惡心にて致候にては無レ之、諸役人段々吟味の上にて、此通の事、天命共可レ申哉、料理人はしめ隨分向後致二吟味一候樣にと御意斗也、彼御旗本顏色を替、感涙に被レ及候に付、其譯を御尋候へは、私も先年給物の事に付か樣之事有レ之、料理人に其熱鍋をあひせ、惣身やけとにて相果申候、壯年の血氣に任せ候仕方、唯今の御趣意承候而、後悔に奉レ存候段申上らる、

一江戶上野に、諸大名御宿坊といふて、知行被二遣置一候、公にも御宿坊可レ被二仰付一思召に、御留守居共三百石被レ遣候樣に申上候へは、公以の外御色を變せられ、士を養ふて祿を費せとはすゝむるそ、士を抱候へは我命に代り候、宿坊無くも濟候と仰らる、

一江戶御詰之內、大雷之節も、御機嫌伺といふ事無候、公思召付にて御登城被レ遊、御下乘之內、御側三四人御草履取計にて御步行被レ遊候、三四間程脇へ雷落、水汲人足を微塵に打殺さる、御供の面々何もたをれ候處を、公御平氣にて御呼被レ遊、夫に氣を得て起上り追着、彼人足を御覽被レ遊、不便に思召、扨御肴を

見候樣に被レ仰候、見候へは、御召物こけ色に成たり、少も御鬱不レ被レ遊候事、

一由井正雪甚公を恐れ、逆謀に臨ても、一番に手當巧候はねは、たとひ天下を手に入候而も、心許なくといふたるよし、同人より御屋敷御用間提灯屋にて、蝶之御紋の提灯あつらへ候ゆへ、提灯屋より御屋敷へ尋に來り、役人了簡にも不レ叶ゆへ、朝御膳中に窺候得者、御膳御上りさし被レ遊、直に出袴を召、御側の者御連被レ成、御式臺へ御出被レ成、馬々と被レ仰、（其節者御供衆共閉玄門の南自脫有レ之拂て有し、夫を御自身御呼被レ遊なり）直に御月番御老中へ御出被レ入候而、御對談被レ遊、是御穿鑿之手掛初りと云へり、

一備後守樣、播州宍粟三萬石被レ進、公へ被レ下候同事に思召候いふ上意之時、御請被二仰上一御退出之節、闕に御つまつき被レ遊、外より公に似合ぬ事の樣に被二申越一被二聞思一、上意、新太郎故に其通也、其悅ひ候處、眞實に思ふゆへ也と仰られしよし、

一或人御使者に行、御口上申入て後、床の楠の繪有を見入て居ける處へ、取次出て、家名を今一應と問ふ、不圖取込て楠多門兵衛と申、其後先方より、如何にしても、古しへの名將の名義を其儘に附候事、先は遠慮も可レ有事、御趣意も有候哉と噂有れは、公御返答に、左樣の者は手前に無レ之候、定而楠田門兵衛事にて可レ有哉と仰レ被、扨も度法もなき事を申たると御笑ひ被レ成候而事濟候也、

一因幡御家中澤間八太夫御使者に出、途中より若黨を先へ遣候處、御旗本野々山瀨兵衛殿の供割をして切捨通られし、澤間は跡より行掛り驚、辻番にて子細を尋、其儘矢立に而、御使者御返答、幷しか〳〵の事書調、家來を屋敷へ戻し、其身は鎗を取乘出し追掛る、野々山殿は跡をも不レ見、北條某殿屋敷へ逃込給ふ、澤間は右之門に至り、此內へ唯今逃込候者を御出し候へ、得二御意一度事候といふ、北條殿よりは兎角申て出さす、其內に因州屋敷より其儘引拂戻候樣にと御下知故、無二是非一乘捨有し馬の片鐙を外し取歸る、此由御上へ聞、野々山殿は腰拔の御沙汰に及ひ、直に御追放、扨御老中より因幡へ御差紙にて、何と申ても御直參の事、殊に相手追放之上は、澤間には切腹可二申付一樣に申來、御返答に、中々澤間事毛頭も越度無レ之候得は、切腹可二申付一樣も無二御座一候と被二仰遣一、御老中よりは被二仰掛一候事故、是非々々と申來り、段段持重り候程に、公へ御使者にて、御出に成候樣に被二仰越一、早速御出被レ遊、外御一門樣方も御寄合、右の次第如何可レ致哉と被レ仰、公大きに御笑ひ被レ成、扨々何そ六ヶ敷分別も入る事かと存、急に參候處、夫程の事御相談にも不レ及事、先夫は誠に子共の水掛論といふものなり、彼方よりは切らせといふ、此方よりは不二切せ一といふ、いつ迄いふても關は干申間敷候、此度の返答に、覺悟申とあらは相濟申候事に候、其上にも是非々々と理不盡に申され候はゝ、御城へ鐵炮を持掛候上の事、自分も參り掛る不肖には後詰可レ申と被レ仰御歸被レ成、扨此趣早々御老中へ相聞けれは、不レ安とて御覗にて、新太郎か樣に申候はゝ、最早其分に仕て置候へと上意にて事濟候也、

一公終身新太郎樣と申き、諸大名此事は如何候らん、改らるへきかと物語有し時、公共事は仰られす、近頃も江戸の町を通り候に、鍛冶に大和守、或は鏡磨に何の大椽なと申名の候、さのみ難レ有も覺候はすとの給ひし、（諸家源秘錄に見ゆ）江戸御往來關札にも、備前少將とは不レ被レ遊候事、

一酒井雅樂頭忠清公天下の執政として、權威甚盛成し頃、公の御屋敷小書院（今の号場也）にて、度々御もてなし有、忠清の專姿なる事を仰出されて、上の御爲に大不忠なる由責させ給へは、忠清いはん詞なく、やゝ有て、少將に任せられ給ひて年ひさしくは、中將に任せられなん事望に有らは、其由を申上へしと語られけれは、公中將に進み何の御爲になり可レ申哉、封地增賜りなは、夫程の奉公をはすへきにて候と仰らる、

一右酒井樣不食の御煩被レ成候節、諸大名より贈物珍味を盡せしか、公にも何そ被レ進度思召、御膳奉行を召御相談被レ遊、うきふ可レ然に極り、小豆米粉御前へ御取寄、御自身御拵被レ成候而、小重箱に入、御留守居役御使者にて被レ遣、餘り少分にて氣の毒に思ひなから持參、御口上申入候處、御使者へ御逢可レ被レ成候間、相待候樣に被二仰出一暫して段々奥へ通し、御居間襖障子を明候へは、夫に被レ成二御座一、新太郎殿御使者御懇意之段、御禮可レ申樣も無レ之、近來決而何も給不レ申候へとも、御深切之御贈物難二默止一候間、御禮には給て見せ可レ申とて、かさへ一つ快被二召上一、此旨歸

り候而宜申上由、殊之外御感悦之御樣子、御使者も一段之首尾にて歸る、

一江戸御屋敷にて御客的有レ之、小的に中り兼候て、公も殊外不興に思召、青地三之丞は兼而御秘藏の射手成し、當日御使者に出候て、御的に不レ出、餘り不レ中故、呼に遣候樣に仰有、無レ程歸罷出ける、しかしかの由を聞、扨射候樣に被二仰付一時、三之丞矢壹本持出、射上しかは、座客甚御賞美、公にも喜色ありといふ、

一今の學校の地に、御祈禱所圓乘院あり、公の御時は、祈禱も不レ被二仰付一候故、坊主立退き、跡學校に成、年經て右の坊主被二召返一候樣にといふ事を、東叡山の御門主樣へ御願申に付、御大老雅樂頭樣を以て、公へ御願被レ遊候付、雅樂頭樣御出候得共、可レ被二仰出一御咄し移りも無レ之、又重而御出候節被二仰出一候へ者、公早速御返答に、准后樣御賴とあれは、致二承知一候段、謹而被レ仰、扨跡にて、是は其元への咄にて候、惣體祈禱と申もの、自身信仰なくては、驗も無レ之と存候、只今准后樣御祈禱被レ成可レ被レ下共、自分信仰には不レ存候、まして拙者領内のあの坊主ゐ、祈禱は實說なり、夫故御家老の片倉小十郎は、備前之御恩を不レ忘となり、

一御道中にて、獻上の御茶壺に付候役人雜兵共、重疊にいひけれ共、御茶壺をは道端に置候ゆへ、銘々權柄をいへ共、第一の御茶壺を道に指置、何も茶屋へ入て休息して、人の當りたる抔咎候、御茶壺を麁抹に致候段、江戸表にて御咄可レ被レ遊と被レ仰候得者、役人殊外迷惑して、御斷を申候事、

一御道中二條番と御同宿に御泊り被レ成候節、二條番殊外權柄にて、無禮放言有しかは、御使者を以被二仰遣一候は、加樣成振廻苦々敷事、江戸表へ罷越候者、可レ及二御沙汰一旨を聞て、大きに驚、俄に愍懃にして、段段閉口仕候事、

一道中甲府樣御領にて、馬子横道成事有レ之候へ者、江戸へ被二召連一、御着之日、直に甲府樣へ御出御對面、御領内某所の馬子、加樣成事付召連罷越候、則私の土產に御座候と仰られ候得者、甚御悅、御自分ならては告知する人有ましきとて、御仕置に被二仰付一、

一大井川の川越人足横道之義有レ之節も、江戸へ被二召連一言上被レ成候而、御成敗被二仰付一候事、

信仰に無レ之故不二申付一候へは、夫を立腹に存、我等に暇をくれ候而、國を立退申候、其坊主今更御賴とても、此方より口を下け歸候樣には得不二申付一候、彼よりとそ歸度段申出候はゝ、御賴の上は成ほと望に任せ、寺院幷寺領已前之通可レ遣候、祈禱は向後賴み不レ申候と被レ仰、其後歸も不レ致候、

一松平陸奥守樣御幼少にて御家督之節、御知行少は減候樣に思召有レ之、公御同道にて御登城、未レ被二仰渡一前に、諸役人へ御逢被レ成候得は、公仰に、陸奥守家は格別之義、家督も無二相違一被二仰付一候に究たる事、難レ有存候段被レ仰に付、其日之外御用有レ之に託して、不レ被二仰渡一翌日無二相違一被二仰付一と云、

一說に、御減に成而被二仰渡一候處、御請に公被レ仰候は、陸奥守儀未幼少にて御座候に、家督無二相違一被二仰付一候段、再三被レ仰、其席を御立被レ成候而も、跡にて陸奥守樣の御背を撫て、無二相違一被二仰付一旨目出度存候、若少にても相違有レ之候はゝ、我等も此しらか天窓に冑を戴き、後詰可レ申と存罷在候得者、氣遣に成間敷と被レ仰といふ、未是否をしらす、兎角公の御一言にて、無二相違一被二仰付一候事、

芳烈祠堂記に見へたり

一御國中宗旨請、神職に被二仰付一度旨、江戸表へ御咄も御座候得共、珍敷事故御尋御座候節、御返答に、宗旨證狀取候事、隨分慥に致候事第一と存候故、神職共に申付候、坊主共怪敷往來致候故、一圓不レ慥、神職者代々其土地に居候得者、是程慥成事は無レ之と存候付申付候、

一御國にて大鹿狩被レ遊、餘り仰山にて、江戸表にても御沙汰有レ之、御參府之時、御老中より御咄にて、御遠慮も可レ有事の樣に被レ仰候處、御返答に、今太平の時節、人數にて引廻試候事、鹿狩より外に仕方は無レ之候、去夏以來、休息被二仰付一、於二國元一鹿狩り候て試申候、扨々自由に不レ成ものに御座候、太平の民を敎すして軍に用ゆるは棄るといふ、古人の訓もさる事に存候、各には當時御在府にて候へとも、御歸國の節は、かならす御慰なから御試候はゝ、治にも亂を忘れすといふ戒にかなひ、上樣への忠たるへしと仰られは、何も詞なかりけりとそ、

一谷田加介江戸に浪人して有けるか、馬を能乘候聞へあり、或時御屋敷へ見せ馬に來りし時、御前御側には菅八內罷出候、加介乘足を見て、ヲロシと相見候段

申上候を聞て、加介馬上より、八内能見立られ候と賞美す、公にはウキアシといふものならんと被レ仰候得者、なかはにて馬より下り、乍レ憚御目墌奉二拜入一候、此馬を浮足と申もの、江戸中に無二御座一、扨々御目の明なる義と奉二感心一、又乘て仕廻へり、其後外より四百石にて被レ招候得共、御家へ貳百石にて出る、知行は少くとも目の明たる旦那にてなければ、奉公不二面白一といひしよし、

諸家深秘錄に見ゆ

一伊豫大洲の主加藤月窓翁參覲し、道中にて伊勢へ參宮の童に値へり、從者をして其國を問しめらる、備前の民なる由を答ふ、從者戲れて、汝か言は國語ならす、何そ備前の生ならんといふ、時に童笑ていはく、備前の民は僞をいふ事を恥、是國主の禁也といふ、月窓翁怒中に是を聞て感していはく、少將の學、其德大なる哉、縱ひ渠は僞り◎(に脫カ)もせよ、備前には僞を恥といふを以て察するに、其厚き事知るへし、

一御道中へ御納戸坊主三人御供に參候を、御納戸の役の侍より、若病人共有レ之候ては、三人にて御手支にも可レ有レ之段伺候へ者、夫は何人召連候而も、病人はしれぬ事也、もし指支候者、其方共もとも〳〵に世話仕、相勤覺悟に候へは相濟候とて、御增不レ被レ遊、御自身にも隨分御不自由御堪忍可レ被レ遊御趣意なり、

諸家深秘錄に見ゆ

一平常易謙卦の辭を誦せり、天道虧レ盈而益レ謙、地道變レ盈而流レ謙、鬼神害レ盈而福レ謙、人道惡レ盈而好レ謙、

一御硯箱の蓋の內には、貝にて、懈心一生、自暴自棄、擧レ世譽不レ益レ進、擧レ世毀不レ益レ退、

一大坂大賈鴻の池といふ者へ、初而御借銀被二仰付一候節、同人備前へ來り、御作廻の趣を承り、是にては始終御差詰可レ被レ成候間、御家中御免引被二仰付一、唯今の內御儉約嚴敷被レ成候者、始終の御取續に可レ成候、左候はゝ當分の御入用者、如何程にても差出可レ申由、此段池田大學罷出被レ達二御耳一、公は御庭に被レ成二御座一、奉レ窺度義御座候段申上れは、公夫より申ても濟事ならは可レ申と被レ仰候に付、右之段申上しに、何の御意も無レ之故、御椽に半時計も大學伺公して居たり、御意には、此度は鴻の池に用事申付間敷候、早々上方へ歸候樣にと被レ仰、其跡にて、鴻の池へは借銀の事をこそ賴みしに、家中の免相談は可レ賴事にあらす、何と心得候哉、惣して家中の免引等、心安申付候事不レ成事也、戻ししほの無もの也、手間不レ入仕やすきに、今年も不足家中の免引、今年も不足免引といふ樣になり、且役人共は怠り出來て、家中は息も不レ成樣に可レ成と御意被レ遊候、

一江戸へ御發駕前、故有て伊木長門閉門被二仰付一、御發駕當日迄御免もなきに、長門家來を呼、供を排候樣に申付、其身も月代す、家來大きに懽、迚も本心にては無レ之と氣遣す、物見より見候而、能時分に其身一人罷出、又門をは閉て、門前に相待、御輿長門か門前へ御出に成候得は、人皆不審して前後を見るのみ、公長門々々と御意被レ成、其儘御輿の側へ寄、天氣宜恐悅奉レ存候、御留守の義者、例之通何茂申合相勤申候間、少も御氣遣被レ遊間敷候と申上る、公にも甚御機嫌克、留守之事賴と御意被レ成、長州退て家來を呼出し、直に御見立に罷出、其後公へ或人申上候は、此義如何不審に奉レ存候、左樣之御趣意に候はゝ、御免被レ成義、御免無レ之を、押而罷出候段、御咎無二御座一は如何と御尋申上候に、公御意に、國の家老たるもの、如何に主人より申付たり◎(共脫カ)其國主の他國へ行に、閉門して居候樣成もの、何の役にか可レ立哉、不二罷出一は其通にして捨置申間敷と思ひしと被レ仰候、

一京より樂人を召し、辻伯者、東儀修理、窪將監三人來り、士太夫に樂を學せ給ふ、公には特に笙を好ませ給へり、

公の橫笛に名つけん事を、中院內府通茂卿に請せ給ひしに、蘆田鶴といふ名を付られたり、空にかけり澤に年經て幾たひ歟霜の蘆田鶴こるふけぬらんといへる歌にとれる也、此笛を其後樂人辻山城守にあたへられたり、辻者天子の御笛の師なりしかは、彼あしたつ天子の御物となりぬ、一說に、山城守を肥後守といふ、信否をしらす、

一三宅大造は平安の儒者也、公の祿を受て岡山に來り公に侍せらる、京都にては何事かあると問せ給ふ、大造云、京極黃門の書法を慕する者の候て、眞蹟と僞を同して、大に人を欺く、惜むへき事也といふ、公しはらく有て、いやとよ、夫は必しも人を害するにあらす、予か憎む所は、奸臣の知を資て人を欺き祿をぬすむ、是は賢者の慝ならんや、終に利口の邦家を覆すに至る、予か國にもかゝる慝あらん事を、常に恐るゝと

仰あり、

一公恒に仰けるは、禍は下からといふ諺は諷詞也、下民の禍何とて自らならはしむへき、上たる人の導のあしきに依てこそ、下の人々非義を犯し、刑罰にかゝる事も出來るならひそかし、禍は上からといはん詞をかへて、下からといひつるは、上たる人を戒むる詞なり、

一國中の淫祠を毀させ給ひし時、安仁神社（邑久郡藤井村にあり、芳烈祠堂記に見ゆ）は、延喜式に大社と載たり、先王の祀典にありとて造營あり、夫より年毎に、同姓の大夫を命して拜禮の事初れり、

一孝經爭臣五人の章を講せしめられ、大臣池田出羽池田伊賀に、各心をこゝに用ひらるへし、予によからぬ事あらは必諫らるへし、又各も人の諫を能受入られよと仰有しかは、一座皆感し奉りし時、中川謙叔（植左衛門といふ、末座より進み出て、只今の御一言、國家永長の兆也、然れ共公は嚴威有て、殊に聰明におはします、又疱瘡の跡ありて、たま〳〵怒らせ給ふ時は、一目とも見られすと、人々皆申候、かゝる事にて御諫を申人の候へき、公先色を和柔にして、諫るものを賞し給はは、言路開て御益有へしと申けれは、公其眞言を賞し給ふ事大方ならす、謙叔退出し時、加世次春（八兵衛といふ、）餘りなる事を云しと有れは、謙叔、人臣の職自己の利を思ふ爲にいひたるにあらす、國家の爲に無禮を忘れたりといひし、

一津田重次郎永忠十六七歳の頃にや、不レ寢番にて居たりしに、公今の時計何時うちたるやと問せ給ふ、永忠承り、寢入候てしらすと申、公默してをはします、夜明て永忠か座を立けるを見給ひて、事をなすへき男也と、獨ことし給ひしか、十八歳の時、御眼代仰付らる、其日評定所へいてゝ、公務終て後、諸役人物語有れは、永忠末席より、此所は長咄する座にあらすと誡めけり、大臣達公の御前に參り、永忠しか〳〵の事を申候、廿にもたらぬ者の、餘成事也と申されしに、公扨は予か見る所たかはさりき、思ふ事憚る所なくいわん者なりと思ひたりしに、果して然也と仰有けり、

永忠御前に參て申上る事の有ける後に、彼者はつかひやう惡敷は、國の禍をなすへし、才は國中にならふ者なしと仰ける、

一泉八左衛門（熊澤次郎八弟也、世に有德の君子と稱す、）を評定所へ、列座に御出し被レ成候、何事をもいはす出候迄也、諸役人無益の事に思ひ、八左衛門をは陶器にて作りたらんかよかるへしと、戲れ評せし位なりし、公聞召て、八左衛門か前にては、假初にも虛妄の事いふ人有へからす、八左衛門か言と不レ言とにはよらしと仰ける、

八左衛門評定所へ出る事、一年餘も過て、大臣達公の御趣意を悟られしと也、依レ之公の大知なる事を感せり、八左衛門か前にては、事を捌くに私なるの論を憚る、しかれは國政に於て甚益有へし、其御趣意にて出されたり、

一日置草也下屋敷の南百姓の田地、高免にて難義するにより、自分請地に致し候樣に願はれ候節、夫は草也に似合ぬ事也、百姓難義に候はゝ、吟味之上免を下ケ可レ遣事、下の役人は、草也へ氣に入樣に申なすものなるを、誠に請て高免の年貢を出候て請地にし、下屋敷を廣く致し候事は無用也と仰ける、

一公の御時は、町在にて金銀御貸り上といふ事無し、其御趣意、若事急にて、大坂迄被二仰遣一候間も無レ之時は、領内の金銀貸上ケ可レ用、平生の事に用候而は、肝要の急用に不レ立候とて、大坂にて御借用被レ成候、夫も毎歳にては無レ之、御普請御手傳、或は御國中御救なと、格別の御物入有レ之節の事也、國中の金銀は、いつまても自分の用に不レ立といふ事なく、たとへは備に成事也、若其節出さぬ奴あれは、夫は如何樣にも出させやう有レ之、國中の金銀は、皆身か金銀に成と仰らる、

一公御力餘ほと強かりしか共、終に御噂も不レ被レ遊故、存たる者なかりし、或時備後守樣公の御脇指の甚重きを御所望被レ成候得共、御許容不レ被レ成、再三御所望之上に而被レ遣、扨被レ仰候は、非力にては用に立不レ申候、備後守樣いや相應に取廻し候と被レ仰候、左候はゝ力を見可レ申とて、蠟燭を五挺横に並て灯し、盤にてあをき消す事を被レ成候而、御自滿の御顏色を御覽有て、又蠟燭を七挺御取寄、竪に燈し並、盤にて下より上へ御あけ被レ成候勢にて、悉く御消被レ成候、其元には横に並盤を上より下へあをき被レ申候、夫は勢強く候、惣體力といふものは、賴みにすへき物にあらすと、畢竟備後守樣此時糸髮に被レ遊、强力苛察なる御樣子を御制止被レ遊候爲に、右之通に被

レ遊御意も有レ之、其節初而御側の者も拜見、其後は御沙汰も無レ之、

一御國中人改といふ事今にあり、今日は切支丹改と見へ候得共、公の御時は、夫はかりにてはなく、村々壯年の男を改、其時々の田地に御引合被レ遊候而、此村の田地には何十人はなければ耕作不レ成所也、然るに今奉公人に何十人出居候得者、此村より軍用の時、何人ならては出かたく候と御積り被レ遊候、人數多少を御考被レ成候而、奉公人の增減を被レ遊候上にて、今年は他所奉公人召置候樣にと、仰觸等有しと見へたり、

一生駒賴母は、出頭の大小姓頭なり、或時御徒頭某に、於二御城一口論におよび、事にも可レ成と見へしに、はや御出前にて、御供の差支に成候故、其分にして御共に出たり、其翌日又相供被二仰付一、於二御城一出合候節、定而先日之樣子ならは、打果しも可レ致事と思召候處、少も其氣色はなく、和睦の體なれは、其段御覽被レ遊、如何にも不都合成事、侍の義にあらす思召候而、其翌日兩人共御改易被二仰付一、出頭なれ共、心底御見限被レ遊候とみへたり、

一御在國の內は、朝御膳の御相伴に、番頭壹人物頭壹人罷出る、必家內の安否、相組の事、或は先祖の軍功なと尋給ふ、每朝兩人つゝ代り〳〵被レ爲レ召、別而眞田將監度々召出され、每度御咄の上にて、御せり合申候由、

一講釋式日あり、或日講番之者指合候而相延る、醫者中も聽聞に出候に、延候とて鐵御門迄退出候處、又被レ爲レ召候而、御意被レ遊候は、今日は雨天にて、御徒然にも思召候間、醫者仲間取敢す講書仕候樣に被二仰付一、布施玄伯學而首章を講し、其外も不レ殘其次を講す、何茂傘而心懸候段、能讀候と御賞美被レ遊、直に今晚御料理頂戴被二仰付一、

一丸毛元左衞門鐵炮を御上覽之節、大不出來也、丸毛恐入居申、其砌醫見玄三に途中にて逢、丸毛に者、此間鐵炮御上覽之節御供にて候哉、御機嫌如何といふ、玄三、御機嫌何の御障も無レ之と答ふ、丸毛いふ、傘而鐵炮不調法に候へとも、此間の樣成不出來は無レ之、扨々恐入候といふ、其後公御寫物を被レ遊候節、玄三御側へ出居申、何角御咄の序に、丸毛恐入たる樣子御咄申上候得者、公御側に有レ之御脇指を御指被レ遊、玄

三を御覗み被レ成、兼々其方共へ、外樣の事不レ申候樣に申付候處、やゝもすれは左樣成事申とて、甚御叱被レ遊、扨其跡にて、丸毛は鐵炮改の者にもあらす候へは、藝の巧拙に拘らす、其志を見に行候趣意也、何その時は馬前にて用にも可レ立と思ふ志奇特也と被レ仰、其後玄三其事を丸毛にいふとて、頃日其元の事にて散々御叱を蒙候得共、跡にて加樣々々に被レ仰候段申聞候へは、丸毛感涙して、難レ有奉レ存候、

一お六樣御乳兄弟の者、何とそ御徒に被二召出一候樣にと御直にも御願被レ遊、其外御內所御役人より御仕置方へも被レ願候故、度々類書にも出候へとも、不レ被二仰付一、其後お六樣御逝去已後、又伺書に出候節、御意被レ遊候は、此者の事六よりも被レ賴、內所役人よりも其方共へ願と見へて、度々伺出候得共不二申付一候、其趣意は、內所より願候事にて仕置申付而者、殊外害有レ之事に候、乍レ然はや六も死去候へは、一生心に掛事故、此度申付度候間、是は其方共へ我等より賴候まゝ、同心有レ之樣にとて被二召出一、子レ今御內所御掟にも、御內所方へ願出候事仕間敷といふ御法なり、」一評定所月寄の月、公御出被レ遊、御聞被レ成候間、算盤の置上ケにほこりを一桁殘候樣に被レ仰、吝に似たれ共、天下の財を猥に捨候事致間敷と被レ仰、其年のほこり二百俵有レ之といゑり、今に御直筆の御掟書有り、

附御白無垢よこれ候而も、不レ被二召替一候事、御前樣御納戶金取替被レ遊候、御間柄とて御返不レ被レ遊と、御直に被レ仰候事、

一日置若狹家來屋敷の長屋より、水鳥を持て出奔す、尋に人を被レ出候、自分にも可レ出事なるに、手ぬるき仕方とて、秋頃より翌年迄閉門被二仰付一候事、

一丹波守樣木欒子の緒〳〵御覽候而、公御所望被レ遊、其代り珊瑚珠の緒〳〵を被レ進候、其後又木欒子の緒〳〵御所持御譽被レ遊候得者、可レ被二指上一哉と被レ仰、最早御入用に無レ之由御意被レ遊候事、

一日置若狹直諫申上時、何哉覽被二申上一候に、御合點不レ被レ遊候得者、左樣に御塞被レ成候而者、御合點參間敷候間、重而可二申上一とて退出す、出羽脇に居て、大汗の出るほと氣毒に有しと也、

一出仕の日、餅を串にさしたるを重箱に入て、公の左右に置、各壹人宛御前にて賜はるを戴き、頓首して退

く、いつも日暮に及へり、執政の人々公の俸給はむ事を氣毒に思ひ申されしを、公聞召、我國は せはくして、士を多く召置事あたはす、一度士の拜禮に俸事ありたくと、願へ共叶わぬ事よと仰有ける、

一山内權左衞門最初は 知行百五拾石也、數年勤役の内、加增可レ被レ遣思召候得共、御趣意有レ之、最後に一度に三百五拾石御加增被レ下、御次之間へ立候節、此者前廣より 加增可レ遣候處、生質にて若奢り出候得者、家をも滅可レ申と存ひかへ置候、最早あの年來にては、其氣遣も有間敷と、此度數年の勤勞に如レ斯申付候と御意被レ遊、別而難レ有感涙に及ひしと也、

一公の御種とて、小笠原金三郎といふ浪人御國へ參、如何樣にも御抱へ被レ下候樣に再三願候由、證據には御守脇指持傳へ居申候由、公聞召、段々御考被レ遊、若懷姓の女中なと、御暇被レ遣候義なと御座候哉と思召候得共、少も御心當り無レ之に付、容易に御抱も難レ被レ成候へ共、止り不レ申候、折節出羽は天城へ潮湯に被レ參候、最早一兩日に歸候て◎を も御待兼被レ遊、御側の小姓何某天城へ被レ遣、右之事御さばき被レ遊かたく候、如何被レ思候哉との御意、左右を拂て密に申達候へは、出羽被レ答に、夫程の事御了簡無レ之哉、夫こそ御召抱被レ遊候か宜候、其段被二申上一候得と被レ申候、其趣意は、左樣成草臥者、御抱被レ成上にて、切腹被二仰付一候へは濟候、其御側歸より先へ彼浪人の方へ、出羽より使者を遣し、御抱已後切腹被二仰付一候段被二申聞一候へは、早速御國を歸去候由、夫にて事濟候、出羽歸候而、御前へ出いはれ候は、殊之外御譽被レ遊、あれ程の事御心附不レ被レ遊哉と被二申上一、

一下濃彌五左衞門（今の宇兵衞といふ家）を召して、池田伊賀を以て櫺外記に預置し弓足輕の中拾人、彌五左衞門に預候へしと命せられしに、彌五左衞門承り、新に預られなんには、拾人はさて置一人なりとも辱と申へし、外記か中をわけて預られたるは、遙に外記にも劣れる明なり、軍旅の事、外記の下にたつへき身にあらすと申す、伊賀側に有ける横目の高木左近左衞門◎（脫字カ）に向て、唯今下濃か言事道理也と、詞少なくとりあわす、伊賀やむ事を得すして御前に參り、未申出さゝるか、公明敏にてはやく察し給ひ、彌五左衞門いかにいひつるやと有けれは、されはかく申て候と申、公笑はせ給ひ、鐵炮足輕廿人預けよと命せられけり、

一誰にてか有けん、長鎗五拾人を預けらるゝに、中々長槍を司るへき身にあらす、吾不肖なるをしりて命を率るは 君を欺く也と申、伊賀強れとも聞さりしかは、公聞召、彼には程なく鐵炮を預け候へし、先長鎗を強く預けよと仰あり、伊賀出て又すゝむれは、高木左近左衞門側より、我心に能すましき事としりたるに、君命なれはとて受へきやといふ、伊賀又かくと申せは、則鐵炮を預けられけり、

一高木左近左衞門使番也し時、御城の東北川を隔て、小姓町といふ所あり、竹林に鵯（ヒヨドリ）多かりしを、家來を遣てとらせたり、公御覽有て、制禁の竹林に網を張事やあると仰有、高木此時當番也けるか、是を聞、さらは家來は死刑成へし、我も腹切へし、戰場にて討死すへき侍を、小鳥に替給ふは殿の過也といひしを、公聞召笑はせ給ひて、扨やみ給ひけり、

一公甚書法を好ませ給ひ、弱冠の御頃にや、青蓮院の宮高純親王に學せ給ひしか、後に中華の古法帖を萃し給ふ、王文成公の客坐私祝の石摺、其中三字缺けるを補書し給ひし、今泮宮に、其石摺屏風あり、何れか公の補書なるといふ事を辨識するものなし、

一山田道悅は新進の士也、或日御前にて物語しける時、殿にはふきを聞し召れすと承候、いかなる故にやと問は、公させる事もなき事とて取合せ給はす、押返して子細の候やと承りぬ、まさしく其趣を承候はやと、しきりに申けれは、公されはよ、先祖謹國公の長久手にて討死有しは、ふき畠の中也しと聞召、其軍は義戰に非さるゆへ、深くなけき思ひ、ふきのうるさきと仰有けれは、道悅謹て、それは殿の大き成幸と申ものにて候、謹國公若田の中にて御討死あらんには、殿は飯をきこしめさて、餓死せさせ給ふへしと嘲哢しけるに、公は願て外の事御物語有て御咎は更になし、一武藝の內に、別而射法を好ませ給ひ、御居間の傍に卷藁有て、弓組の弦音を聞召す、弓組廿人を擇て塵下に備らる、或時山川重郎左衞門を召して、百射の賭射を被レ成たり、公九十五筋あたり給ひ、十郎左衞門九十六筋當りけれは、公弓を十郎左衞門に賜りけり、程なく又百射の賭ありて、十郎左衞門御相手となりけるに、公九十六筋あたらせ給ひ、十郎左衞門九十五筋あたりけれは、公笑はせ給ひ、けふは予勝たり、さらは賭の弓出せと仰けれは、十郎左衞門先に賜りける

弓を出す、公是は頃日汝にあたへたる弓也、別の弓を出すへしと仰けれは、十郎左衞門、いや此外に弓はなしと申上れは、さらは返しあたふると被レ仰とそ、其弓今に山川の家に秘藏の器とせり、

一常に國計を重き事として、時々自ら聞召、量レ入以爲レ出給ふ、且錢を鑄らしめん事を議らる、富國の計是より然るへきはあらしとて、其事定りけるに、錢を鑄上手を諸侯の國へは出されさるよしなれは、湯淺右馬允を使として、京都の所司代に所望有けれはゆるされぬ、是より國殊外富たり、其錢を鑄所、今の錢屋敷也、

一青地三之丞射藝の妙を得たるといふ程の者也、寒中に的を射けるに、公御覽して、三之丞かはなれ、今日は見苦しきはいか成事と問せ給ふに、三之丞、歲暮の近く、勝手の殊外にあしく候と申上けれは、公笑せ給ひて、銀子を賜りけり、

一山川重郎左衞門へ節季詰りて御意被レ遊候は、定而子共に着る物なと致遣候哉と仰らる、殊外勝手不如意に(候脫カ)故、段々せかみ候得共、得致し遣不レ申候と申上れは、定て左可レ有、是を遣候と被レ仰、小判弐拾兩紙に御包被レ遣、難レ有御禮申上罷歸り、かそへ見候へは廿一兩あり、翌日罷出候節、右之壹兩を持出、御前へ罷出、昨日は難レ有仕合、家内一等に難レ有奉レ存候、扨小判を數へ候へ者、如何樣に仕候而も、廿一兩御座候故、壹兩は返上可レ仕と持參仕候段申上候へは、そふも有まい、是へ〳〵とて御取返し被レ遊候事、

一或夜御菓子に蜜柑を被二召上一、御側醫(醫見玄三といふ)いふ、夜中冷物を御用捨可レ然旨申上れは、即御止被レ遊候、暫ありて御内所へ入らせられ、扨々あふなき事有と御獨言をの給ひ、年寄女中如何樣成御あふなき事にやと問まいらすれは、公今醫者しか〳〵の事をいへり、是尤なり、然るに我も夫程の事は知りて侍りぬと、既に口外へ出さんとせしに、不レ言して止たりき、若しかいわんには、是より後誰か予かあしきを諫るものあらんや、此醫後に聞て感涙せり、

一御不快被レ成二御座一節、御老中共不レ殘、於二御前一御軍話の折節、土倉淡路(本生言葉少き律義成生質也)被レ申は、私本生存候は、伊木長門池田伊賀年來不和にて、御爲に不レ宜候樣に被レ存候、御大事も有レ之節は、兩人の内一人と、私刺違候得者御爲に宜と兼而存寄居申候、是私の忠義と存罷在候由被レ申候、兩人共目前詞なく有りしかは、公御執成被レ仰、夫より和睦有レ之、淡路を饗應せられしといふ、

一備前軍者山田道悅成へし來りし時、公甚御信用被レ遊、其節諸事手輕き事を專一といふに付、御狩の節も、御自身御腰付を御持被レ遊候樣に申上ると見へて、其通に被レ遊、伊木長門御供に參る、如何にも結構成辨當幷酒肴を數々持參し、御休の時、素より公は御腰付の事なれは、御幕もなく、少の間に御晝食被二召上一相濟候、長門は幕を張、右の辨當を取出し、時を移しぬ、御待兼被レ成、御使を被レ遣、長州其御使を留て、酒肴を出し振廻、又御側の者を被レ遣、又如レ前して御使をかへさす、四五度にも及て、餘り御不審の思召、樣子を見て參候得と被二仰遣一、其者悉く見屆歸て、具に言上す、以の外御機嫌損し、直に御歸城被レ遊、追付長門を被二召出一、今日の致方定て存寄有て致候と思召候段、甚御機嫌惡敷被レ仰けれは、長州少も憚る氣色なく、成程少し存寄も候へとも、是は跡にて可二申上一候、先御前の思召寄から承度奉レ存候、御大名の御腰付辨當、是何事にて御座候哉と申上、公被レ仰候者、兎角武家としては、平生手輕事を專一と、身持を心掛仕習可レ置事也と被レ仰、長門申上候は、夫は尤も可レ有二御座一、御尤には奉レ存候得共、此長門か目の見へ申内には、御前へ御腰付差上候事、如何樣の事有レ之候共不レ仕候と、居丈高に成て申上けれは、忽に御顏色和き、扨々是は身か心得違也と御意被レ遊、

一幅多山猪狩、格別に大勢を催されて、追留は北方村三野村前の曠野なり、公は土手筋大樋の上に御狩場を被レ居、射手組士鐵炮の二組は、御左右手先へ出張、御軍監上泉治部左衞門は御前に在りて大鼓の役なり、輝錄君池田佐渡は中備、老中共は皆嫡子の手の大將たり、木下淡路守樣戸川土佐守樣山崎甲斐守樣御見物として御出、各御狩場を設らる、大猪壹疋狂ひ出て人を傷る、久保田清閑七十有餘、弓を執て馳向ひ、聲を掛て矢をつかへは、即時に飛來を、間近く引請て、一矢にて射留たり、餘り手際にて、一同に鯨波を上て譽たり、公も御悅喜不レ斜、老武者仕たるものかなと、返す〳〵御譽め被レ遊、則召たる御羽織を被レ下、又一人此名不レ詳、鐵炮にて狂ひ猪を間近く引付拇留たり、是又手際成事甚御賞美有、日既に晩景に及

て、俄に時雨車軸を流し、面も向得さる折から、皆々鐵炮を持出し候樣にと仰有り、岸族右衞門畏候といふより早く、手勢の先に進て下知すれは、組の足輕數十人、一列に立並ひ、つかへ放しに狩立ける、かゝる大雨の中に、手早く次第もつゝき、間れも遲速なと甚見物事にそ有ける、公も大に御感有て、是も御手つから御羽織を賜りける、又相圖の貝を被レ命、此時御貝吹の者坂を登り、息喘て吹得されは、上泉貝を取て吹に、大に響けり、御感悅不レ淺となり、珍敷大猪狩とて今に云傳ふ、御獲もの甚多かりし、

此御狩の時にや、又外の時にや、是も半田御狩の節、鹿一疋せこの間を拔々(脫カ)郷司長左衞門青地三之丞に被二仰付一ふせきける、其後は一疋も不レ拔、若一疋にてもぬけ候はゝ、切拔すへき覺悟にてふせきとるよし、此時草の陰に鹿一疋臥しを、執田彥八郎青地三之丞に被二仰付一、兩人矢玉兩脇に中り候由、被レ爲レ召候御羽織を三之丞に被レ遣、御挾箱の御羽織を御取寄に而、彥八へ被レ遣、鐵炮たゝき是にて致二堪忍一候へと御意被レ遊、

一鹿久井鳴猪狩、其曉雨天に付、御目覺も申上兼候得者、少く遲く御目覺申上、雨降候故延引と申上候段、御側の者申上候得者、雨天には出陣はならぬかと被レ仰、甚御機嫌惡し、朝七つ前長門身拵して罷出、殿には未御拵被レ遊す候哉と被二申上一、依レ之御機嫌勇々敷御出被レ遊、雨天なれ共御傘も不レ召、一同の人數と同敷御ぬれ被レ成、御火繩消可レ申とて、漸後には御傘を指掛候事、

一赤坂郡に狩し給ひ、夫より數日村邑をめくらせ給ひし時、或所にて農を集め、終日耕業をかたらせて聞し召、日暮て老農共退出けるを、呼返し給ひ、植物の中何物か第一に多く得るやと問せ給は、答申上けれとも、怪しみ給ふ色有、やゝ有て、土地に依て多寡の不同有へし、聞及たるは、異國にても芋を植て富たる物ありと云、試に色々の物を植て見しに、果して芋に及ふ物なし、芋壹つを植れは、大抵壹升を得つへし、一反に十石を得へし、燥濕の地にも不レ寄、培さのみかたからす、葉も莖も食ふへき物也、五穀に次せるもの也、汝等かしらさる事はあらし、土地の不同なるによるならんと仰あり、

和氣郡坂根村井手へ鴨を搏に、御逗留に御出被レ遊候節、御夜具不レ被レ爲レ持、御挾箱の內へ御蒲團を御入被レ遊候而、夫にて御仕廻被レ遊候故、信濃守樣なとも、其節は其通に被レ遊候、惣而御殺生の節は、萬事手輕に被レ遊、燒飯を紙につゝみ、御袖に御持被レ成、加樣に無レ之而者、殺生はならぬもの也と仰有、夫故信州樣御殺生の節、公の御傳授にて、燒飯御持被レ遊、御晝休なと、民家へ御立寄被レ遊候而は、耕作の妨と思召、多山野にて御濟し被レ遊、耕もの去らす、道を行者を不レ拂といひ傳ふ、

一御野廻り御晝休にて、白魚を御吸物に指上る、御椀の中に砂氣有レ之、以の外御機嫌損し、無念之儀と御叱有れは、御料理人御前へ罷出、乍レ恐申上候、御椀の中には中々砂は無二御座一候、今日は風立候ゆへ、公の御口中に砂氣御座候と奉レ存候、御口を被レ嗽候而御上り被レ遊候へと憚る所なく申上れは、公いかにもいかにもと、即御手水を被レ成、御上り被レ成、汝かいふ所尤也、我誤れりとて御笑被レ遊とかや、

一御野廻りの節、大なる蜂の巢を御杖にて落し給へは、數十の蜂飛出て、人に付に依て、御側の面々拂々するうちに、覺へすしらす御前を退、やゝ有て皆々走集て、御容體を奉レ伺は、蜂十はかり御身に留り有を、一つも御はらい被レ遊す、泰然として御座被レ遊、此時何も赤面して恐入たる風情なれは、公顏色を正しての給く、分厘の針を以てさす虫にすら、我をわすれたる有樣也、況や尺の劒を以てせは、各いかんと御意有れは、各絕入心地したりといふ、(御庭を御廻り被レ遊候時諸家深秘錄に豐前守樣とあり、の事といふ說もあり、)

一御鷹狩御歸に、伴福村にて、路に倒れたる稻穗を紙にて御くゝり合せ給ふ、民の傍に在て見しかは、いかなる故にやと口さらしかは、役人此內申上る、公やゝ默して御座被レ成、子細もなき事也、予あやまちて蹈倒して、民の日にさらされ雨にぬれ、千辛萬苦したる物を足にかけたれは、天道を恐れてそくゝり設たり、とくからせとそ仰あり、

綱政公或時、美濃紙に文字を御書被レ遊候節、御書そこなひ被レ遊候而、餘紙に御調被レ遊、初の御そこなひをは、御側の者もみ捨る、其時其紙は惜しむにあらす、又相應の入用有へし、此紙は殊外人力を費したる物なれは、捨へからすと御意被レ遊、本文と同一揆たり、

一御野廻りの節、或所に盜捕候とて、ませ返し候樣子

御見及被レ成、直に其所へ御越被レ遊、御直にも樣子を御聞せ、御前へ召れ參候而、脇より掛置候はたつけをとらんと仕候と申上る、盜は左樣にてはなく、はたつけの下よりねふかをとらんと仕候由を申、御聞被レ遊候て、入牢被二仰付一候、盜ははたつけよりねふかを輕き事と心得申上る、他の物は何程をもく共所によるへし、ねふかは壹本にても、民の作物に手を掛候段、指免しかたく候間、右之通入牢被二仰付一、

一御野廻りの節、稻の未穗に出さる內に、此は何と云稻そと度々御尋被レ成、郡奉行申上る、御聞被レ遊候而、間には左にてはなし、是は葉は廣けれは何にて可レ有とて、地主を公御尋被レ遊候へは、果して其通也、稻の名も知らぬ郡奉行、百姓を養ふ事危事也と仰らる、

一御野廻りの節、代官の宅へ御寄被レ遊、御書被レ遣候物有レ之、其砌迄は代官村々內出張、何となく勢有レ之、百姓こまり候樣子被二聞召一、御書調被レ遣、其文言、年貢取立之事、宗門改之事、此外何れにも構申ましく候、

一或時獵より歸らせ給ふ時、名主の家に人多く集て騷敷、何事そと問せ給ふに、獵を追入て候に見へすといふ、公聞召、あやしき物也、鍬を入て見よ、化物の明を奪ひかたかるへしと仰有り、果して梁の上にかゝみ居たるか、鍬の表にうつりたり、

一御野郡中原村に、公の遊覽の地あり、旭川の傍にて、夏日暑を避給ふ時は、こゝに至らせ給ふ、名主の家に幕と幕串を預け置せ給ひ、幕打廻し毛氈を足の上に敷て、辨當をひらき憩せ給ふ、今に其地數丈の間、牛馬を牧せす、公のいこはせ給ふ地とて、民共敬せり、世人此地を御凉所といふ、

一旭川の東岸に花畠（今諸士の居宅有）といふ所、もと清泰侯備前へ封せられ おはしましける時の別業にてありしに、公儉を事とし給ひしかは、これを壞て、奇石をは皆地中に埋させ給へり、公身を沒らせ給ふ迄、峻宇彫墻の好み露計知らせ玉はす、

一澁子の弦の邊にて御烟草被二召上一、御野郡上道郡御覽渡し被レ成、御醫散被レ遊御側より、御城の後に好場所も御座候へは、御茶園仰付られ候て、御慰にも可レ然哉と申上る者あり、（其時は御後園もなし）それは慰にも可レ成か、大分の田地を費し、人力を苦め、予も又大抵の心

遣にては出來す、然れは末はしらす、差當り樂にはならすして、無益の事多し、夫よりはかくのことく心の儘に、行度所へ行、休度所にて田畠の心地能生立たるを見る事、此上の樂なしと御意あり、野鳥飼鳥一つに遊といふ前句に、治めしる國のまかきの內なれやと被レ遊し御心の內の廣き、衆と共に樂給ふ事也、

一鷹狩して歸らせ給ひ、城へ入らせ給ふ時、靑地三之丞、今日の牛旁狩、得もの多かりしやといひしを聞召、おかしき事を云へる物かな、子細有へきとて問せ給ふに、三之丞承り、過し頃鷹狩の御歸に、當番の者のつかれたらんとて、其日の得もの 粟（スイモノ） にして賜りしを、忝事と思ひしに、牛旁はかり也、さては今日も牛旁を狩らせられしと心得候と答申せしかは、料理人を叱らせ給ひて、其日新に雁を羹にして、當番の士に賜りたり、

一御野郡野殿村の邊へ、極月廿日過御廻り被レ遊候處、御道筋の村にて、小屋を崩し候所一二箇所あり、樣子を御尋被レ遊候へは、屋根替を仕候由を申上る、又先にても御覽、御尋被レ遊候ゆへ、かゝし申事もならす、年貢に差つまり家資拂候由を申上る、直に御歸被レ遊、殊外不便に思召、御貸米被二仰付一候事、

一難波町御堀御ねらひに御廻り被レ遊候節、或侍の家へ御入、裏の堀に居候鴨御ねらひの時、茶園に大根の見事に出來たるを御覽有て、亭主歸たらは、大根か能出來たるそと心得てくれよと仰置る、御草履取は、路次の外に脇指をもたせ置內へ入る、御歸掛に御覽被レ附、何者の脇指そと御尋あり、無二何心一御草履取の脇指の由を申上る、不相應成奢者、糸にて柄を卷とて御叱御暇被レ遣候、夫にて御家中之者迄、輕きものは皆々革柄に仕替候事、

一惣而御野廻等に御出、御歸の節、途中より雨降出候へは、御供と同し事に、町口迄は御ぬれ被レ成候而、御歸被レ遊候故、御供の面々ぬれ候ても、何共不レ存由、伊豫守樣信濃守樣御同道の時は、是亦御一所に御裾範にも不レ召、御ぬれ御歸被レ遊候由、

一靑地善左衞門鐵炮獵を好み、暇日には必出遊ふ、一日備中松島邊へ行、得もの少く、黃昏に御野郡今村邊へ歸りしに、折ふし田面に鴈數多居たりしをみて、僕に持せける鐵炮おこせとて、取てねらひけるに、火繩のはせてあるとは思ひもよらす、目當にのりけれは、

引おこしけるに、あやまたす鴻(ヒシクイ)弐羽つなきに打けり、思ひよらす驚入て、此御留場にて、鳥搏へきとて鐵炮を乞しにあらぬに、火繩をはせし段如何したる事やと僕を叱りけれは、僕は御留場といふ事は不レ存、鐵炮こせと仰候へは、鳥御搏に成候と心得、口藥も改め火繩もはせて、例の通に渡しまいらせ候けるといふに、兎角なくて、此上はせん方なし、あの鳥取て參れとて取よせ、又鐵炮も鳥も僕にもたせ歸らんとする所へ、御鳥見の者駈來、何人にてかゝる不埒候哉と咎けれは、有のまゝに語りぬ、誤り入候へは、歸候而早速申上、いか樣共御成敗を待候心得の由のへけれは、夫は兎も角も、何分御法に候間、右の鐵炮幷鳥御渡し候樣にと申しけれは、いやそれは存もよらぬ事、成申間敷と申候に付、互に言葉もあらく成、鳥見も是非なく、家來の持たる鐵炮をとらんとしける程に、善左衞門拔打に鳥見を討果し、夫より急き岡山へ歸、頭へ參右之段々申達候處、とかふ可レ申樣も無レ之事共、先差扣被レ居候樣にと申、直に御家老衆へ申達候へは、夜中なから明日迄は延かたしと、直に登城して委細に申上る處、是は急に下知も難レ致事に候間、先明日の沙汰に可レ致とて御聞込被レ成候而、御家老をは御下けに成候、扨五日め迄も何の御沙汰もなきにつき、御家老衆罷出、頃日の善左衞門儀者如何可レ被二仰付一哉と御尋あれは、されは其儀にて候、色々考候處、あやまちなから鳥を搏たるは不埒にも候へとも、鳥見を切しは、身か側近く召仕候て、兼而目かねに違無レ之樣に存候、しかれは目かねに違候者と一樣には參間敷候得者、各にも爰に了簡有て、身か目かねに合たる所に宥免候而、此度の罪は指免度候間、左樣に心得被レ申候へと御意に付、御意之上はとかふ申上へき樣無レ之候、仰之通鐵炮は被レ渡申間敷候へは、無二是非一右之通致候者と被レ存候、左候はゝ御免之由可二申聞一と被二申上一には、呼寄直に可二申聞一と御意にて、則善左衞門儀被レ爲レ召候而、御前に罷出候處、扨扨不埒の儀致候、しかし鳥見に鐵炮とられ候はゝ、無二是非一切腹可二申付一所、兼々身か目かねにはつれさる致方故、留場の定に背候各も差免候間、只今迄の通相勤候樣にと被二仰渡一、扨御家中へは、留場の義向後堅相守可レ申候、假ひ善左衞門か如きの過有レ之候共、聞屆申間敷候間、此度相觸候樣にと、御家老衆へ被二仰渡一候由、則何れも退出せんとする時、善左衞門に扨右の鴈は如何仕たると御尋有けれは、切腹間も無レ之と存、此間に二羽共料理仕候而、給候よし申上けれは、如何樣そふ有ふと仰て御笑被レ遊候よし、

一或侍御留場にて致二殺生一、御鳥見吟味の上達二御耳一、被二仰出一候は、御免の札場三五間の事は、能々吟味を可レ遂とて、其夜密に御免札建所をかへ置候樣に被二仰付一、翌日御鳥見吟味被レ遣候得は、御免場相成候故、鳥見之無念に成候而、侍は御咎なし、侍を御助け被レ成候御趣意なり、

一或侍御留山にて、松を堀り歸るを、山廻り見付て、吟味の上達二御耳一、留山にて松を盜、其上に山廻りを打擲する事、重々不屆也、其分に不レ成事也、扨其松は如何致し候哉と御尋被レ遊、取歸庭に植置候と申上る、左候者許し可レ遣、彼か庭に植置には、山に有も同事也、若伐採候者、屹と申付へき事とて、御叱置被レ遊候事、

一御普請所にて、出羽足輕役を、御徒奉行の者叱候ゆへ、出羽怒りて御前に參り、しか〳〵の事候と申けれは、公夫は奉行の申所是尤也、其事予は櫓より見たり、侍にあらすとも、予か法を受て下知する事なれは、其人の輕きによるへからす、法度に背候故也と被レ仰しに、出羽氣色惡敷被レ退候樣子御覽、御呼返し、天城へ引込被レ申と相見候、予にたてつく事奇怪也、只今討手を申付へし、天城へ引込たらは、汝か手柄成へしと仰けれは、公族大臣詫言樣子にて事やみけり、

一山內權左衞門へ被レ下候御書付寫、（堅紙也、山內與八郎持傳ふ、文字のくはりも此通無二相違一、（◎字配りは今便に隨ひて改めたり）

一心を正しく義を明にするを本として、其職を可二相勤一事、

一寬弘にして人の言を許容し、權高に無レ之、末々までも物申よき樣に可二相心得一事、

一財寶之出入義を專とし、萬滯なき樣に可二相勤一事、

年號を記し傳ふるものを爰に輯む

一寬永元年甲子、台德院殿世子と倶に上洛有、公も供奉し給ふ、同九月六日、上皇（後水尾）二條の城に幸せらる、和歌の御會有て、竹契二退年一といふ題を以て、公國風

を獻せらる、「嶺に生る松の千年もとり添て君がよわひを契るくれ竹」、此頃因幡國公の封疆たるゆへに、嶺に生るとは謂せたる成へし、

一同九年壬申、大猷院殿俄に公を御召ありて、因幡より備前へ封を移すの命有、五月廿三日、因州を發し給ひ、道中殊外急かせ給ふ、あふ付馬に召給ふ、此時のあふ付馬に敗たる鞍、今武具藏に有りとなん、

一寛永九年壬申、忠雄侯卒去有、公の叔父なり、殊に悼せたまひて、「うきにそふ涙はかりをかたみにて見し面かけのなきそ悲しき」と謂給へり、

一同十年、大猷院殿向井將監忠勝に仰て、相摸國三浦にて安宅丸といふ大船を造らせられ、同十二年六月、江戸の海上にて御召初の規式有、諸大名品川海邊に出給ふへき由仰出され、公には大夫人の召させ給ふ御帷子を被レ爲レ借、それを召して、猩々皮の陣羽織にて出給ふ、御出掛御式臺に立給ひ、御扇をひろけて差あけ給ふに、御軍扇也、衣服の體よりしてあやしき事よと、御供の人々思ひ居たり、扱品川にて諸大名群集し給ひ、如何成御裝束やと尋らるゝに、いや少し存る旨の候てと答へ給ふ、程なく大猷院殿御船にて、諸御大名の前を御通り有けるに、あの衆に替りたる衣服は備前の少將成へしとて、小船を以て御召有、公則安宅丸に乘り移らせ給へは、大猷院殿御尋あり、公謹て、御祝の儀式は御船の內之事、我等は陸の警固し奉ると存せし也と答へ給ふ、大猷院殿則其羽織くれられんやと仰有、脫て奉られしかは、酒盃を給はり、公起て自然居士の曲舞せられしを、諸大名陸より見やりて、驚く斗也、夫よりして諸大名直に出仕有へしとて、品川表を退出有けるに、供の人々遊の脇にひかへたる故、一時に集りさはかしき事大かたならす、公の扇を差上給へるゆへ、御供の面々、殿にはあれにとて、頓て集りけれは、公諸大名に向せ給ひ、供の人々騷動と見へ候、予か家來を殘置、予か邸へ追々あつまり候半樣に申傳させはや、其內予か邸に立寄れ候なんや、一所に御悅に出仕し侍らんと仰られけれは、皆忝とて引伴て、品川より龍の口備前屋敷へ御步行にて來り給ふ、無レ程御料理を出して御もてなし有、是は伊木長門六十人前の用意致し置けり、其後供の人々集來て御出仕有、

翌日長門へ、昨日の料理用意致置候は、如何樣成心得に哉と御尋あれは、昨日の御前御裝束にて、若御叱等有レ之、御一同樣方御寄合被レ成候事も可レ有、但御首尾宜候はゝ、加樣に御同道被レ遊御歸之事も可レ有、言凶共に御客可レ有と御答申上れは、彌忠義の志、御感悅不レ淺事、

一正保元年甲申、御願有て、東照宮の御廟の造營有レ之、同三年丙戌より、御祭の大禮初てあり、夫より歲歲行はれし、先御祭前日通御の道筋御見分被レ遊、當日まて御參拜、夫より御旅所へ御出被レ遊、明曆三年丙申九月十七日、初而流鏑馬十つかひを命らる、如何成人かいひ出しけん、因幡にて流鏑馬は馬工郎のする事也といふ事を聞召、諸士登城の時、御前にて上泉治部左衞門を召て、東鑑やぶさめの禮儀の所を讀み命せらる、鎌倉將軍の時、八幡の流鏑馬の儀式、其姓名を高らかに讀、私爲の旗頭熊谷小次郎、的持の役たる由に及てやみけり、夫より少も勤事を厭はす、寬文八年九月十七日、東照宮祭禮、諸士甲冑にて供奉す、今年眞田將監侍大將にて、公の前を過けるか、餘人皆平伏しけるに、將監一人しかせさりしを、側より無禮也と云人のありしに、公、將監は軍禮を誰に學ひけるや、介者不レ拜（禮曲禮に見ゆ）と云事、周の代の古禮と仰あり、或時御側の者に、誰はゝや疱瘡仕廻候哉と御尋被レ遊、疱瘡は仕廻候得共、未流鏑馬不二相勤一と申上るを御聞召被レ遊、其譯を御尋被レ成、其者與レ風誤て、下にていふ流鏑馬はいのち定といふ俗談を以て御答申上る、度々御問返し被レ成候ゆへ、やむ事を不レ得、俗語の趣意を委く申上れは、親の身にして夫程に思ふ事ならは、やめて可レ然と仰有てやみ候由、

一說に、流鏑馬止候事不レ詳、的三つに中れは、射上とて再ひせぬ事、菅八內射上と、菅家にいひ傳ふともいふ、又八內射上し後も、慥に有たり共いふ、（芳烈祠堂記に見ゆ）

一承應三年甲午の秋、備前洪水にて、百姓の難澁は云斗なき事也、公倉をひらきて濟ひ給ふに、悉く及ひかたかりしかは、大きに患思召して、是予か政事の不善成に依て、天の戒め給ふ成へし、罪なき百姓の此災にかゝる事、悲に餘ありとて、枕食をやすんし給はす、熊澤助左衞門御前に出て、此事を議しけるか、臣に一匁の策有とて、江戸に參り天樹院樣より公方樣へ申こはせ給はり候やうになけき申なは、捨置せ給ふへきに非すとて、頓て直に備前を發してかくと申せは、

黃金四萬兩貨し給りしかは、錢にかへ、領內の四方に運ひつゝ、分ちあたへて救ひ給ふ、役人の中に、民の二度三度に及ひて米錢を受るあり、如何して改へきといふを、公聞召て、事おそくは民ともいとゝせまるへし、幾度なり共あたへよと也仰有、

一寬文元年、和氣郡新田に井田を制作有り、

一同六年、岡山假學校出來、

一同七年、和氣郡和意谷に御墓所思立せ給ふ、公御見分として御出被レ遊、茅茨を伐て其地を定給ふ、伊里中村の源助といふもの、御先立御案內に出る、公草鞋にて御步行被レ遊、源助を御側近く召して、路の印を付よとて、御小刀を被レ下、一の御山、寬文八年出來立、二御山、三御山、四五御山、追々寬文九年十年比迄に出來、源助家に右之小刀有、寶曆二年春拜見す、赤銅に桐の木毛おり、中央に鳳凰金の居紋、兩端金のはしはみあり、

一和意谷御墓　下馬より一御山迄八丁といふ、其間ふみ石二千六百七十三、

一御山　參議樣

二御山　武州樣御夫婦樣

三御山　芳烈公御夫婦樣

四御山　右近大夫輝興君　武州樣御弟、五郎八樣御父、正保四亥、新八郎輝尹君　繼政公御兄、延寶七未、

守政元君　恒元君御子、延寶五巳、

五御山　攝津利政樣　參議樣御子、政虎君御弟、寬延十六年卯、加賀政虎樣參議樣御子、輝興君樣御弟、寬延十二亥、民部政貞樣恒元君御弟、寬永十酉、お六樣芳公御娘、延寶七未、

一御墓祭、每年二月九日、御同姓衆御名代有レ之、酒果茶御備、

一國中遠在へ御扶持醫者被レ遣候事、郡々之內一二ヶ所宛、手習所出來候事、是を在學校といふ、于レ今其跡といふ所あり、

一寬文八年、岡山の學校出來、公幷御連枝樣方度々御入、公の至らせ給ふ時は、學校御門前石橋より六七間も南にて、御駕籠より下り給ふといへり、

一寬文十年、閑谷の學校御造營あり、

芳烈祠堂其外講堂已下は、網政公の御代におひ〳〵出來、

公の衣服什器有り、皆儉素を專にし給ふ御事のみなり、

一或時岡山學校へ御入被レ遊、鑓稽古之內、一人雌子

の敵れたるを着す、御覽有て、御感悅被レ遊、若き者外儀に心なきは奇特也とて、御手つから御帷子を被レ遣、

一公御隱居被レ遊候已後、西御丸に被レ遊二御座一、或時最早蚤の時分と思召候段被レ仰、網政公被二聞召一、郡方へ仰付られ、早速指上候而御覽被レ遊、如何にして取來と御尋被レ成候、在より指出候段申上候へは、百姓の力を勞したる蚤は、慰に不レ成と御意被レ遊、

一御庭朝顏の垣を、小作事より拵る、もとより新き竹にて奇麗に仕、御覽有て、費成事也、竹の切さし抔は格別の事、かやう成事に、新き物をは用間敷事なりと仰あり、

一或時御凉屋にて、觀世よりを被レ遊候而、御蚊帳の釣手に被レ成、是にて用足りぬとの給、御側の者の奢を示し給ふ御趣意也、夜の御召物は、茶羽二重の外はなしと語り傳ふ、東照宮の御廟を御造營に、萬金を惜み給はす、國中堤防殊に力を盡せり、是熊澤氏の教を受用被レ遊る〻故也、

一西御丸西の御堀は、鴨澤山に居る、或時池田大學御供して御庭を廻りし時、此さまより鴨を御拂被レ遊候は〻、能御慰と申上るに、此邊は別而堅き法度場、伊達殿より免し無レ之而は、我等自由には不レ成と御意被レ遊、大學早速御城へ參、此由申上る、直に御徒頭を御使者にて、唯今迄何の御心付も不レ被レ成候、此已後御拂被レ遊候樣にと被二仰遣一、忝と御返答にて、御拂不レ被レ遊、其後四五日過、御對顏之時、御拂被レ遊候哉と御尋被レ遊候得者、未御拂不レ被レ成候、又御直に御拂被レ成候樣にと被レ仰候、已後折々御拂被レ遊候事、

一網政公の女中懷妊なる有て、次第々々に榮耀に成て、戶障子のあけたて付に、眞綿を付るといふ樣成事、萬事是に準せり、公御聞被レ遊候而、或時早朝寢に及迄、御廟の馬場にて種ヶ島鐵炮御上覽有り、其後自然と痞の沙汰もやみたり、

一或時池田大學、熊澤の事を論して退出しけるを呼返させたまひ、今の汝か云つる詞に、心得られさる事有、誰を何の職に稱すへきやといひしは、もし其人よからぬ時、されはもとより疑存て、決斷し侍らさりし程にやとは申せしなりと、いひひらくへき爲成へし、國の大臣は、人をすゝめあくるを職とす、自ら任する

所の職を、左樣の身構してよかりなんや、汝か父伊賀は、遠き慮有て、予をも大に諫爭、人をすゝめ其職に任たる者也き、よも汝は伊賀か子にあらし、伊賀今隱居したる故に、汝年若けれ共、政を執行ふへき者と思ひたるは、予か不明也、汝は伊賀か子也や、又誰人の子也やといひ聞すへしとて、しきりになしらせ給へは、大學頓首して居たりけるか、涕泣しけるを御覽有て、さては伊賀か子にてもありけるか、汝等こと き者に國政をとらする事、危き事也、能心得よと仰せて內に入らせ給ひけり、後に世に稱せられたる義口は、此大學か事也、

一御隱居已後も、半年程つゝ度々江戸へ御詰被レ遊、御鷹なと御拜領ありて、御道中も御殺生御免の上意有レ之、

一御年寄共へ御遺言にも、兎角其方達も能々被二心得一候へ、銘々の上にても考て被レ見候へ、大身成ものは、家老たるものよくなければならぬものにて候、國の仕置も其方共に任候へは、隨分平生無二油斷一、諸事可レ被レ附レ心候、其方共家も、家老能候へは、治り候ものにて候事、

一御病氣御大切に成せられて、大坂の良醫北山壽庵を召して、御膽被二仰付一退ていふ、御病治すへからす、御着物等諸事御家風質素成事を感して、大守誠に君子也と感涙して歸る、初は御內所に御座在しか、後に甚重らせたまひて、御表へ御出被レ遊、昵近の諸士共御介抱申上る、

一御病中眞桑瓜を御好被レ遊、其節未熟瓜不自由につき、池田美作家に出來るを獻上す、御好のものなれ共、指出候を御覽ありて、先御廟へ備候樣に仰て、其後被二召上一、御一生御廟を御尊信被レ遊候事甚厚し、

御病中瓜を御好被レ遊候故、御忌祭の節、御果子の內へ必瓜を獻せらる、御逝去砌、餘程の年數の內は、極て美作家より指出候由、其後者郡中より出す、たとひ未レ熟候節にても、被レ獻事于レ今其通也、

一天和二年壬戌五月廿二日、岡山西御丸にて御逝去被レ遊、御享年七拾四歲、初喪より大祥忌に至るまて、御祭禮儒禮を用ひ、六月十三日、和意谷へ御入被レ遊、御棺の木は兼而御壯年の節より、土佐公より被レ進有レ之由、諸役人幷禮節諸事別に記レ之、

公御一生國事を勤勞なされ、御學文も初めは王學、後朱學御尊信被レ遊、世に四君子と稱せし其壹人にて、

天下に名を顯し給ふ、國中の人一人として其澤を蒙らさるものはなし、

一享保已來之事なり、或備前侍の江戸淺草邊の茶屋に腰掛て居る處へ、其邊の老人七十有餘なるか來れは、茶屋の亭主いふやう、老人は此御侍を何國の御家中と被レ見候、兼而其元諸國の風俗を能見わけ候と被レ申候へは、目利被レ致候よといへは、されは先三拾萬石已上の御屋敷の御侍と見候、藝州ともみへす、長州御家中にて可レ有といふ、亭主いふは、兼て自滿なれ共違申候、此御侍は備前にて候といへは、老人驚て、侍に對していふ、必御心にかけられましく候、備前も御風義殊外替り申候、江戸にても備前風とて、御家中の風義甚しつほりと仕候而、能見分られ候に、只今は左樣にも成候哉といふ、扨今の備前風と申候、新太郎樣御代、江戸中に無レ紛御質素成儀に御座候處、今は髮の上御衣服、已前の御家風は少も無二御座一、加樣にも違候ものかなといへは、其侍は無レ詞して歸り去るとなり、

有斐錄亨

一明曆元年、初而御祠堂御祭御發記、一說、承應四年ともいふ、今の御月見櫓と申御櫓にて、參議樣武州樣御夫婦樣御神主出來、萬治元年、今之御殿御造營有レ之、西之御丸より御神主御移徙被レ遊候節、雨降候得者、公には御草鞋御手傘にて、御供被レ遊候由、

明曆二年八月十五日

前レ期三日、齋戒、

沐浴更衣、不二飮レ酒茹レ葷、不二弔レ喪問レ病聽レ樂、凡凶穢之事、皆不レ得レ與、

前レ期一日、設レ位陳レ器、

主人帥レ衆、大夫及執事者、洒二掃正寢一、洗二拭椅卓一、

考卓　茅砂　　香案茅砂
祖妣卓茅砂
祖考卓茅砂

洒掃酒盞版
灰湯火炙版

詣二香案前一、跪告辭曰、

孝孫左近衞權少將　松平新太郎、今仲秋之月、有

レ事ニ於祖考妣一、敢請ニ神主一、出就ニ正寢一、恭伸ニ奠
獻一、　俯伏興

設ニ蔬菓ニ三方　熨斗　昆布　勝栗

考　藤右衛門　外記　兵部神加　彦右衛門小脇

奉レ主就レ位祖妣　數馬　主人前導

祖考　美作

序立　主人　出羽　伊賀　信濃　藤右衛門
四拜　五郎八　長門　淡路　若狹　數馬　美作

祝　櫨左衛門山内

降神上レ香酹レ酒　銚子　信濃

盞　彦右衛門　俯伏再拜

徹ニ蔬菓一　外記　兵部　彦右衛門

本主人　半十郎

進レ饌　本主人　執事九兵衛田中一　二長門　三若狹　二出羽　三淡路　二五郎八　三伊賀

本主人　半彌

考　藤右衛門　奠盞　奠盞

初獻主人詣ニ神主前一祖妣　數馬　銚子源次郎尾関

祖考　美作　奠盞　奠盞

主人祭酒奠レ酒　俯伏興　每位同

詣ニ香案前一跪　主人　讀畢主人俯伏再拜復位

讀レ祝

奉饌　五郎八

考　藤右衛門持ニ徹飯器一八太夫　彌三郎

徹飯羹　祖妣　數馬　羹奠通　半十郎

祖考　美作　盛飯　外記　半彌

持ニ徹酒器一　半彌

洗盞　兵部

持ニ洗盞器一　兵部

主人　亞獻　儀式同前　銚子源次郎

奉饌　五郎八

考　藤右衛門持ニ徹飯器一九兵衛彌三郎

徹ニ飯羹奠一祖妣　數馬　羹奠通　半十郎

祖考　美作　盛飯　外記　半彌

洗盞彦右衛門　儀式執事　同前

終獻主人　儀式同前　銚子源次郎

奉饌五郎八

主人　侑食　執注湯諸位盞　猶香案前　再拜復位　銚子源次郎
　　猶挿箸于飯中　主人

皆出閤レ戸祝啓レ戸復レ位　祝三作ニ咳聲一

點茶　兵部

考　伊賀

獻レ茶　祖妣　長門

祖考　出羽

辭　饅頭

考　若狹

獻レ菓羊羹　梨　妣　淡路

柿　蒲萄　祖　信濃

主人　祝取ニ祖考前之酒盞一、詣ニ主人之右一、
　　授ニ主人一、即主人傾ニ別盞一、略嘗少許一、
　　祝取レ箸、折ニ諸位之飯一各少許一、盛
　　レ盤、詣ニ主人之左一、辭畢、主人飯福
　　嘗胙、俯伏再拜、

辭神　參四拜

焚ニ祝文一

送レ主

徹レ饌

源太夫

御膳立忠右衛門

七郎兵衛

甚右衛門

同洗　半右衛門

與右衛門

明曆二年丙申極月朔日

家中へ申渡覺書、出羽伊賀若狹に寢間にて讀聞せ、

何も存寄候はゝ可レ申候、直し可レ申と申聞候へは、

何も御尤と申候、其後惣士中不レ殘五座にして、若

狹よみ、口上にて委細を申聞候事、

口上にて可ニ申渡一覺

一先年きゝんの節、壹成可レ遣と申出候へ共、指上候

に付、其通に仕候、其後可レ遣と存候得とも、家中風俗

惡く、おこり極ての災に候へ者、大きにこらし候はて

は、おこりもやみ申間敷、又遣し候ても、足にも成ま

しくとひかへ置候得共、よきなきすりきりの分、近年

物成惡く、何と儉約に仕候共不レ成は必定たるへく候

間、此度右之一つ成遣候、借銀無レ之者は、藏より米にて請取可レ申候、借銀有レ之者は、此壹つ成を以て、借銀の本をへらし可レ遣候、當分手前のたりに可レ仕よりは、本へり候へは、長きすくひたるへく候、其うへ來年より物入打續き候へは、只今一同に藏より遣候事も不二相成一候、借銀不レ仕者に、借候者よりは手前迷惑仕候者も可レ有レ之候、公儀へ苦勞かけす、とかく難澁仕段、奇特に存候、手前成候者は、尚以只今より後、すりきり不レ申候樣に仕、人馬懈怠なきやうに仕候段、何より以奉公たるへく候、

一來年より、家中一同に、定物成三つ五歩と極め可レ遣事、

一儉約と申も度々申聞候へ共、能合點不レ仕候か、又は合點仕候者も、我儘を仕にて可レ有レ之候、儉約と申は、丙所のおこり費をやめ、公儀を第一に勤め、軍役公役のたしなみ仕こそ、まことの儉約にて、まことの士にて可レ有レ之に、人にはよるへく候へとも、丙所はおこり、うわむきにては、人馬をもしかくたしなます、儉約なと、申者有レ之由聞傳候、今より後、士の禮義を存、丙所をつめ、軍役公役の心かけ專一に可レ仕事、

一勝手方の物語、手前不成のなき事なとは、町人も人かましき者は不レ申候義に候を、唯今は士の上にも恥を不レ存、けんくは申をりこうの樣に風俗成くたり候、此方に度々取上候故申と存候間、此後は人々手前のそせう、老中も取次に仕間敷候、今よりは獨立の覺悟可レ仕候事、

一家中にて惡口をはきちらし、風俗をみたり候者有レ之と見へ候間、左樣の者は昔より治第一のさまたけと申傳候條、承届候はゝ、曲事に可二申付一と申聞候を心得そこなひ、仕置の事を評はん取さた法度の樣に申由に候、それは聞候て心得に成事も候へは、少も不レ苦候事、

一子を育つるは、母の乳ほと能はなしと申傳候、大身にても其理を知人は無レ之候、國主の內室にも左樣成か在レ之候に、小身者迄乳をとらねは不レ叶樣に風俗有レ之と聞及候、沙汰のかぎりに候、小身者は猶以母の乳にてそたて、家內に女數すくなきやうに可レ仕候事、

一此前家中の心得自然の時、末のつゝくへきかんかへもなく、むさと人多に可二召連一樣に覺悟仕と承候故、人數つもりきりつめて申付候、自然の時は、夫にては成ましく候間、增レ人可レ遣と存候へ共、飢饉已後、用銀も不足にて、家中へ合力成間敷候間、自然の時人々手前さはきに可二罷出一覺悟尤に候、人つもりもこれほと不二召連一しては成間敷きと存候分、面々に書付、組はつれは老中、其外は番頭迄渡し可レ置候、重而見可レ申候、人くはり之儀、此方に思案仕置候、是も重而可二申付一候事、

一家中作法、又は面々の心得、度々申聞候へ共、今以無作法に惡き心得の者有レ之樣に聞傳候間、今より後彌作法惡き由承候はゝ、一組切におしたて、横目を入置、家內の義迄具に可二承届一候間、何も左樣に可二心得一事、

一近年度々申聞候事、大方は士中への異見にて候、法度と異見とは格別に候、異見は度々申さすしては不レ叶候、士中より我等に異見聞度候、異見を法度と存候はゝ、大き成心得そこなひにて候事、

一祝言の事、先年申付候へ共、今以不レ入事共仕候樣に存候間、有合の物にても、身代よりけんかくに輕くもなく、むさと人多に可二召連一樣に覺悟仕と承候故、人數つもりきりつめて申付候、自然の時は、夫にては成ましく候間、增レ人可レ遣と存候へ共、飢饉已後、用銀も不足にて、家中へ合力成間敷候間、自然の時人々手前さはきに可二罷出一覺悟尤に候、人つもりもこれほと不二召連一しては成間敷きと存候分、面々に書付、組はつれは老中、其外は番頭迄渡し可レ置候、重而見可レ申候、人くはり之儀、此方に思案仕置候、是も重而可二申付一候事、

一家中作法、又は面々の心得、度々申聞候へ共、今以無作法に惡き心得の者有レ之樣に聞傳候間、今より後彌作法惡き由承候はゝ、一組切におしたて、横目を入置、家內の義迄具に可二承届一候間、何も左樣に可二心得一事、

一近年度々申聞候事、大方は士中への異見にて候、法度と異見とは格別に候、異見は度々申さすしては不レ叶候、士中より我等に異見聞度候、異見を法度と存候はゝ、大き成心得そこなひにて候事、

一祝言の事、先年申付候へ共、今以不レ入事共仕候樣に存候間、有合の物にても、身代よりけんかくに輕く可レ仕事、

一當分家中悉狩り悦ひ候ても、ひつけう風俗あしく成行候へは、よきにてはなく候、當分上をうらみそしり、迷惑かり候ても、畢竟戒に成行候へは、あしきにてもなく候、たとへは美物を給候と、藥をのみ候樣なるものにて候、當分のよろこひは十か九は毒に成、戒は十か七つもくすりと可レ成候、此前きつく申付候とて、家中いやかり、此度は何事も申付す候とて悦ひ候よし聞及候、いつれか能にて候はんや不レ存候、自今已後家中の悦と不レ悦とにはかまひ申間敷候、家中の樣子次第に、成程きつく可二申付一候義も可レ有レ之、又やはらかに申付候義も可レ有候、人の申ならはしには仕間敷候間、人々は不二申及一事迄も、覺悟作法よく謹み可レ申候、

明曆三年三月二日、御郡奉行共御前へ被二召出一、一昨日寄合を仕候由、替義も無レ之候哉と御尋被レ遊、其後何茂に被二仰聞一候は、

一近年何も心得違候、百姓といふ者は米をは喰ぬもの、ぬかはしか抔食物とする者にて候由、吾人存候と

思ひ候、惣而百姓も人にて候へは、米を食する筈にて候へとも、得食さる様に、此方より仕置仕候故、近年は喰不レ申候、先根本を何も心得候はては、萬事の仕置たかい申筈にて候、末々細かなる事は、此方より指圖は仕難く候、郡により所による事にて候、其は面々かおこたらす心に入さへ仕候はゝ、いかやうの事も出來可レ申候、先上様の御本意御願は何もなく候、一天下の民、壹人も飢こゝへ候人なく、國富さかへ候様にとの御願の外は無二他事一候、然共御壹人にては不レ成故に、國々を御預け、又は小給人も其通にて、國を亡所に仕、一國の人民歎申候様に仕候は、其一國の民歎を皆上様御壹人御かふり被レ成候へ者、上様の御冥加へり申候様に仕候事、第一の不忠無二申計一候、又吾等も壹人しては、國の事不レ成候故に、何茂に知行所を預け、此方の本意の如く仕置仕候へとの事にて候を、皆吾物に仕候故、下民むさほり飢かつへ人出來、今日も不レ知様に罷成候事、不忠可レ言様なし、吾等への不忠計ならは左も有へし、皆上様へ御かふり被レ成候へは、其分にては置れす候、又箇様に申せは、惡敷心得たる者は、唯慈悲と斗合點仕と見へ候、尤吾に對し慮外なと仕候を、科に落し候は有間敷事に候、其者壹人の覺悟に依て、諸人習惡敷成候か、國の爲に不レ成ものは、不便なから百人成共成敗可レ仕候、近きたとへ可二申聞一候、我等國の仕置無沙汰に仕、一國の民飢こゝへ、亡所に成様に仕置候はゝ、上様より御改易被二仰付一候はては不レ叶事に候、其如く百姓も己か業に怠り、他人迄も引崩候様の者候はゝ、成程きつく申付候はては不レ叶事に候、此本を能合點し、萬事可二申付一候、十村肝煎抔のあてかい肝要也、むかしの大庄屋に不レ成様に 合點可レ仕候由、具に御口上に被二仰聞一候事以上、

同五月十五日、御町奉行御郡奉行共に被二仰付一候覺、

一當町幷在々の酒屋法を破り、百姓に酒を賣候もの有レ之をあては、酒道具共に闕所に申付、已來二度酒屋させ申間敷候事、

一法を背酒を買候百姓は、田畠共に取上け、人をも召仕候百姓の下人の譜代に可二申付一事、

一當町在々共に、あめちわうせん仕候義令二停止一之條、賣申もの於レ有レ之、曲事たるへく候、

一同日御郡奉行不レ殘被二召出一、被二仰聞一候は、度々申聞の如く、萬事打はまり細に精を出し可レ申候、又法を守先例を引事尤可レ有儀に候へ共、事により時により、法にかゝはらす、能事可レ在レ之候、事多をむつかしく思ものは、法令を引申度可レ存候、打はまり唯能様にとあつく存知候ものは、身かまへなく可二申付一と存知候、縦は唯今の如く日てり時分、水之義なとに可レ有レ之と思候、我田地に不レ入水にても、他村へ遣候へは、已來例に成と思、身かち成百姓可レ在レ之と存候、申所百姓の身としては尤に候、左様之所に奉行處て、何かたの田も公儀のにて候得者、私として身かちに可レ仕様なく候間、すたる水は遣、以來法に不レ成書物抔仕候はゝ、身かちなる心根百姓共連々にはなをり可レ申候、郡奉行より事多をいやかり、先例々々と申候はゝ、百姓共は猶以わる心に可レ有レ之候、是奉行の仕様に可レ有レ之事と存候、とかく萬事打はまり申段、第一と可二心得一旨被二仰聞一候事、以上、

萬治元年 霜月廿一日、番頭物頭組頭 御城へ被二召上一候時、兩老中を以、表之於二御居間一被二仰渡一候覺、

一眞田將監丹羽惣兵衛に 坂本孫右衛門悴源右衛門、此度無作法之事、親孫右門事、當分は不レ存義も可レ有レ之候へ共、去候年之事に候、男色計も不義に候、此度之事不レ誠放之事出來之段、不屆に思召候間、御改易被二仰付一候、源右衛門義は存命に居候共、御成敗可レ被二仰付一候と思召候、岡田安之丞義者、存命に居候はゝ、其儘に可レ被二指置一と思召候處に、相果不便に思召候、

一芳賀內藏之丞、伴庭彌左衛門、悴彦七、坂本源右衛門同前に思召候間、御國追放被二仰付一候、已來若御國へ立歸、右之義に付宿意存候はゝ、親兄弟曲事に可レ被二仰付一候、

一日置粂之助に上方清兵衛弟善六、右同斷、

一尾關源次郎、土倉登之助に、田村庄太夫一所に有レ之、浪人村尾權兵衛、右之儀遮而取持候由、本人より曲事に思召候間、御成敗被二仰付一候、

同被二召上一候士中不レ殘、於二竹之間一御直に被二仰渡一候覺、

一內々可レ被二仰聞一と思召候處に、今度若き者共事を仕出し候を、序と思召被レ爲二仰聞一候、先年も御家中

風俗心得之樣子被二仰聞一候得共、風俗は能不レ成、結句惡敷成候故、今度之樣成義出來と被二思召一候、此度之元は男色故に候、男色者天理に背き、人倫の作業には無レ之候、世俗之誤にて候、當國他國共に、士事之樣に存候、被二仰出一も尾籠成事に候得共、士の子共を遊女抔の樣に、彼方此方と引廻し候事、其悴の身にしても、無念千萬成事に候、他國之義はともあれ、御家中之義は、急度可レ被二仰付一候、今度之者共、世俗誤り來るならいに候間、此度者其儘に差置せらるへくとも思召候へ共、左候へ者不レ苦事と存、以來事止申間敷と思召、御成敗追放被二仰付一候、芳賀內藏丞眞田將監相組之者共、此度之品御尋被レ成候處に、樣子不レ存、我相組之內箇樣之儀不レ存候段、不沙汰千萬思召候、將監は少は存候由、遠所にも罷在候か、內藏丞不レ存義、別而不覺に思召候、此義に付組御取上被レ成候共、兎角は存間敷候、人にはより申候へとも、大形相組之內麁略成樣に思召候、扨又右之者共は、人のさはりに成候とても、一兩人五三人のそこなひにて、さのみの事にては無レ之候、御國政の妨に成候者、大惡人と思召候、向後者能侍に可レ成と、人々隨分嗜可レ申候、風俗惡敷義理にくらく候て、無レ詮事に義理を立、心得違に思召候、誰とても能侍に成候事を、いやと存者は有間敷候得共、うかと心得居申候故、能侍の道をしらぬ故不レ學、已來は能々侍の事を尋學、嗜可レ申候、組中も相和し、風俗能樣にと、是のみ御願思召候處にて候、先年組切に橫目御入置可レ被レ成と思召候へとも、其內風俗も能成候半と思召、唯今迄御延引被レ成候、組切に組頭を橫目に被二仰付一候由、則起證文前書御讀御聞せ被レ遊候、兎角大惡人といふは、國政を害する者を申事にて候、組中の子共兄弟は不レ及レ申、掛り居申浪人迄も、作法惡敷、長刀さし、かふき申もの無レ之樣に、善惡之事承屆可レ申候、御國政の障りに成候者は、虛言を申、人の善をきらい惡を悅ひ、行義わろく心むさき者之義を御惡被レ成候、

右被二仰出一候翌日、組頭中相談之上にて、書付を以て、日置若狹殿迄申候覺、日置久米之助津田左源太兩人、使に若狹殿之參、

一書紙前書、御案紙之通畏奉レ存候、併相組中萬事之義御耳に立、御尋被レ遊候節、不レ存候はゝ不屆に可レ被レ爲二思召一御意之旨、御口上に被二仰渡一候、此段相組中之義と申なから、御前之御耳へ達候樣に承候事は、中々成間敷と奉レ存候、殿樣には御慥目數多御座候て、申上義に御座候、惣而惡事は人々隱し申世俗之習に候、殊外此度私共箇樣に被二仰付一候上は、彌惡事隱密可レ仕候間、猶以不二得承一事のみ可レ有二御座一と迷惑仕候、或は私未レ承候內御耳に立、御尋被レ成候、則不レ存義も可レ有二御座一候、此段御赦免被レ成候樣にと申上にては無二御座一候、被二仰付一候通、隨分御意に應し候樣にとは可レ存候へとも、右申上る通りに御座候故、只今御理申上候、此段寄合申候組頭神與田助兵衞、竹腰八郎兵衞、津田左源太、日置粂之丞、田中惣兵衞、薄田藤十郎、安藤平左衞門、堀彌次兵衞、村上九左衞門、丹羽惣兵衞、水野甚兵衞、湯淺又右衞門、

右之通若狹殿へ申候へ而◎は殿樣御內意は、此度不慮之義に付、其頭前後之樣子御尋被レ成候得共、不レ存候故、其頭前廉にも存候はゝ、頭方無事に可レ仕候に、不レ存體故箇樣之事に成候と思召候、以來之義、番頭組頭共に、其組々に入ばまり、萬事致二吟味一無事に成候樣にと思召候ての事に候、人により可レ申候得共、大形相組之儀、疎略成を思召候間、向後は何も相和候樣に、常々可二申談一候、相組之內事出來候、則番頭組頭無事に可レ仕と相談候得共、同心不レ仕族、又者此度之樣成事有レ之候者、內々老中迄成共申上置候樣にと思召候、併一應伺二御前一可レ申候由、

同廿三日、津田左源太、日置久米之丞、御城に被二召上一、於二御數寄屋一御直に被二仰聞一候覺、

一先日被二仰出一候趣、得と不二呑込一趣、老中へ相尋候由、尤に候、其組々に事出來候刻、少事は隨分異見申、番頭相談仕、下にて相濟候樣に可レ仕候、今度之樣成義は、兼而老中迄申聞せ置候へとの事にて候、大成事は他所江戶迄も相聞る事に候を、うかゝと仕置候事、沙汰之限りと思召候、組合侍共之義、少々つゝの事を承、申上候へと思召にては無レ之事、

一相組中若き子共、かふき不行義成者有レ之候はゝ、親類共にも申聞異見させ、何とそ引直候樣に尤に候、かふき候者、皆々下々のまねにて候、侍たる者道具持中間之まね致廻り候事、扨々淺ましく口惜覺悟と思召候事

一下々長き刀脇指之直成を指、かふき申者有レ之候はは、隨分穿鑿被二仰付一、他國者は御國を可レ被レ爲二追

拂、御領分之者は堅申付、直させ候樣に可レ仕候事、
一主人はりちき成體にても、下にかふき者を好候て、召遣候者有レ之候、左樣之者は、心中如何にもかふき者に候間、相組中右之通之者候はゝ、隨分異見可レ仕候事、此二ヶ條番頭中被二召上一候に不レ及候間、其組頭に御內意之趣に、其番頭へも可二申聞一候、右之かふき者よりも、人の惡事を悅ひ、何角無益の事を申ふらし、虛言計にて心むさく、政道之妨に成候者を大惡人と思召候、惡口と申もの、去年も有レ之由、左樣之者は若き者に限らす候、右のかふき者は心あさく、異形體を仕斗に候、とかく風俗を亂し、仁政を害し申者を御惡被レ成候間、急度罪科に被二仰付一度思召候事、
右之趣兩人に御直に被二仰付一候故、罷歸り若狹殿へも申候處、其通之御趣意に候由、其通夫々の番頭へも申談候、

起請文前書之事

一相組中之儀、年々被二仰出一候御法幷御敎能相守申者、又者相背申者、或は私にして御國政之さはりに罷成者、隨分承屆可レ申事、
一かふき者之事、御奉公人之外たりといふ共、組中に掛り居申者にても、能々承屆可レ申候事、
一相組中之儀、可レ成程入レ精相和候樣に、番頭共可二申談一候、
右之條々、緣者親類たり共、御尋之節は、善惡之義、依怙ひいきなく、有姿に可二申上一候、不レ及レ申御橫目職は、君之後目にして、諸侍之直を賴む所なり、然るを其職に居て其職を不レ勤者、尤罪の重き者也、我朝武士之守護神八幡も、時に照覽仕給へ、依而起請文如レ件、

萬治元年十一月廿五日　　白紙墨判
　　組頭中連判

萬治元年極月朔日、被二仰出一候御書付之內、
一軍陣之時、いにしへ殿樣程之大名、人數七八千斗と被二聞召一候、先年も被二仰付一候、御家中人數積り、隨分少き樣にと被二仰出一候得共、一萬五六千有レ之候、然共人少にて難義仕候者可レ有レ之由被二聞召一候間、難義之樣子書付、人積仕上可レ申候、幷先年は幼少之子共、唯今は軍可レ勤程に成候者、其下人又書上、人積り之內、有人不足人書出し可レ申候、

萬治元年十二月四日、伊木長門、池田伊賀、日置若

狹、土倉淡路、池田主計、御近習之面々、御郡奉行、御代官、其外御城に相詰罷在候大小姓兒小姓迄、御前へ被二召出一、左之通御口上仰二仰聞一、
一當年之樣子、飢饉近きに可レ有レ之樣に存候、自今已後は、如二先年一救候義難レ成可レ有レ之候間、奉行代官共、只今より其覺悟仕、不レ飢樣にもくろみ不レ懈可レ仕事、
一國富萬人豐成は、民業を精に入、不レ怠に有レ之候、此旨は不レ及レ申、何も存之前に候へ共、心身打はまり、我家內の如く可レ存との事也、口にて申付る迄にて、實に心に不レ存者、しるし有間敷候、百姓とても人毎に耕作之義、具に不二心得一由聞及候へは、奉行代官仁愛を本として、怠る者を戒、不レ足者をは導き、萬植物の時節迄能考おしへ、我と不レ懈すゝみはけみて、油斷不レ仕候樣に申付候はゝ、國豐に可レ成事無レ疑存、是第一民を愛するにて候、然るを惡敷心得たる者は、眞實のおしへなく、口上にて計申付、また民を愛するとはいへと、或は業に怠、もしくは奢者、又は無禮成者有レ之といへ共、賤者なとゝあなとる心よりいましめ、さても有へし、又暇なき身に禮義をなすは、不レ謂ついへとおもひゆるすも有へし、
本民も同敷人なれは、あなどらすして禮義を正敷可レ敎事也、惣而眼前之儀は、せはしく理屈たけく申、箇樣成奉行の郡民は、心立あしく可レ成候へは、奉行申付義も不レ用もの可レ有レ之候、然を奉行に申付義も不二聞入一、奢橫道に成候なとゝ、奉行の內にも申者有レ之由聞候、打はまりまめやかに精を入者は、おのつから民の惡をは擧さるへし、己か勤敎の不レ足事を實に知れは也、然るを却而右之如く申者は、沙汰の限り、不レ及二是非一事に候、其者の心根を察するに、己か申付樣惡敷、勤の不レ足故とは不レ存して、世間の毀を恐れ、申わけの言なるへし、己さへ其職に懈て、民を敎る事可レ成候哉、我等年々申聞趣意を不レ守、己か身かまへ成者聞屆候はゝ、急度曲事に可二申付一者也、
一先年も度々如二申聞一、第一奉レ對二上樣一、大不忠と存候得は、尤罪の重き所也、凡兵亂の時に至ては、忠を存者多く、無爲之時忠を思ふは少し、すへなから我此忠を存候間、能々此旨を堅心得候て、我志を可レ助者也、右之段具に申聞は、奉行共の心得も人により、先年の比よりは、世間の毀にひかれ、口落仕へき樣に思

召故なり、

一家中のとなへ、又は謀箱に入書付を以て見るに、近年民へ御あてかい難ㇾ有義なり、此御恩を存、萬事正路に可ㇾ有を、還て徒に奢、或は禮義をしらすなとゝ書付有、尤おしなへて左様にも有間敷候得共、一人にても曲事成義に候、急度可ㇾ戒有ㇾ之候、又近年の御恩を可ㇾ存義とは如何可ㇾ有ㇾ之哉、人により歷々士にも、古主の恩を忘れ、又常々恩をも不ㇾ知者あり、下民には常々恩をあたふ事なし、又近年救は時至て不ㇾ得ㇾ已はなさて不ㇾ叶事也、是珍敷事にあらす、如ㇾ此のうは さ老中聞まとわれ候はゝ、奉行共伺義に付被ㇾ申付ㇾ事に、若誤可ㇾ有ㇾ之哉と無ㇾ心許ㇾ存候、すゝむ所をくしかれ候ては、其者志不ㇾ盡者也、大形之者は身構へに成可ㇾ申候、尤惡敗義をも其分にして可ㇾ被ㇾ指置ㇾといふにはあらす、世間之毀を聞入、よしとおもひ、我趣意を忘れ、もしとかむる心あらは、被ㇾ申付ㇾ品誤可ㇾ有ㇾ之哉と云事也、かく云はとて、人々言をふせきいはせさる様に心得よと云にはあらす、我志を得心して、其趣意に背、身かまへ成奉行代官有ㇾ之は、我にかへて可ㇾ被ㇾ敎戒ㇾ候、殘而老中も、今此職に不ㇾ預といふとも、家中の重と可ㇾ成人達なれは、我趣意を守られ、奉行惡事あらは可ㇾ被ㇾ戒候也、

一右申如く洪水より已來申付義、年々下民難澁仕、其上に洪水飢饉時に至て、救候はて不ㇾ叶事也、恩をあたふるにあらす、然るを其仕置我爲にして、下民より其返報を可ㇾ請故に、何も存候やらん、御恩を可ㇾ存抔と、奉行の內にも申者有ㇾ之と存候、先年より此旨は度々申聞候得共、于ㇾ今確と得心不ㇾ仕と見へ候、全我可ㇾ利爲にあらす、國を預り候へは、其職に隨ふ也、一習といふ事、人々能可ㇾ心得ㇾ事也、百姓はぬかはしかの類を食して、しかと米なとは不ㇾ食ものと習におもふ也、百姓も人なれは、人の食物を食するは尤不ㇾ珍事也、然を牛馬の如く存なす習心より、少よろしけれは、牛馬に替り人かましき事をとかめそしるも、又是よりおこると見へたり、人間を禽獸のことく存なす事、習といひなから、天罰のかれ難かるへし、可ㇾ恐愼ㇾ事也、

一士中近年物成惡けれは、能仕遣度と存候、然共民に力なくては、何を以て可ㇾ成様なし、民は餓死すへき共、侍さへよけれはと存者は、いかなれは有間敷候得共、士之本意も、民を豊にするに有事必然なり、然る上は民に農業をはけますより外はなき事也、此故に萬人の安土に本たる所は民なる事を堅存、可ㇾ成程耕作に力を盡させ候様に、奉行代官精を出し可ㇾ申候、右にも申如く、上様への忠と存上者、是非何も賴思也、

一仕置惡き時は、給人百姓之間、互にあたかたきと思ふもの也、然る時は上下同前なれは、罪の上に歸する事眼前にあり、近來當國之民共、給人を大形敵と思へは、又給人共の言を聞に、當國の民は邪心にして横道成由をいふ、しからは一國の民皆惡人かと思へは、先年給所召上候節有ㇾ之、給人をしたふ民有、是程くたれる風俗の中に、此給人之心難ㇾ有事也、左様之給所は、唯今申付仕置よりは能可ㇾ有ㇾ之候得共、其人斗へ返す事難ㇾ成勢なれは、先預り置也、右之品事多様なれ共、二ケ條に限るへし、一には奉ㇾ對ニ上様一忠と存事、二には國豊成時は、四民安堵の本なり、此二品不義にあらさる事をしらは、奉行の不足をは、大身は戒敎、小身はなつくへき事なり、然るを民豊成を聞て恨るは何そや、是諍心なるへし、惣て諍といふ事は、其類に有事なり、此旨を何茂承ㇾ之、百姓に對し諍心なと可ニ申付一哉と、定而可ㇾ存候、能願て合點可ㇾ仕候、年々民と給人あたかたきの如く思ひつる、其根に令有てそねむ故に、そしるも又是より起る、他國の民豊なるを開けは、可ㇾ感奉行もまた此理を不ㇾ知故に毀を恐れ、其心根士の道にあらさる事をしらは、恐に不ㇾ足事也、不義に可ㇾ恐哉、かくいふても恐者は、たとへは軍中において、遁は不義なり、進は義なり、皆敗するに、我壹人不ㇾ敗はそしらるへしと恐て遁に同し、事は替れ共、不義に恐るゝは同敗なり、凡郡奉行職を不ㇾ輕事也、萬人の安否の本なる事をしつて能可ㇾ愼もの也、

右之條々、郡奉行代官能心得、我志を助、實に精を入可ㇾ勤者也、

一萬治二年二月五日、軍役人馬積り帳、二月十五日より內に認、日置若狹殿差上候様に被ニ仰渡一、

此一件、別帳に書記、不ㇾ載ニ于此一、

同三月八日、御老中番頭物頭組頭鐵炮引廻中竹之間え被ニ召出一、段々列座仕、御軍法之條數御讀聞せ被ㇾ遊、此節大野良成御小姓組安藤奎組之頭役に付、末席罷出奉ㇾ承ㇾ之、御口上と相違可ㇾ仕も不ㇾ存候得共、指上折五十

三ケ條書記ス、

道筋請取口　　萬治二年三月七日

一庭瀨口　池田若狹　美作監物　一野殿口　土肥右近　萬成口　眞田將監
一半田口　伊庭主膳　一金川口　日置若狹
一牟佐口　瀧川縫殿　宮城大藏　一佐伯　土倉淡路
一八堵寺口池田八之助　池田伊賀　一福渡　池田清八　一西大寺　土倉華人　池田數馬
一同迎　同田
一船手　浦伊部片上牛窓　伊木長門　中村主馬神圖　一兒島藤戸　池田主水　池田信濃

萬治二年八月朔日、出仕之時被二仰渡一、

一下女共金入帶（木綿にても、巻物等之ある帶金入、）堅御法度之事、見合次第剝取候樣に被二仰付一候、

萬治三年十月廿五日、八木左右衞門へ被レ下候御判物之文を寫に依て、歷長年中、輝政尊君より被レ下候御折紙も一所に寫す、

八木山村神職ゐ被レ下御折紙寫、

備前國和氣郡八木山村之內抱分、田方貳反五畝、畠方貳反九畝壹步、都合五反四畝壹步、依レ有レ孝レ親、永代扶助候也、仍而如レ件、

慶長六年十二月日　　輝政（有二御書判一）

備前國和氣郡八木山村之土民淨慶有二孝行之聞一、又能制レ石造二佛像一、其巧甚妙、予祖父相公感二彼孝行一、免二其家年貢課役一、以養二父母一、相公辭レ世之後、淨慶悲歎之餘、自造二相公之石像一、朝夕禮拜、有二子二人一、命二彼等一曰、我蒙二國主之恩一最深厚、汝等爲レ僧守二護此石像一、是我之所レ願也、二人之子　即剃レ髮爲レ僧、淨慶已死、長子亦號二淨慶一、能守二護石像一、亦事レ母有レ孝年久、予憫下彼等爲二出家之身一、而無中子孫之相續上、竊召二彼等一、令レ告レ之曰、祖父相公免二汝父之年貢課役一、依レ有二孝行之譽一也、然令二汝等爲レ僧無レ子、是不孝之第一也、況又汝等死後、無下子孫之守二護石像一者上乎、願改レ過還レ俗、子々孫々、永守二護石像一、誠可レ謂レ達二父之本意一歟、淨慶大悔二前非一曰、恭承二君命一、嗚呼復レ善之速、て有レ忠有レ孝、不レ可レ不レ加二褒美一、仍令二淨慶還俗一、號二八木左右衞門復善一、又賜地六石餘に候上、加二增十三石餘一、前後之高　都合貳拾石、永神像之祭田者也、

萬治三年十月廿五日　　國司光政（有二御書判一）

右御造營者、萬治元年共いへり、

萬治三年霜月廿七日被二仰出一、

一當物成三つ五步無レ之に付、御足可レ被レ下候旨、就レ夫年寄中、當免平し有合に被二仰付一被レ下候樣にと斷に付、御家中不レ殘、同事に御斷申上、則達二御耳一、何も存寄候處、御滿足に思召候、當年は物成不レ足候間、何も申候通に可レ被レ成候との御意也、

一組中より申上度事は、組頭を以可二申上一候、餘人を賴申間敷候事、

萬治四年正月被二仰出一、

一銘々召置候下女、御法度之大卷物等之帶ゐり仕候は丶、見付次第髮をそり可レ申候、男有レ之は、髮之はへ申候間、養手有レ之間敷候、則男養候へと可二申付一候、法度を背かせ候過怠にて候、又出替りに手形を以召置候事、先年被二仰出一候へとも、しかと御法立不レ申候間、今度急度銘々心得可レ申候事、

萬治四年六月朔日

御備立

右
若松太郎兵衞　草加五郎右衞門　池田數馬　池田美作　池田出羽

中備
深谷甚右衞門　池田求馬　池河內　佐野治兵部　河野殿

左
伊木長門　伊木日向　伊坂主馬　上齋藤加右衞門　瀨波彌八郎

御旗本
吉田清兵衞　梶浦大隅　丹羽兵部　日置若狹守

御後備
野村越中　山脇修理　瀧川出雲　池田信濃守

御後備
池田下總守　伊庭主膳　宮城筑後　下野掃部

安東平左衞門　生駒主水　伴內記　熊谷源五兵衞　湯淺右馬允　牧野將監　芳賀內藏丞

荒尾內藏之助　香西采女　布施兵庫

米田和泉　丹羽甚人　上泉治部左衞門　鈴木愛之助　小堀右衞門　湯淺半右衞門　河原九郎兵衞

寛文二年十一月十二日

芳烈祠堂記に見へたり

一寛文元年、和氣郡新田に井田被二仰付一二井出來す、井田村と名付、閑谷村と替地にし、古地に成、閑谷新田に成、井田成就之後、同四年、御假御殿立候而、御覽之爲御成被レ遊候由、

眞藤源助物語也

一異姓を養子に仕候は、譬へは桃之木の臺に梅を接たる同前也、臺か桃なりとても、花も實も梅に成候、名字は傳るといへ共、子孫絶候、此儀を不便に存、同姓を養せ度候得共、合點不レ參、我物すきの樣に存候と聞候、世上皆異姓之せんさく無レ之故也、然る上は、我等も先唯今は世上なみに可二申付一との御意なり、

一寛文元年丑正月廿日、江戸御屋敷燒失に付、御家中惣侍中として、江戸御書院にても被二仰付一候か、又は增役にても差出し可レ申候歟、土肥飛驒を以申上候處、則達二御耳一候處、何れも存寄御滿足に思召候、併先年さへ御作事輕く被二仰付一候、此度猶以之事御請被レ成間敷と御意被レ成候、其上にて老中是而被二仰上一候は、先年箇樣申上候得共、御承引不レ被レ成候故、此度は何とそ被二仰付一被レ下候樣に、一同に達而申候由申上候處、去年米高直之節、物成例年之通にもなく、家中之手前如何と無二御心許一思召候、上之不レ成時は、下として上を助け、下之不レ成時は、上より救ひ、相互に持合助合、君臣主從之道にて候故、志は滿足申候得共、此度も請ましきとの御意、且何共難レ被レ成候はゝ、御請可レ被レ成候へとも、是程の事は、いか樣共御取合被レ成られ候間、先御請被レ成ましき由、其後達て御老中願上申候故、御書院被二仰付一へきよし被二仰出一候、二月十五日、

一同閏八月朔日、士中御城番之節夜食、前には燒食なと持參候處、後には辨當持せ、外之間之番之者も、寄合候事なと有レ之候、夜長之時は、夜食給へ候はても成不レ申事、輕き燒食なと致、持參候へとの御意之由、

二月十九日、仲春御祭御執行畢而御禮應過、五郎八殿、香庵老、池田出羽、伊木長門、日置猪右衞門、池田信濃、池田八之丞、池田美作、池田數馬、池田藤右衞門、小堀彦右衞門、草賀兵部、湯淺民部、岩田八右衞門、尾關源次郎、土倉登之助、田中九兵衞、山內權右衞門、杉山五左衞門を御前ゟ

被二召出一、直に被二仰聞一候は、此被二仰出一年號不レ詳、正の事、別錄に在レ之年なるらんか、故に爰に記す、

一今日之祭首尾能仕廻大悅に存候、惣て國之大事二つ有レ之候、一つは軍陣、一つは祭にて候故、是程大き成事は無レ之候、然共國凶年凶事有時は、樂をも止候由に候、其故今日は樂止候、又番頭物頭何も召、昨頂戴、又何も盃事仕候へ共、是も止候、然は去年凶年、當年火事打續候上は、家中も猶以萬事儉約に愼可レ申候、次而に申候、五郎八香庵は餘人とは違候得共、當國に御入候上は、此國之掟に御隨ひ候て能候、衣裳美過候と存候、又禮應も如二家中之法一尤に候、左候はゝ、其方達禮應候者結構に可レ仕候、左候へは國之法破れ申候、家中禮應にも、端々に法に過たる由聞およひ候、去年者米直段も能候へ者、借銀等おしやすく候半と存候、左樣之義に付不レ覺者出來可レ申候、一兩年は禮應等又破れそうに候由聞及候、取分出羽長門猪右衞門等は、家中の手本にも成人なれは、彌萬事敬儉約を專に可レ仕候、出羽は一入遠塞之內と申、旁敬み尤に候、就レ夫內々は春中にも老中ゟは可レ參と思候得共、當年は參間敷候、右之通是へ罷出候番頭物頭承候て、相役共に語可レ申候旨被二仰聞一、

一郡奉行共不レ殘御前ゟ被二召出一、被二仰聞一候は、寄合仕候よし、唯今は爲レ替談合も有間敷と思召候、當年は我等少無二心許一所有レ之候間申聞候、去免惡、我等勝手渴々之體を皆聞をよひ、又當年火事、旁に付笑止に可レ存候得は、免之儀なとに心引れ、若不能免も皆候半と思候、能此所を得心可レ仕候、

一去暮には、百姓とも町方にて調物潤澤に仕なとゝ申候儀聞候、此所思案仕候に、左樣に一國於レ有レ之は、一段滿足成事に候へ共、押並候て左樣には有間敷候、縱ひ一村に弐人つゝ手前成者候ても、七百八拾村ゟ當見候得は、夥敷事に候、其樣成を申と思候、

一去々年も申聞候通に候得共、又申聞候、皆々申は、年々百姓救候へは、免も上り不レ申候と申由に候、先其者之趣意と我等の趣意と、違候處を合點可レ仕候、下民近年難澁に及候を好仕度と存候迄にて候、能成候へ者免も上り候か驗にて候、又皆共は好くは免を上け半爲と存候、此本意違申事にて候、又脇より何角と申候故、縱は折かれ難レ仕と存候者も、奉行之內に

て可レ有レ之候、脇より申處尤と存候、右之趣意遠候上は、末にては遠候筈にて候、脇よりはもとかしく可レ存候、其者に奉行を申付候はゝ、申々今存様には成間敷候、其趣意之遠候者之申所を不レ申候様に抔と存候もの、大きに遠にて候、此方の守る所を強存、萬事可二申付一候、又皆之者を脇之者に仕候はゝ、脇より存様に多分可レ存候、脇之口を塞き度と不レ存、面々か守る所を堅固に存可二申付一候、加様に申とて、不レ及レ言儀候ても、むさと免も易く仕候へとにはあらす、不能高免を置、年々之仕置を無に不レ仕候様にと申事に候、皆共か免之義にも、壹つも誤りとは不レ被レ思候、仕誤も可レ有レ之候へは、脇より申所を申候は尤に候、一免の義、かふもきはろくなる事と存候、併面々心得次第にては候よし被二仰聞一、

一先程より何角申聞候得共、詰る所は百姓強く成、耕作に精を入させ候より外は無レ之候、是本にて候間、左様に可二心得一旨被二仰聞一、

寛文四年九月廿日被二仰出一、下々善事かくれ候て不レ知候間、聞申度候、何れも書付を仕、上を封し候而、銘々名を外に書付可レ申候、日限者指圖を以此方へ請取可レ申候、

一上は老中より下は百姓町人に至迄、善事一ヶ條にても見聞候事、不レ殘書付可レ申候、善事は品々有レ之候得共、先有增書付候て、此類を推して可二書付一事、

善事之大略

一日頃孝行成者　如何樣之孝行成義有レ之
一子能育て候者　如何樣之
一忠節成者　如何樣之
一下々能召仕家調候者　如何樣之
一夫婦之間正敷和睦仕候者如何樣之
一兄弟之間能者　如何樣之
一能友を求候者　如何樣之
一義理を專に仕候者　如何樣之
一義理と存候ては、人の毀も不レ憚、一筋に義理仕候者　如何樣之
一慈悲深き者　如何樣之
一正直成者　如何樣之
一武道之藝能心掛候者　如何樣之
一行儀能者　いか樣之
一賴母敷者　いか樣之
一役義等能相勤候者　如何樣之

右十五ヶ條は、善事之荒增也、此內一ヶ條にても有レ之候者は、書付可レ申候、右之外善事も色々可レ有レ之候間、見聞次第殘し申間敷候、書付申儀無レ之候はゝ、白紙封し出可レ申候、

右善事之ヶ條、證據無レ之共、見聞仕候義可二申上一旨、同廿二日又被二仰出一候、

寛文四年十一月朔日被二仰出一、

一當年者近年之豊年にて、國中悅候間、家中に三つ八歩可レ遣候、已來も加樣に可レ有レ之と存、勝手不作廻仕間敷事、

寛文四年辰十一月十三日、草加宇右衞門、小堀彦左衞門、湯淺民部、其外御近習之物頭幷御用人不レ殘、船奉行、代官頭、郡奉行は有合候分、町奉行、作事奉行、銀奉行、勘定奉行、片山勘左衞門御前に被二召出一、被二仰聞一候品々、

一此度横目共に申聞趣意を、皆共にも得心さすへき爲申聞するなり、惣て横目役は、國家之仕置横道に行るゝを見聞する役なり、

一唯今是れ召出候者共者、國家之用之役人なれは不レ及レ言、我等爲あしかれと思ふ者は、一人も可レ有レ之とは不レ思候、然共爲と存所に、人により爲にならさる事有もの也、是は爲と言處を見るに、大かたは利による所也、義理程爲に成候事はなきと可レ存、又不レ覺惡敷事は可レ有レ之、面々之手前惡敷事あれは、必竟は皆我爲に不レ成事明白也、此段をは何も能心得して、面々の志す爲と思ふ所、無に不レ成樣に可二心得一也、然る上は、各手前に惡事ならは、横目共見聞仕候はは、我等に不レ及二申聞一、先其者に申聞へし、あやまちにおゐては、早々可レ改、我不レ知して能成候へ者、是に過たる滿足は無レ之候、其者も過と知て改は奇特と可レ存候、右之趣何れも尤と存者は、横目共何事も不二申聞一共、面々の方より可レ尋、又横目も不レ慥事成共、其者之心得にも成事ならは、早く可二申聞一候、此上は平に和し、相尋申聞可レ申候事、

一惣而面々職に付、能心にかけ精を出し申候事、人々の勤る所なり、尤不精成とは、黒白の違たる事なれ共、國家の爲を本として、其職を勤る所なくは、過所可レ有レ之と被レ思候、子細は、士大將は組之事にひか

れ、用人勘定方は勝手の事にひかれ、代官頭郡奉行は民の事にひかれ、町奉行は町人の事に引れ、此外も役にひかれ、不レ覺かたより申物にて候、かたよれは國家之爲には不レ成候事能辨可レ申也、

一評定場にては不レ及レ言、常々も評定する事有レ之時は、まつ心を靜め色をやはらけ可二相談一、又各か上に惡事ありとて、必恥敷事と思ふへからす、滿足と可レ存、子細は、右いよ如く皆之者共は、爲惡敷と存なから行事は有間敷候へは、其惡き事は皆過也、君子の上にも過は有レ之と聞、然る時は其過を聞て可レ改は、何も滿足の事也、此旨を能得心不レ仕候者、我を立る慢心より、腹を立大聲を上あらそふもの也、是第一の大惡事也、此慢心からは、其者諸事の裁判不レ可レ然候と可レ存候間、此段能々可二心得一也、

一伊賀猪右衞門は諸役人之中にて、何れへ心を寄へき職にてはなけれ共、目當とする所不レ慥は、過可レ有レ之、目當とする處は慢心私を捨、義を以て國家の爲とする所也、初聞入所、又は不レ覺ひきの方に心よるもの也、此所能用心可レ有レ之也、

右之趣何茂尤と存候はゝ、能々心得可レ仕、組人により、御尤にては候とも左樣には不レ成と存者自然可レ有レ之、たとへは的を射候に、迎我星には申るましきとて、脇をねらふ如く、あたらぬ迄も星をねらい可レ申候、星を心さしてさへあたりかねるに、的より脇をねらはんと思ふ者は、役義を斷可レ申候、指免可レ申候、

寛文五年正月十一日、横目共に被二仰聞一御書付之覺、

一爲に可レ成と存候事、面々思寄次第可二申上一候、三人相談にて申上儀も、事により可レ有レ之候、其段思案可レ仕候事、

一年寄共番頭之身之上、或は組之引廻、惣て士共過有レ之候はゝ、異見可レ仕候、必直に不レ申して不レ叶義にても有間敷候、其品面々思案可レ有レ之候、

一諸役人之過を正し候に、當分能受候而も、間に滿心、是心ふかく其印無レ之候者、二應三應も議論仕、横目之申所理に落候て茂、直り不レ申候はゝ、又異見之手たてをかへ、或は品により、始より異見之申樣も可レ有レ之、隨分善に入候樣に盡し見可レ申候、其上にて

替事無レ之候者、可二申上一候事、

一諸役人之手前之事、横目共存寄次第に異見可レ仕候、三人相談之事は、大形は無用たるへし、併事により相横目相談仕、或は相横目皆として申聞事も可レ有レ之、是又面々思案可レ有事、相横目の内にも可レ有レ之候間、互に諸役人同前と可レ存事、

一不形義或は法度を背き、或は男道之恥辱有レ之候て、異見かゝはらさるもの於レ有レ之は、直に可二申上一事、

一或は家來之者を理なくして手打に仕、或は成敗仕、惣て跡に成候て、異見不レ成事は可二申上一、又爲レ差義にて無レ之候とも、善事は可二申上一、又惡事は面々思案可レ有レ之事、

一品により、伊賀猪右衞門に申聞埒明候事も可レ有レ之候、兎角第一之心掛、人を善に引入候樣に意得相勤可レ申候、其品は面々思案可レ有レ之、萬事之義なゆへ、此方より指圖は不レ成事に候、右之荒增を背付なり、

寛文五年正月十五日

一切死丹御改、今度從二江戸一被二仰出一申付埜、（御文言略レ之、）

伊木長門守可二申聞一覺、寛文五年巳三月十五日

一郡奉行代官之惡事、幷知行所之訴等、先長門守申候得と、家來幷領地庄屋共申付由、

一山田十右衞門を、口明の侍共方へよせ不レ申候樣にと被二申付一候由、

一今度之公事も右之申付故、少其方幷家來之者共へもひゝき候樣に、下にて取沙汰有レ之由聞傳候事、其方事下地りちきに候て、上を敬ふ樣に見及、賴母敷内内令二祝着一候、然る所に下にて專右之事共取さた有レ之由に候、下地りちきに候得は、中々其方心よりか樣に可レ有レ之とは不レ存候、家來之内惡人有レ之候て、色々惡敷樣に其方へ申聞候と推量申候、國之大臣として人にたまされ不義に落入候事、沙汰之限に候、臣下之吟味を明にして、善人を用ひ候樣に可レ被レ仕候、若大惡におち入候ては、代々之家老とても、我等ひいき不レ成事可レ有レ之候、其方家中幷家内のおさめ樣、色々取沙汰在レ之候、能々慥に可レ被レ申候、

長門家老共に可二申聞一覺

一君子とても過ちは有レ之候、家老たるもの助けすしては不レ叶事也、家老は家のおもせにて居なから、長

門あやまちあれ共いさめす、他人に惡名をあらはし、主君を不義におとし入候事、重罪と存知候、重ても長門に壹つ之罪有レ之候はゝ、家老共の罪一倍二倍たるへく候、

右日置猪右衞門御使被二仰付一、賴母被二相添一被レ遣る、

巳十二月六日被二仰渡一、寛文五年なるへし

一當地御藏米平三つ九歩被レ下候内、弐歩通大唐米、大坂ゟ上せ候間、相場次第に銀子にて可二相渡一候、又本米壹歩通は、御藏給所にて銀子に被二成置一、追而相渡候樣にと、自二江戸一被二仰付一候、早々可二申渡一、

寛文六年七月朔日、池田出羽、伊木長門、池田伊賀、日置猪右衞門、土倉淡路、池田清八、池田八之丞、榊原香菴老、同八之助殿、御老中之内池田信濃殿には病中にて無二御出一、津田重次郎、鈴田夫兵衞、森半右衞門御前ゟ被二召出一、御口上に被二仰聞一候覺、

一此度申出候事直に仕度と申趣意を、何茂能合點ならは、事の上枝葉とのみ可レ被レ存候と思ひ、只々何もゟ申事にて候、萬事直と云本は、五倫正敷事本にて候、其を推廣めて末々の少き事わさまてゆきわたる事にて候、就レ夫人々儘とは云共、誤り多きものにて候、我等申付横目は、先年大猷院樣被二仰付一候大横目之心にて候、先我等の不德故、何程も誤有レ之事を覺候、然共皆之衆心得能は、風俗も直り可レ申候に、面々にも無二心得一誤多候へは、家風不レ宜事尤に候、然上は此分にして指置候事、第一奉レ對二上樣一不忠至極と存候間、三人横目に申付、先我等之誤より正し候へと申付候、然る上は各身の上も、惡事又は家の爲に不レ成事承候者、正候得と申付候、伊賀猪右衞門は、唯今用人に候へ者不レ及レ申、出羽長門を始、一門大身家のおもり第一之仁にて候得者、心得惡候ては、仕置に構はぬと有ても、大きに國政の妨成事に候間、左樣に被二心得一尤に候、三人之者義、兼々申付候通、國家之要之役人に候得は申付、起請文之本意を守、身構なく精を出し可二申付一候、去年如二申聞一、餘人は皆一役におほらす、片寄申と存候、横目役は指當り片付候役なく、國家之爲を任候役なれは、先は大形は直に可レ有レ之事と存候、何事によらす老中を初、其外役人共へも、惡事誤承候はゝ、そこつ者になり有殘成事にても、其者に可二申聞一候、右申如く我等身の上より、か樣に申付候上は、何茂其上可レ被二相心得一候、惣て法式不レ立本は、皆大身より破り候と聞及候、是大成國政の妨不レ過レ之候、事は少き儀にて候、左樣に有レ之を、其分にて指置候事、行々は不レ成事に候間、其上にては急度申付候はては不レ成事に候、左樣に可レ被二心得一候、加樣に三人に申付候上は、以來は評定所ゟも三人共に罷出可レ申候、此上に三人は身構仕候はゝ、急度可二申付一候條、左樣に可レ被二心得一候、

右之品御口上にて細々被二仰聞一、同時に香菴なとは浪人といひ、我等を賴み被レ居候へは、隨分痛敷人にて候得共、國政の爲に妨と成人にて候へは、其方とても其分にて見のかしには不レ成候、上樣へ奉レ願候義と、私の法なとは、縱ひ少は見のかしも可レ成候、去年江戸より參候儉約之細なる書付、上樣より被二仰付一にてはなく候、上よりは儉約を守り候樣にと斗出申候を、御老中面々に、右之書付の如く吟味にて、我々より〻樣になくては、天下の御法不レ立と御申、右の如くに候、又御一門にては、紀州樣第一の御人にて候に、今度も掛二御目一候得は、儉約之事我等共より能守り候はては不レ叶事に候とて、我等へ御尋被レ成候、か樣に有レ之てこそ、能御一門能御家老とは可レ申と被二仰聞一候、同時に、池田五郎兵衞、池田大學、池田三郎右衞門、土倉四郎兵衞、伊木勘解由御前ゟ被二召出一、被二仰聞一候覺、右之段被二仰聞一、家中若き者又は子共之手本に被レ成候樣に、嗜可レ申由被二仰聞一、

寛文六年七月八日被二仰出一、

一池田大學、日置左門ゟ被二仰聞一候者、昨日伊賀、猪右衞門如レ申、兩人は折々罷出、信濃、主稅なと出候時は、出候て目見も可レ仕候、親々ゟも少之用之時は可二申遣一候、小姓共不二有合一時は、小姓役を可レ仕と可レ存由被二仰聞一候以上、

寛文六年七月十五日被二仰出一、

覺

一仕置之者　番頭　組頭　組之鐵炮引廻　大小姓頭
同組頭　大小姓　馬廻り之内中小姓に申付　裏判江戸
公儀使　兒小姓　士弓頭　同組頭　學校奉行　地共
横目　寺社奉行　鷹方奉行　船奉行　鐵炮頭　普請
奉行　代官頭　平物成刻奉行　旗奉行　鎗奉行　町

奉行　歩行頭　奏者　勘定奉行　同上聞　手廻り鑓奉行　作事奉行　樋奉行　銀奉行　借米奉行　那奉行

一京にて平井安兵衛相組

右之役人、少にても存寄有レ之分、親子兄弟親類縁者知音たり共、無二遠慮一書上可レ申候、尤唯今之役人之内にても、他之役に仕可レ然と存候者は、書出し可レ申候、たとへ大役たり共、小身無足之輩なく、人柄次第可二書上一事、

寛文六年八月十五日於二御城一被二仰出一、

一御老中番頭物頭組頭諸奉行被二召集一、最前御國政御自分之儀存寄有レ之候はゝ、書上候様にと被二仰出一候處、銘々心掛候故、書上御滿足に思召候、右之書上一字も無二相違一御寫被レ成候間、何も承可レ申候旨御意にて候、爰入加藤甚右衛門持出讀、

一右同日、從二當年一權現様御祭禮、甲冑にて神樂御供可レ仕由、土肥飛驒、若原監物兩組共、岸織部、稲川十郎右衛門、八木惣兵衛被二仰付一、

此一兩年前より、當御神事流鏑馬被二仰付一候條、可レ成者は組頭中より書上可レ申候、先年相勤候者は、其通書付上可レ申候以上、

午八月廿三日申渡覺、　寛文六年成へし、

數年聖學御尊信之誠、士民感應仕、儒道に趣、佛道を捨者、多は勢漸盛有て、上之御趣意を不レ辨、一向に佛道を放却するを善とす、意得其害可レ有レ之様に被二思召一に依て、老中番頭物頭諸役人を御城ゑ被二召上一、左之通之御書付、津田重次郎に命して被レ讀二聞之一、

諸家深秘錄に出たり

一權現様之御意に、神佛共に御用ひ被レ成候との義也、神道は正直にして清淨なるを本とし、儒道は誠にして仁愛なるを尊む、佛道は無欲無我にして忍辱慈悲を行とす、三教其に如レ此ならは、たとへ教は品々あり共、世に害有へからす、今時神道儒道衰微なれは、善惡みるへきなし、佛道は大きに盛なれ共、坊主たる者、多は有欲有我にして、慳貪邪見也、己か不祥破戒之云分は、各我等如きの凡夫は、善行をなす事ならす、欲惡なから阿彌陀を賴みて極樂に生す、題目たに唱ふれは成佛すといふ、是人に惡を教る也、自今已後、如レ此の邪法を說て、人の心をそこなひ、風俗を亂るへからさる事、

一何と傳へ誤候哉、國中佛者及二迷惑一候由、國中に住者は、皆國主一人を賴居候得は、何者によらす、我はこくむへき者也、惡き者とても、今迄教なくて惡きは我あやまりなれは、彼を不レ可レ惡、其佛法の教は、權現様の御用ひ被レ成候と御意之佛法にはあらすとの如くならは、必破却可レ被レ成候、たとへ本は能とも、時に當て害あらは、其害をは除て不レ叶義也、其佛法のまとひを悟り神道の正直儒學の大道におもむかんと思ふ者は、心次第たるへし、然れ共心術躬術こそ替り候ものなれ、さもなくて法をかゆる様に成事は、甚く坊主の流浪仕らさる様に申付へき事、

一一夫不レ耕、國其飢をうく、一婦不レ織、國其寒を受くと聞、比丘比丘尼の多は、國民を飢寒せしむる本なれは、非をさとり還俗する者は、すきはひを與ふへき事、

一出家の中、或は老人或は病者、或は無才文盲なる者は、とりわけ不便の事也、惣して坊主たる者、邪法たて直さすは、墓守と心得て養置へき事、付惡癖の僧侶をすゝめて、急に佛法をそしり、神儒に入事なかれ、己と知ありて善惡を見しり、邪を捨て正に趣者をゆるし候へは、此比は心なき者をも無理にすゝむるのよし、甚以無用の事なり、君子は不レ言して、德を以て人を導と聞、言語を用るは末なる事、

一神道は正直を先とし、儒道は誠を本とす、誠なる時は明也、明成時は正直なり、我民たらん者は、心に誠を立て迷をはらし、正直をうしなふ事なかれ、心たてよくは、たとひ位牌こりんは佛氏の流なり共可也、時飾あるへき者也、心もしらて、事のみ儒者のまなひをなさは、是又名のちかひたる佛者成へき事、

一社家佛者に替りて奢をなすへからす、不側の神道に背て、亂に祈禱をなし、人の財をやふるへからす候事、

一國中山林あれ、材木薪不自由之間、富なる町人百姓猥に作事すへからす、堂寺を新敷立直すへからす、破損をは其儘にて修理を加へ、或はたゝみて少くすへき事、

一神儒の辨へ有ものは各別也、さもなき者は、猥に寺を捨へからす、今迄の寺をかゝへ、坊主を養置へし、たとへ辨有とも、其上墓所有レ之に於ては、今迄道しるものは可レ道、奢を助る事なくは可なり、

一神儒を尊ふ者も、誠を先にして事を後にすへし、喪祭之義者、漸を以ておこすへし、心よりすゝまざる者は、佛者の法を用ひて可なり、人死して魂氣は本より天にあかり、魄體は土に歸す理道なり、速に朽なんかまされり、然共孝子の情は、親の體を像に土に近付に忍ひす、是以暫く行ふ者なり、祭は神道の印に、分限有レ之者は、斟斗に燒鹽をそへ、夫も及ひ難きものは、經か田作を菜子の上に加るとも可なり、祭の膳は、其家にして朝夕用る物を念を入てか、或は親の生て被レ居たらは、如レ此して振廻へきと思ふ程にして可也、喪は別をなけくの悲を本とし、祭はいますか如くの敬を本とすへし、天地の道は易簡なり、事むつかしきは大道にあらす、人の跡になつます共、時處位をしるへきなり、

一寛文六年午九月七日、年寄中番頭物頭を召、先日評定所にて撰候御仕置之書付を御讀せ、各猶又存寄有レ之候はゝ、可二申上一旨御尋有、御書付之趣一々御尤之由、何も申上に付、則被二仰出一、右之條數、

一國中物成之儀、郡中之諸事用米を引殘して、三つ五歩之年は不レ成事に候、夫より上有レ之候年は、賦入給所平にして、殘分壹歩通は用銀用米に退ケ可レ申候、豐年にて郡用を引、三つ九歩の上にのり候はゝ、八分より上有次第用銀に可レ仕候、今之銀用用米之不足にては、自然之時、御奉公難レ成かるへき段、第一無心掛と存事、

一侍共身體不レ成もの、内證にて可レ仕樣なく、訴訟申上候はゝ、番頭物頭は組足輕知行屋敷家共に指上、小身なるものは、知行家屋敷指上、在鄉可レ仕候、在宅之摸樣により、有人に何人增と積り、顯難にて暮し候あてかいにて、扶持方斗遣、借銀相濟候共、二三年物成積置、家普用銀迄手番有レ之候以後可二罷出一候、但足輕之儀は、いつにても明次第可二申付一事、

一侍共國にて衣裳木綿紬田舍縞可レ着レ之、羽織袴可レ爲二同前一、但おく島は可レ爲二無用一事、

一侍共江戸にて之衣類は、彌可レ爲レ如二先年一之事、

一女出替り三月廿日九月廿日に可二申付一事、

一足輕之小頭小人に、壹人つゝ可二申付一事、

一侍共年寄或は病者なるものは、望次第品により、世悴名代に可二申付一事、

一家中若黨下々、前主之儀は不レ及レ申、侍共へ對し、不禮不レ仕樣に、主々堅可二申付一事、

一郡々普請所之義、郡奉行見及候上にて、所々より三人の普請奉行共も見及相談可二申付一候、幷家中鐵炮、又は役人無レ據用在レ之時は、其奉行へ相斷、可レ任二指圖一候、惣而鐵炮の者、役人共於レ在レ之は、亂に無レ之樣に、頭に堅可二申付一事、

一正月砌岡山在々子共、寶引あないも等の遊、惡習之本に候間、自今已後可レ爲二停止一事、

一當町中問屋々々ゟ横目を出し、本の直段聞屆させ可レ申候、付北國船屋根木鹿料積來り候時、是又横目を出し、裁判可二申付一事、

一在々村々所々より、百姓すくなく、田畑分際に過候所には、岡山へ出候さるふり呼返し入可レ申候、但入候ても、村々爲にも不レ成ものは、無益之事に候間、町奉行郡奉行相談之上、可レ相二斗之一、自今已後、奉公人の引込は、重々念入、町奉行郡奉行出合、吟味之上にて、百姓にも不レ成、奉公も難レ成者は、町へ引込候樣に可二申付一事、

一江戸へ侍共召連候下々、其村所之便に不レ成ものにて候共、村所之ものにて慥成者にて候はゝ、請に立候樣に、奉行共可二申付一候事、

一海邊之池淵船可レ爲二無用一事、

一鷹場に猫狗候儀不レ苦事、

一在々十村肝煎遣米、貳石つゝまし可レ遣候事、

一在々ゟ入候諸商人、唯今迄之通堅留候ては、迷惑仕族も可レ有レ之候間、入候はて不レ叶商人は、奉行心得次第入可レ申事、

一在々救米之儀、銀にて成共米に而成とも、又は銀米兩樣にて成共、郡奉行銘々好次第可二申付一事、

一郡々年貢皆濟之儀、只今迄之通、年內皆濟に可二申付一事、

一在々とくいかし樣よく仕候もの、穿鑿仕可二申上一候事、

一川口船留番所に、水主壹人つゝ下番に申付置、唯今迄罷出居候賃取、番所に置申間敷事、

一郡々日用米百石つゝ可二遣置一候、麥時無レ之所は、麥田を仕、惡田にて立毛不出來之所ゟ者入出仕、田地之繕可レ仕候事、

一岡山道水扳、三人之普請奉行共、常々見及可二申付一

事、付橋之義者、普請奉行見及、樋奉行と相談可レ仕候事、

一葬之義、自今已後土葬に可レ仕候、付百姓町人死候時、棺之義自分に調候事難レ成者は、村中或は一町として可二相助一事、

一百姓町人共、吉事凶事、五人組として相助、善事のほうひ悪事之罪科共に、五人へ相掛り可レ申候事、

一那々講釋仕候もの壹人宛、下にて閉立入置可レ申候事、

一村代官共村々ね打はまり、彌念を入候様に常々可二申付一候事、

一年寄中知行所の者、家中之奉公仕居申を呼返し候義、先より斷申候はゝ聞屆、其分に可レ仕事、

一家中犬はやり候事、年寄中申合、長し不レ申候様に可レ仕候、若乘なとの爲に、小身者飼候はゝ、其頭に相斷、繁候而飼可レ申候事、

一下々女持事、當春申付候如く、互に親兄弟も存、媒成を以相調候、自分之申合停止たるへく候事、

一自然之時駈出人、毎年改レ之、奉行可二申付一候事、

一番頭預り之鐵炮之者召抱候砌、引廻し候者共に相

談可レ仕候事、以上、

寛文六年惣平し免

一三つ八歩九厘六毛五、内三つ八歩 御家中ね渉レ遣候、内壹歩通用銀米可二指上一置、殘り三つ七歩、手前ね可レ納、外に夫米ぬかはら代米三つ八歩にかけ可レ納、免引殘て九厘六毛五郡入用、

寛文六年丙午十月七日、故羽林次將命二泉仲愛津田永正一、繕二修二九松平五郎八政種君之舊舍一、以假爲二學館一、而使二諸士之子弟學レ文習レ武、乃以二仲愛永正一爲二學盬一、◎學館地圖省略に從ふ

寛文八年戊申十二月二十二日、入學之諸生瀟泉、而學館不レ能レ容、故池田伊賀、日置猪右衛門以二君命一、使泉仲愛津田永正一轉二新舘所圓乘院之舊地一、又移二十家十七區一、以新經二營學校一、◎地圖省略く

寛文八年六月朔日被二仰出一條々、

一此度申出制法、當春公方樣御直に被二仰出一上意を本として申出候間、左樣に可二相心得一候、只今迄の樣におろそかに心得、法を背者於レ有レ之は、急度可二申付一候、去々年も法式具に申聞候得共、人に寄大身小身共に、たとへは振廻之儀に付ても、色々名を替手くろうして、法を破る者間々有レ之由聞傳へ、不合點心得そこなひにて背者よりは、大きに不屆成義と存候、又末々の者心得違も有レ之由、是は士頭共法を踈に存故にて候、頭々能得心仕、組士ともに具に切々申聞置候はゝ、心得違は有レ之間敷と存候、畢竟皆頭の越度と存候、以來は急度心得、侍頭は切々組士を寄讀聞、其上にて能合點仕らせ可レ申候、當春上意を承候得は、只今之時に當て、奉レ對レ上候御奉公は、國中末々迄儉約を堅申付、國中飢寒之者無レ之樣に仕候程、忠は無レ之と存候、然共此段我等一身之志斗にては不レ成事に候、是偏に家中侍共覺悟に依て、奉レ對レ上候御奉公申上候義者、我等に對して無二比類一忠節と可レ存候間、自今以後は、何も左樣に心得、隨分堅可二相勤一事、

右者酉九御廐間にて、惣侍中ね御直に被二仰渡一、

覺

一自分之衣裳、紗綾縮緬羽二重綵しまの類可レ着レ之、寢道具も可レ爲二同前一事、

一奥方衣裳、公義御法を相守、可レ爲二儉約一、但壹表に付代貳百目より上不レ可レ着レ之、末々も夫に隨ひ、輕く可レ仕候事、

一膳部之事、他客祝儀者各別、常は二汁三菜たるへき事、

一家中侍共より上ゟ、肴菓子等器物塗物、又は鉢なとに入可レ申候、縱ひ祝義之時も、箱肴無用、其盛盍に居可レ申候事、

一湯治歸、其外暇申、他所ゟ參り歸候時、誰々によらす土産無用之事、

女着類之定

一老中　表百五拾目　上々　帷子七拾目　上々　召仕表　十目　帷子三拾目　上々

一千石以上　同百　目　同　五拾目　同　五拾目　同二拾五匁

一千石以下　同七拾目　同　三拾目　同　三拾目　同　拾五匁

右御定より下直之衣類、常々可レ令二着用一、たとへはれの衣裳たり共、是より高直成着類、堅可レ爲二停止一事、

家中ゟ申聞覺

一家作之事、今度從二公儀一被二仰出一候通、猶以輕く可レ仕候、先年も如二申出一可レ成程堪忍候て不レ叶義は、

繪圖を以材木其外入用之積書出し、頭々迄相伺、可レ任二指圖一、自今已後、柱天井板共に、杉檜之節なし可レ爲二無用一、付床かまち建具之ふちさん共に、漆塗可レ爲二停止一、張付は老中之外可レ爲二無用一事、

一武具之事、分限に過結構仕間敷候、用に立候所斗考尤に候、附馬具之事、虎之皮らつこの鞍覆、幷紫あをりの緒は、老中も無用たるへく候、其外之物共、梨子地金かなかひ惣蒔繪鞍鐙共、持掛は各別、自今已後、新規に拵候事可レ爲二停止一、紋所は不レ苦、半鞍おゝひ馬せん駄覆ひ共、虎の皮らつこは不レ及レ云に、ひろうと毛織共に可レ爲二無用一、尤熊之泥障渡り共に無用、紫手綱あをりの緒紅紫色、可レ爲二無用一事、

一馬之事、見分に無レ構、岩乘第一に可レ仕候、分限に過高直之馬求申間敷事、

一刀脇指拵、是又自今已後、結構可レ爲二無用一事、

一金梨子地惣蒔繪金かなかひ鞍鐙共に停止候上は不レ及レ申、何にても梨子地金かなかひ惣蒔繪之器物拵候、堅可レ爲二無用一、但持掛は可レ爲二格別一事、

一振舞之事、先達而如二申出一、老中は二汁三菜、外に肴壹種たるへし、番頭幷千石以上は、二汁三菜肴一種、物頭幷五百石以上、一汁二菜肴一種、此外菜のもり合、後段停二止之一、酒何茂三返、菓子一種之外不レ可レ出レ之、右之外小身なる者、用にて寄合之外、料理出候事無用之由、先年申付候得共、緣者親類無二如在一者共寄合候時は、一汁二菜之料理可レ免レ之候、右何茂定之菜數にても、重き料理仕間敷候、汁或は煮物等ゐ色々入交候事は、盛合同事に候得は、無用可二申付一事に候へ共、一種斗も難レ成由に候條、自今已後、魚鳥を入合すへからす、何にても一種つゝに仕、外に精進物之類加へ候事不レ苦候、幷物頭已下之小者共、濃茶不レ可レ出レ之、惣て家中大小身共に、持寄可レ爲二停止一候、然る上は、數寄道具求候事、猶以可レ爲二無用一候事、

一祝言之時、祝儀取遣候事、大小身共可レ爲二無用一、親子兄弟聟舅は不レ苦、但一萬石以上小袖代銀三枚貳枚、五千石より貳千石迄貳枚壹枚、千九百石より千石迄三百疋二百疋、九百石より以下は貳百疋百疋、或は輕肴一種たるへし、其外之祝義、親子之外、歲暮年頭五節句共に、次合たるへし、

一侍中衣類之事、只今迄國にて着候通、田舍縮日野紬京八丈之類、木綿にても心次第是を着すへし、於二江戸一も可レ爲二同前一候、尤右之類たりと云共、高直之物不レ可レ用レ之、此外絹布之類可レ爲二停止一、羽織袴も可レ爲二同事一、但江戸居者共は、持掛りの分、當年來春迄可レ免レ之事、

一壹萬石以上之妻女着物、上着代百目より上可レ爲二停止一、練しま羽二重紗綾より上之絹布不レ可レ着レ之、地紅縫箔かのこ入高直之染色停二止之一、九千石より三千石迄之妻、羽二重練しま田舍絹、染色右同前、二千石以下は、縮日野紬之類可レ着レ之、たとへ持掛りたり共、大小身共上には不レ可レ着レ之、同帷子はたとへ老中之妻女たり共、代銀壹枚より上の帷子不レ可レ着レ之、縫かのこ縫箔可レ爲二無用一、但地紅は不レ苦、其外はくゝし紺屋染たるへし、少つゝの紅入は不レ苦候、持掛りの分、當年來年可レ免レ之事、

一大身之召遣女たり共、日野紬の外上に不レ可レ着レ之、帷子は內かた染の類可レ着レ之、但茶之間はしたより以下は、大身の召遣たり共、帶共木綿可レ爲、帷子は地布可レ着レ之、持掛りの帷子帶、當年中者可レ免レ之事、

一土産餞別、他は不レ及レ言、兄弟を初、一切可レ爲二無用一事、

一女正月禮、可レ爲二繼合一、但親子兄弟聟舅之間は不レ苦、何にても持參は無用たるへき事、

一喪祭之禮、分限に過、重く取行候へは、夫におとらぬ樣にと心得候者も有レ之由に候、喪祭は心の誠を盡所成に、却而外聞を第一に存候樣に成候得は、非二本意一候間、可レ應二分限一事、

右之條々、堅固可レ守レ之者也、　六月朔日（寛文八年成へし）

（芳烈詞堂記に見へたり）

一覽文八年申八月廿一日、郡々檢見、當年も如二例年一、彌かふ切に仕、日損所は郡奉行存まゝに、免を引下け可レ遣旨御意之由、年寄中より郡奉行に被二申渡一、是當年池掛り天水所は日損多、又井手掛りの分は、例年よりは格別能所も有レ之に付、土免を破り、惣檢見に被二仰付一候は、凡七八千石も御米出可レ申候、是以例年より格別能き所之百姓も、縱は免貳分は民之得に成候處、惣檢見に被二仰付一候へは、壹歩を指上、殘一歩は民の得分に成候へは、末例年より得分御座候、日損に逢候處の者、例年より致二迷惑一候へとも、各別免を下け候事も不レ成候、右之能き所より上り候を、あしき所へ打込候はゝ、日損之民十分之御救に可レ被レ成候、當年の如き甲乙の有レ之年は、加樣に被二仰付一

可レ然かと、郡奉行之内二三人申上る付、於二御前一年寄中、例の衆議人共會議被二仰付一、被二聞合一被レ爲レ成二御意一候は、七八千石之得を以、民の倍を破り可レ申義にて無レ之候、如二例年之一彌檢見を好候民斗、かふ切の檢見に可二申付一候、每より能き所は、百姓之仕合に候、惡敷所は存夫々に免を引捨遣レ之旨依レ仰、右之通被二申渡一候也、以上、

一當年平免如レ例、萬引物引候て、三つ五歩六厘三有レ之候、此内三つ五歩御家中に被レ下、殘六厘三の分は、當年之事候得は、在々も痛申候間、御救又は御普請等爲レ被二仰付一、御退け可レ被レ成候と思召候、各其心得にて、御相組中へ可レ被二申達一候、

十一月朔日寛文八年成べしといふ故にこゝに記す、

一學校出來已後、御組頭中之二男、當次第出校仕候樣にと御意にて御座候、御望之方は、拙者共へ可レ被二仰下一候、

七月十六日寛文九年なるへし　津田重次郎
　　泉　八右衞門

一寛文十年庚戌冬、故學監津田永正承二先君之命一候て、剪レ茅造二學舍一、以奉二先聖牌位一、改二舊延原一面號二閑谷一、延寶二年甲寅冬、始建二聖堂一、閑谷學校記に記す是なり、

一上樣は日本國中の人民を、天より預り被レ成候、國主は一國之人民を、上樣より預り奉る、家老と士とは、其君を助て其民を安くせん事をはかる者也、一國之民の安と不安とは、一國の主人にかゝるへき事なれ共、天下の民の一人も其所を得さるは、上樣御一人の責なれは、此國民を困窮せしむるは、上樣の御冥加をへらし奉る義也、不忠成事是より甚はなし、上に不忠民に不仁、國主之罪死にも入られす、今時何事もあらは御用に立んと、亂之忠を心掛候人は、餘多有レ之と聞へ候得共、上樣御冥加へりて何事あらんには、忠を存す共益有間敷候、寸志なからも此國においては、上樣の御冥加をまし奉り、長久の御いのりをいたし、無事の忠を致さんと存者也、汝等大臣小臣共に、我寸志を助て、其業を遂しむへし、士は貧を以て常とす、貧く共百姓之畠にはまさるへし、士の奉公人、いつのきゝんにも餓死する事はなし、人々不自由かんにん仕候はゝ、汝の君に忠可レ有候、

一義と利との分別なく、我によけれは悅、我にあしけれは恨みいかるは、市井の野人、黑白を辨へさる者の云所なり、士にして如レ此なるは、無下成事也、たとへ君の悅を求るに迷て、家中の者に詑きあてかひ有とも、國政に公ならすは、謀をかへ其利を不レ取して可也、たとへ汝諸士に便せす共、道において尤なる事ならは、かんなんを行て可也、義を見て利を見さるものは士の道也、利を知て義を不レ知者は市井の風味也、汝諸士市井之人たらんか、士たらんか、市井にいてたに心有者は、義と利との分別なくては叶へからす、一他人を迷惑させて、我身のさかゆる事は、たとへあるても、君子善人はせす、いはんやたへてなき理なるをや、然るに我士共は、只我身かちにて、人の迷惑をかゑり見す、他國の人迷惑させてたに、我さかゆる事はすましき儀なるに、此國の人民を迷惑させて、米を高く賣候事を望み候樣になる心根故、我と大借銀仕、次第にみつから迷惑仕候、得る故に不レ足理を不レ知して、未た得事不レ足とおもへり、あまり頑愚なる事故、天道いかりを動かし給ひて、蟲さし日損水損の責を下し給ひ候、それを治る事不レ成主人故、我尤此難に預り候、因州と當國にての事を存くらへ可レ申候、

因州にては儉なる故少く得て足り候、當國にては奢り候故に、多得ても不レ足、是以家中儉約を用候へと申付候へは、文盲故か、しはきを儉約と覺、奢りをいささよきと存る樣子にて候、しわきと云は、邪見にして人をも救はす、下人百姓等のかつゑをもかへりみす、軍役公役傍輩の附合、禮義愛敬もなく、たゝかたむきに金銀をため候を申候、儉約といふは、家に儉にして國に勤ると云て、我身の榮耀、妻子の私、內所のかさりをのそひて、軍役公役を勤め、朋友と愛敬あり、無用之外聞結構をやめて、下人をあわれみ、百姓等をすくひ、天地各別成儀に候、士と成て人足同前に文盲にて、是程の道理をさへ不レ存、口のあきたる儘に、心に任せて上を申かすめ、道學を惡口申事、士とは難レ申候、奢りと云は、我身の榮耀、妻子之口腹を專に仕候故、軍役公役を不レ勤、其目隱しに外聞の無用を繕ひ候故、下人困窮してもあはれみ救す、人をころし不便の者をもふちはなし、國に窮民をまし、百姓のかつゑをもかゑり見す、たゝ一月のふちかたの事を申付候にさへ、わつかの米の故にさまゝゝ口すさましく、亂國の樣に申なし、上の用にも立ましき樣に申

段、心根のきたなきこと、しわきといつれそや、おこりとしわきとは、ひつきやう大欲心故、面は替り候へ共、心根は同前なり、

一借銀仕候者共申分、上より御救とは被二仰付一候へ共、利付て出し申候、被レ下たる物にてはなし、おひたたしく御せんさくに不レ及義と申者候由、餘成憎き申分に候、其知行十分一の人馬不レ出し仕者も有レ之、能分にて千石取六七百石取程ならては無レ之候、其上國中人あまり、他國へ遣し、或は迷惑に及ひ候へは、民のつかれに候、如レ此の不忠あけてかそへかたし、箇樣之所を存候へは、身上ほとに取廻し候者共は、忠臣にて候間、褒美加增も遣し度事に候得共、其者にも人からのよしあし可レ有レ之候、尤借銀仕候者にも、道ありすりきるも可レ有レ之候、具にせんさく及かたき故、知行ほと奉公仕候者も、空くにくき心行を以、不忠之樣をかくる者共も其通に候、依レ之先日在郷之義申付候、隨分かんなん仕、借銀相濟、一二年の物成溜りて、知行屋敷返しあたふへきなり、

一先年より申付候政法度をは、心學流と名付けて、心學流はおきたるか能く候、世間は世間之樣に仕たるか能抔と、家中の者共申候て、面向人馬をはへらし候へ共、奥方内所の榮耀おこりは、古にまさり候樣に成申候由に候、心學流とは大きに違ひ申候、心學流は古流にて候、古流は義理をたしなみ候故、家には儉にして國につとめ候故に、いか程すり切ても、身上程の人馬の公役はかゝし不レ申候、奥方内所隨分詰候事に候、士の心掛け勇氣をうしなひて耻と不レ存、女童町人等の譽候を公儀と存候風俗、なけきても尚餘り有、此國は我國にて候得者、此國の世間は我世間にて候、然るを光政流は無用、世間之如く仕候得とは、他國に居候と存候也、但主は脇に候也、

覺

一家中士共、自然の事あらは用に立へしと口にては申、常々心掛も仕者有レ之と相見へ候得共、其作法は一圓不相應に候、我國を亡し我軍法を亂り候事のみ常々仕候、我を助くる臣にてはなくて、我を亡すあたを養置にて候、先國を堅くし軍を治るには、其國の地民を能するにしくはなし、近くは檜現樣三州にして武威をふるひ給て、終に天下を知給ふ、尤明將たりといへ共、三州よりおこり給はすはかたかるへし、三州之地民常理直にして心勇なり、權現樣其理直を不レ失、其勇をそたて給ふ、士は日本國中さのみかわりはなきもの也、只地民の善惡に依て、平生も治り軍も利有へし、然るに今我國の地民不理直にして、心氣弱なり、是常に治りかたふして、軍に利有かたき第一のなけき也、然共和する時は、弱能強を制する理あるなれは、國民能士を愛敬して、其理に先たゝん事をねかふ、愛する所には必勇あり、我子を捨て膺病なる者なし、是則平生の政也、軍と常と二つ有へからす、先諸士の心いさきよくして、民の心にかんせしむへし、慈愛あつて民の心を服すへし、然るに今國中の民共士を見るへきには、欲心深き事也、耻も不レ知無道心なる事也、人に非すと思ふなるへし、民の心の師に成へき士か如レ斯にして、何を以てか國俗を能せんや、其品あけてかそへかたし、ひつきやうきたなき欲心、慳貪邪見成心よりおこる事なり、目さましに一二をあけてきかすへし、欲心と邪見とは、有時はともにあり、士共定て盜賊の火付をは思ふへし、わつか兩手にさけて取へき物のため、數間の家をやき亡し、數萬の財寶を失ひ、人を殺し、貧窮も及す處、邪見成心ならすやと、にくみ思はさるや、今士共の心少も此火付におとるへからす、いかんなれは、天下周流の米、京大坂より高はなし、京大坂につきては、運賃の違斗にて、當國より高もすくなし、然るにやすしとして、此國におゐて關所を望み、大坂より高してこへん事を貪ふる、此國之米大坂より高からん事は何を以てすへし、たゝ此國の人民を迷惑させて、此國の者に高く賣也、此邪見無道心の心、下々民の心にかんして、さそ情なく思ふへし、當年の如く成飢饉、まのあたりなる死人を見てたに、他國の五穀を入よとのそせうを一言不レ言、却而關所之上にも關所を望む心有、わつかの藏米をうらんために、國中のきゝんをかゑりみす、何を以か火付の利に異ならんや、其米高を以、汝等か手前迷惑する事を不レ知して、いまた高くはよからんと思ふ故に、次第に借銀かさねは、それ士は常の食なけれ共常の心あり、民のこときは常の食なけれは常の心なしと云に、如レ此困窮せしは、何として人民の心たて風俗よかるへきや、士共手前さはき斗心かけて、如レ斯國の亡るに近き事を露もなけかす、彌亡るに近く共、我爲のよき樣にとならては不レ存、

國亡は汝等誰と共によからんや、汝等口利口に、米の高は町人の爲にもよしと云、其能者は汝等かおこりを助る者のみ、國中千にして九百九十は迷惑し、十人汝共によしといふへし、其十人はいか程米高くても死には不レ及者也、扨すくはさるやうにても、士中に財米をすつる事は十にして八九也、救様にても、民に財米を捨る事は、十にして一二也、其一二の人は、十にして八九人、八九の人は十にして一二人なり、如レ此格別なる愛敬なるに、たまさかにも民によき事あれは、百姓斗御用に立可レ申候なと、申、知行を請て居なから、左様の言葉を出す事、士共人とも云へからす、少も身の爲よき事あれは、道にはかまひなくても、天下にもなき様に、上をほむるかと思へは、少も身便せさる事有は、道にはかまひなく、ほめたる言葉をひるかへして、さん〳〵に上を惡口す、定て皆か皆に左様には有間敷候間、惣方の顔よこしに、自今以後は仲間より吟味可レ仕事に候、惣て此借金より此方士共つき合に、かり初にも利得のせんさく斗にて、士道の物語、武道の事も不二申出一候、何とそ利錢の手をやめ度存候、それに依て餘り心かきたなく成て、男女奉公人をかゝへ申者共、人にはより可レ申候、定て多くは有間敷候へとも、上下を着し兩腰さし候若黨を、三俵や四俵にねきりなし、小もの中間よりおとりに仕候由、國土困窮故かつゑに望、奉公人多きによつて是非なく居候にて、夫程之主人ならは、定て其切米の外には、古かみ子はかまおひはなかみにても事かき候時分を見て、とらせは仕ましく候、無二是非一々々々と存て奉公可レ仕候、小者共壹俵半壹俵貳斗壹斗なとにてかゝへ、下女抔も五匁三匁にてもかゝへ置候由に候、扨々むこき次第に候、盜を仕より外、何として夫にてはたをかくし可レ申哉、いかに居候へはとて、左様にておかれ可レ申哉、左様ならは、定て其外には不便を加へ、それ〳〵の物とらせ申間敷候、夫のみならす、下々を使候事、牛馬の如く存候由、牛馬も心なくてはたてりかたし、只竹木を切使如く仕候由にて、無事之時、無二是非一勢にこそかんにん仕候へ、自然の事も有て、御敵退治のために遠國抔へ出陣せは、左様之主人の下々は、皆道より走り可レ申候、知行高を取と申も、人を多く持を以てこそ本意と仕候事にて候に、持て不レ持におとり候仕形、無二是非一義に候、扨夫の

みならす、若出陣の跡にて、隣國逆心の發いてきなは、走たる下々とてものかれぬ身と思ひ、空國へ引入を仕候はゝ、何の手もなく、逆心の者の爲にとられ可レ申候、法をかたくして少付したかひたる者共も、常常の無道心の主人、今此時にかへさんと存候はゝ、其死をにくみ見て助は申間敷候、是初に云ふ所の、汝諸士共の常の振舞、家國を亡し我軍法を亂し候にあらすや、左様にきたなく、民を苦め下人をひつめて、金米を用る處を見れは、妻子を愛し女娘の公儀を專にし、少もかけては耻とおもひ、士道の心かけ人馬のかけたるをは恥とも思はす、我知行は諸士共の知行と成たると存候、上様より女之けはひ田には此國は不レ被レ下候、上にの申分も無儀に候へ共、けんくはかけにて惡口して少も不レ用候、汝等左様に公儀をかゝへて、愛する妻子共、自然の時、苦めたる民や下人の手に渡り、恥をさらし目もあてられぬ事と可レ成候へは、ひつきやう妻子も愛せさるにて候、如レ此恥如レ此理を能々わきまへ悔さとりて、自今以後、我民をすくふ助と成て、さまたけをなすへからす、汝らも共に民を救、下々をあわれみて、其君にも忠有り、其民にも仁あり、其妻子の行末をも思ふへし、汝等おもてひつそく、内おこりをやめ候はゝ、分々の仁義は可レ成候、あゝかなしきかな、數萬の民の老若男女いとけなきを、在々になかしめうやし、こゝやかしこに夭死せしめ、或は山下の町にたゝよわしめ、二八月の出替には、數萬之男女道路に立まよひ、むれすゝめの宿りかねたるていにて、彼無道心の主人をたに求かね、五日十日なくなれは、餓死の數に入、乞食非人と成へきかと悲みぬるを、汝諸士たのしむや、人の心あらん者、妻子のかさりを求るいとまあらんや、妻子の小袖壹つを以て、彼等四五人の心身をゆたかにすへし、妻子何そ寒からんや、去年今年の樣なるきゝん年、其身妻子の衣食もかつ〳〵にて、よう〳〵下々をかゝへ申候はゝ、切米の安きも理りたるへく候、口の上にては三人置候者を、四五人も抱ひ申候はゝ、國への忠たるへく候、乍レ去心有士は置樣可レ有事に候、若黨ならは小者の切米にねきりなす共、はなかみ代となり共名付、其身の恥と不レ成、忝なかり、主人よりなき事なれは、御尤と存樣に仕樣可レ有レ之候、下々女にても、其心よりは又此外情のかけ樣にて、同し樣なる事なか

ら、親にかゝりたる子共の切米も、何も不レ取してともしからさる様成事可レ有レ之候、とかく各は士にて士にあらす候、士といはるゝは大事の事にて候、其名に叶申へく候、

在江戸侍中に被レ下御扶持方覺、

一無足人當被レ下候扶持に三人增、
一高百石より二百石迄、上下有人に三人增、
一二百石より九百九十石迄、上下有人四人增、
一千石以上、上下有人、拾人に付三人增、

極月朔日被二仰出一覺

一若黨以下直成刀脇指差候者、明日よりもき取候様に、御横目衆え被二仰付一候、

覺

一郡々日用普請仕度所、人々存寄可二申上一事、年内に用意仕置、正月より早々取掛り候様に可レ仕事、
一横役なしに成候て、小百姓は悦候得共、庄屋共手前不レ成、迷惑仕候由にて、庄屋をいやがり候ては、萬事無情に候間、庄屋田地といふ物を遣可レ然候、或は上田をつふし屋敷に仕候哉、或は田中の屋敷なと山わ上候て不レ苦をは自然に申付、古地のさわりに不レ成新田、加様之所を見立、右之庄屋田地に可レ仕候、此外奉行存寄穿儀可レ仕事、
一米納町人共、百姓手前請取藏へ入候事、藏入給所共に有レ之由、何れにそ手くろ可レ有レ之候、せんき仕法度に仕、さわる事無レ之候はゝ、停止に可レ仕事、
一御留山之義、百姓自分に林候所、留山に成候所候哉、藏入之時分不レ留レ山、給所に出候て留候處在レ之候哉、所によりわつかの山、牛馬飼所下木所ゟ留候而は、百姓之作をさまたけ申候間、吟味可レ仕候、又何れに名を付候而成共、林し候て能所も可レ有レ之候、郡々隨分山を林し候様に仕度候、山の嶺より松たねを植候か能と申候、牛馬飼處留候はゝ、百姓可レ致二迷惑一事、
一古地のさわりに不レ成新田所、隨分見立可レ申事、
一男女出替り、今の法よく候哉、穿儀可レ仕候事、（男は二月二日女は八月、）
一五里付之事、幷銀米雜穀もの、しちの利足せんき可レ仕事、
一空地有レ之所は、うるしの實うへさせ可レ申候事、
一米種の品々、皇物に至迄、地にあい候と不レ合と、能

能考させ可レ申候事、
一去春申出す法令に付候はゝ、暇遣候百姓下人、飢饉の年は餓人と可レ成者、あるひは毎年公儀役人に可レ成者は、吟味をとけ、則主人の家内にて、夫婦あわせ子持候はゝ、庭子に肖候様のはからひ可レ有レ之候、又いとま遣候而も、左様之者は救米を不レ遣候て、百姓奉公人に仕候様の仕様可レ有レ之事、
一侍中大小姓に被二召仕一候に、知行三百石被レ下候はては、大小姓役の人馬持申儀成かね可レ申と思召候間、向後は大小姓に被二召出一候はゝ、三百石以下之衆ゟ者、三百石に御足し可レ被レ下候、其後病氣其外樣子有レ之、御赦免被二成下一候、右之御加增知行可二差上一由御意之旨、御老中被二仰渡一候間、左樣御心得成レ被レ成候、

霜月十五日

一相果無二跡目一士中、其年之物成殘被レ下覺、
夏相果人には壹つ成、秋相果候人には貳つ成、
冬相果候人には、其年之物成不レ殘被レ下、

於二御書院緣際一池田信濃、池田藤左衞門、小堀彦左衞門、南部半左衞門、田中九兵衞、能勢勝右衞門、松山五左衞門、小倉登之介、森半右衞門、渡邊友之助、菅小左衞門、加藤甚右衞門、日設久馬之助、中村久兵衞、寺澤藤左衞門、水野作右衞門、大埜十兵衞、淵本久五左衞門、久保田市太夫を召、被二仰渡一候者、

一諸役人面々和睦仕、諸事不レ可レ有二間斷一、惣て横目役は、雖レ聞二諸人之過惡心一、不レ可レ有二訴申義一、縱對二其人一令レ告二知之一、相互に申談、可レ改二覺悟一、或は依二心得誤一、却而爲二不忠一之族可レ有レ之、別而相役之内存二忠義一者、不レ狹二我心一可レ令二勤仕一者也、其外委細親切之仰條々有レ之、今記二其大略一、幷江戸長屋寄合之料理之御法式、

一江戸於二御長屋一振廻御停止之上は、行掛り出來合も、互に出申間敷候、然共心安者、夜之寄合咄候時は、吸物之外菜二つ、內一種者鹽辛か醬之類、或は精進物可レ出レ之事、
一溫飩切麥掻麥切なと出候時は、吸物之外に、是亦鹽辛醬之類、或は精進物一種可レ出候、此時は食出し申間敷事、勿論酒は三返之外堅無用、
一番頭以下、濃茶幷食後之菓子出し申間敷候事、

右之趣堅可二相守一候、加樣に被二仰出一候義は、人々勝手之爲候、然上は寄合之儀、急度停止可レ被二仰付一儀に候得共、左候ては、何も氣つまり迷惑可レ仕と思召、如レ此被二仰出一上は、銘々能心得仕、假初にも以外義勤用之寄合、堅可レ爲二無用一、常々も心安申談者共は不レ可レ苦、若此旨承引無レ之輩は、可レ爲二越度一旨、被二仰出一候者也、

一佛を捨て、或はかくれ忍ひて寺ゐ參、表には神主を置、內所には位牌を置、上むきは神儒の體をなし、誰そ問候へ者、合點は不レ參候へとも、代官之被二仰付一、庄屋申付にて候故、佛を捨てなと申由、如レ此にては、民に僞を敎るにて候、我等儒を好み、無レ僞正路に有レ之候得者、佛道も不レ苦候、何にても僞正路ならす、內外有者は惡人にて候、たとへ只今儒を學候共、佛にかへり度存候者は、心次第に寺にも參候樣に可二申付一事、

奉行代官申付る故、其節はいな共難レ申、尤と民共可レ申候ゆへ、代官は民共心底より佛を捨候と存義も可レ有レ之候、是また尤のやうに有りなから、人情を察する事おろそか成故、へつらい僞をさそい起すなり、向後能思案仕、諸事可二申付一事、

江戶御居間ゐ、御近習之者共被二召出一、御直に被二仰付一御口上之覺、

一參勤之刻、皆共に申聞候趣、失念仕間敷候、然共程あれは或は懈り、又心得違も可レ有と存、唯今又委敷申聞候、今是ゐ召出候者は、取分爲を大事と可レ存者共なれは、面々の役義少も不レ怠樣嗜可レ申事、第一之忠節たるへき事、

一何れの役も同前と云共、南部半左衞門、山內權左衞門ことく、內證之義を申付る者、主之爲を大事と思、忠を可レ盡と存者は、少之儀にても主之損なき樣にと存る故、惡敷心得候得は聚斂之臣と成者也、少の利を爲として、末々は迷惑仕事古今多し、下之迷惑といふに可レ有二心得一、理屈を以いふ時は、末の痛にさのみ不レ成事にも、可レ利爲になす事は、少にても下迷惑に存者也、又過分に費之所を能考仕直す事は、下少々痛事にても、却て尤と云者也、少々利を可レ得とて、主名出る者也、此事は上には無二御存一、我等共之仕事と申といへ共、主加樣之義好故にと、諸人存る者也、右の如く人は爲を第一に存、精を出す故に、費を能考、爲と成事も數多有也、然共諸人は其能事を云す、過のみ云

立る者也、又己か爲を專にして、身構成者は、諸人に不レ被レ叱樣之分別を爲し、主の爲に可レ成義を存出すと云共、其事を不レ爲、萬に無情成者也、此者は大きに無レ忠人也、惣して我人の過つ根を考るに、慢心に初れり、如何となれは己か爲と云事皆能と思ひ、他に無二問事一、たま〳〵尋と云共、己か心に順ふ者に問もの也、此故に善惡共申聞者あれは、我職にも無レ之不レ入差出と思ひ、或は詞にし又は面に顯るゝ故に、以來善事有ても不レ告、還て咄る者也、惣而相役に不レ限、皆之者共、主人の爲を思はゝ、我意を立たる樣に、隨分嗜二萬事一可二申合一也、如レ此ならは、何も可レ和、和すれは家は齊ふ事無レ疑、慢心有レ之は無レ可レ和、此旨を堅く可レ存事、

一橫目役は大事也、橫目之本意は、主人之儀を初として、橫邪之行あるを見聞して申役也、左樣に心得、末末の義に不レ限、面々役仕樣、具に可レ承候、先主人之儀を專に可二申聞一、次に諸役人之儀承、過有は其者に可二申聞一、面々も慢心無レ之樣に嗜み、眞實に爲を大事と存る者は、此方より必可レ尋候間、橫目も無二遠慮一其役儀之事可二申聞一也、

一忠節といふ事、人毎にいふ事なれ共、忠之儀委く知て行者稀也、忠は己を盡すを忠といふ、是迄も皆知れり、然共己か不足を覺より忠生る事をしらす、此故に謙を體に不レ爲故に、其忠皆慢心となり、還而忠を成心を盡たる其忠無に爲す事、歎か敗事也、世俗にいふ、忠か不忠に成といふは、此謙を體に不レ爲故也、謙はへりくたり慢心無レ之を謙と云、

一惣士中にも此義は可二申聞一候、銘々身の上は不レ及レ申、朋友之間にも又は下々にも、少にてもかふき者有レ之は、其理は不レ及レ申、互に申合、急度直させ可レ申事、幷家中下々惡事を爲と云共、江戶にては、兎角何事も沙汰の無か能とまて、人々可レ存候得共、成敗可レ仕程之義も、見遁しに可レ仕と存知候、左樣にては下々の風俗惡敷可レ成候間、自今已後、罪之品を申聞、成敗も可レ仕候事、

一此度は年寄共供不レ仕候間、末々之義或は細成義、若は疑事可レ有と存候間、何事によらす相談仕可二申聞一、此上にも老中不レ有とて遠慮仕候はゝ、右申聞する可レ爲二身構一事、

右者信濃、小堀彥右衞門、草加兵部、尾關源次郎、南